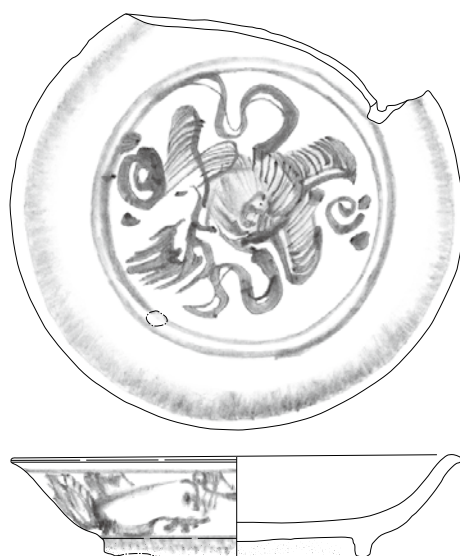


奥名遺跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ



2016.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

奥名遺跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ

2016.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

本書は高知西バイパス(一般国道33号バイパス)建設に伴い、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所から高知県教育委員会が委託を受け、公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成24年度に発掘調査を実施した奥名遺跡の発掘調査報告書です。

奥名遺跡は、昭和53年に行われた宇治川改修工事の際に縄文土器が偶然に見つかり埋蔵文化財包蔵地となりました。今回の調査では新たに古代から近世の遺構や遺物が発見され、当時の人々の土地利用の変遷が明らかとなりました。

平成19年度の「城ヶ谷山遺跡」の発掘調査から始まり、本年度の「奥名遺跡」の報告書刊行まで、足かけ9年間携わらせて頂きました。これまでの調査成果は、この地域の歴史に新たな1ページを加えると同時に、高知県の地域史を解明していくうえで貴重な成果となりました。

今までに刊行された報告書と同様に、本書が地域史の研究に寄与し、地域の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、いの町、そして埋蔵文化財への深いご理解とご協力を賜りました地元の皆様方に心から謝意を表すと共に、発掘調査に従事して頂いた現場作業員の皆様方、報告書作成にあたりご指導ならびにご教示頂きました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 松田直則

例言

1. 本書は、高知西バイパス建設に伴い、平成24年度に実施した奥名遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 奥名遺跡は、高知県吾川郡いの町字奥名西に所在する。
4. 発掘調査は3ヶ月にわたって実施し、発掘調査延べ面積は、1,400㎡である。
5. 調査期間は、平成24年5月24日～同年8月10日にかけて発掘調査を行い、併せて基礎整理を平成25年3月31日まで行った。また、本報告書刊行及び整理業務を平成26年4月1日～平成28年3月31日にかけて実施した。
6. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成24年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏
総務：同次長 嶋崎るり子 同総務課長 里見敦規 同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 吉成承三 同専門調査員 武森清幸 技術補助員 大原直美
測量補助員 横山藍

平成26年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏
総務：同次長兼調査課長 松田直則 同総務課長 野田美智子 同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長 松田直則
調査担当：同調査第三班長 吉成承三 調査補助員 横山藍

平成27年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 松田直則
総務：同次長兼総務課長 東勝彦 同総務係長 吉森和子 同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼第一班長 吉成承三
調査担当：同調査第一班長 吉成承三 同主任調査員 筒井三菜 調査補助員 横山藍

7. 本書の執筆は吉成・筒井が行い、調査補助員の横山が編集した。現場測量、遺構図等の作成、及び報告書掲載の遺構・写真等の図版作成は、調査補助員 大原・横山の補助を得た。
8. 遺構については、SB(掘立柱建物跡)、SA(柵列)、SK(土坑)、SD(溝)、SE(井戸跡)、SX(性格不明遺構)、P(ピット)とし、遺構番号は、全ての遺構において通し番号を付した。掲載している遺構図の縮尺はSB、SAはS=1/100、SK、SD、SE、PはS=1/40、S=1/100で作成しそれぞれに記載しており、方位(N)は世界標準座標方眼北である。
9. 遺物については、原則S=1/3とし、法量の大きさによってS=1/4、S=2/3で掲載し、各遺物にはスケールバーを掲載している。
10. 航空写真測量については株式会社四航コンサルタントに委託し、整理業務では木製品の樹種同

定を株式会社古環境研究所に委託し業務を実施した。

11. 現場作業及び整理作業については下記の方々に行って頂いた。(敬称略,五十音順)

発掘調査作業員

井沢俊一・大原栄美・尾崎毅・川上公雄・塩見朗・渋谷茂弘・中島美恵子・西内園・西村仁
水・橋村康之・林孝明・原田憲二・宮添彬・村松広海・山口壽子・山口優幸・横山正宣

整理作業員

岡崎千枝・高橋由香・永森亜紀・橋田美紀・畑平裕美・松山真澄・吉本由佳

また,報告書作成にあたっては,埋蔵文化財センターの諸氏の協力と援助を得た。記して感謝する。

12. 出土遺物について,高知県立歴史民俗資料館副館長 岡村桂典氏に助言を頂いた。また墨書土器について,高知県立歴史民俗資料館の曾我満子氏の協力により赤外線カメラで撮影させて頂き,文字判読においては久保由美氏にご教示を頂いた。和鏡については久保智康氏(京都国立博物館)にご教示を頂いた。記して感謝する。
13. 調査の実施にあたっては,国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所,いの町,いの町教育委員会,工事関係者の協力を得た。また,地元の方々の絶大な協力と援助を得た。
14. 出土遺物の注記は,出土略号を12-3IOとし,図面,写真資料とともに高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る契機と経過	1
1. 調査に至る契機	1
2. 調査の経過	3
3. 試掘調査の概要	3
第Ⅱ章 遺跡の概要と周辺の遺跡	5
1. 奥名遺跡の概要	5
2. 奥名遺跡周辺の遺跡	5
第Ⅲ章 調査成果	9
1. 発掘調査の概要	9
2. 調査の方法と調査区の基本層序	10
3. 検出遺構と出土遺物	13
(1) 掘立柱建物跡	13
(2) ピット	19
(3) ピット出土遺物	23
(4) 土坑	26
(5) 溝	33
(6) 井戸跡	37
(7) 廃棄土坑	41
(8) ハンダ土坑・石垣	45
(9) 表採遺物	53
(10) 包含層出土遺物	54
第Ⅳ章 科学分析	67
1. はじめに	67
2. 試料と方法	67
3. 結果	67
4. 考察	68
第Ⅴ章 考察	71
1. 遺構－中世の遺構について－	71
2. 遺物	72
(1) 古代	73
(2) 中世	73
(3) 近世・近代	74
(4) 出土遺物からみた土地利用の変遷	74
3. 地検帳からみた奥名遺跡周辺の景観	75

挿図目次

図1	いの町位置図	1
図2	位置図兼グリッド設定図	2
図3	試掘トレンチ位置図・柱状図	4
図4	奥名遺跡周辺の遺跡	6
図5	調査区位置図	9
図6	調査区セクション図	11
図7	遺構配置図	12
図8	SB1 遺構図・遺物実測図	13
図9	SB2 遺構図	14
図10	SB3 遺構図・遺物実測図	14
図11	SB4 遺構図	15
図12	SB5 遺構図	15
図13	SB6 遺構図	16
図14	SB7 遺構図・遺物実測図	16
図15	SB8 遺構図・遺物実測図	17
図16	SB9 遺構図・遺物実測図	18
図17	SB10 遺構図	18
図18	SB11 遺構図・遺物実測図	19
図19	ピット遺構図・遺物実測図1	20
図20	ピット遺構図・遺物実測図2	21
図21	ピット遺構図・遺物実測図3	22
図22	ピット遺物実測図1	24
図23	ピット遺物実測図2	25
図24	ピット遺物実測図3	26
図25	SK3・5 遺構図・遺物実測図	27
図26	SK7 遺構図・遺物実測図	27
図27	SK11 遺構図・遺物実測図	28
図28	SK13～15・18 遺構図・遺物実測図	29
図29	SK28～30 遺構図・遺物実測図	30
図30	SK31・46 遺構図・遺物実測図	30
図31	SK48 遺構図・遺物実測図	31
図32	SK49・50 遺構図・遺物実測図	32
図33	SK51・53～55 遺構図・遺物実測図	33
図34	SD1 遺構図・遺物実測図	33
図35	SD2～5 遺構図・遺物実測図	34

図36	SD6～9遺構図・遺物実測図	36
図37	SD10遺構図・遺物実測図	37
図38	SE1遺物実測図1	37
図39	SE1遺構図	38
図40	SE1遺物実測図2	39
図41	SE1遺物実測図3	40
図42	廃棄土坑遺構図	41
図43	廃棄土坑遺物実測図1	42
図44	廃棄土坑遺物実測図2	43
図45	廃棄土坑遺物実測図3	44
図46	ハンダ土坑1遺物実測図1	45
図47	ハンダ土坑1遺物実測図2	46
図48	ハンダ土坑1遺物実測図3	47
図49	ハンダ土坑2遺物実測図	48
図50	石垣裏込め遺物実測図1	50
図51	石垣裏込め遺物実測図2	51
図52	石垣裏込め遺物実測図3	52
図53	表採遺物実測図	53
図54	I層遺物実測図	54
図55	II層遺物実測図1	56
図56	II層遺物実測図2	57
図57	II層遺物実測図3	58
図58	II層遺物実測図4	59
図59	II層遺物実測図5	60
図60	III層遺物実測図	61
図61	IV層遺物実測図1	62
図62	IV層遺物実測図2	63
図63	IV層遺物実測図3	65
図64	IV層遺物実測図4	66
図65	奥名遺跡木製品	69
図66	土師質土器皿・杯形態分類図	73
図67	奥名遺跡周辺の景観復元	76

遺構計測表目次

遺構計測表1 SB	81	遺構計測表10 SB9ピット	84
遺構計測表2 SB1ピット	81	遺構計測表11 SB10ピット	84
遺構計測表3 SB2ピット	82	遺構計測表12 SB11ピット	84
遺構計測表4 SB3ピット	82	遺構計測表13 SK	85
遺構計測表5 SB4ピット	82	遺構計測表14 SK	86
遺構計測表6 SB5ピット	82	遺構計測表15 SD	87
遺構計測表7 SB6ピット	83	遺構計測表16 SE	87
遺構計測表8 SB7ピット	83	遺構計測表17 SX	87
遺構計測表9 SB8ピット	83		

遺物観察表目次

遺物観察表 1～22	91	遺物観察表 243～264	102
遺物観察表 23～44	92	遺物観察表 265～286	103
遺物観察表 45～66	93	遺物観察表 287～308	104
遺物観察表 67～88	94	遺物観察表 309～330	105
遺物観察表 89～110	95	遺物観察表 331～352	106
遺物観察表 111～132	96	遺物観察表 353～374	107
遺物観察表 133～154	97	遺物観察表 375～396	108
遺物観察表 155～176	98	遺物観察表 397～419	109
遺物観察表 177～198	99	遺物観察表 420～442	110
遺物観察表 199～220	100	遺物観察表 443～465	111
遺物観察表 221～242	101		

図版目次

- 図版1 奥名遺跡遠景(北東より)
図版2 調査前遠景(北東より)
調査前風景(北東より1)
図版3 調査前風景(南東より)
調査前風景(北東より2)
図版4 遺構検出状態(南西より)
遺構検出状態(北より)
図版5 遺構検出状態中央部(西より)
遺構検出状態南半部(東より)
図版6 遺構完掘状態(上空より)
遺構完掘状態南半部(北西より)
図版7 遺構完掘状態北半部(南西より)
遺構完掘状態北部(西より)
図版8 調査区セクション全景(北西より)
調査区セクション中央部(西より)
図版9 調査区セクション北部(北西より)
調査区セクション南部(西より)
図版10 SD2・3・4セクション(東より)
SD6・7・8セクション(東より)
図版11 SE1石組検出状態(北より)
SE1半裁状態(北より)
SE1土師質土器杯(166)出土状態
SE1漆器椀(177)・曲物(178)出土状態
図版12 SB1P11石錘(3)出土状態
SB8P5炆器甕(16)出土状態
SB8P5銭貨(18)出土状態
SB9P4鉄製品刀子(21)出土状態
P56土師質土器小皿(26)出土状態
P105土師質土器(29)出土状態
P175銭貨(39・40)出土状態
P349土師質土器小皿(49)・陶器瓶(50)
出土状態
図版13 P410銭貨(54)出土状態
P410銭貨出土状態
P328須恵器皿(64)出土状態
図版13 P44土師質土器杯(67)出土状態
P446土師質土器杯出土状態
P505土師質土器杯(79)出土状態
P131陶器壺または甕(100)出土状態
P144銅製品(109)出土状態
図版14 P338銭貨(110)出土状態
P152石製品石臼(114)出土状態
SK5セクション(南より)
SK5集石出土状態(南西より)
SK7セクション(北東より)
SK7集石出土状態(北東より)
SK11・P130セクション(北より)
SK13陶器皿(121)出土状態
図版15 SK18セクション(南より)
SK29セクション(北より)
SK30セクション・青磁碗(128)出土状態
SK31土師質土器杯(129)出土状態
SK48セクション(南より)
SK49完掘, SK50・ピット検出状態(西より)
SK50セクション(東より)
SK54セクション(南より)
図版16 II層和鏡(366)出土状態
III層青磁杯(380)出土状態
IV層弥生土器壺(391)出土状態
IV層土師器杯(394)出土状態
IV層土師質土器小皿(406)出土状態
IV層土師質土器杯(411)出土状態
IV層青磁碗(434)出土状態
IV層鉄製品雁股鏃(452)出土状態
図版17 SB3P9, SB7P4・P5・P7・P8 陶器(皿),
土師質土器(杯), 白磁(皿)(内面)
SB3P9, SB7P4・P5・P7・P8 陶器(皿),
土師質土器(杯), 白磁(皿)(外面)
図版18 SB8P4・P5・P6・P12 土師器(甕), 東播
系須恵器(捏鉢), 土師質土器(小皿・杯),

- 図版18 炆器(甕)(内面)
SB8P4・P5・P6・P12 土師器(甕), 東播系須恵器(捏鉢), 土師質土器(小皿・杯), 炆器(甕)(外面)
- 図版19 SB9P3・P4・P6 土師質土器(杯), 鉄製品(刀子), 錢貨(表面)
SB9P3・P4・P6 土師質土器(杯), 鉄製品(刀子), 錢貨(裏面)
- 図版20 P28・105・107・110 土師質土器(杯), 陶器(壺), 瓦質土器(羽釜)(内面)
P28・105・107・110 土師質土器(杯), 陶器(壺), 瓦質土器(羽釜)(外面)
- 図版21 P173・188・202 土師質土器(杯), 青磁(碗), 土製品(土錘)(内面)
P173・188・202 土師質土器(杯), 青磁(碗), 土製品(土錘)(外面)
- 図版22 P410 錢貨(表面)
P410 錢貨(裏面)
- 図版23 P268・312・314・320・332 土師器(皿・甕), 黒色土器(椀)(内面)
P268・312・314・320・332 土師器(皿・甕), 黒色土器(椀)(外面)
- 図版24 P16・44・68・277・348・446 土師質土器(杯)(内面)
P16・44・68・277・348・446 土師質土器(杯)(外面)
- 図版25 P23・86・124・227・325・411・492 土師質土器(杯)(内面)
P23・86・124・227・325・411・492 土師質土器(杯)(外面)
- 図版26 P31・62・108・159・217・311 土師質土器(鍋), 瓦器(皿), 瓦質土器(鍋), 東播系須恵器(捏鉢)(内面)
P31・62・108・159・217・311 土師質土器(鍋), 瓦器(皿), 瓦質土器(鍋), 東播系須恵器(捏鉢)(外面)
- 図版27 P176・184・272・380・463 青磁(碗)(内面)
P176・184・272・380・463 青磁(碗)(外面)
- 図版28 SK50・51・53～55 陶器(瓶子・甕), 土師質土器(杯), 青磁(碗), 瓦質土器(鍋)(内面)
SK50・51・53～55 陶器(瓶子・甕), 土師質土器(杯), 青磁(碗), 瓦質土器(鍋)(外面)
- 図版29 SE1 東播系須恵器(捏鉢), 炆器(甕), 青磁(碗)(内面)
SE1 東播系須恵器(捏鉢), 炆器(甕), 青磁(碗)(外面)
- 図版30 P64・144・182・338・346・353 土製品(土錘), 銅製品(飾金具・不明), 鉄製品(釘), 錢貨
SE1 木製品
- 図版31 SE1 木製品(曲物)(側板)
SE1 木製品(曲物)(底板)
- 図版32 SE1 木製品(表面)
SE1 木製品(裏面)
- 図版33 石垣裏込め 磁器(碗)(内面)
石垣裏込め 磁器(碗)(外面)
- 図版34 石垣裏込め 磁器(蓋・段重・火入・水滴)(内面)
石垣裏込め 磁器(蓋・段重・火入・水滴)(外面)
- 図版35 表採 青磁(碗), 炆器(壺・水屋甕・甕)(内面)
表採 青磁(碗), 炆器(壺・水屋甕・甕)(外面)
- 図版36 II層 土師質土器(焙烙)(内面・外面・側面)
- 図版37 II層 土師質土器(焙烙) 赤外線写真
- 図版38 II層 土師質土器(焙烙)
II層 土師質土器(焙烙・小皿)
- 図版39 II層 土師質土器(小皿)
II層 土師質土器(小皿)
II層 土師質土器(小皿)
II層 土師質土器(小皿)
II層 土師質土器(小皿)
II層 土師質土器(小皿)
II層 土師質土器(小皿)
- 図版40 II層 和鏡
IV層 土製品(土錘)

- 図版41 IV層 青磁(碗)(内面)
IV層 青磁(碗)(外面)
- 図版42 SB1P3・11・12 陶磁器(皿), 陶器(碗),
石製品(石錘)
P150 鉄製品(小札), 鉄滓
SB8P5・6 鉄製品(小札), 銭貨(表面)
SB8P5・6 鉄製品(小札), 銭貨(裏面)
P110 土師質土器(杯)(内面)
P110 土師質土器(杯)(外面)
P247 東播系須恵器(捏鉢), 炆器(鉢)(内面)
P247 東播系須恵器(捏鉢), 炆器(鉢)(外面)
- 図版43 P327 土師器(杯)
P106 土師質土器(杯)
P204 青花(皿)
P465 石製品(叩石)
P152 石製品(石臼)
SK3 陶器(灯明皿)
SD2 磁器(碗)
SD10 土師器(杯)
- 図版44 SE1 土師質土器(杯)
SE1 漆器(椀)
廃棄土坑 陶器(碗)
廃棄土坑 陶器(碗)
廃棄土坑 陶器(小壺)
廃棄土坑 磁器(大皿)
廃棄土坑 磁器(角皿)(内面)
廃棄土坑 磁器(角皿)(外面)
- 図版45 廃棄土坑 磁器(小碗)
廃棄土坑 磁器(碗)
廃棄土坑 磁器(碗)
廃棄土坑 磁器(碗)
廃棄土坑 磁器(碗)
廃棄土坑 磁器(仏飯器)
廃棄土坑 釜道具(トチン)
廃棄土坑 磁器(碗)
- 図版46 廃棄土坑 磁器(碗)(内面)
廃棄土坑 磁器(碗)(外面)
廃棄土坑 磁器(碗)
- 図版46 廃棄土坑 磁器(碗)
廃棄土坑 磁器(碗)
廃棄土坑 石製品(五輪塔)
ハンダ土坑1 陶器(灯明皿)
ハンダ土坑1 陶器(播鉢)
- 図版47 ハンダ土坑1 陶器(徳利)(外面)
ハンダ土坑1 陶器(徳利)(底面)
ハンダ土坑1 磁器(皿)
ハンダ土坑1 磁器(皿)
ハンダ土坑1 磁器(皿)
ハンダ土坑1 磁器(碗)
ハンダ土坑1 磁器(碗)
ハンダ土坑1 磁器(碗)
ハンダ土坑1 磁器(碗)
- 図版48 ハンダ土坑1 磁器(碗)
ハンダ土坑1 磁器(碗)
ハンダ土坑1 磁器(碗)
ハンダ土坑1 磁器(碗)
ハンダ土坑1 磁器(碗)
ハンダ土坑1 磁器(鉢)
ハンダ土坑2 磁器(碗)
ハンダ土坑2 磁器(碗)
- 図版49 ハンダ土坑2 磁器(碗)
ハンダ土坑2 磁器(碗)
石垣裏込め 陶器(碗)
石垣裏込め 陶器(碗)
石垣裏込め 陶器(碗)
石垣裏込め 陶器(碗)
石垣裏込め 土師質土器(焜炉)
石垣裏込め 磁器(小碗)
- 図版50 石垣裏込め 磁器(碗)
石垣裏込め 磁器(碗)
石垣裏込め 磁器(碗)
I層 磁器(瓶)
I層 窯道具(トチン)
II層 陶器(火入)
II層 磁器(仏飯器)
II層 石製品(五輪塔)
- 図版51 III層 土師質土器(杯)

- 図版51 P407・417 石製品(砥石)
 SK48・49 石製品(砥石・不明)
 SD7 緑釉陶器(碗), 青磁(碗), 瓦質土器(鍋)
 廃棄土坑 磁器(小杯)
 SE1 石製品(叩石)
 ハンダ土坑1 土製品(人形)
 II層 陶器(碗)
- 図版52 廃棄土坑 瓦(平瓦)
 廃棄土坑 瓦(平瓦)
 廃棄土坑 瓦(平瓦)
 廃棄土坑 瓦(平瓦)
 廃棄土坑 瓦(平瓦)
 廃棄土坑 瓦(平瓦)
 廃棄土坑 瓦(平瓦)
 廃棄土坑 瓦(平瓦)
- 図版53 II層 磁器(皿)
 III層 瓦質土器(鉢・鍋・羽釜)
 IV層 弥生土器(壺)
 IV層 土師器(甕)
 IV層 石製品(砥石)(表面)
 IV層 石製品(砥石)(裏面)
 IV層 石製品(砥石)(側面)
 IV層 瓦質土器(羽釜)
- 図版54 IV層 石製品(砥石)
 IV層 石製品(投弾)
 P327・349 土師器(杯), 陶器(瓶)(内面)
 P327・349 土師器(杯), 陶器(瓶)(外面)
 P292・433 白磁(皿)(内面)
 P292・433 白磁(皿)(外面)
 P297・270 白磁(皿), 青花(碗)(内面)
 P297・270 白磁(皿), 青花(碗)(外面)
- 図版55 P21・131・340 炆器(甕), 陶器(甕)
 (内面)
 P21・131・340 炆器(甕), 陶器(甕)
 (外面)
 P367・490 陶器(播鉢)(内面)
 P367・490 陶器(播鉢)(外面)
- 図版55 P1・509 陶器(播鉢・甕)(内面)
- 図版55 P1・509 陶器(播鉢・甕)(外面)
 SK5・7・11 陶器(鉢), 瓦質土器(羽釜)
 (内面)
 SK5・7・11 陶器(鉢), 瓦質土器(羽釜)
 (外面)
- 図版56 SK13・15 陶器(皿), 土師質土器(杯)(内面)
 SK13・15 陶器(皿), 土師質土器(杯)(外面)
 SK15・18 瓦質土器(鉢), 陶器(水屋甕)
 (内面)
 SK15・18 瓦質土器(鉢), 陶器(水屋甕)
 (外面)
 SK30・46 青磁(碗)(内面)
 SK30・46 青磁(碗)(外面)
 SK48 土師器(甕)(内面)
 SK48 土師器(甕)(外面)
- 図版57 SK48 須恵器(壺・甕)(内面)
 SK48 須恵器(壺・甕)(外面)
 SK49 土師質土器(小皿・杯)(内面)
 SK49 土師質土器(小皿・杯)(外面)
 SK49 陶器(瓶子), 青磁(碗)(内面)
 SK49 陶器(瓶子), 青磁(碗)(外面)
 SD1・2 土師質土器(杯・焙烙), 陶器
 (皿), 磁器(碗)(内面)
 SD1・2 土師質土器(杯・焙烙), 陶器
 (皿), 磁器(碗)(外面)
- 図版58 SD10 土師器(杯)(内面)
 SD10 土師器(杯)(外面)
 SD10 土師器(甕)(内面)
 SD10 土師器(甕)(外面)
 SE1 土師質土器(皿・杯)(内面)
 SE1 土師質土器(皿・杯)(外面)
 SE1 土師質土器(杯)(内面)
 SE1 土師質土器(杯)(外面)
- 図版59 ハンダ土坑1 炆器(播鉢・甕), 陶器(播
 鉢)(内面)
 ハンダ土坑1 炆器(播鉢・甕), 陶器(播
 鉢)(外面)
 ハンダ土坑1 磁器(大皿)(内面)

- 図版59 ハンダ土坑1 磁器(大皿)(外面)
ハンダ土坑1 磁器(碗)(内面)
ハンダ土坑1 磁器(碗)(外面)
ハンダ土坑2 磁器(蓋物)(内面)
ハンダ土坑2 磁器(蓋物)(外面)
- 図版60 石垣裏込め 土師器土器(杯), 青磁(碗),
陶器(碗)(内面)
石垣裏込め 土師器土器(杯), 青磁(碗),
陶器(碗)(外面)
石垣裏込め 陶器(碗・皿・瓶)(内面)
石垣裏込め 陶器(碗・皿・瓶)(外面)
石垣裏込め 陶器(搗鉢)(内面)
石垣裏込め 陶器(搗鉢)(外面)
石垣裏込め 陶器(火鉢)(内面)
石垣裏込め 陶器(火鉢)(外面)
- 図版61 I層 陶器(皿), 磁器(灯明皿)(内面)
I層 陶器(皿), 磁器(灯明皿)(外面)
II層 瓦質土器(火鉢)(内面)
II層 瓦質土器(火鉢)(外面)
II層 石製品(砥石)(表面)
II層 石製品(砥石)(裏面)
II層 石製品(石臼)(上面)
II層 石製品(石臼)(下面)
- 図版62 III層 炆器(搗鉢)(内面)
III層 炆器(搗鉢)(外面)
IV層 土師器(杯)(内面)
IV層 土師器(杯)(外面)
IV層 土師質土器(杯)(内面)
IV層 土師質土器(杯)(外面)
IV層 鉄製品(雁股鍬)(表面)
IV層 鉄製品(雁股鍬)(裏面)
- 図版63 SB7P8, SB9P6, P56, P61・34, P105,
P328, P349, P505 土師質土器(杯・小
皿), 須恵器(皿)
- 図版64 P291, SK3・15・29・31, SD2, SE1, 廃
棄土坑 土師質土器(杯), 青磁(碗), 磁器
(皿), 陶器(碗・皿), 土師器(椀), 陶磁器(皿)
- 図版65 廃棄土坑, ハンダ土坑2, 石垣裏込め
磁器(皿・小杯・碗), 陶器(灯明皿・碗)
- 図版66 石垣裏込め 陶器(皿・匣鉢), 磁器(皿・
小碗・碗)
- 図版67 石垣裏込め, I・II・III・IV層 磁器(碗・
小杯・小碗・皿・大皿・角皿・紅皿), 瓦(軒
平瓦), 土師質土器(皿・小皿), 陶器(搗鉢)
- 図版68 II・III・IV層 土師質土器(焙烙・羽釜),
瓦質土器(焙烙), 陶器(火鉢・甕), 銅製品
(煙管), 土師器(羽釜・鍋・杯・椀・甕)
- 図版69 IV層, SB11P3, P175, SE1 東播系
須恵器(捏鉢), 陶器(甕), 炆器(甕), 鉄滓,
石製品(基石), 土師質土器(杯), 銭貨
- 図版70 ハンダ土坑1, 石垣裏込め, I層 磁器
(蓋), 陶器(鉢), 磁器(皿・碗)
- 図版71 I・II層 磁器(碗), 陶器(皿・碗・鍋)
- 図版72 II・III層 磁器(碗・蓋・盃), 瓦(軒平瓦),
土師質土器(小皿)
- 図版73 III・IV層 土師質土器(杯), 青磁(杯・
碗), 東播系須恵器(捏鉢), 黒色土器(椀),
須恵器(甕)
- 図版74 IV層 土師質土器(皿・羽釜), 瓦質土器
(鍋・搗鉢), 青磁(杯・盤)
- 図版75 IV層 青磁(碗), 青花(皿), 白磁(皿)
- 図版76 IV層 陶器(搗鉢), 鉄製品(包丁), 銅製
品(飾金具), 銭貨, 石製品(石鍬)

付図目次

付図 奥名遺跡遺構配置図 (S = 1/100)

第 I 章 調査に至る契機と経過

1. 調査に至る契機

奥名遺跡の所在するいの町は、県中央部に位置し、東側は県都である高知市に接する。平成 16 年(2004)10月に吾川郡伊野町、吾北村、土佐郡本川村が合併して現在のいの町になった。町の南部に位置する中心部には、鉄道に並行して東西に国道33号が通っており、仁淀川橋のたもとで吾北、本川、愛媛県西条市方面に向かう国道194号と分岐する。これらの国道は、高知県西部の主要国道であり、いの町は近郊からの交通の要衝となっているため、中心部の国道は慢性的な道路渋滞となっている。これらの交通渋滞緩和及び路面冠水の解消、交通安全確保を目的として国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所により高知西バイパスの計画が図られた。

高知西バイパスは、高知市鴨部よりいの町波川までの総延長9.8kmの区間で計画されており、高知市鴨部よりいの町枝川までのⅠ期工事区間は平成9年度に開通した。いの町枝川から波川区間についてはⅡ期工事として地域高規格道路・高知松山自動車道の一部としての事業が進められてきた。いの町内では平成18年度から高知西バイパス建設工事が進められている。路線は、いの町中心部の南部丘陵地を現国道33号に並行して西に進み、仁淀川に架橋して対岸の鎌田地区に渡り、波川、日高村方面に向けてのバイパスが建設される予定である。

いの町内には、仁淀川及びその支流沿いに遺跡の分布密度が高く、バーガ森北斜面遺跡や天神溝田遺跡などに代表される弥生時代から中・近世にかけての周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く立地する。今回のバイパス路線計画は仁淀川の支流である宇治川沿い、及び南部丘陵地に工事が行われることから国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会による協議が行われ、計画路線

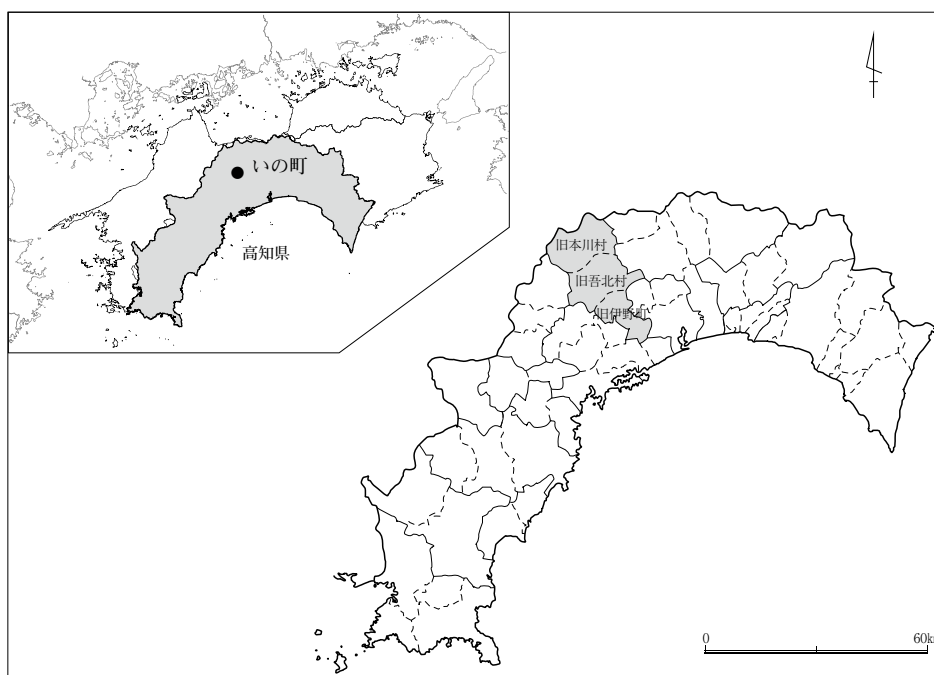


図1 いの町位置図

1. 調査に至る契機

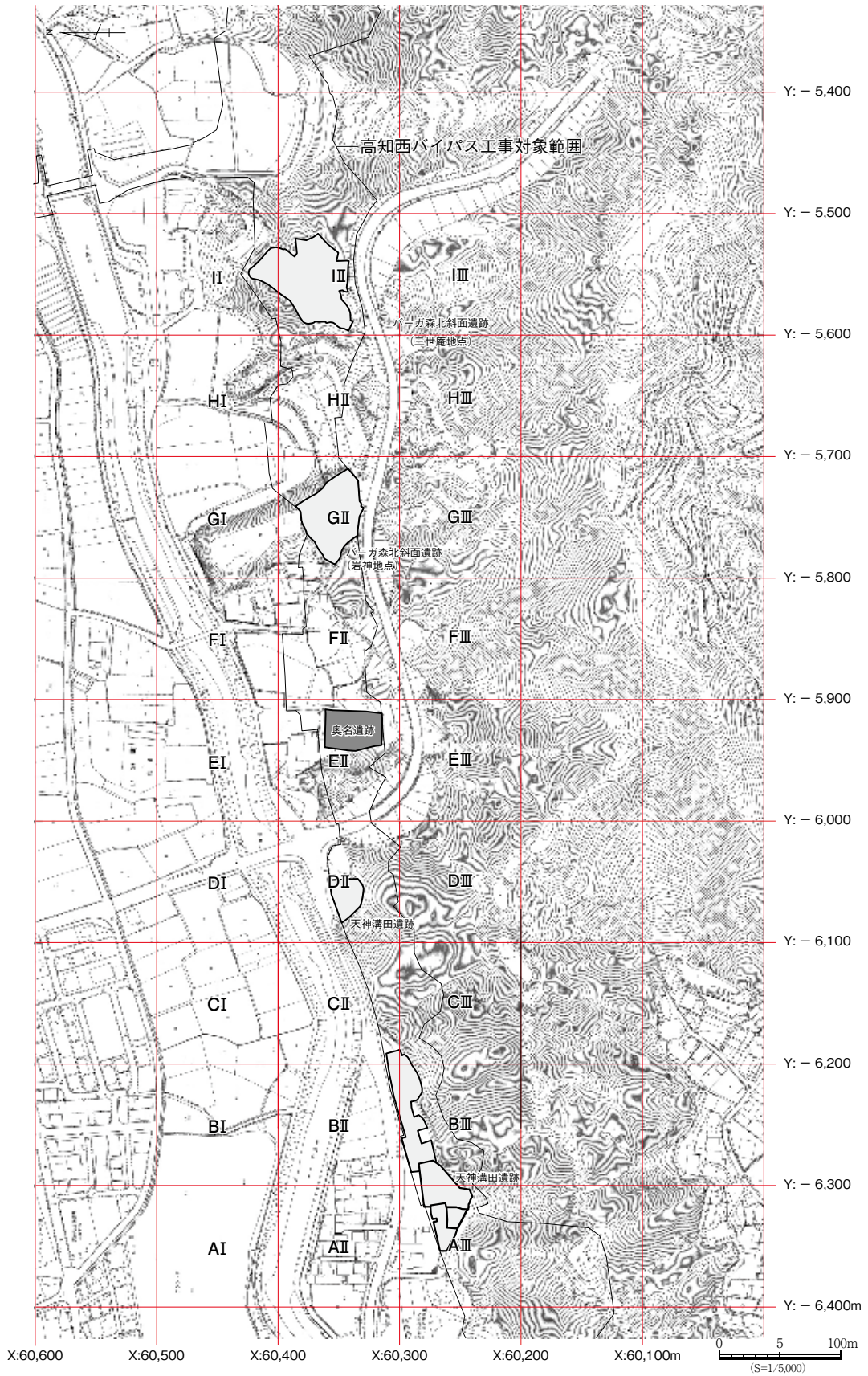


図2 位置図兼グリッド設定図

内及び周辺部に埋蔵文化財包蔵地が立地する工事計画区域については、事前の試掘調査を実施し、遺構・遺物の有無等、調査内容の結果により発掘調査が必要な場所、さらに、その範囲についての協議が行われた。

今回報告する奥名遺跡については、平成21年度に高知県教育委員会により試掘調査が実施された。

2. 調査の経過

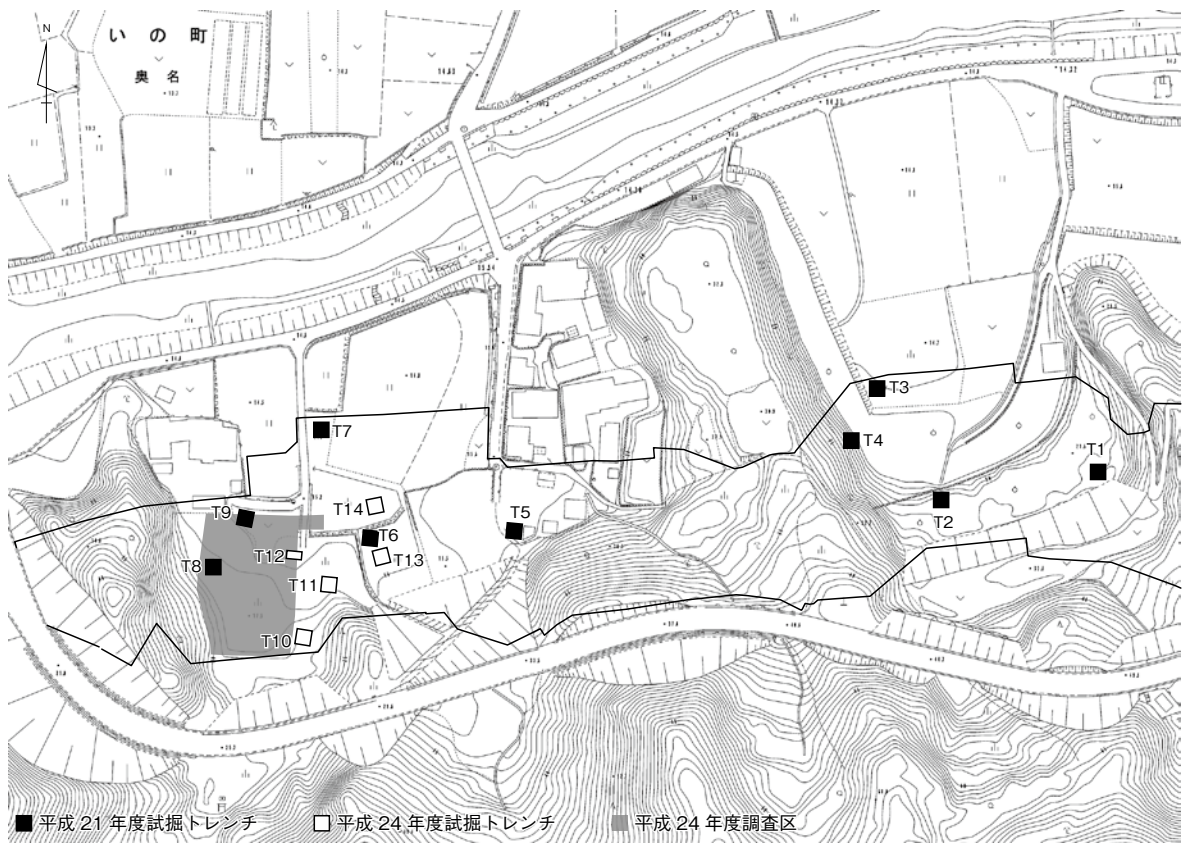
奥名遺跡は、昭和53年(1978)に行われた宇治川改修工事の際に縄文土器が出土し周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡範囲が登録されている。包蔵地内に道路計画があったため、平成21年度に高知県教育委員会が試掘調査を実施した。試掘調査では、中世の遺構、及び遺物包含層が確認され、その結果国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、いの町、高知県教育委員会による協議が行われ、工事計画区域内の丘陵部分を中心に記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、高知県教育委員会から公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが委託を受け実施した。現地発掘調査は平成24年5月24日から同年8月10日まで実施した。

3. 試掘調査の概要

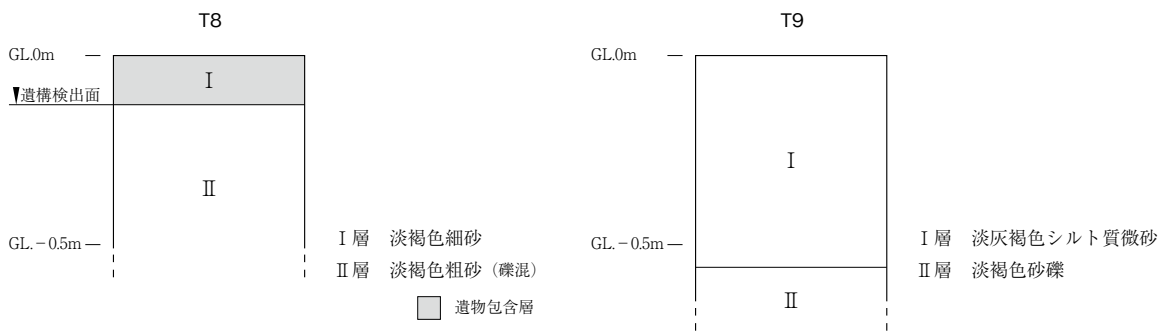
奥名遺跡の試掘調査は平成21年度に高知県教育委員会が実施した。工事対象範囲の内、バーガ森北斜面遺跡に接する2つの谷部を中心に試掘トレンチを設定し調査を行った。試掘地点は奥名遺跡の東丘陵を挟み、東側に広がる谷部(菖蒲谷)に4箇所(T1～4)、奥名遺跡包蔵地範囲である谷部に5箇所(T5～9)設定した。各試掘トレンチの規模は、4×4m(16㎡)であり、調査対象地4,200㎡の内、144㎡を調査した。東側谷部の調査では対象地南側の斜面部の農道建設に伴い大規模な耕地整理が行われており、その際の盛土が3.0m以上に及んだようである。T1・2では深さ1.2mまで掘削したが造成土であり、それより下層の確認が困難であった。T3では造成土下に厚さ1.0mのシルト層、その下層には粗砂層を確認した。T4は丘陵裾にあたり、表土直下は地山であった。西側の谷部に設定したT5～7では1.5～1.7mまで掘り下げたが、T5・6においては1.5mで粗砂・砂礫層、T7では表土下0.3mで砂礫層となる。各トレンチとも遺構・遺物は認められなかった。T8・9は丘陵裾部に設定したトレンチで、T8では表土直下の淡褐色粗砂層上面でピットを検出し、中世の土師質土器が出土した。T9においては礫で埋もれた溝を検出した。時期は不明であるが、屋敷地を区画する溝の可能性はある。

以上の試掘調査の結果から、T8・9を中心とした西側の谷の丘陵裾部2,800㎡を対象に本調査を行う事とした。

3. 試掘調査の概要



試掘トレンチ位置図



試掘トレンチ柱状図

図3 試掘トレンチ位置図・柱状図

第Ⅱ章 遺跡の概要と周辺の遺跡

1. 奥名遺跡の概要

奥名遺跡は、吾川郡いの町に所在し、仁淀川の支流、宇治川沿いに立地する。遺跡の背後丘陵には、弥生時代中期末から後期初頭の集落遺跡であるバーガ森北斜面遺跡や、中世山城の音竹城跡が広がる。昭和53年(1978)に行われた宇治川改修工事で、橋の付け替え工事の際に掘削土の中から偶然に縄文時代の土器が確認され、縄文時代の周知の埋蔵文化財包蔵地になっている。

2. 奥名遺跡周辺の遺跡

奥名遺跡の立地する平野部には縄文時代から江戸時代にかけての遺跡が分布する。これらの遺跡は、宇治川を中心とした自然堤防上に立地する。以下に時代ごとに周辺の遺跡の概要を述べる。

奥名遺跡では、昭和54年に行われた宇治川改修工事の際に縄文時代中期中葉の船元ⅢA式土器、後期中葉の津雲A式土器が発見された。また、対岸の大デキ遺跡では排水工事の際に水田から縄文時代晩期の磨製石斧が採取されている。

さらに、大デキ遺跡では弥生時代中期中葉に位置付けられる甕型土器の口縁部や石斧などが、更に宇治川を東へ500mほど遡ったサジキ遺跡でも同時期の土器片と石包丁が採取されており、宇治川右岸の平野部には弥生時代中期頃の遺跡が一定の広がりを見せる。宇治川下流域に目を向けると天神溝田遺跡が立地している。昭和36年(1961)の宇治川改修工事の際に中細形銅剣と中広形銅戈(いず



奥名遺跡周辺遠景(北より)

2. 奥名遺跡周辺の遺跡

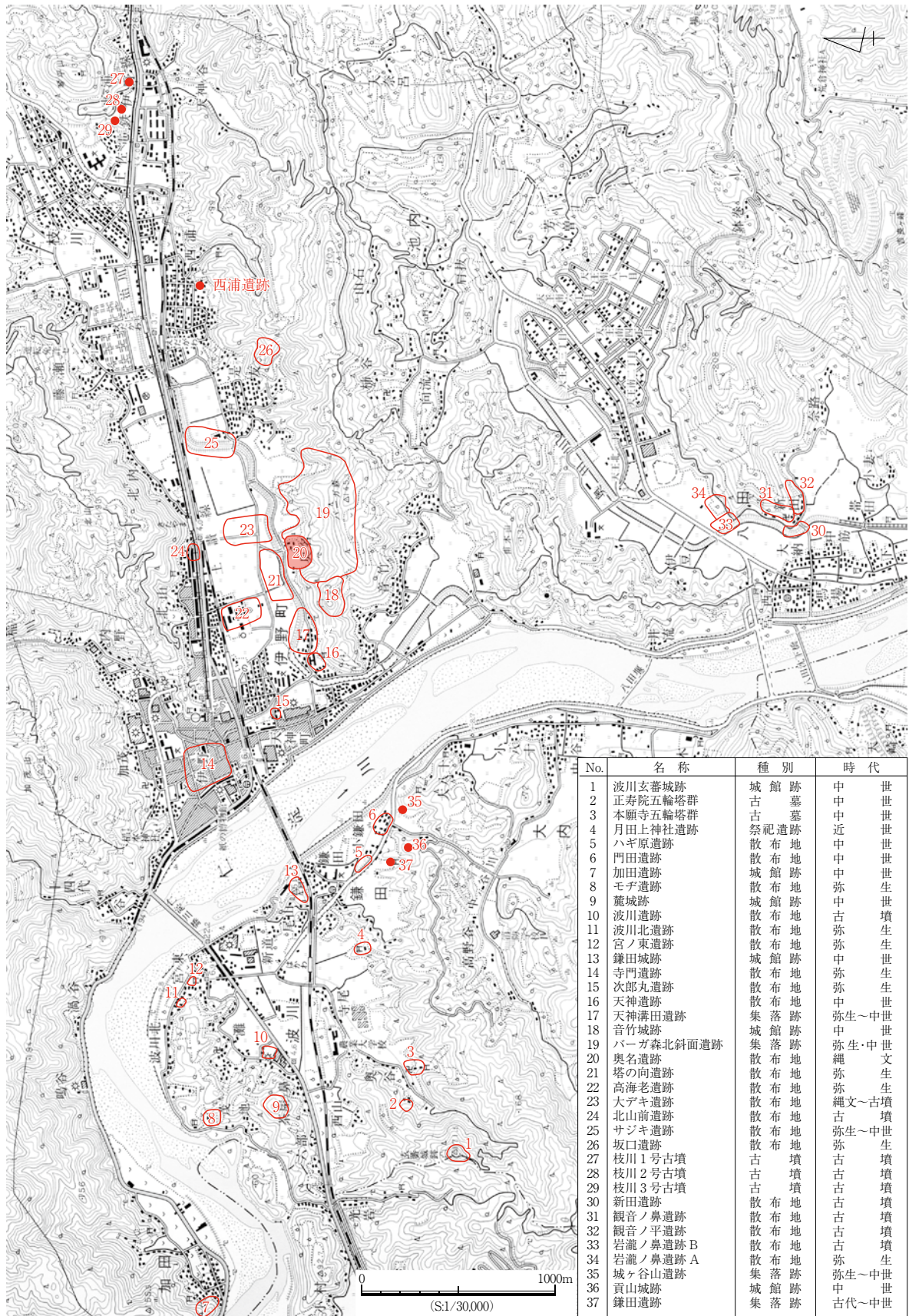


図4 奥名遺跡周辺の遺跡

れも昭和59年に県指定文化財となる)が、河川に近い畑を掘削中に地下2.5～3.0mで偶然出土した。銅剣の出土状況の詳細は不明であるが身は斜めになって埋没していたとされており、さらに5.0mほど離れた地点で銅戈も出土した。これらの青銅器を祭った弥生時代の人々の集落がバーガ森北斜面遺跡ではないかとされている。バーガ森北斜面遺跡は、奥名遺跡の南背後の標高140m前後の丘陵北斜面に広がる遺跡である。遺跡発見の端緒となったのは昭和32年(1957)で、地元の刈谷登喜義・中島勝秀両氏らによって三世庵・岩神地点を含む7地点から遺物が発見され、丘陵北斜面の中腹を中心とし東西約450m、南北300mの範囲の中に弥生時代中期末の集落の存在が想定された。その後、昭和43年(1968)、昭和49年(1974)、昭和51年(1976)に岡本健児・廣田典夫両氏らによって三世庵と奥名地区の発掘調査が行われ、竪穴建物跡3棟、弥生時代中期末の土器、石包丁、叩石、打製石鏃、鉄刀子、投弾などが出土した。これによって菖蒲谷を挟んで東側に三世庵・新崎、西側に岩神・岩神ノ上の標高45～80mを測る丘陵斜面部に弥生時代の集落の存在が明らかとなった。特に、三世庵地点で発見された竪穴建物跡は良好な状態で検出され、昭和50年(1975)に伊野町指定文化財として登録された。その後、平成9年度(1997)と平成11年度(1999)に伊野町南地区基幹農道整備事業に伴い、新崎地点と岩神地点の記録保存を目的とした発掘調査が実施された。新崎地点は三世庵地点の上部にあたり竪穴建物跡1棟、土坑4基、段状遺構を3箇所を確認し、弥生時代中期末の壺・甕を中心とする土器、石包丁、石錘などが出土した。岩神地点では竪穴建物跡2棟が検出されている。さらに、これらの調査地点に隣接する箇所について高知西バイパス建設に伴い平成22・23年度に調査を実施し、竪穴建物跡12棟、土坑114基など多数の遺構を確認し、弥生時代中期末から後期初頭の高地性集落のより具体的な様相を把握することができた。(詳細は高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第144集『バーガ森北斜面遺跡』2015.3)高知県に所在する弥生時代の高地性集落の構造を解明するうえで欠かすことの出来ない遺跡である。

天神溝田遺跡は、平成18年度から高知西バイパス建設工事及びいの町道建設に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期から江戸時代にかけての遺構と遺物が確認されている。(詳細は高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第113集『天神溝田遺跡Ⅰ』2010.2 同139集『天神溝田遺跡Ⅱ』2014.3)この調査で



バーガ森北斜面遺跡(三世庵地点)Ⅳ区完掘状態(北東より)



バーガ森北斜面遺跡(三世庵地点)Ⅱ区ST8完掘状態(西より)



バーガ森北斜面遺跡(三世庵地点)Ⅳ区遺物出土状態(南より)

2. 奥名遺跡周辺の遺跡

は弥生時代後期前半の土坑と、後半の土器溜まりを検出したが、先に述べた銅剣・銅戈の時期を示す遺構と遺物は確認されなかった。出土した土器は従来「天神式土器」と呼ばれるこの地域の弥生時代後期後半の指標土器であり、この頃には周辺部に集落が開けていたものと思われる。また、遺跡の東端では弥生時代後期前半代の土器が土坑から一括して出土した。この地点は宇治川を挟み対岸に塔の向遺跡があり、弥生時代後期と古代の土器片が採取されていることから、天神溝田遺跡と同時期の遺跡の広がりが明らかとなった。

天神溝田遺跡では他に古代の遺構と遺物が同町内で初めて確認され、銅製の銚帯金具や、鉄器製作を窺わせる鉄滓が出土し、鍛冶関連遺構も確認された。これらの古代の遺構・遺物の時期は主に8世紀後半から9世紀前半代、9世紀末から10世紀代の奈良・平安時代が中心である。

また、中世では完形の備前焼壺の中に土師質土器皿20枚、銭貨393点を納め、壺の口を和鏡で蓋をするように置いた埋納遺構が発見された。さらに、壺内部を精査した結果、アワ類の種子も入っており、何らかの祭祀を行った後に埋納されたものと推測される。埋納の時期は備前焼壺の形態から16世紀前半代と考えられる。また検出された遺構の時期は南北朝期から室町時代であり、14～16世紀前半代の掘立柱建物跡や土坑、溝を検出した。南背後にある丘陵上には音竹城跡が立地しており、現状では堀切や平場など中世の山城としての遺構が良く残っている。城主や築城時期の詳細は不明であるが、天神溝田遺跡及び、今回の奥名遺跡の調査によって検出された南北朝期から室町時代の遺構から推察し、同時期に機能していたものと思われる。

また、天神溝田遺跡では17世紀前半代と、18世紀後半から19世紀代を中心とする掘立柱建物跡や土坑、これらの屋敷を囲む溝が検出されており、近世段階における屋敷地の広がりが確認できた。



天神溝田遺跡Ⅱ区遺構完掘状態(北東より)



天神溝田遺跡 埋納遺構出土遺物



天神溝田遺跡 埋納遺構出土和鏡

第三章 調査成果

1. 発掘調査の概要

奥名遺跡の発掘調査地点は、バーガ森北斜面遺跡岩神地点の西側谷部に位置する。以前は果樹畑、畑地であり、現在は竹林、雑木林であった。現地標高は15.50～17.50mを測り、段畑状の地形を呈する。谷部の水が豊富で、調査地点内の一部では湧水する箇所があった。

遺構検出面は、標高15.20～16.25mで、調査区南部から北部にかけて地形が低くなる。調査区は南部、中央部、北部に大別することができ、南部と中央部との境界に、中世の段階に造られた成形面とみられる0.50～1.20m前後の段差がある。一段高い南部では、中世の遺構として掘立柱建物跡のピットや土坑、土師質土器の杯や皿と銭貨が伴って出土した地鎮の性格を持つピットが検出された。また、近世の遺構としては掘立柱建物跡と、畑地として転用された際の肥溜めとみられるハンダ土坑が検出された。一段低い調査区中央部では、中央に3×2間の掘立柱建物跡が検出されており、規模も大きく中心的な建物になるものと思われる。また、この建物の北東側には、建物と同じ主軸方向で溝が検出されており、屋敷の区画溝になる可能性が考えられる。この建物跡の西側では、直径1.1～1.2mを測る円形の土坑が検出された。墓の副葬品とみられる銭貨と共に土師質土器の杯が出土している事から、土坑墓の可能性もある。調査区北部では、古代(平安時代)の遺物が出土している。遺構は西側に集中しており、山裾の小高い部分に生活面があったものと思われる。調査区中央部と北部の境には石垣があり、この石垣下からは、近世の溝が検出された。石垣の裏込めからは、18世紀後半から19世紀を中心とする陶磁器類が出土している事から、この頃に築かれたものと思われる。また、

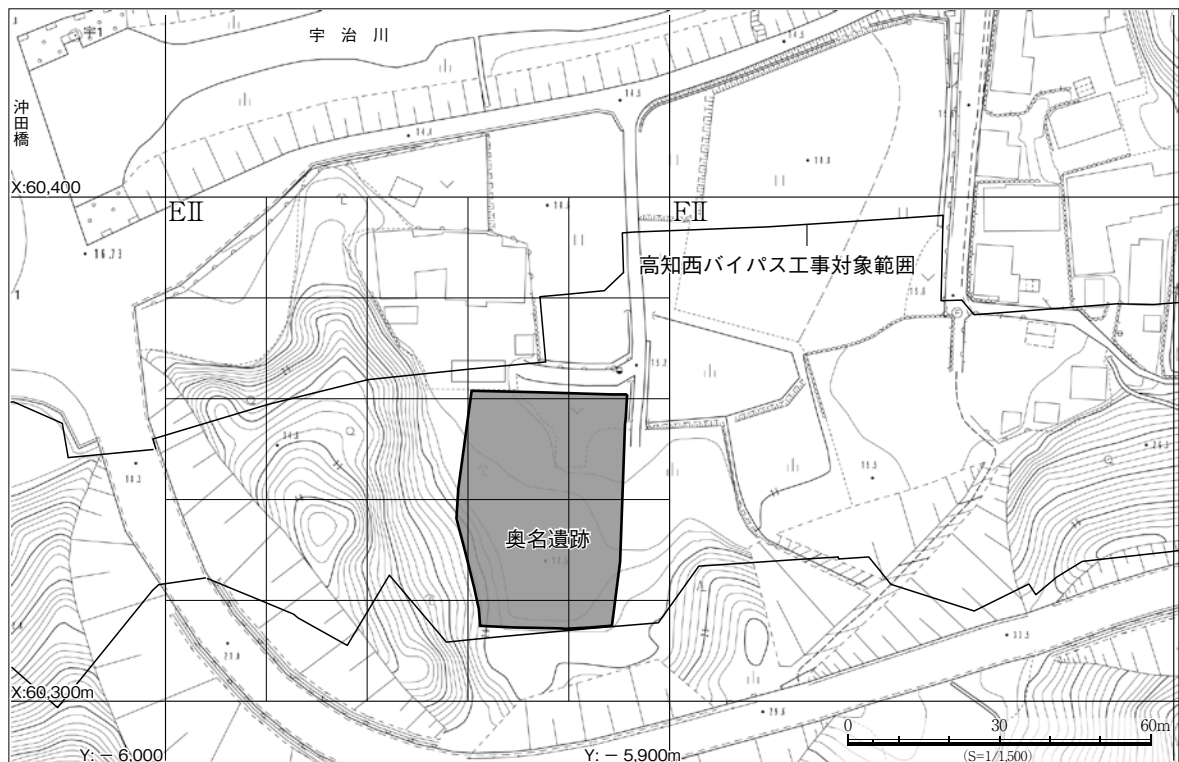


図5 調査区位置図

1. 発掘調査の概要

石垣下では中世の井戸を検出した。直径 1.2m を測る石組井戸で、深さは検出面から約 3.0m を測る。底面では湧水が認められ曲物板と漆器椀、杭など木製品が出土した。

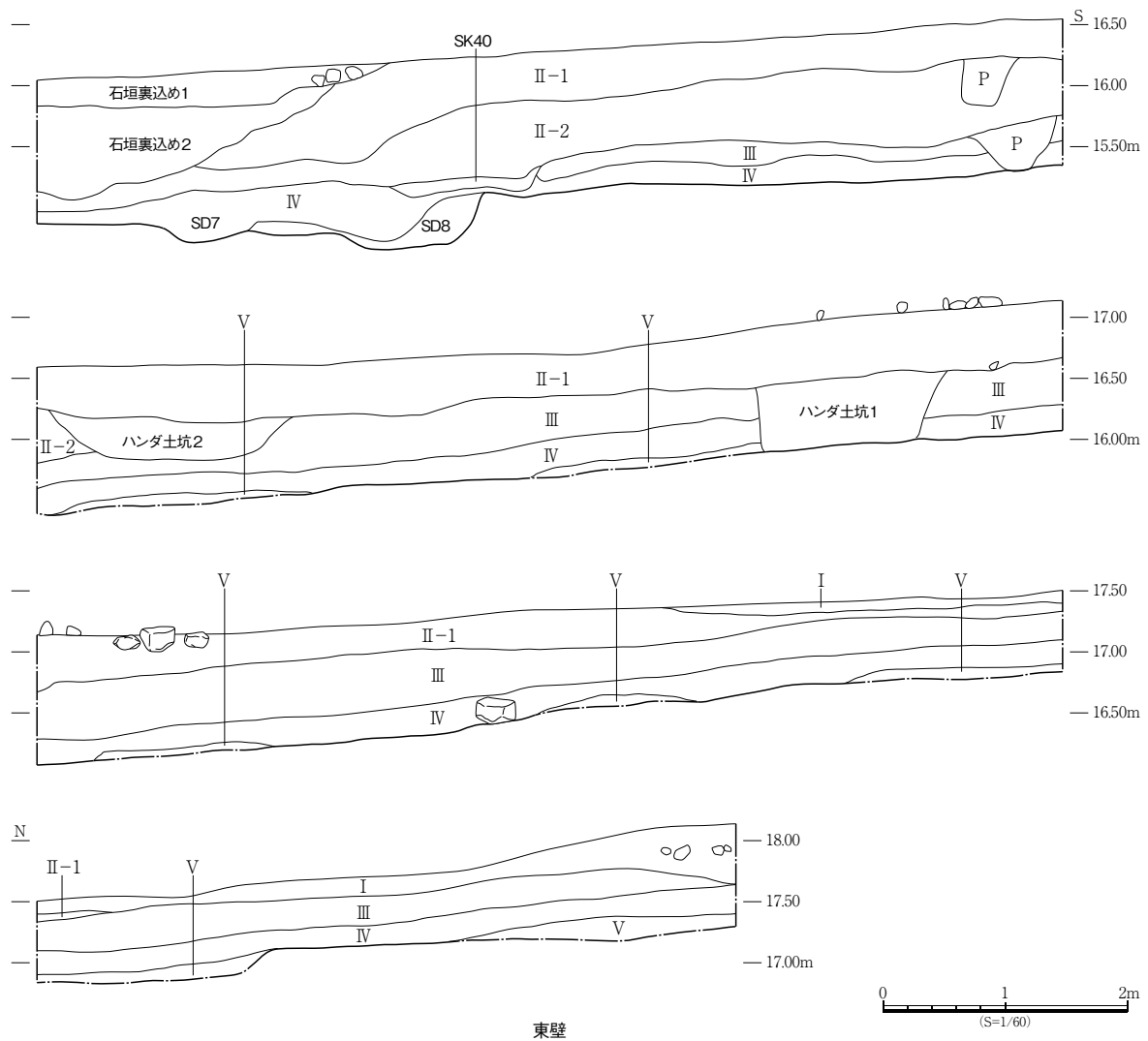
今回の出土遺物の時期は、古代(9c末～11c)、中世(13c後半～15c)、近世(17～19c中葉)、近現代(19～20c)で、古代は、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器などが調査区北部でまとまって出土した。中世の遺物は調査区南部から中央部にかけてⅣ層よりまとまって出土し、土師質土器・瓦質土器・東播系須恵器・備前焼・青磁・白磁・青花など鎌倉時代から室町時代にかけての遺物がみられる。近世は、唐津産の皿など17世紀後半に位置付けられるものや、能茶山窯など地元で生産された陶磁器類を中心に、肥前産の陶磁器などの流通品も見られる。遺物の組成は、碗や皿といった供膳具、焙烙や火鉢の雑器など生活用具が多種にわたり、江戸時代を通じて生活を営んでいた場所である事が窺える。19世紀以降に調査区北部と中央部に石垣が築かれ、屋敷地と耕作地への転換が行われたものと思われる。

2. 調査の方法と調査区の基本層序

発掘調査前に調査対象地内全域の伐採を行い現況の地形測量を実施した。その後方位に応じてローマ数字、アラビア数字を付し各調査区の設定を行った。調査にあたっては、公共座標(世界測地系)を使用し、調査対象地を含む100m四方に20mの中グリッド、4mの小グリッドを設け、包含層の遺物の取り上げ等には調査グリッド名を使用した。

調査対象地内の樹木伐採終了後に調査区を設定した。その後、平面的な発掘を重機(小型バックホー)及び人力により行った。廃土については、調査対象地東側の用地内に仮置きするため小型キャリアーを使用した。遺構完掘後はラジコンヘリコプターによる遺構全体の完掘状況写真撮影及び写真測量を委託し、記録保存を図った。また、調査終了後は調査成果について地元を対象とした現地説明会を実施した。

基本層序は、Ⅰ層が畑耕作土であり、地下は果樹根や竹根の影響を受けていた。黒褐色砂質シルトで、主に近世から近現代の陶磁器や瓦などの遺物が混じる状況であった。Ⅱ層は褐灰色・黄褐色を呈したシルト・シルト質砂であり、旧耕作土及び近世遺物包含層である。出土遺物は、肥前産磁器、能茶山窯など18～19世紀を中心とする陶磁器が多い。これら近世の出土遺物は主に調査区南部から中央部より出土した。また、調査区中央部と北部の境界には、高さ1.0m程の石垣が構築されていた。裏込めには18世紀後半から19世紀を中心とする近世の遺物が多くみられた。Ⅲ層はオリブ褐色砂質シルトで、特に調査区南部から中央部にかけての東寄りで堆積しており、主に近世の遺物を包含する。Ⅳ層は黒褐色粘土質シルトで、主に土師質土器の供膳具や、鍋片、瓦質土器、青磁など鎌倉時代から南北朝期を中心とする遺物が出土した。Ⅴ層は黄褐色シルト質砂で上面が遺構検出面である。また、調査区北西部で検出された遺構には暗褐色粘土質シルトの埋土のものがあり、これらは出土遺物から古代(平安時代)の遺構と思われる。調査区東壁では確認されなかったが、調査区北部は先述したように地形が一段低く、後世の開墾時に削平の影響を受けているものと思われる。



基本層序

- I層 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト(耕作土)
- II-1層 褐灰色(7.5YR4/1)シルト
- II-2層 黄褐色(2.5Y5/4)シルト質砂(φ5~7cm角礫混・近世遺物包含層)
- III層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質シルト(φ1~2cm礫混・中近世遺物包含層)
- IV層 黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト(φ1~2cm礫混・中世遺物包含層)
- V層 黄褐色(2.5Y5/6)シルト質砂(地山)

図6 調査区セクション図

2. 調査の方法と調査区の基本層序

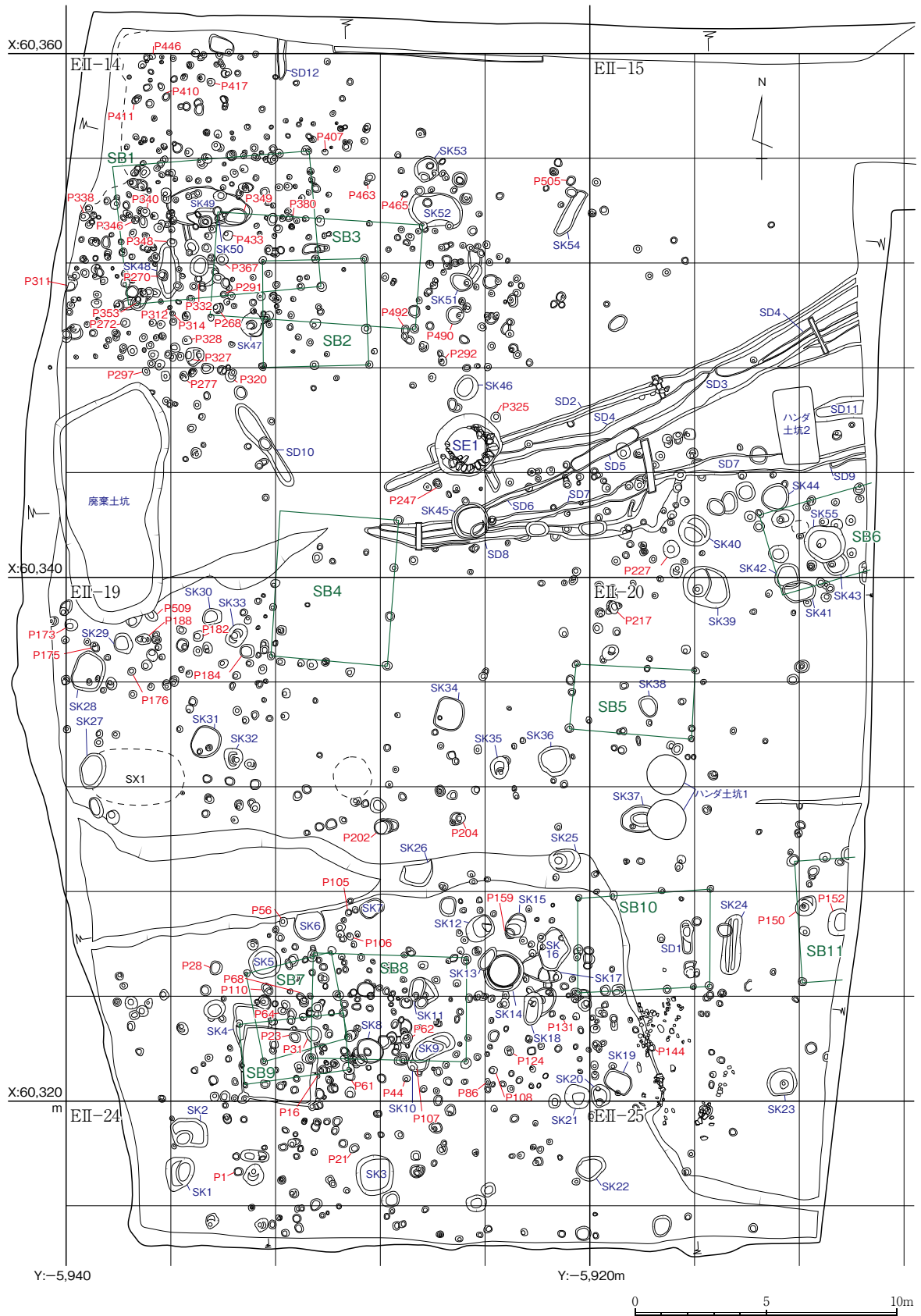


図7 遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

(1) 掘立柱建物跡

SB1(図8 1~3)

調査区北部で検出した桁行4間、梁行3間の東西棟側柱建物跡である。棟方位はN-85°-E、検出標高は東側14.70m、西側15.10m前後を測る。規模は桁行7.63m、梁行5.25m、床面積は40.05㎡である。柱穴は0.16~0.52mを測る円形・楕円形であり、その内約1/3が径0.06~0.30mの柱痕を持つ。埋土は、主に炭化物を含む黒褐色シルトと、暗褐色シルトである。P1から土師質土器細片18点、P2から土師器細片1点、P3から土師質土器細片7点と陶磁器皿1点(1)と鉄釘1点、P5から土師質土器細片5点、P10から土師質土器杯片1点と青磁片1点、P11から石錘1点(3)、P12から土師質土器細片1点と陶器碗1点(2)、P15から土師質土器細片7点が出土した。その他のピットから遺物は出土しなかった。1は陶磁器皿で、器壁は薄く口縁端部の小範囲に釉剥ぎが施される。2は陶器碗で、全面に釉調は極暗赤褐色、口縁端部は短く外反する。3は細粒花崗岩製の石錘である。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

SB2(図9)

調査区北部で検出した桁行2間^{*}、梁行2間の東西棟側柱建物跡である。棟方位はN-2°-E、検出標高は14.80m前後を測る。規模は桁行4.06m、梁行4.04m、床面積は16.40㎡である。柱穴は0.27~0.35m

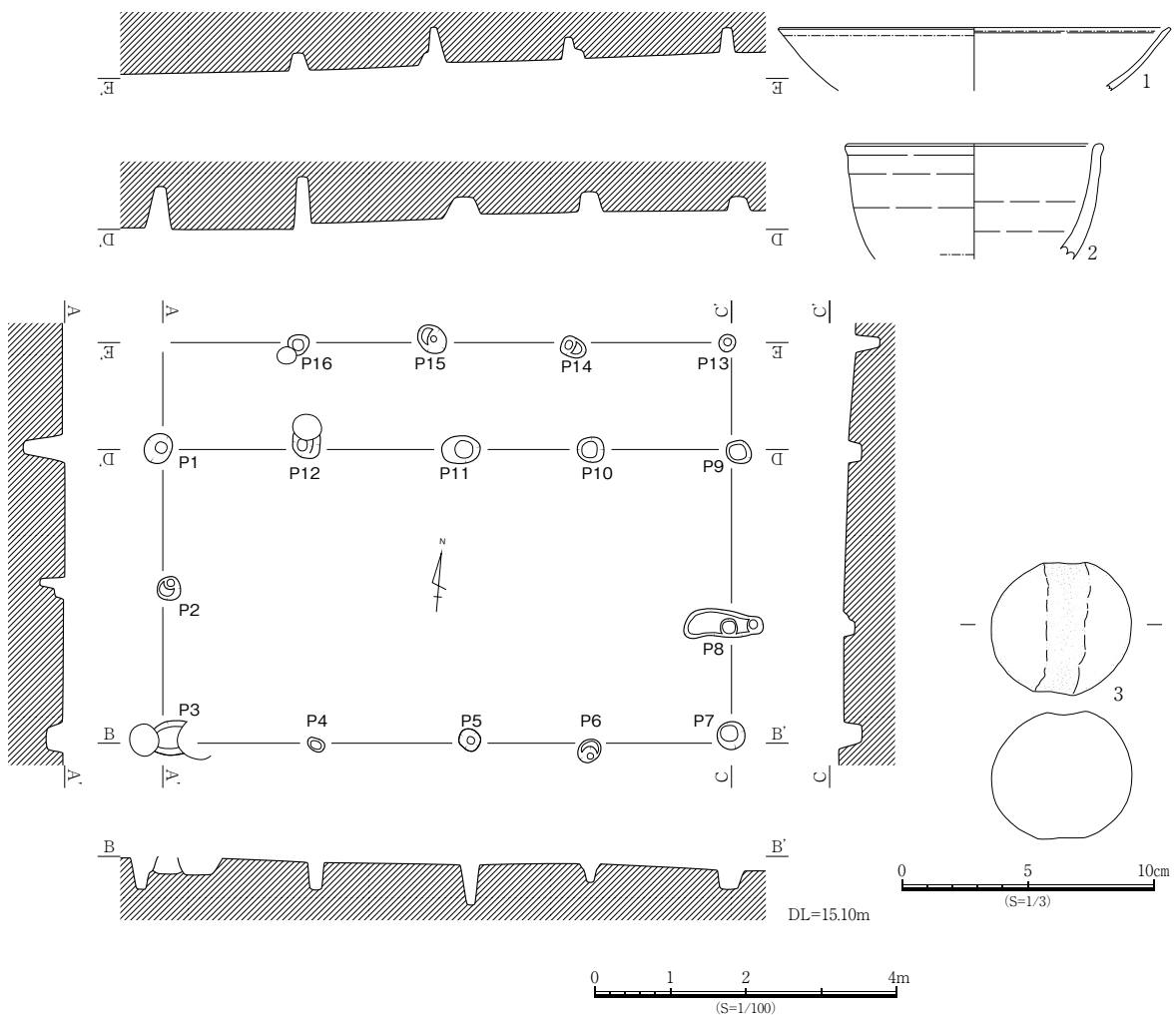


図8 SB1遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

を測る円形・楕円形であり、その内約1/3が径0.07～0.23mの柱痕を持つ。埋土は、主に炭化物を含む黒褐色シルトと、暗褐色シルトである。P1から土師質土器細片1点、P2から土師質土器細片1点、P3から土師質土器細片2点と陶器(備前焼)甕1点、P4から土師質土器細片3点と瓦質土器鍋片1点、P5から土師質土器細片1点、P6から土師質土器細片2点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

SB3(図10 4)

調査区北部で検出した桁行4間、梁行2間の東西棟側柱建物跡である。棟方位はN-86°-W、検出標高は東側14.90m、西側14.50m前後を測る。規模は桁行7.81m、梁行4.00m、床面積は31.24㎡である。柱穴は0.22～0.48mを測る円形・楕円形であり、その内P3は径0.15m前後の柱痕を持つ。埋土は、主に炭化物を含む黒褐色シルトである。P1から土師質土器細片2点、P2から土師質土器細片1点、P4から陶器(陶胎染付)1点、P6から土師質土器細片1点、P7から土師質土器細片3点、P9から土師質土器細片1点、陶器皿1点(4)、P10から土師質土器細片5点が出土した。4は瀬戸美濃系の皿である。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

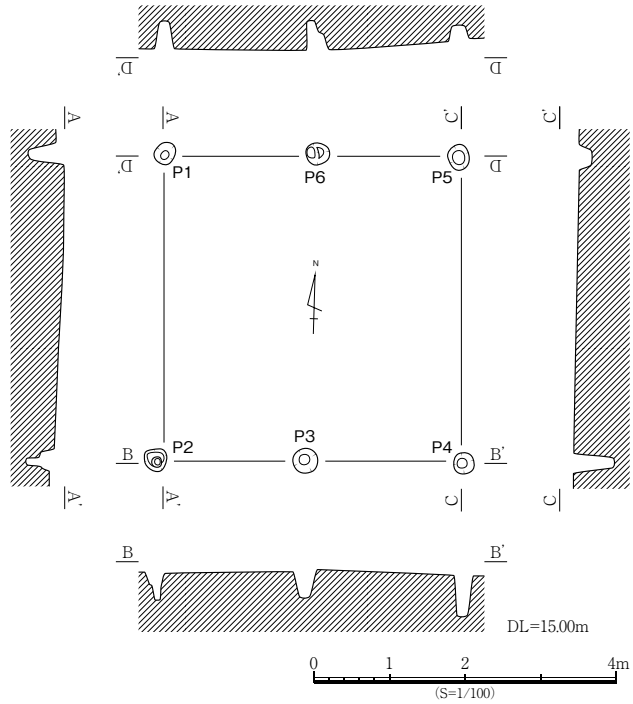


図9 SB2遺構図

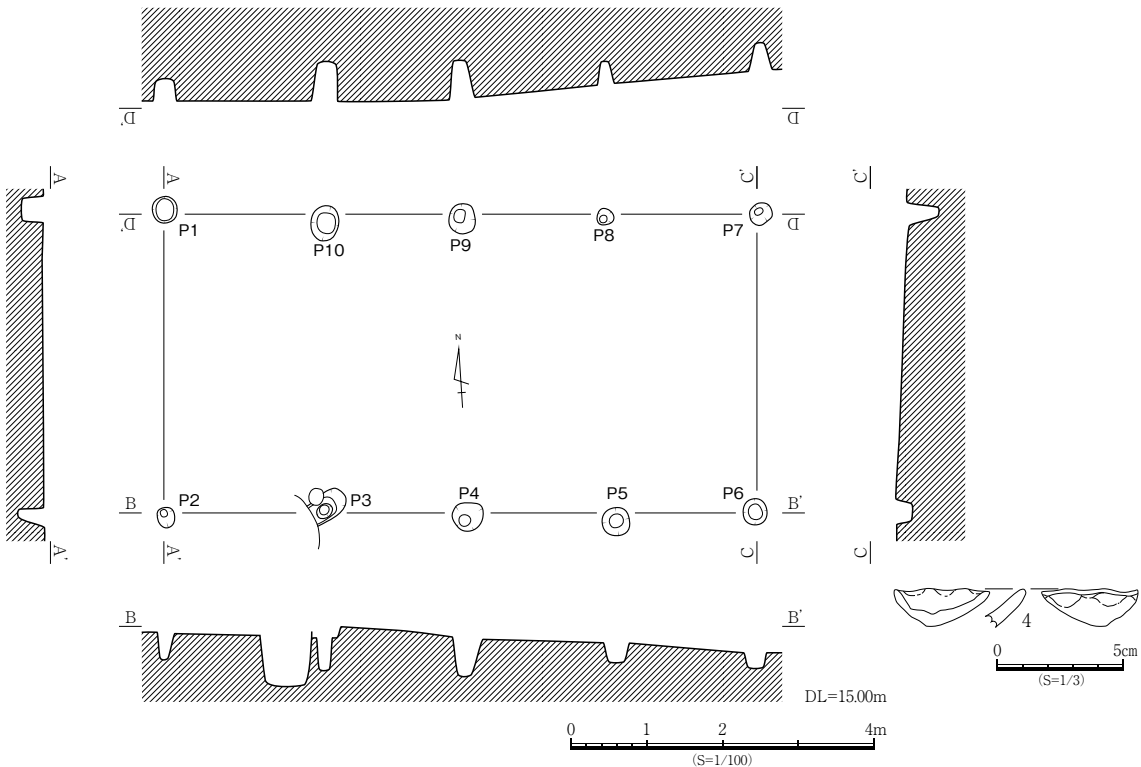


図10 SB3遺構図・遺物実測図

※ SB2・3の間数については柱間の数ではなく、桁行方向の柱間距離を基準とした

SB4(図11)

調査区中央部で検出した桁行3間、梁行2間の南北棟側柱建物跡である。棟方位はN-5°-W，検出標高は北側14.90m，南側15.50m前後を測る。規模は桁行5.63m，梁行4.43m，床面積は24.94㎡である。柱穴は0.26～0.39mを測る円形・楕円形であり，その内P3とP5で礎板石と考えられる石を検出した。埋土は，主に炭化物を含む黒褐色シルトである。P5から土師質土器細片5点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

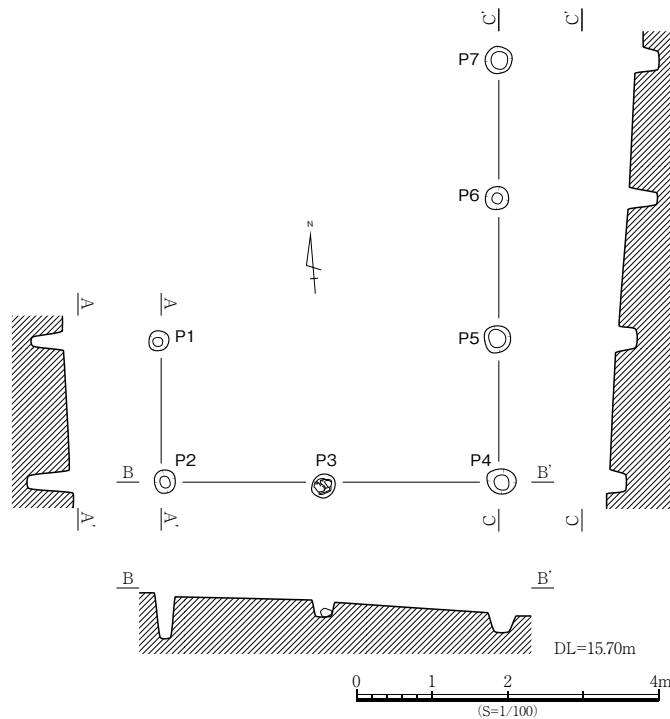


図11 SB4遺構図

SB5(図12)

調査区中央部で検出した桁行2間、梁行1間の東西棟側柱建物跡である。棟方位はN-84°-W，検出標高は北側15.30m，南側15.50m前後を測る。規模は桁行4.67m，梁行2.63m，床面積は12.28㎡である。柱穴は0.22～0.33mを測る円形・楕円形であり，埋土は，全て炭化物を含む黒褐色シルトで，遺物は出土していない。

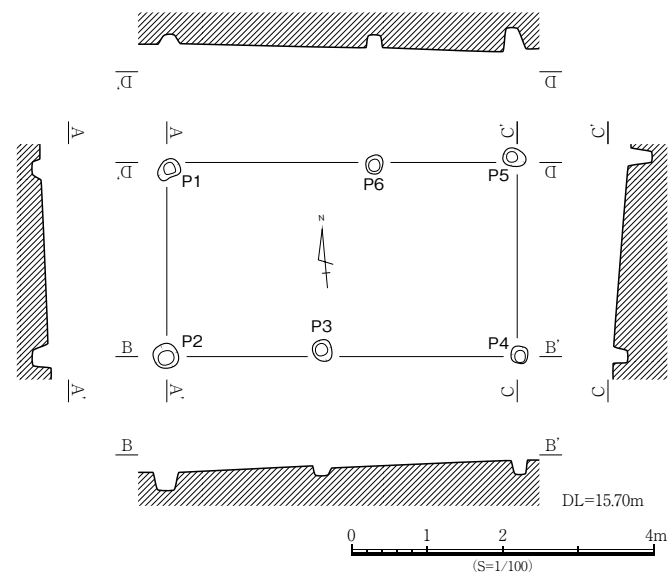


図12 SB5遺構図

SB6(図13)

調査区中央部東端で検出した桁行2間、梁行1間の東西棟側柱建物跡である。棟方位はN-74°-E，検出標高は北側15.00m，南側15.30m前後を測り，調査区東壁にかかる。規模は桁行3.98m以上，梁行3.22m，床面積は12.81㎡以上である。柱穴は0.25～0.45mを測る楕円形であり，その内半数が径0.15m前後の柱痕を持つ。埋土は，主に炭化物を含む黒褐色シルト

である。P1から土師質土器細片1点，P2から土師質土器細片3点，P5から土師質土器細片1点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

SB7(図14 5～11)

調査区南部で検出した桁行2間、梁行2間の南北棟側柱建物跡である。棟方位はN-14°-W，検出標高は北側17.00m，南側17.30m前後を測る。規模は桁行3.40m，梁行3.35m，床面積は11.39㎡である。柱穴は0.25～0.48mを測る円形・楕円形であり，その内半数が径0.15m前後の柱痕を持つ。埋土は，主に暗褐色シルトである。P3から土師質土器細片1点，P4から土師質土器杯1点(9)と細片4点，

3. 検出遺構と出土遺物

白磁皿1点(11), 陶器(備前焼)壺片1点, P5から土師質土器杯2点(6・7)と細片7点, P6から土師質土器細片2点, P7から土師質土器杯1点(10)と細片24点, P8から土師質土器杯2点(5・8)と細片5点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。5～10は土師質土器杯で, 5～7の底部切離しは回転糸切りである。11は白磁皿で, 胎土は陶質を呈する。

SB8(図15 12~18)

調査区南部で検出した桁行3間, 梁行2間の東西棟側柱建物跡である。棟方位はN-88°-W, 検出標高は北側16.90m, 南側17.10m前後を測る。規模は桁行6.09m, 梁行4.03m, 床面積は24.54㎡である。柱穴は0.20~0.56mを測る円形・楕円形であり, その内半数が径0.20m前後の柱痕を持つ。埋土は, 主に暗褐色シルトと, 炭化物を含む黒褐色シルトである。P3から土師質土器細片1点, P4から土師器甕1点(12)と細片1点, 陶器(瀬戸天目)碗1点, P5から土師質土器細片10点, 備前焼甕1点, 炆器甕1点(16), 銭貨1点(18), P6から土師質土器小皿2点(14)と細片8点, 東播系須恵器捏鉢1点(13), 鉄製品小札1点(17), P9から土師質土器細片7点, P10から土師質土器細片1点, P11から土師質土器細片3点, P12から土師質土器杯1点(15)と細片4点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。12は土師器甕の口縁部で, 胎土に石英を含む。13は東播系須恵器捏鉢で, 口縁端部は上方に伸び僅かに上下に拡張する。14・15は土師質土器である。14は小皿で外面ナデ調整, 底部切離しは回転糸切りである。15は杯で, 外面の一部に煤が付着する。底部切離

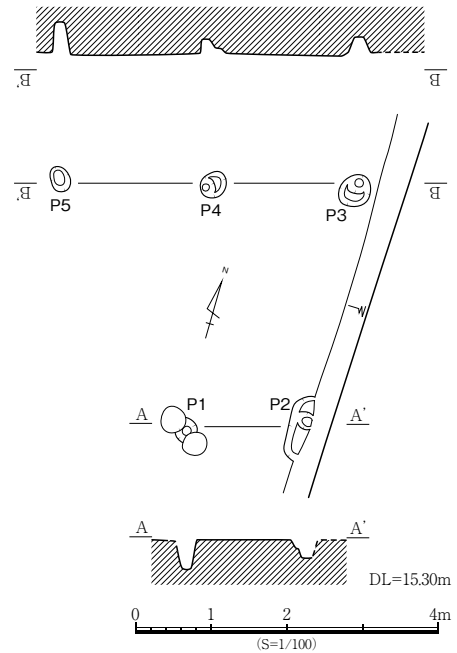


図13 SB6遺構図

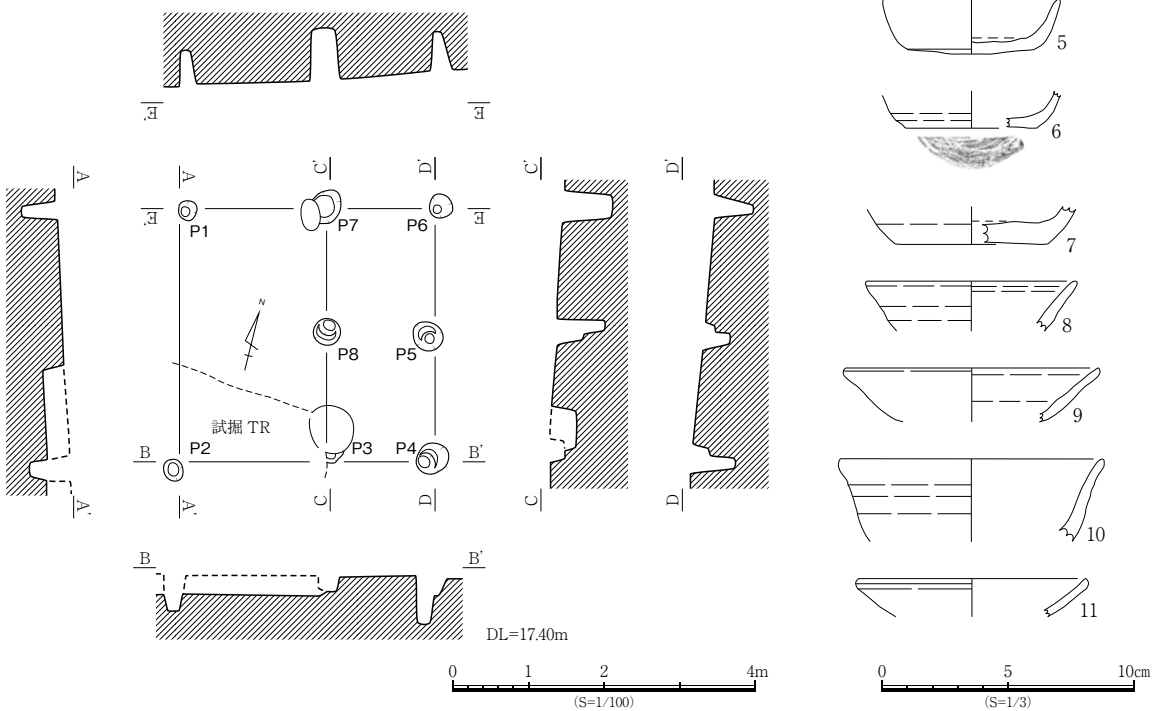


図14 SB7遺構図・遺物実測図

しは回転糸切りである。16は炝器甕の胴部片で、外面に自然釉がかかる。17は鉄製品の小札である。径3mmの円孔が2箇所認められる。18は開元通寶である。

SB9(図16 19~22)

調査区南部で検出した桁行2間、梁行1間の東西棟側柱建物跡である。棟方位はN-83°-E、検出標高は17.20m前後を測る。規模は桁行4.03m、梁行2.32m、床面積は9.34㎡である。柱穴は0.18~0.49mを測る円形・楕円形であり、その内P6は径0.20mの柱痕を持つ。埋土は、主に暗褐色シルトと、その他は炭化物を含む黒褐色シルトである。P3から土師質土器杯1点(20)と細片2点、P4から土師質土器皿1点と細片32点、鉄製品刀子1点(21)、P5から土師質土器細片3点、P6から土師質土器小皿1点(19)と火鉢1点、銭貨1点(22)が出土した。19・20は土師質土器である。19は小皿で内外面回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りである。20は杯で、ロクロ成形が施される。21は鉄製品の刀子である。22は開元通寶である。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

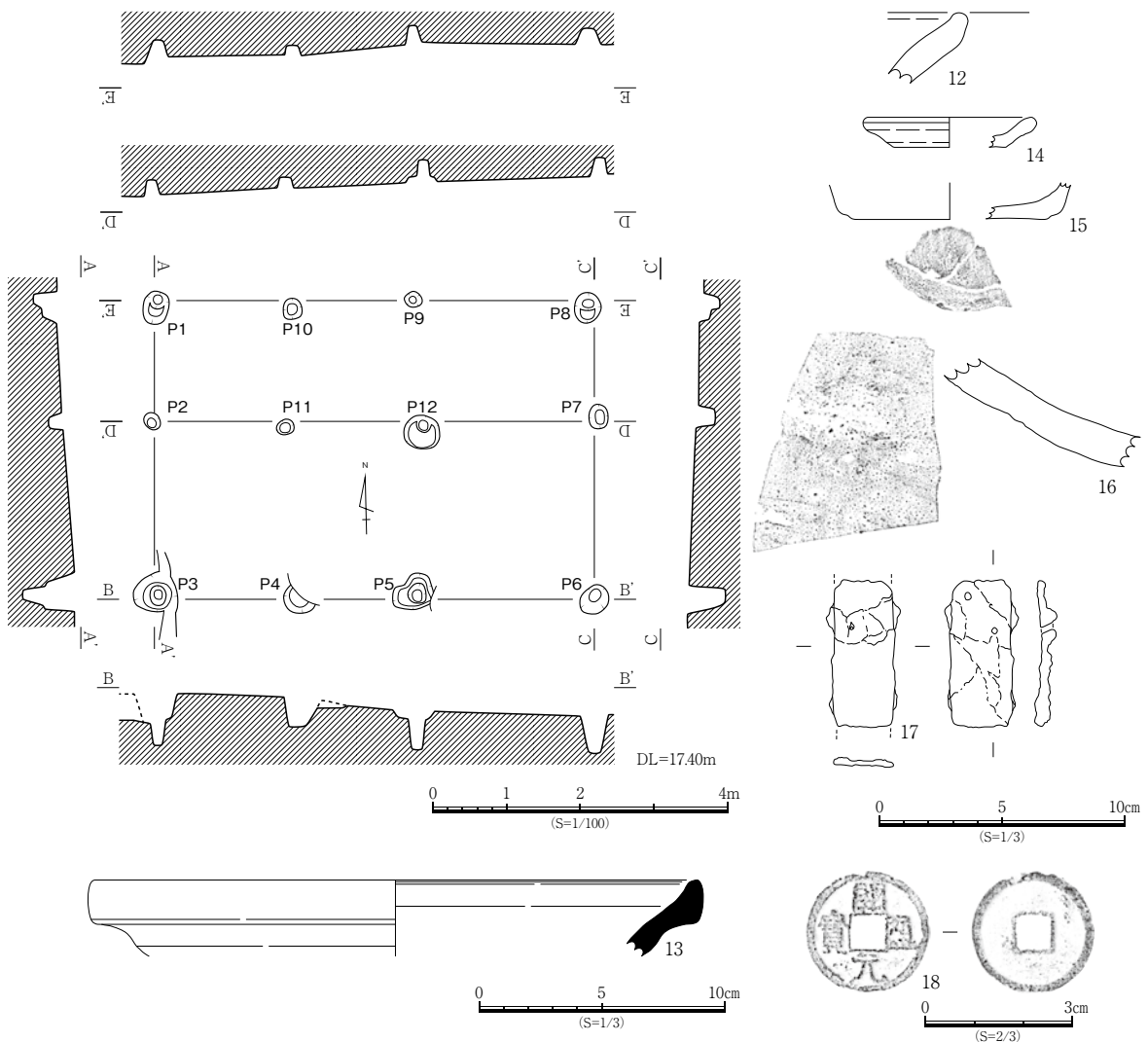


図15 SB8遺構図・遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

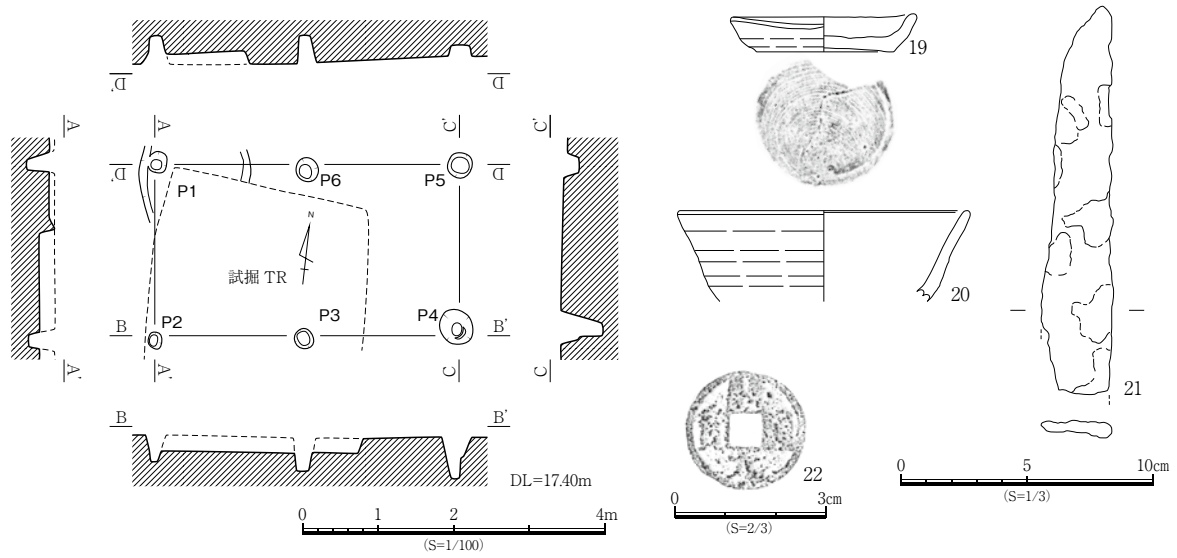


図16 SB9遺構図・遺物実測図

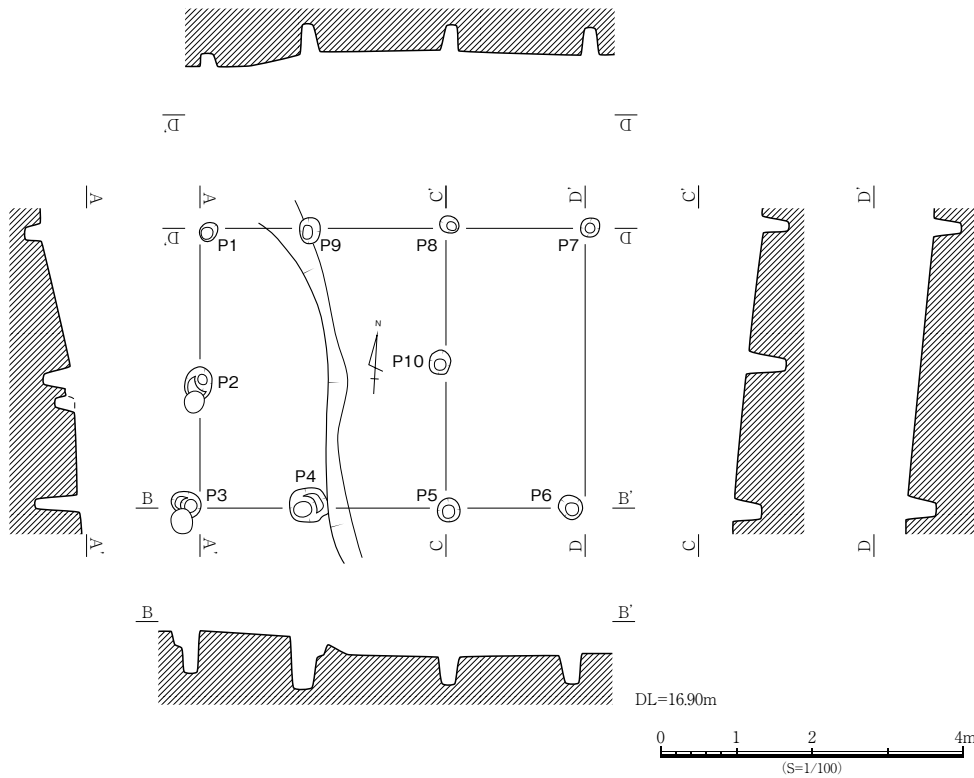


図17 SB10遺構図

SB10 (図17)

調査区南部で検出した桁行3間、梁行2間の東西棟側柱建物跡である。棟方位はN-87°-E、検出標高は北側16.10m、南側16.70m前後を測る。規模は桁行5.08m、梁行3.80m、床面積は19.30㎡である。柱穴は0.20~0.52mを測る円形・楕円形であり、その内P2~4は径0.20m前後の柱痕を持つ。埋土は、主に炭化物を含む黒褐色シルトである。P4から土師質土器細片2点、P5から土師質土器細片1点、P8から土師質土器細片2点、P10から土師質土器細片5点が出土した。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

SB11(図18 23)

調査区南部東端で検出した側柱建物跡である。調査区東壁にかかるため、棟方位・規模は不明であるが、西側の柱通りは総長4.65mである。検出標高は北側16.10m、南側16.50m前後を測る。柱穴は0.31～0.50mを測る円形・楕円形であり、埋土は、全て炭化物を含む黒褐色シルトである。P1から土師質土器細片2点、P2から土師質土器細片1点、P3から土師質土器杯1点(23)と細片5点、P4から土師質土器細片2点が出土した。23は土師質土器の杯で内外面とも摩耗が著しく、調整等は不明瞭である。中世の掘立柱建物跡と考えられる。

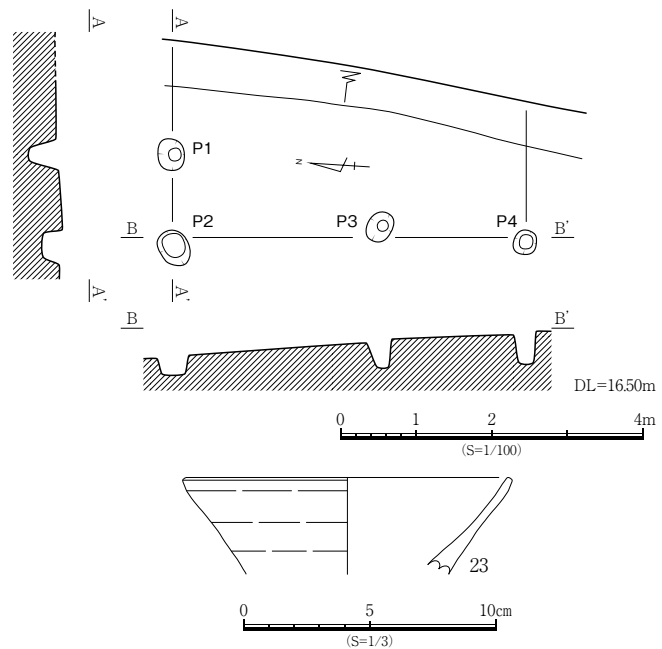


図18 SB11 遺構図・遺物実測図

(2) ピット

P28(図19 24・25)

調査区南部で検出した長径0.53m、短径0.45m、深さ0.19mを測る楕円形のピットで、断面形は台形状を呈する。埋土は黒褐色シルトで、炭化物が混じる。埋土中より土師質土器杯1点(24)と細片2点、及び陶器(備前焼)壺1点(25)が出土した。24は内外面とも回転ナデ調整で、底部切離しは回転糸切りである。25は備前焼の壺底部で内外面とも回転ナデ調整で、内面底部にはロクロ目が残る。

P56(図19 26～28)

調査区南部で検出した長径0.34m、短径0.30m、深さ0.63mを測る楕円形のピットで、断面形は台形状を呈する。埋土は黒褐色シルトで、炭化物が混じる。埋土中より土師質土器小皿3点(26～28)と細片17点、東播系須恵器捏鉢片1点、瓦質土器片1点、常滑焼甕片1点が出土した。26～28はいずれも内外面とも回転ナデ調整で、底部切離しは回転糸切りである。28は外面底部に板状の圧痕が残る。

P105(図19 29・30)

調査区南部で検出した長径0.27m、短径0.25m、深さ0.20mを測る円形のピットで、断面形は台形状を呈する。埋土は黒褐色シルトで、炭化物が混じる。埋土中より土師質土器杯1点(29)と瓦質土器羽釜1点(30)が出土した。29はロクロ成形で、底部切離しは回転糸切り、板状の圧痕が残る。30は内外面の口縁部及び鏝部にナデ調整が施され、外面の一部に煤が付着する。

P107(図19 31・32)

調査区南部、SK10の床面で検出した長径0.37m、短径0.31m、深さ0.23mを測る楕円形のピットで、断面形は台形状を呈する。埋土は黒褐色シルトで、炭化物が混じる。埋土中より土師質土器杯2点(31・32)と細片13点が出土した。31・32はいずれも内外面とも回転ナデ調整である。31の胎土には石英を含み、他とは異なる。

P110(図19 33・34)

調査区南部で検出した長径0.51m、短径0.38m、深さ0.23mを測る楕円形のピットで、径0.17m、

3. 検出遺構と出土遺物

深さ 0.19m の柱痕を確認した。埋土は黒褐色シルトで、炭化物が混じる。埋土中より土師質土器杯 2 点(33・34)と細片 2 点が出土した。33・34 はいずれも内外面とも回転ナデ調整で、底部切離しは回転糸切りである。34 の底部内面は横方向のナデ調整が施される。

P150(図20 35・36)

調査区南東部で検出した長径 0.92m, 短径 0.71m, 深さ 0.38m を測る楕円形のピットで、北側に段を持ち、中央は径 0.12m の柱痕状に落ち込む。埋土は黒褐色シルトで、炭化物が混じる。柱痕埋土より土師質土器細片 5 点、鉄製品小札 1 点(35)、鉄滓 1 点(36)が出土した。35 は厚さ 0.5cm の小札で重量は 10.50g である。

P173(図20 37・38)

調査区中央部西側で検出した長径 0.50m, 短径 0.46m, 深さ 0.75m を測る楕円形のピットで、断面形は台形状を呈する。埋土は暗褐色シルト礫で、炭化物が混じる。埋土中より土師質土器杯 2 点(37・38)と細片 10 点が出土した。37・38 はいずれも回転ナデ調整で、38 は一部に煤が付着し、底部切離しは回転糸切りである。

P175(図20 39・40)

調査区中央部西側で検出した長径 0.40m, 短径 0.32m, 深さ 0.11m を測る楕円形のピットで、北側に径 0.11m の柱痕を持つ。埋土は暗褐色シルト礫で、炭化物が混じる。埋土中より銭貨 10 点(39・40)が付着した状態で出土した。39 は元豊通寶で、40 には残り 9 点が付着しており、最前面は開元通寶である。

P188(図20 41・42)

調査区中央部西側で検出した長径 0.58m, 短径 0.40m, 深さ 0.49m を測る楕円形のピットで、中央に径 0.15m の柱痕を持つ。埋土は黒褐色シルトで、炭化物が混じる。埋土中より土師質土器片 5 点、青磁碗 1 点(41)、土錘 1 点(42)が出土した。41 は龍泉窯系の青磁碗で、

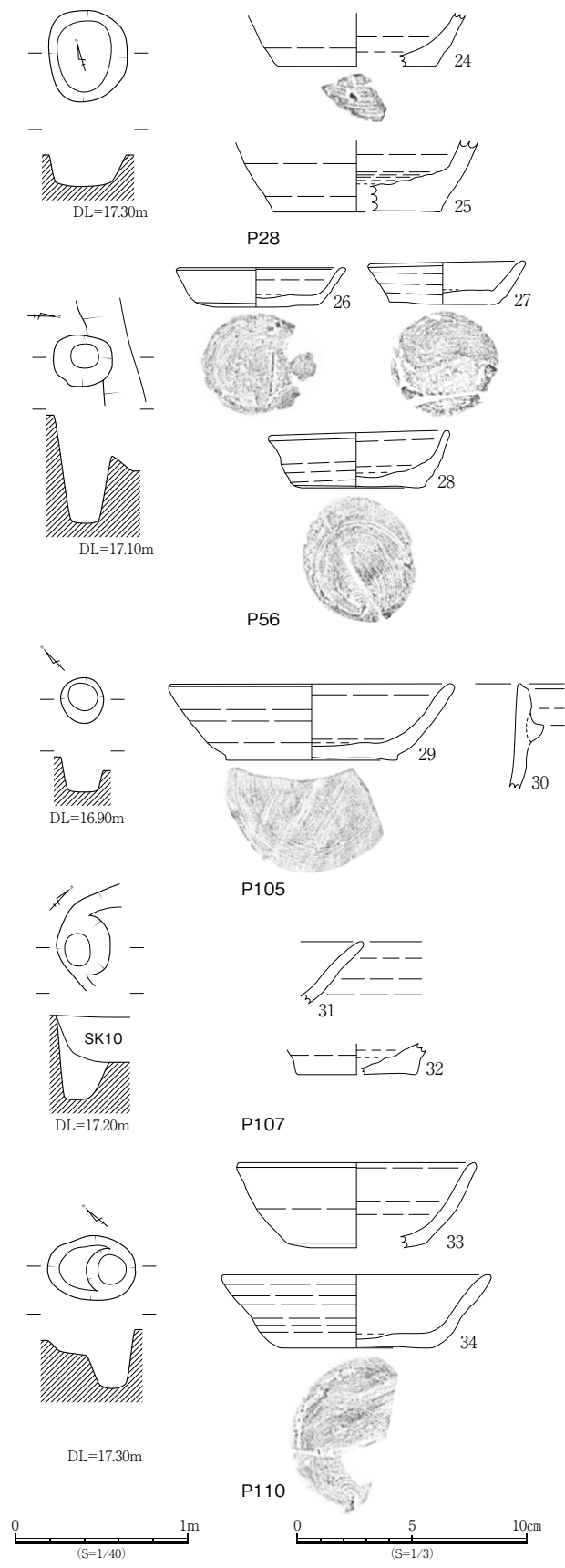


図19 ピット遺構図・遺物実測図1

外面に鎬蓮弁文が施される。

P202(図20 43・44)

調査区中央部で検出した長径0.72m, 短径0.61m, 深さ0.24mを測る楕円形のピットで, 東側は僅かに段状を呈する。埋土は黒褐色シルトで, 炭化物が混じる。埋土中より土師質土器杯2点(43・44)と細片4点が出土した。43は内外面とも回転ナデ調整, 円盤状高台で, 底部切離しは回転糸切りである。44は摩耗が著しく調整等は不明瞭である。

P247(図21 45・46)

調査区中央部で検出した長径0.29m, 短径0.27m, 深さ0.40mを測る円形のピットで, 西側に径0.08mの柱痕を持つ。埋土は暗褐色シルト礫で, 炭化物が混じる。埋土中より東播系須恵器捏鉢1点(45), 炆器鉢1点(46), 土師質土器細片7点, 瓦器鉢1点が出土した。45の口縁部は僅かに上下に拡張し, 外面は回転ナデ調整, 指頭圧痕が施される。46は高台付鉢の底部で, 内外面ともに回転ナデ調整が施される。

P327(図21 47・48)

調査区北部, P274の床面で検出した長径0.49m, 短径0.34m, 深さ0.33mを測る楕円形のピットで, 断面形は台形状を呈する。埋土は暗褐色シルト礫で, 炭化物が混じる。埋土中より土師器杯2点(47・48)と細片18点が出土した。47・48はいずれも内外面ともに回転ナデ調整, 底部切離しは回転ヘラ切りである。48の体部から口縁部は欠損する。

P349(図21 49・50)

調査区北部で検出した長径0.84m, 短径0.63m, 深さ0.17mを測る楕円形のピットで, 断面形は台形状を呈する。埋土は暗褐色シルトで, SK49を切る。埋土中より土師質土器小皿1点(49)と杯片1点と細片7点, 陶器瓶1点(50)が出土した。49は内外面とも回転ナデ調整が施されるが, 摩耗のため詳細な調整は不明瞭である。50は外面に自然釉がかかる。外面はヘラ

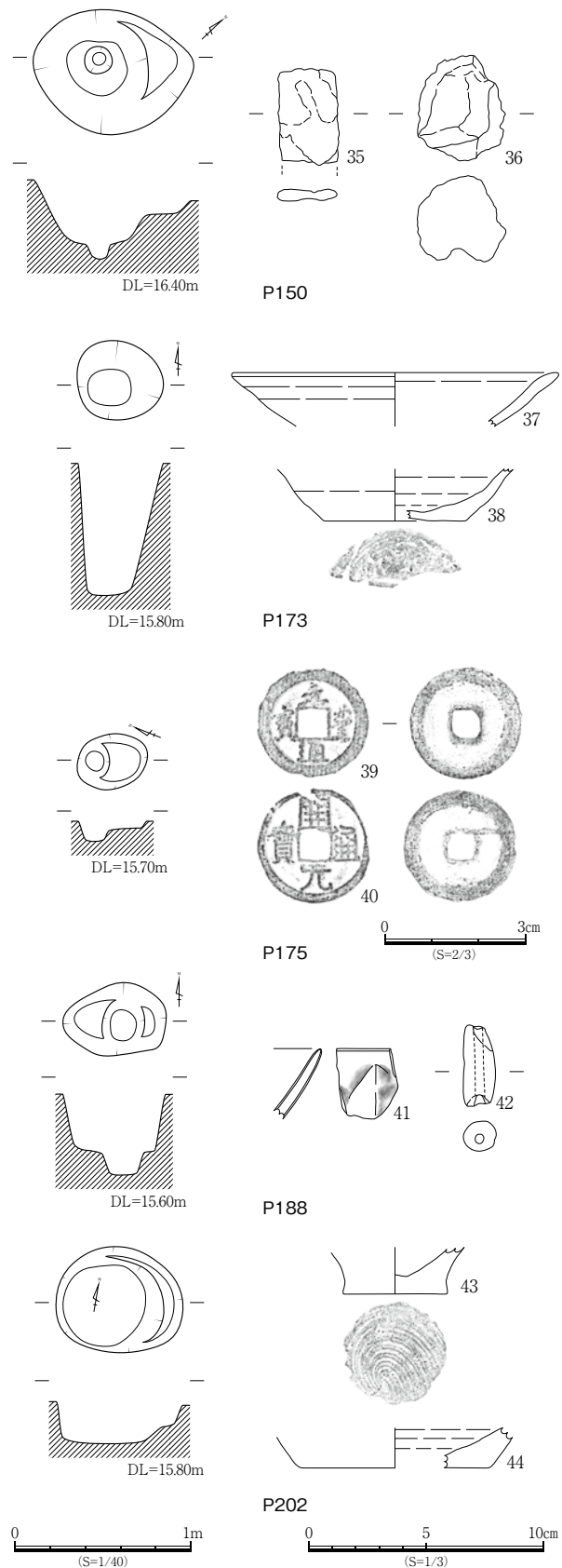


図20 ピット遺構図・遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

状工具による横方向のナデ調整, 内面はヘラ状工具とユビによる斜方向のナデ調整が施される。

P410(図21 51~58)

調査区北部で検出した長径0.34m, 短径0.28m, 深さ0.07mを測る楕円形のピットで, 断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗褐色シルト礫で, 炭化物が混じる。埋土中より土師質土器細片3点と銭貨8点(51~58)が出土した。51が元豊通寶, 52が天聖元寶, 53が皇口通寶, 54が治平元寶, 55が皇宋通寶, 56が景德元寶, 57が天禧通寶である。58は「平寶」が読みとれる。

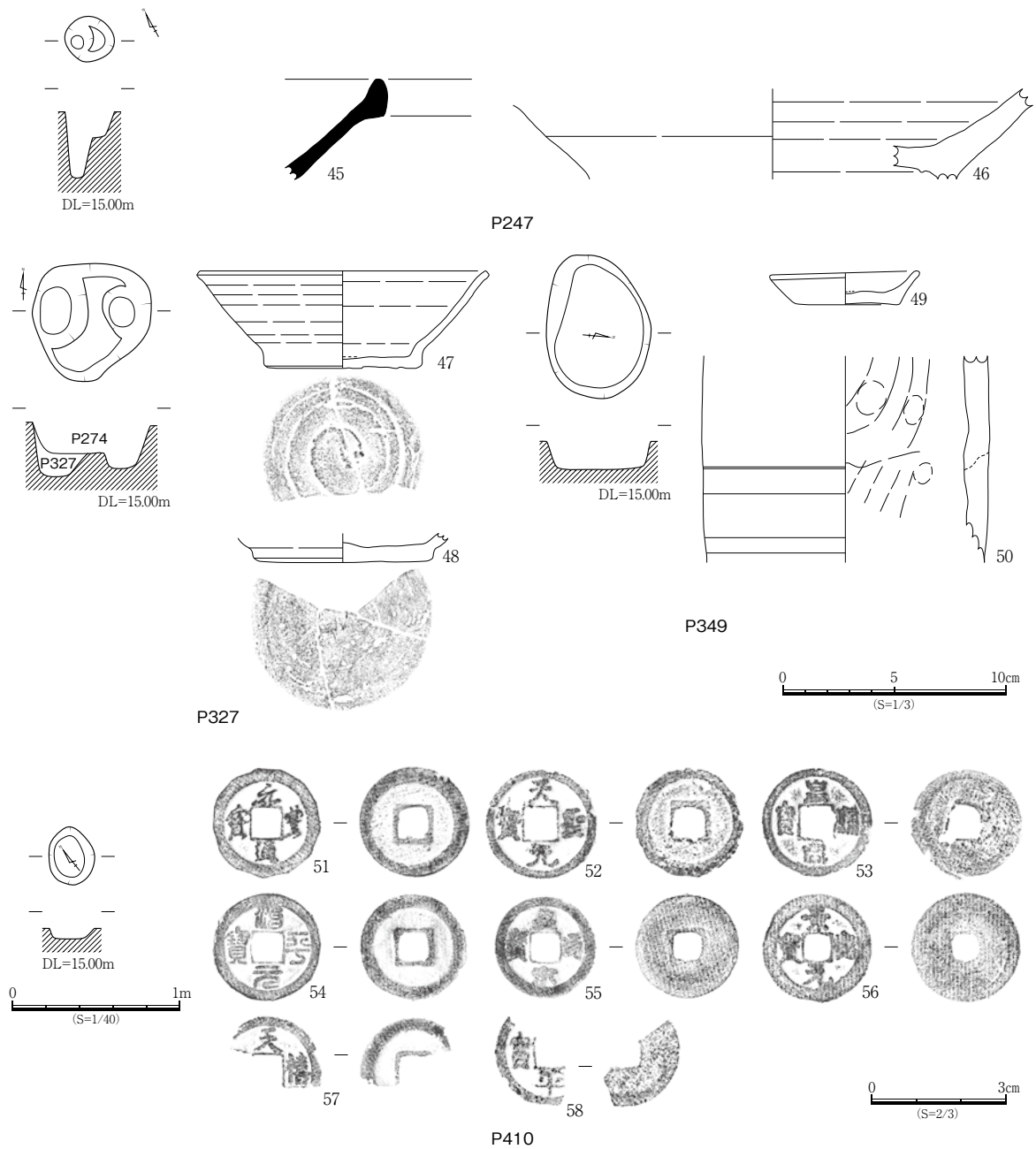


図21 ピット遺構図・遺物実測図3

(3) ピット出土遺物(図22~24 59~114)

59~62は土師器である。59は皿で、器壁は薄く口縁部は外方に開く。60~62は甕で60の口縁部は僅かに内傾する。61は口縁部内面に粗い単位の横方向のハケ調整が施される。口縁部は外方に開き、端部は上部に拡張する。62は胴部で、外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整が施される。搬入品である。63は内面黒色処理の黒色土器碗である。内面ヘラミガキ、外面ナデ調整が施される。搬入品である。64は須恵器の皿である。内外面とも回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りである。口縁端部は平坦面を呈す。

65~81は土師質土器である。65は小皿で内外面とも回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りである。66~80は杯である。66はロクロ成形で、内外面とも回転ナデ調整が施される。67も内外面とも回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りである。68・69も内外面とも回転ナデ調整で、69は摩耗が著しい。70は内外面とも回転ナデ調整、底部内面は横方向のナデ調整が施される。底部切離しは回転糸切りである。71の口縁部は僅かに内傾する。内外面とも回転ナデ調整である。72は底部片で、底部切離しは回転糸切りである。73も底部片で、内外面とも回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りである。74も底部片で、内外面とも回転ナデ調整、底部切離しは回転糸切りである。75は内外面とも回転ナデ調整、底部切離しは回転糸切りである。76の器壁は厚い。摩耗が著しく調整等は不明瞭であるが、内外面に回転ナデ調整がみられる。77は底部片である。底部切離しは回転糸切りである。78は内外面とも回転ナデ調整、底部切離しは回転糸切りである。79は大振りの杯で、器壁は薄い。内外面とも回転ナデ調整、底部切離しは回転糸切りである。80も内外面とも回転ナデ調整、底部切離しは回転糸切り、ヘラ状工具の痕跡が残る。81は鍋である。口縁部は肥厚し、端部にナデ調整が施される。外面頸部に指頭圧痕が残る、一部に煤の付着が見られる。

82は瓦器皿である。内外面の口縁部にナデ調整、外面底部に指頭圧痕が残る。83は瓦質土器鍋である。胴部は膨らみ、口縁部は直立気味に立ちあがる。口縁部は横方向のナデ調整、胴部上部に指頭圧痕が残る。

84~86は東播系須恵器捏鉢である。いずれも内外面とも回転ナデ調整、口縁端部は上方に拡張する。85の口縁端部には自然釉がかかる。13世紀前半から後半のものと考えられる。

87~92は青磁で、いずれも龍泉窯系碗である。87は内面に劃花文が施される。88は外面に細蓮弁文が施される。89は内面見込みに界線、草の文様が描かれる。全面に厚い釉が施され、高台内は丸く釉を剥ぐ。90~92は無文碗である。90の口縁部は斜上方に伸び、91の口縁部は外反する。92の口縁部は玉縁状を呈し、外反する。

93~95は白磁皿である。93・94は口縁端部に釉剥ぎが施される。95の口縁部は欠損する。13世紀後半から14世紀前半のものと考えられる。

96は炆器甕である。内面に指頭圧痕とナデ調整、外面にナデ調整が施される。97・98は青花である。97は皿で、内面に玉取獅子、外面に牡丹唐草が描かれる。高台畳付は釉剥ぎで、砂粒が付着する。98は碗で、内面に二重界線に丸三つを結合した文様が施される。

99~103は国内産陶器である。99は常滑焼甕の体部片と考えられる。内面に横方向のナデ調整が施される。100は常滑焼の壺または甕片で、外面に菊花状の押印文が施される。101は備前焼の播鉢である。口縁内部に稜線を残し、端部は上方に伸び平坦な面を成す。15世紀のものと考えられる。102・103も備前焼播鉢で、口縁部は断面三角形を呈し、端部は僅かに上部に拡張する。14世紀後葉から15世紀中葉のものと考えられる。104は近世陶器甕である。内外面に褐釉が施され、口縁端部は横方向に拡張し

3. 検出遺構と出土遺物

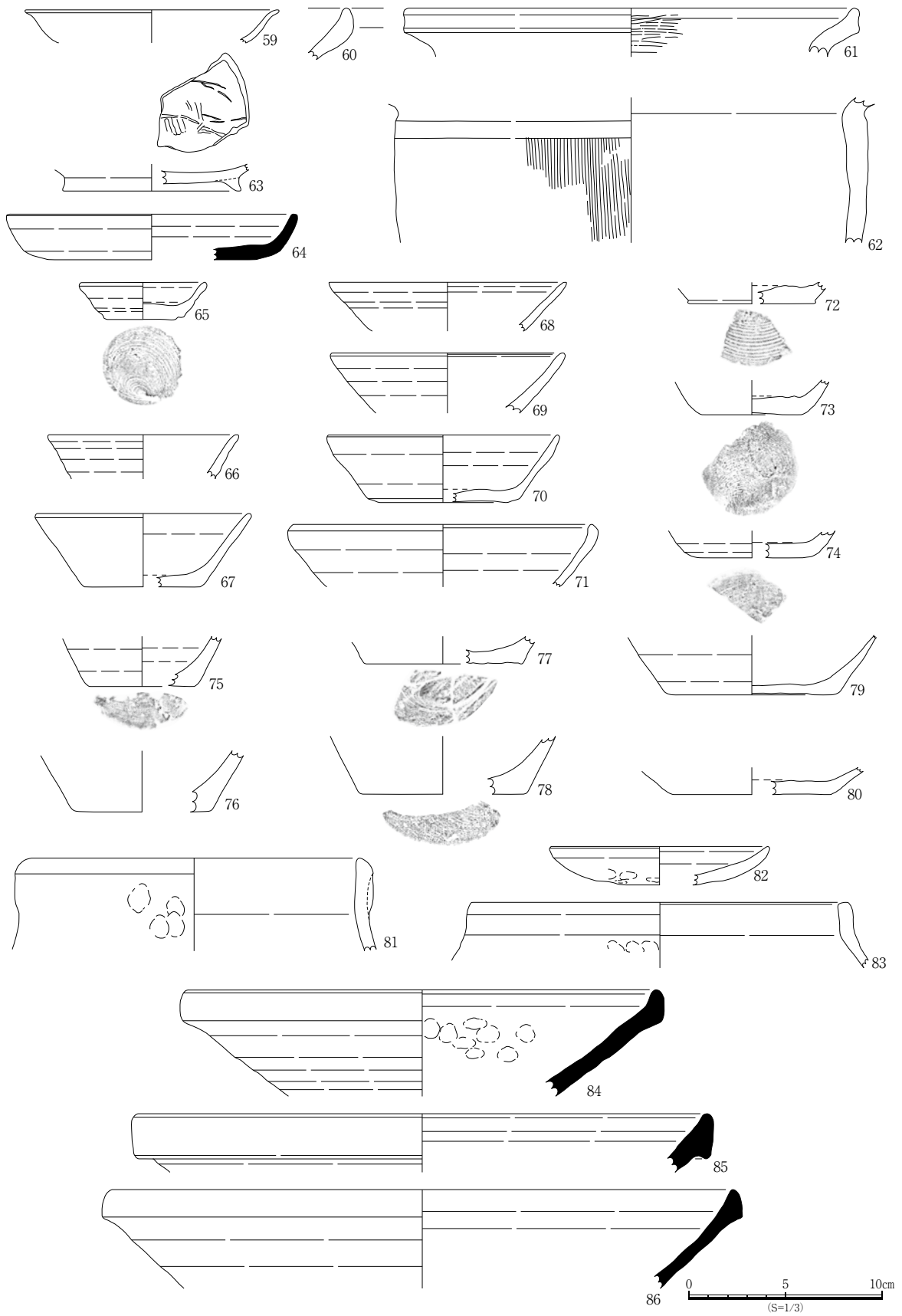


図22 ピット遺物実測図1

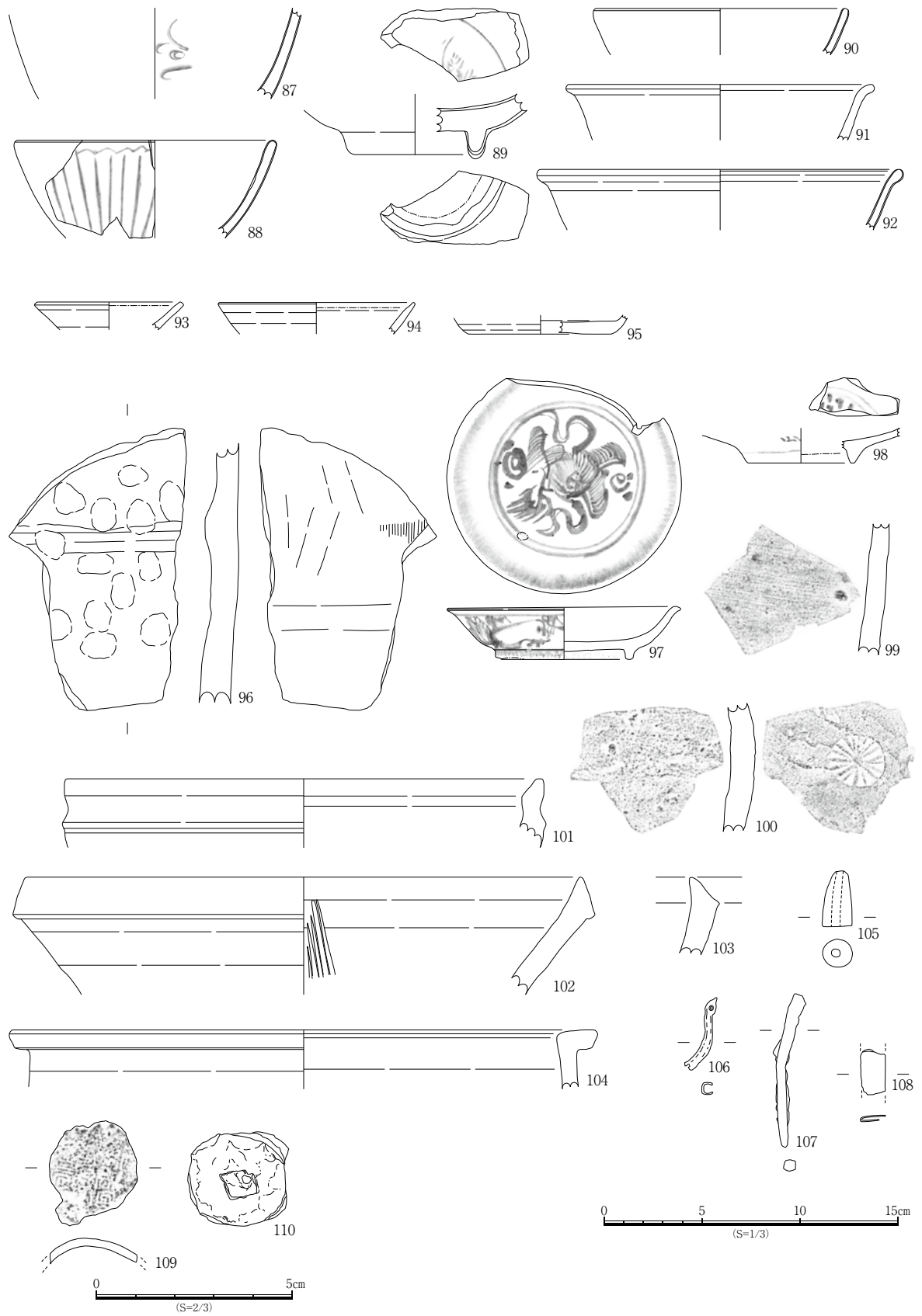


図23 ピット遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

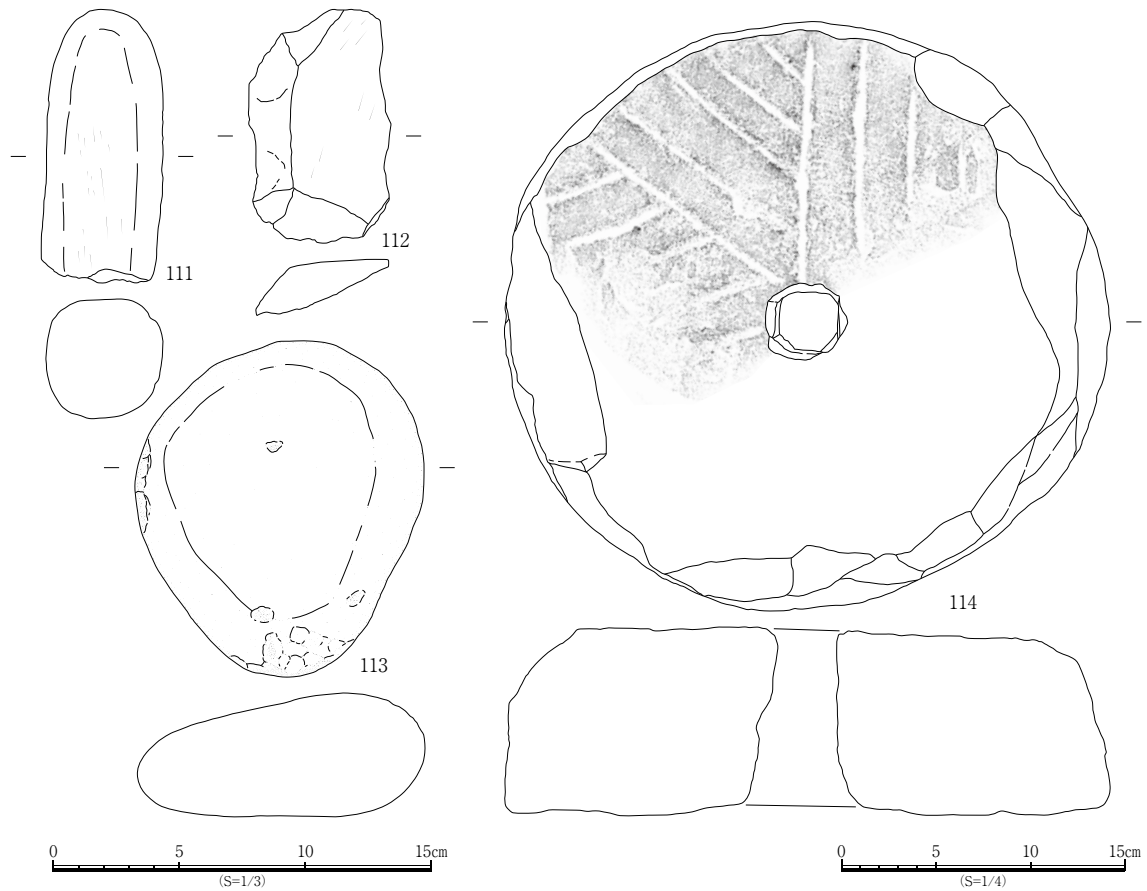


図24 ピット遺物実測図3

平坦面を成す。105は土錘である。106は銅製の飾金具，107は鉄製の釘で断面四角形状である。109は銅製品で，雷文が施される。110は銭貨で，数点が付着した状態で出土した。111～114は石製品である。111・112は砥石で，111は流紋岩製，112は細粒花崗岩製である。113は細粒花崗岩製の叩石で，114は砂岩製の石臼である。

(4) 土坑

SK3(図25 115～117)

調査区南端に位置する土坑である。規模は長径1.52m，短径1.42mを測り，長軸方向はN-13°-Wである。平面形は隅丸方形である。検出面からの深さは0.30～0.51mを測り，断面形は逆台形状を呈する。土坑の内側にはハンダ状の土を検出した。弥生土器細片2点，須恵器片1点，土師質土器細片1点，近世陶磁器片13点が出土しており，その内陶器灯明皿(115)，磁器皿(116)，肥前産磁器皿(117)が図示できた。

SK5(図25 118)

調査区南西部に位置する土坑である。規模は長径1.26m，短径1.23mを測り，長軸方向はN-55°-Eである。平面形は円形である。検出面からの深さは0.36～0.40mを測り，断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗灰黄色砂質シルトと黄灰色粘土，黒褐色砂質シルト，暗灰黄色シルト質粘土である。また埋土中からは10～30cm大の礫が検出された。土師質土器細片2点，近世陶器片1点が出土しており，その内近世陶器鉢(118)が図示できた。

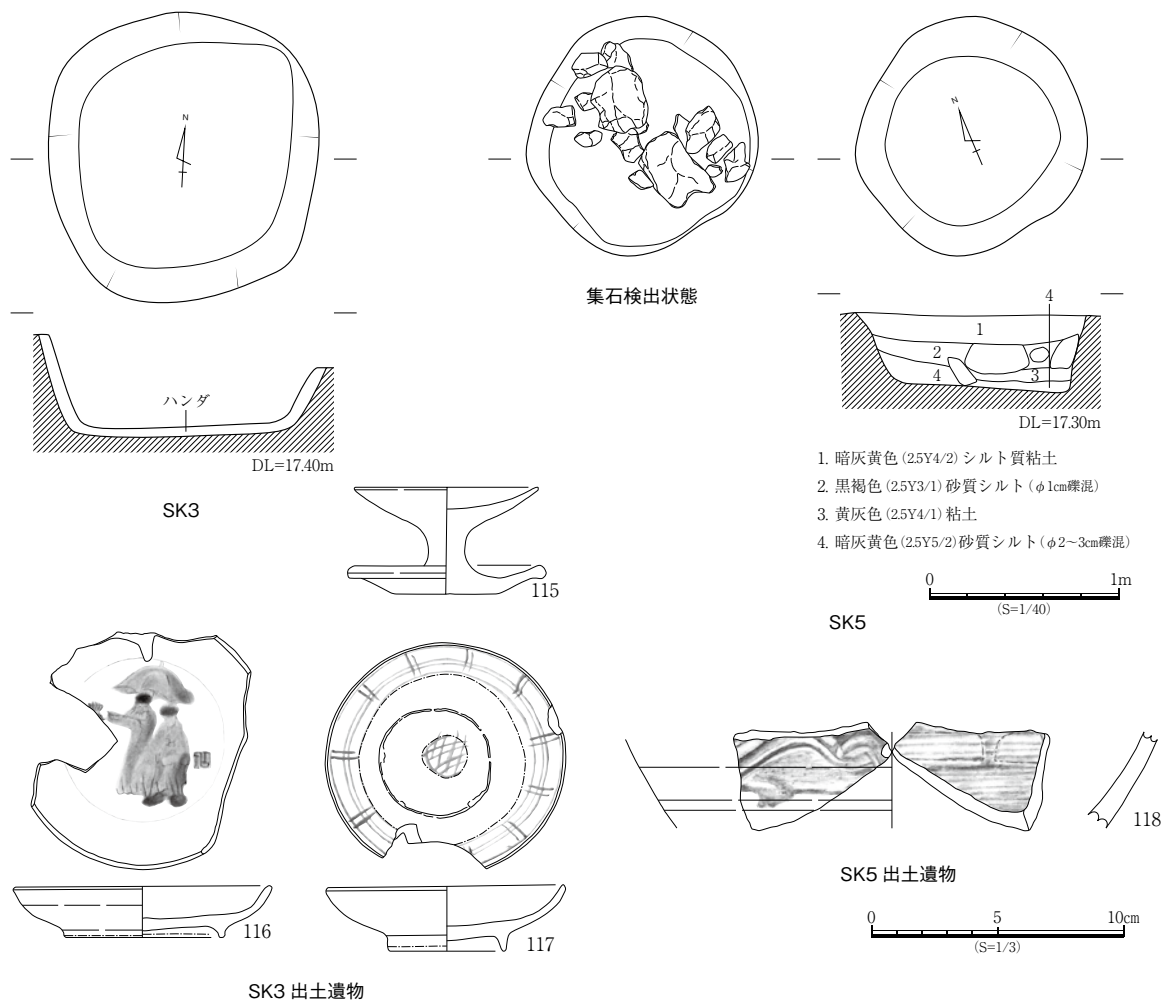


図25 SK3・5遺構図・遺物実測図

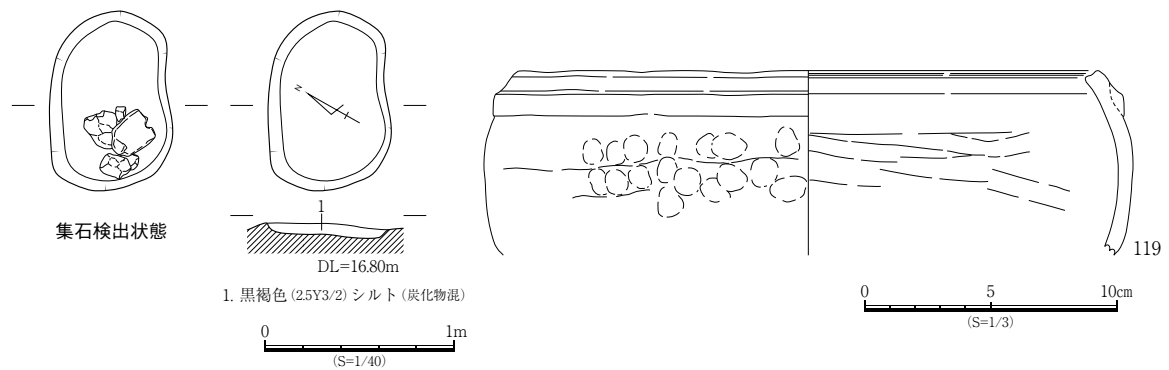
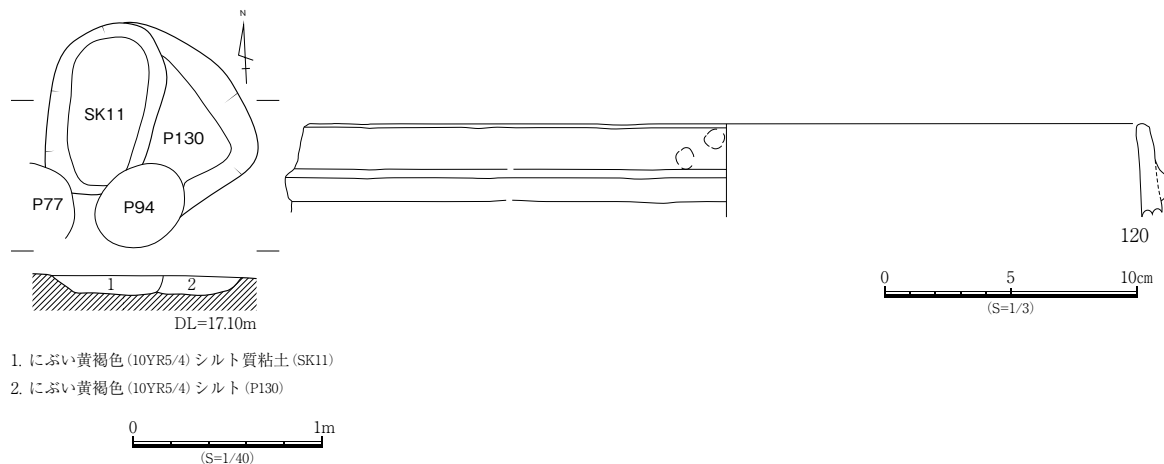


図26 SK7遺構図・遺物実測図

SK7(図26 119)

調査区南部中央に位置する土坑である。規模は長径0.94m，短径0.63mを測り，長軸方向はN-59°-Eである。平面形は楕円形で，検出面からの深さは0.08mを測り，断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。また遺構上面において20cm大の礫が検出された。土師質土器細片1点，須恵器甕片1点，瓦質土器羽釜1点などが出土しており，その内瓦質土器羽釜(119)が図示できた。119は断面三角形状の退化した鏝が巡り，外面は指頭圧痕が顕著である。

3. 検出遺構と出土遺物



1. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト質粘土 (SK11)
2. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト (P130)

図27 SK11遺構図・遺物実測図

SK11(図27 120)

調査区南部中央に位置する土坑である。P130を切り、遺構の南側はP77とP94に切られる。規模は長径0.92m、短径0.60mを測り、長軸方向はN-14°-Eである。平面形は楕円形である。検出面からの深さは0.10mを測り、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト質粘土である。土師質土器細片11点、瓦質土器1点が出土しており、その内瓦質土器羽釜(120)が図示できた。

SK13・14(図28 121)

調査区南部中央に位置する土坑である。SK13がSK14を切っている。SK13の規模は長径1.00m、短径0.47mを測り、長軸方向はN-35°-Eである。平面形は楕円形である。検出面からの深さは0.18mを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗オリーブ褐色粘土質シルトである。土師質土器細片4点、近世陶器皿1点が出土しており、その内近世陶器皿(121)が図示できた。121は唐津産の皿で、内面見込みには砂目が残る。

SK14は長径1.58m、短径1.50mを測り、長軸方向はN-58°-Wである。平面形は円形で、検出面からの深さは0.26mを測り、断面形は箱形を呈する。埋土は灰黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土である。土師質土器細片15点、近世磁器片2点が出土しているが図示できるものはなかった。

SK15(図28 122~124)

調査区南部中央、SK13・14の北約0.5m地点に位置する。規模は長径0.97m、短径0.75mを測り、長軸方向はN-26°-Eである。平面形は楕円形である。検出面からの深さは0.32mを測り、北側に段を持つ。埋土は暗オリーブ褐色シルトとオリーブ褐色シルトである。土師質土器杯2点と細片13点、瓦質土器鉢1点が出土しており、その内土師質土器杯(122・123)と瓦質土器鉢(124)が図示できた。122・123は土師質土器杯の底部である。底部切離しは回転糸切りである。124は瓦質土器鉢で、底部切離しは回転糸切りである。

SK18(図28 125)

調査区南部中央、SK13・14の南東約0.6m地点に位置する。規模は長径1.28m、短径0.71mを測り、長軸方向はN-7°-Eである。平面形は楕円形である。検出面からの深さは0.47mを測り、断面形は箱形を呈する。埋土は炭化物を少量含む黒褐色シルトと褐灰色粘土質シルト、暗灰黄色粘土質シルトで、遺構上面からは20cm大の礫を中心とする集石がみられた。土師器甕片1点、土師質土器細片4点、近世陶器甕片1点と細片1点が出土しており、その内陶器水屋甕(125)が図示できた。

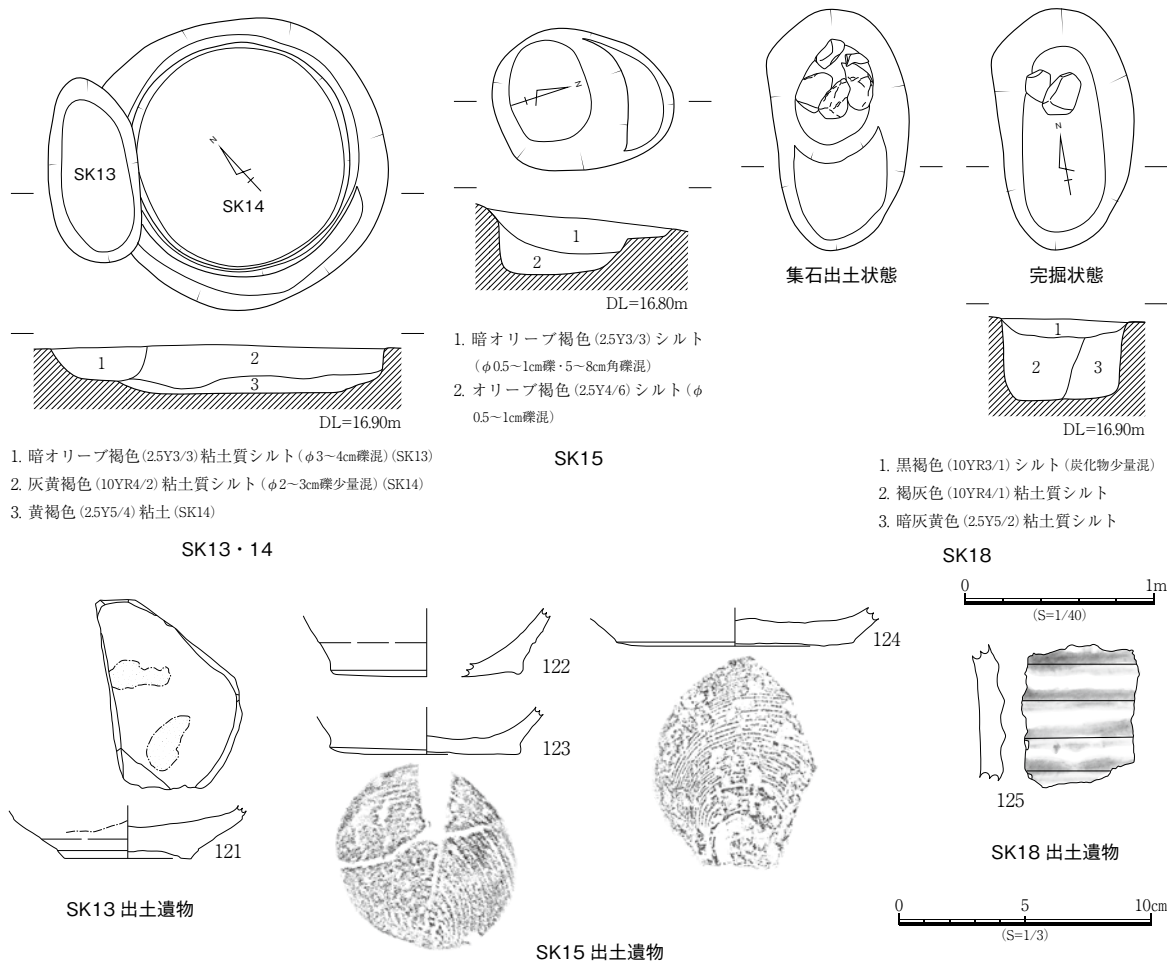


図28 SK13～15・18遺構図・遺物実測図

SK28(図29 126)

調査区中央西端部に位置する。規模は長径 1.54m，短径 1.19m を測り，長軸方向は $N - 21^\circ - E$ である。平面形は隅丸方形で，検出面からの深さは 0.07m と浅く，断面形は皿状を呈する。埋土は炭化物を含む暗褐色シルト礫である。鉄製品の刀子(126)が出土している。土坑墓と思われる。

SK29(図29 127)

調査区中央西端部，SK28 の北西約 0.6m 地点に位置する。規模は長径 0.82m，短径 0.70m を測り，長軸方向は $N - 9^\circ - W$ である。平面形は楕円形で，検出面からの深さは 0.30m を測り，断面形は逆台形を呈する。埋土は炭化物を含む暗褐色シルトである。土師質土器杯 1 点と細片 4 点が出土しており，その内土師質土器杯(127)が図示できた。

SK30(図29 128)

調査区中央西部，SK29 の北東約 2.8m 地点に位置する。規模は長径 0.73m，短径 0.62m を測り，長軸方向は $N - 84^\circ - E$ である。平面形は楕円形で，検出面からの深さは 0.26m を測り，断面は逆台形状を呈する。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトである。土師質土器細片 10 点，青磁碗 1 点，鉄製品釘 1 点が出土しており，その内青磁碗(128)が図示できた。128 は内外面無文の碗で，口縁部外面に沈線状に釉が溜まる。

SK31(図30 129)

調査区中央西部に位置する。規模は長径 1.23m，短径 1.09m を測り，長軸方向は $N - 24^\circ - E$ である。

3. 検出遺構と出土遺物

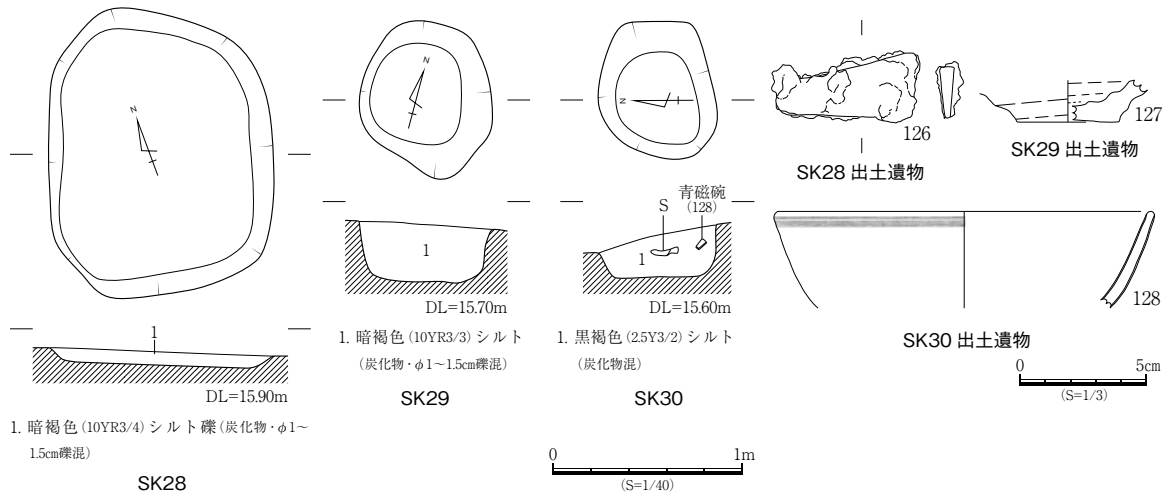


図29 SK28～30 遺構図・遺物実測図

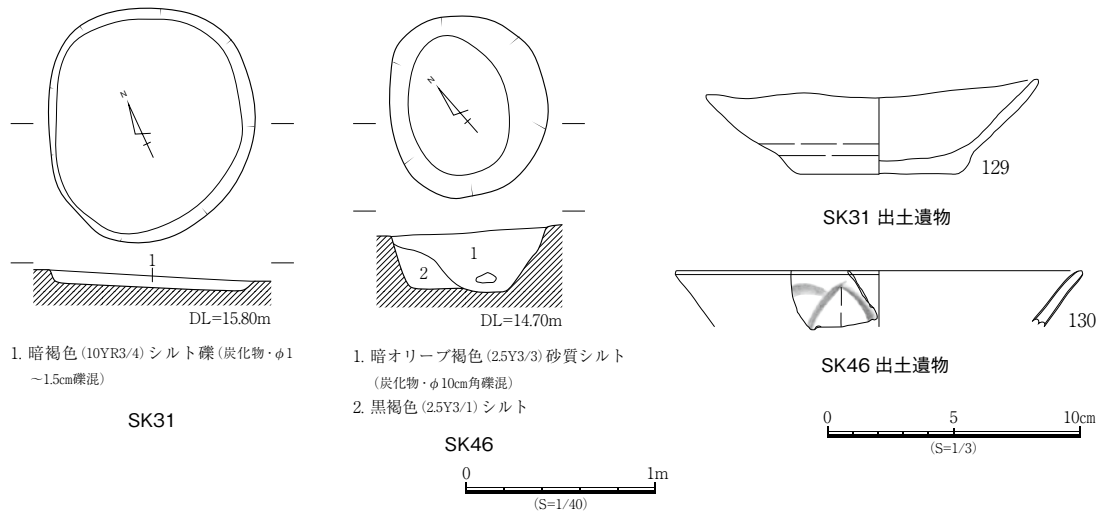


図30 SK31・46 遺構図・遺物実測図

平面形は楕円形で、検出面からの深さは0.08mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は炭化物を含む暗褐色シルト礫である。土師質土器杯1点と細片1点、銭貨1点が出土しており、その内土師質土器杯(129)が図示できた。129の口縁部は底部から外方に伸び、端部は丸く収める。内外面は摩耗のため調整等は不明瞭である。土坑墓と思われる。

SK46(図30 130)

調査区北部中央、SE1の北方約0.6mに位置する。規模は長径0.97m、短径0.83mを測り、長軸方向はN-37°-Eである。平面形は楕円形である。検出面からの深さは0.32mを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は炭化物を含む暗オリーブ褐色砂質シルトと黒褐色シルトである。青磁碗1点、国内産陶器片1点が出土しており、その内青磁碗(130)が図示できた。130は龍泉窯系碗で外面には鎬蓮弁文が施される。

SK48(図31 131～135)

調査区北西部に位置する。上面はP269・335・348に切られる。規模は長径2.15m、短径0.84mを測り、長軸方向はN-2°-Wである。平面形は溝状である。検出面からの深さは0.25～0.28mを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトである。土師器甕片8

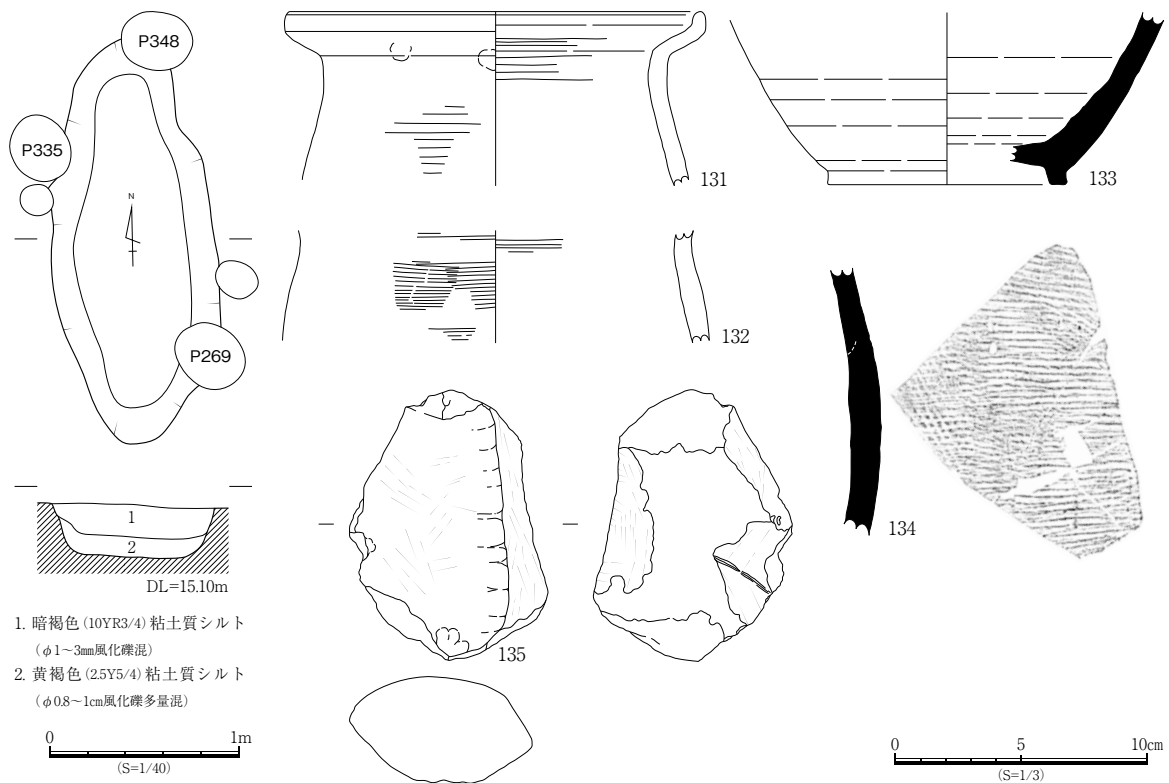


図31 SK48遺構図・遺物実測図

点と細片63点, 須恵器碗片1点と壺片2点, 甕片1点, 砥石1点が出土しており, その内土師器甕(131・132), 須恵器壺(133)・甕(134), 砥石(135)が図示できた。131の口縁端部は上方に摘み出す。体部外面と頸部内面にハケ調整が施される。132は土師器甕の体部片で, 内外面にはハケ調整が施される。133は断面台形状の高台を有する。134は甕の体部片で, 外面には平行のタタキ目が施される。135は砂岩製で三面または四面に使用痕が認められる。

SK49・50(図32 136~143)

調査区北西部に位置する。SK49は上面をSK50, P347・349・350・356・373に切られる。規模は長径3.29m, 短径1.52mを測り, 長軸方向はN-85°-Wである。平面形は楕円形で, 検出面からの深さは0.04~0.11mと浅く, 断面形は皿状を呈すると考えられる。埋土は炭化物を含む黒褐色粘土質シルトとオリーブ褐色粘土質シルトである。土師質土器小皿1点と杯2点と細片54点, 青磁碗1点, 国内産陶器瓶子1点, 土錘1点, 石製品1点が出土しており, その内土師質土器小皿(136)・杯(137・138), 陶器瓶子(139), 青磁碗(140), 土錘(141), 不明石製品(142)が図示できた。136の底部切離しは回転糸切りである。139は瓶子の頸部で外面には二条の沈線が施される。古瀬戸の可能性が考えられる。140は青磁碗で, 口縁部はやや外反し内外面は無文である。

SK50はSK49を切る土坑であるが, 上面はピットと重複しているため, 形状は不明瞭である。規模は長径1.62m以上, 短径0.73mで, 長軸はN-90°-Wである。検出面からの深さは0.17~0.28mを測り, 断面形は逆台形状を呈する。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトである。土師質土器細片14点, 国内産陶器壺1点, 鉄滓66.0gが出土しており, その内陶器瓶子(143)が図示できた。143の外面には四条の沈線が施され, 自然釉がかかる。139と同一個体の可能性が考えられる。

3. 検出遺構と出土遺物

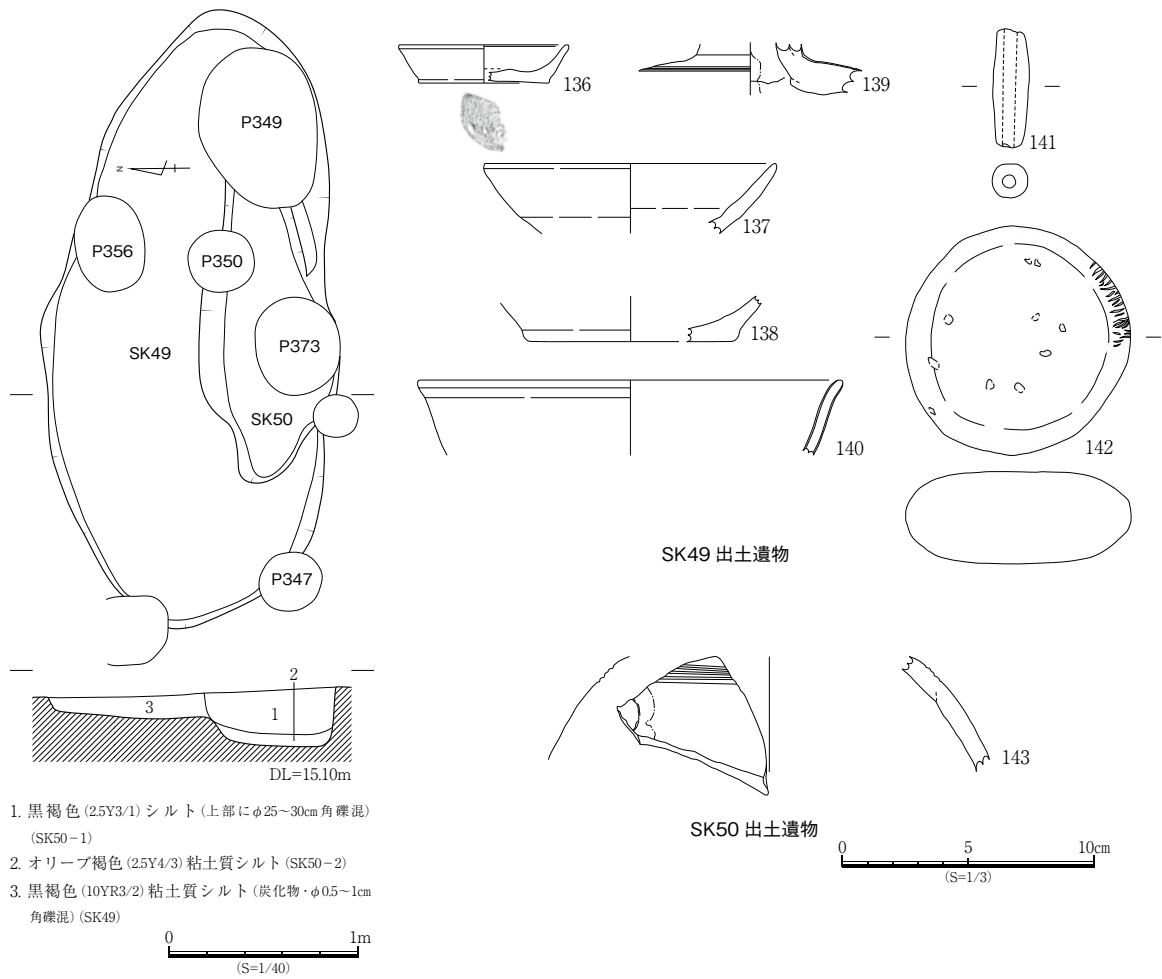


図32 SK49・50 遺構図・遺物実測図

SK51 (図33 144)

調査区北部中央に位置する。規模は長径0.90m, 短径0.70mを測り, 長軸方向はN-59°-Eである。平面形は楕円形である。検出面からの深さは0.39mを測り断面形は台形状を呈する。埋土は黒褐色粘土質シルトとオリーブ褐色シルト質粘土である。土師質土器杯1点と細片6点, 備前焼片1点, 磁器片1点が出土しており, その内土師質土器杯(144)が図示できた。

SK53 (図33 145)

調査区北部中央に位置する。規模は長径0.97m, 短径0.89mを測り, 長軸方向はN-47°-Eである。平面形は楕円形で, 検出面からの深さは0.10mと浅く断面形は皿状を呈する。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトである。出土遺物は土師質土器杯1点と細片7点が出土しており, その内土師質土器杯(145)が図示できた。

SK54 (図33 146)

調査区北東部に位置する。上面はP504に切られる。規模は長径1.98m, 短径0.56mを測り, 長軸方向はN-30°-Eである。平面形は溝状で, 検出面からの深さは0.14~0.26mを測り断面形はU字状を呈する。埋土はオリーブ褐色砂質シルトと炭化物を含む暗灰黄色粘土質シルトである。出土遺物では土師質土器細片9点, 備前焼甕1点が出土しており, その内国内産陶器甕(146)が図示できた。146は備前焼甕の底部である。外面には沈線状の凹みがみられる。

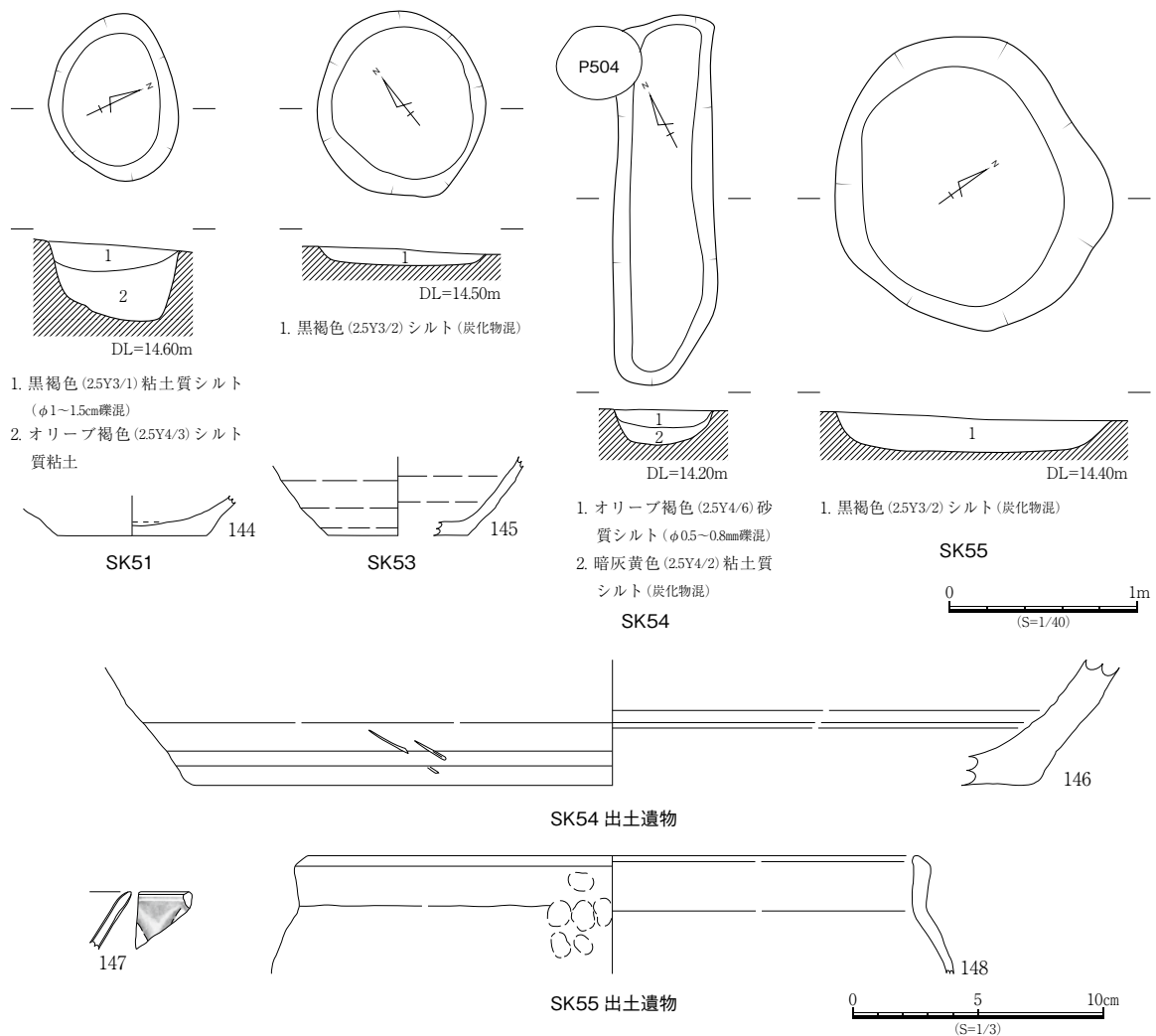


図33 SK51・53～55遺構図・遺物実測図

SK55(図33 147・148)

調査区中央東端に位置する。規模は長径 1.58m, 短径 1.48m を測り, 主軸方向は $N - 55^\circ - W$ である。平面形は不整形で, 検出面からの深さは 0.18m を測り, 断面形は舟底状を呈する。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトである。出土遺物は土師質土器細片 17 点, 青磁碗 1 点, 瓦質土器鍋 1 点が出土しており, その内青磁碗(147)と瓦質土器鍋(148)が図示できた。147は口縁部のみで, 外面には鎬蓮弁文が施される。148の口縁部は直立し, 端部は内傾する。外面には指頭圧痕が顕著である。

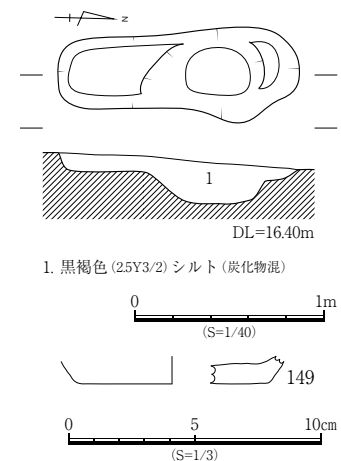


図34 SK55遺構図・遺物実測図

(5) 溝

SD1(図34 149)

調査区南東部に位置する。規模は長径 1.28m, 短径 0.38～0.55m を測り, 主軸方向は $N - 3^\circ - W$ である。検出面からの深さは 0.10m を測り, 遺構の中央部は 0.22m である。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトである。土師質土器杯 1 点と細片 2 点が出土しており, その内土師質土器杯(149)が図示できた。

3. 検出遺構と出土遺物

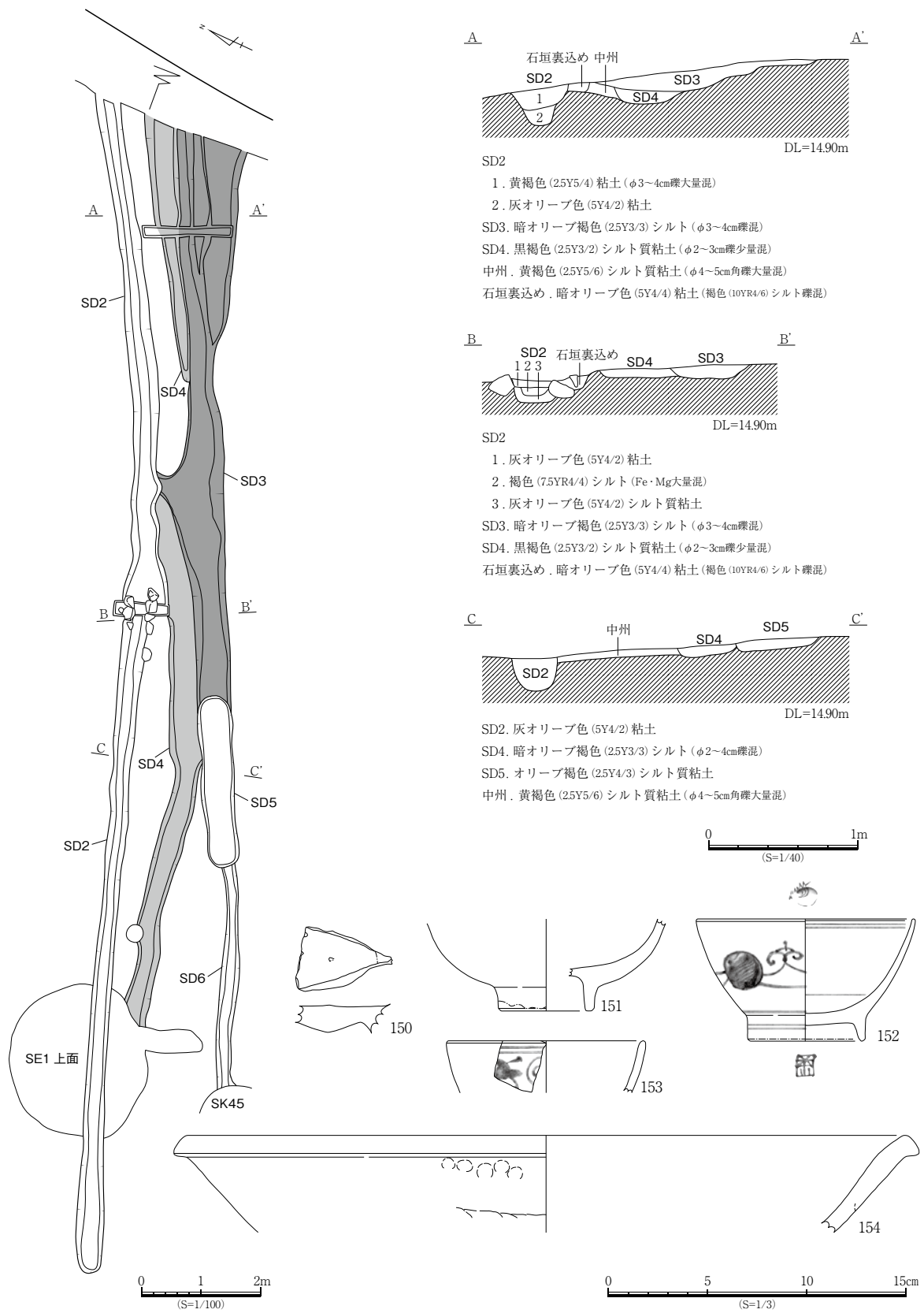


図35 SD2~5遺構図・遺物実測図

SD2～5(図35 150～154)

調査区北東部に位置し、調査区の北東から中央部にかけて検出した複数の溝である。溝の検出前には高さ0.3～1.0m、長さ34.5mを測る石垣が築かれており、調査区を横断していた。

SD2は検出長19.86m、幅0.27～0.48mを測る溝で、SE1を切っている。検出面からの深さは0.12～0.32mを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄褐色粘土と灰オリーブ色粘土、褐色シルト、灰オリーブ色シルト質粘土である。土師質土器焙烙1点と細片4点、近世陶磁器6点が出土しており、その内陶磁器皿(150)・碗(151～153)、土師質土器焙烙(154)が図示できた。152は底部高台見込みに「茶山」の銘が確認できる。154の口縁端部は下方に拡張し、内外面には煤の付着がみられる。また埋土からは石垣の裏込めと思われる石が出土しており、石垣に伴う遺構の可能性も考えられる。

SD3は検出長9.80m、幅0.26～0.82mを測る溝でSD4を切っている。検出面からの深さは0.03～0.19mを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は暗オリーブ褐色シルトである。出土遺物は皆無であった。

SD4の検出長は9.03m、幅0.39～0.47mを測る溝で、SD3に切られている。検出面からの深さは0.06～0.19mを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色シルト質粘土、暗オリーブ褐色シルトである。弥生土器片1点、土師質土器細片9点、瓦質土器鍋片1点、陶器(瀬戸美濃系)細片1点が出土しているが、図示できるものはなかった。

SD5は全長2.88m、幅0.49～0.56mを測る溝で、SD6を切る。SD3との切合い関係は不明である。検出面からの深さは0.08～0.12mを測り、断面形は皿状を呈する。埋土はオリーブ褐色シルト質粘土である。土師質土器細片1点と瓦器碗片1点が出土しているが、図示できるものはなかった。

SD6～9(図36 155～157)

SD6は検出長3.74m、幅0.19～0.32mを測る溝で、SD5に切られる。検出面からの深さは0.08～0.18mを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土はオリーブ褐色シルトで、出土遺物は皆無である。

SD7は調査区北東から中央部にかけて検出した溝である。SD8とSD9を切り、SK45に切られている。検出長は18.92m、幅は0.20～0.81mで、検出面からの深さは0.12～0.24mを測る。遺構の断面形は逆台形状を呈し、埋土は黄褐色粘土質シルトである。土師質土器細片25点、緑釉陶器碗1点、青磁碗1点、瓦質土器鍋1点が出土しており、その内緑釉陶器碗(155)、青磁碗(156)、瓦質土器鍋(157)が図示できた。155は内外面にヘラミガキが施され、外面の一部に施釉される。156は外面に鎬蓮弁文が施される。157の口縁部は直立し短く伸びる。外面は指頭圧痕が顕著で、一部に煤が付着している。

SD8はSD7の南側に並行する溝で、調査区の北東部から中央部にかけて検出した。検出長は12.62m、幅は0.34～1.24mで、検出面からの深さは0.11～0.44mを測る。遺構の断面形は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色砂質シルトと黄灰色砂質シルトである。土師質土器細片51点、瓦質土器羽釜1点と備前焼甕片1点が出土した。

SD9は調査区北東壁側において検出した。SD7に切られる。検出長は1.40m、幅は0.13～0.20mで、検出面からの深さは0.10～0.14mを測る。遺構の断面形はU字状である。出土遺物は確認することができなかった。

SD10(図37 158～162)

調査区の北西部において検出した溝で、上面はP260に切られる。検出長は3.73m、幅は南側0.44m、北側0.77mで、検出面からの深さは約0.13～0.15mを測る。遺構の断面形は舟底状を呈し、埋土は炭化物を含む暗灰黄色シルト質粘土である。土師器杯片3点、土師器の内搬入品の甕片11点と在地系

3. 検出遺構と出土遺物

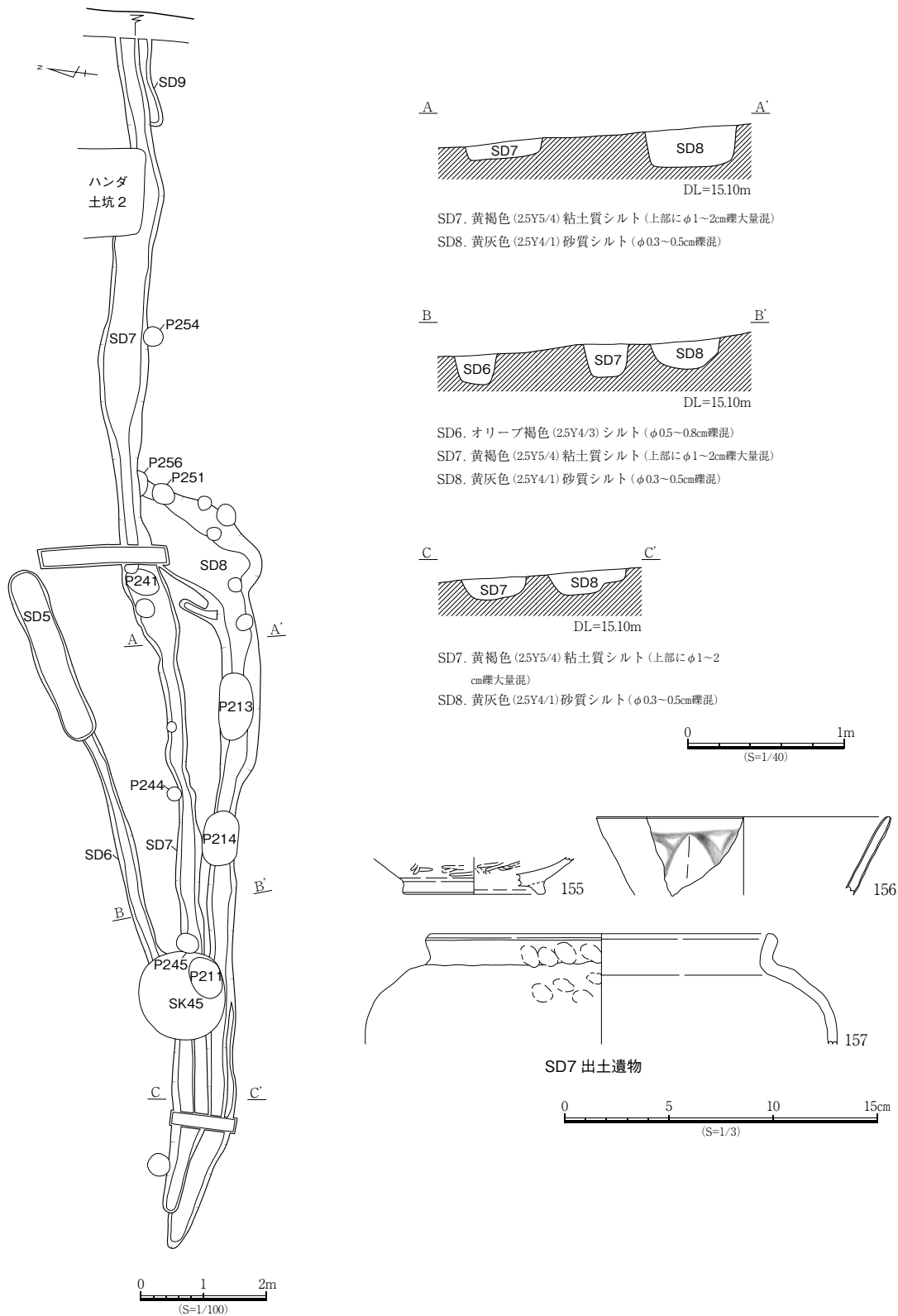
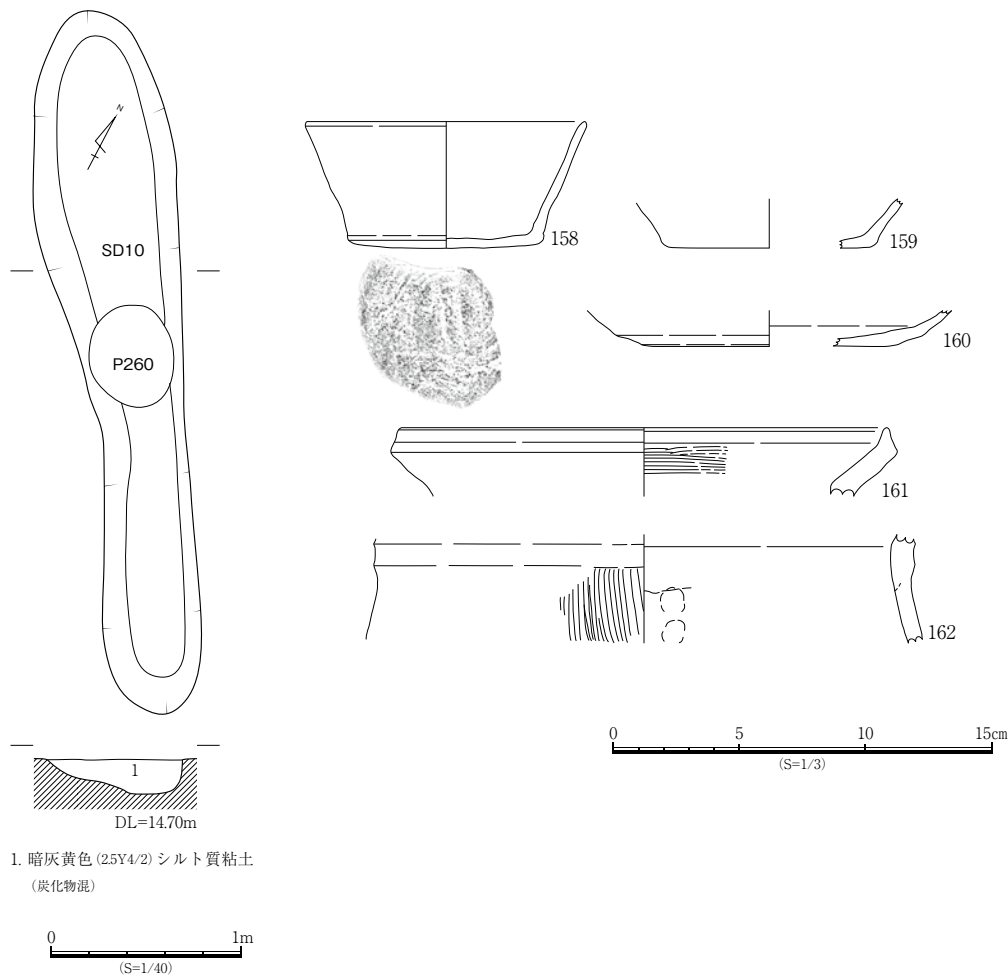


図36 SD6~9遺構図・遺物実測図



1. 暗灰黄色(25Y4/2)シルト質粘土
(炭化物混)

図37 SD10遺構図・遺物実測図

甕片8点, 細片71点の他, 黒色土器片1点, 混入と考えられる常滑焼片1点が出土しており, その内土師器杯(158~160), 土師器甕(161・162)が図示できた。158の底部切離しは回転ヘラ切りで, 板状の圧痕が残る。161の口縁端部は上方に摘み出す。内面にはハケ調整が施される。162は甕の体部片である。外面には縦方向のハケ調整が施される。

(6) 井戸跡

SE1(図38~41 163~184)

調査区中央北寄りで検出した井戸跡である。上面は近世に構築された石垣があり, この石垣下から同じ主軸方向で溝(SD2)を検出し, このSD2によって切られる。石組井戸で, 上端直径(内径)1.31m, 深さは検出面から3.42m, 石組天端から3.0mを測る。北半分は天端石が欠落していた。石組に使用されている石は直径20~40cm大のチャート角礫であり, 石の長径を奥行きとして配置している。埋土は砂質シルトと粘土・粘土質シルトの互層である。1層については当初, 性格不明遺構として取り上げを行ったが, 掘り下げていく中で南部の石を検出したため, 後に井戸上部の堆積とした。1層からは163の土師器椀が出土した。輪高台の椀で, 外方に開く高台が付く。その他, 埋土中(9・10層)からは, 164~184の遺物が出土した。164~171は土師質土器の供膳具

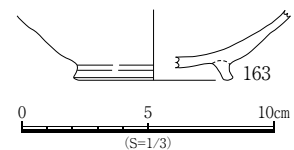


図38 SE1遺物実測図1

3. 検出遺構と出土遺物

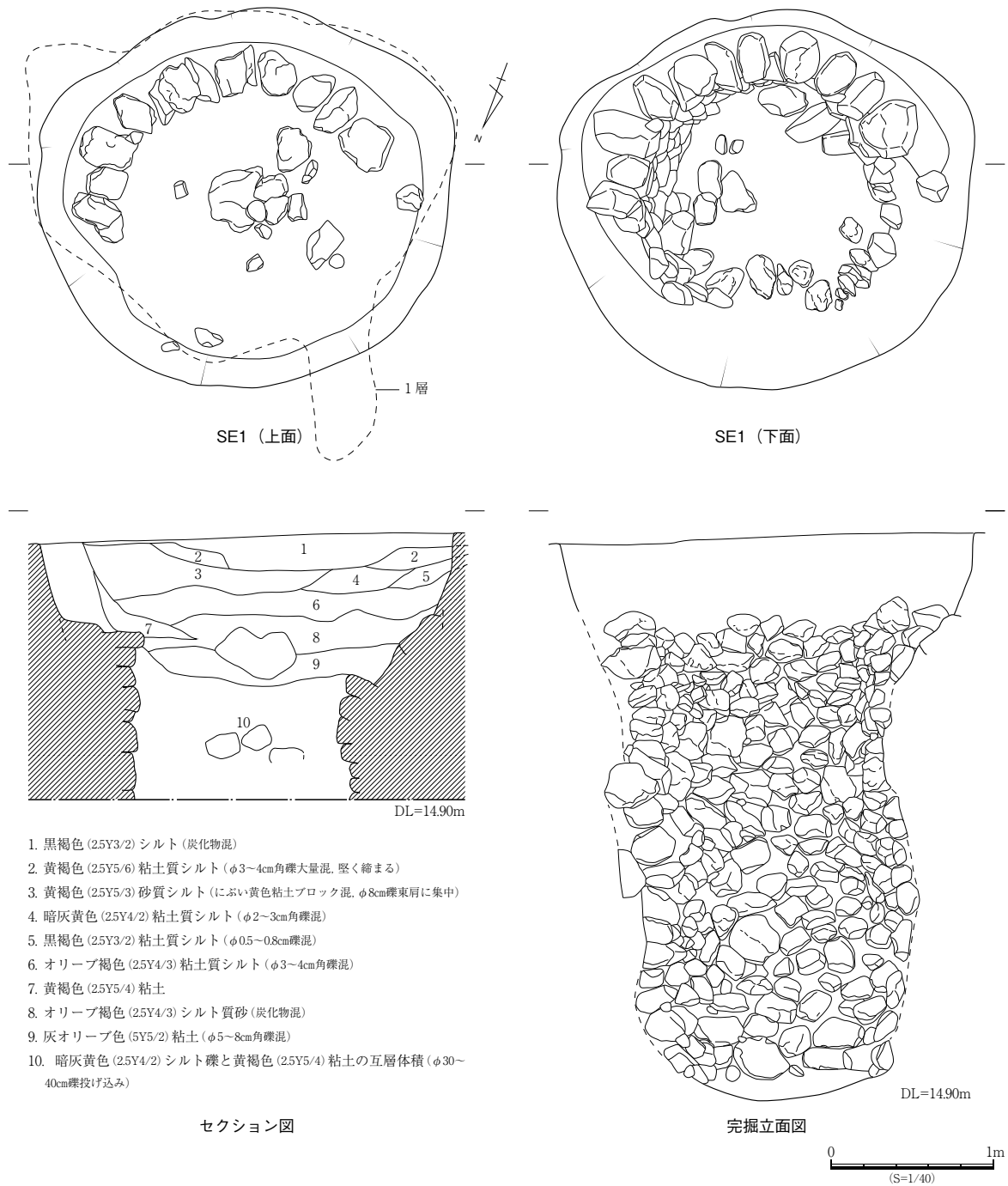


図39 SE1 遺構図

であり, 164は皿, その他は杯の底部片である。164は灯明皿として使用されていたと思われる, 内面に煤が付着する。内面はロクロ目が顕著に残り, 外底部には回転糸切り痕と板状の圧痕が残る。165~171は杯の底部片で, 摩耗が著しく調整等は不明瞭であるが, 166は底部切離しは回転糸切りで, 板状の圧痕が認められる。172は東播系須恵器の捏鉢である。口縁部は僅かに肥厚し, 端部は面を成し片口状を呈する。173も東播系須恵器捏鉢で, 口縁端部は肥厚し丸みを帯びる。174・175は青磁碗片で, 外面に鎗蓮弁文が施される。176は備前焼の甕の底部片と思われる。須恵器質でナデ調整が施される。また, この遺構の底面では湧水が認められ, 曲物板と漆器碗, 杭など木製品が出土した。177は

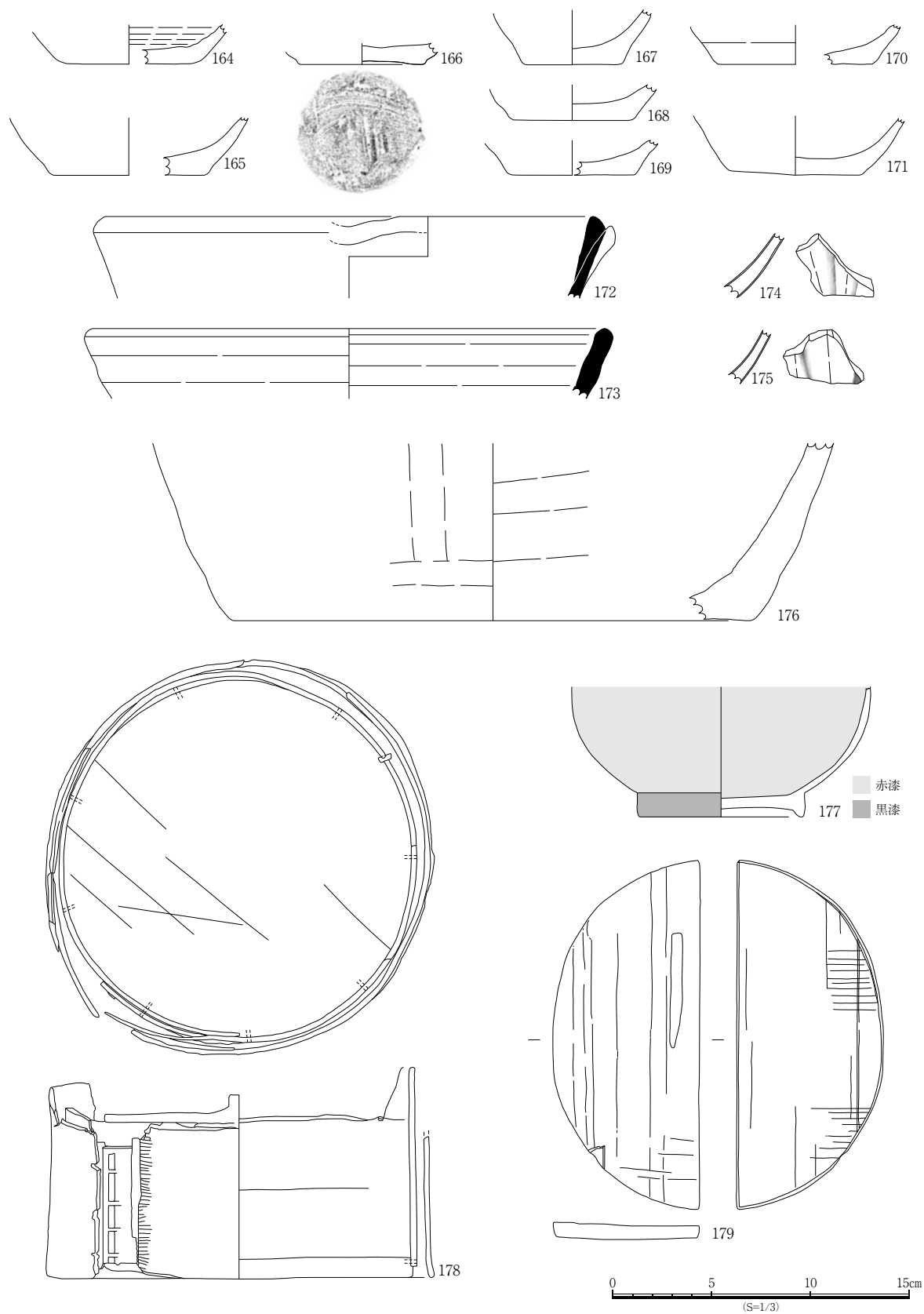


図40 SE1遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

漆器椀で、赤漆が外面高台脇まで施される。下地は黒漆で、高台及び外底部は下地のままである。底部及び体部下半は木地が薄く、丁寧に削られており、樹種はブナである。178は曲物の側板と底板である。いずれもヒノキ材が使用されている。側板は曲げた端と端を重ね合わせて縫錐状の工具により穿孔し、桜の皮で綴じている。底板の側面周縁には側板と固定するための木釘を打ち込んだ穿孔が認められる。179は半月形を呈する板状木製品である。形状から曲物の底板と考えられる。ヒノキ材で、丁寧にケズリが施される。180・181もヒノキ材を加工した板状の木製品であり、曲物の底板か蓋の一部と思われる。180には木釘孔が穿たれている。182は把手状を呈し、取り付け部に円孔を穿つ。ヒノキ材である。183は叩石であり、短辺の二箇所に敲打痕が認められる。石質は細粒花崗岩である。184は緑色岩製の叩石で半分は欠損する。円盤状を呈し扁平な面の中央部と周縁部に敲打痕が残る。これらの出土遺物から、13～14世紀代の井戸と考えられる。

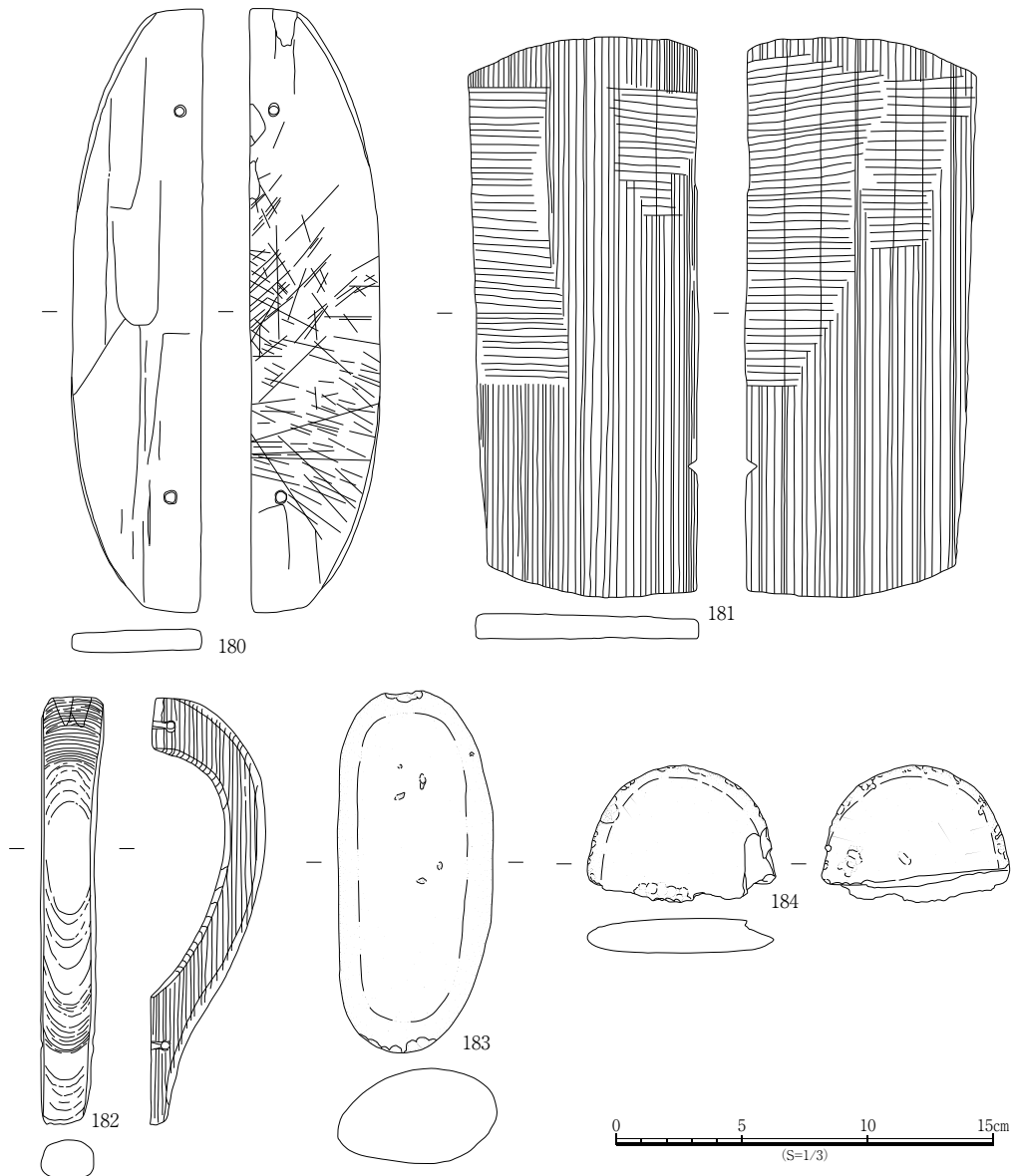


図41 SE1 遺物実測図3

(7) 廃棄土坑(図42～45 185～224)

調査区中央部, 西側に位置する土坑である。平面形は不整形を呈し, 長径3.69m, 短径1.76m, 深さ0.09～0.38mを測る。西側は調査区西端の北側尾根に登る登山道に隣接する。近世から近代の遺物が多く出土し, 廃棄土坑として位置づけた。土師質土器片1点, 青磁片1点, 陶磁器片58点, 瓦片9点, 鉄製品1点, 石製品(五輪塔)1点が出土した。以下に図示できる出土遺物について記載する。

185は陶磁器で, 陶胎染付の輪花皿である。内面花唐草文, 見込みに崩れた五弁花のコンニャク印判が施され, 外面に唐草文, 高台内に圈線, 中央に渦福が染付される。肥前産, 18世紀前半のものと考えられる。186～189は陶器である。186は能茶山窯の端反皿で, 外面胴部中位まで鉄釉がつけ掛けされる。内面は蛇ノ目釉剥ぎで, アルミナ砂を塗布する。187は筒丸形の碗で, 全面に灰釉が施される。内面口縁部に一条の沈線がみられる。188も碗で, 全面に灰釉が施され, 細かな貫入が入る。高台畳付は釉剥ぎである。189はロクロ成形による小壺である。体部下半まで褐色の釉がかかり, 底部は露胎する。胎土は白色である。内面口縁部は上方に伸びる。

190～192は磁器皿である。190は型打成形による菊皿である。口縁部は僅かに内湾し, 端部は水平な平坦面を呈する。191は型打成形による角皿である。外面に退化した窓枠, 内面に区画内に山水文が描かれる。やや外方に開く高い高台で, 畳付は釉剥ぎである。192は肥前産の大皿で, 内面見込みに草花, 山水及び松, 口縁部は四方襷文, 半菊, 窓絵に猫が描かれる。外面高台脇と高台内に圈線が巡り, 高台畳付は釉剥ぎで, 砂粒が付着する。

193は磁器小碗で, 外面二重圈線と樹木文が描かれる。高台は僅かに内湾し, 畳付は釉剥ぎで, 砂粒が付着する。194～199は磁器碗である。194は端反碗で, 口縁部は僅かに外反する。内面口縁部は退化した雷文帯, 見込み圈線中央に文様, 外面上下圈線間に笹と草花文が描かれる。高台はやや外側に開き, 畳付は釉剥ぎである。195も端反碗で, 外面に格子文, 内面口縁部に二重圈線, 見込みに圈線が巡る。196の口縁部は欠損する。外面石灯籠と唐草文, 内面見込み圈線中央に文様が描かれる。外面高台内は能茶山窯の窯印と思われる。197は能茶山窯碗の底部である。外面高台に二重圈線, 高台内に「茶」の窯印が描かれる。高台は外方に開く。198は広東形碗で, 口縁部は斜上方に直線的に伸びる。外面に稲束文, 内面口縁部に二重圈線が巡り, 見込み圈線中央に鷺文が描かれる。199は能茶山窯の広東形碗である。外面高台内に「サ」の窯印が施される。内面見込み圈線中央に十字花文と三箇所目痕が残る。高台畳付は釉剥ぎである。200～202は磁器仏飯器である。200は肥前産で, 杯部は深く口縁部は上方に伸びる。底部は削り出しで, 高台内は浅く, 無釉である。外面に蛸唐草文と圈線が巡る。201の杯部は浅く, 口縁部は外方に開く。畳付は釉剥ぎで, 外面に唐草文が描かれる。202は

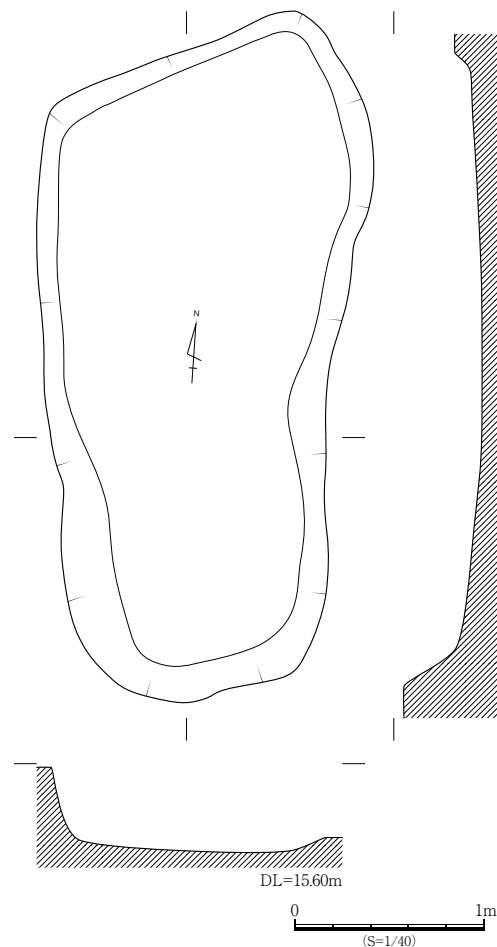


図42 廃棄土坑遺構図

3. 検出遺構と出土遺物

肥前産で、杯部は浅く、口縁部はやや外方に開く。底部は削り出しで高台内の削り込みは僅かである。外面に半菊文が巡る。203は磁器鉢か火入と思われる。内面口縁部に瓔珞文、外面は草花文とみられる文様が染付される。胴部中位にくびれを持ち、口縁部は内湾し、平坦面を呈する。204はトチンで、外面指頭圧痕とナデ調整が施される。外面の一部に自然釉がかかる。

205は型紙摺りの磁器皿である。内面に鶴と檜垣文、外面は唐草文、高台に圈線が巡る。内面五箇所に目痕が残り、断面台形状のしっかりとした高台を持つ。206も型紙摺りの磁器平碗で、外面米俵と鼠、扇形の窓絵に大黒天、内面に樹木、草花、人物が染付される。207は磁器碗である。外面に柿の枝と果実が色絵により描かれる。外方に開く高台で、高台内に「倉陶」の窯印がみられる。208～210

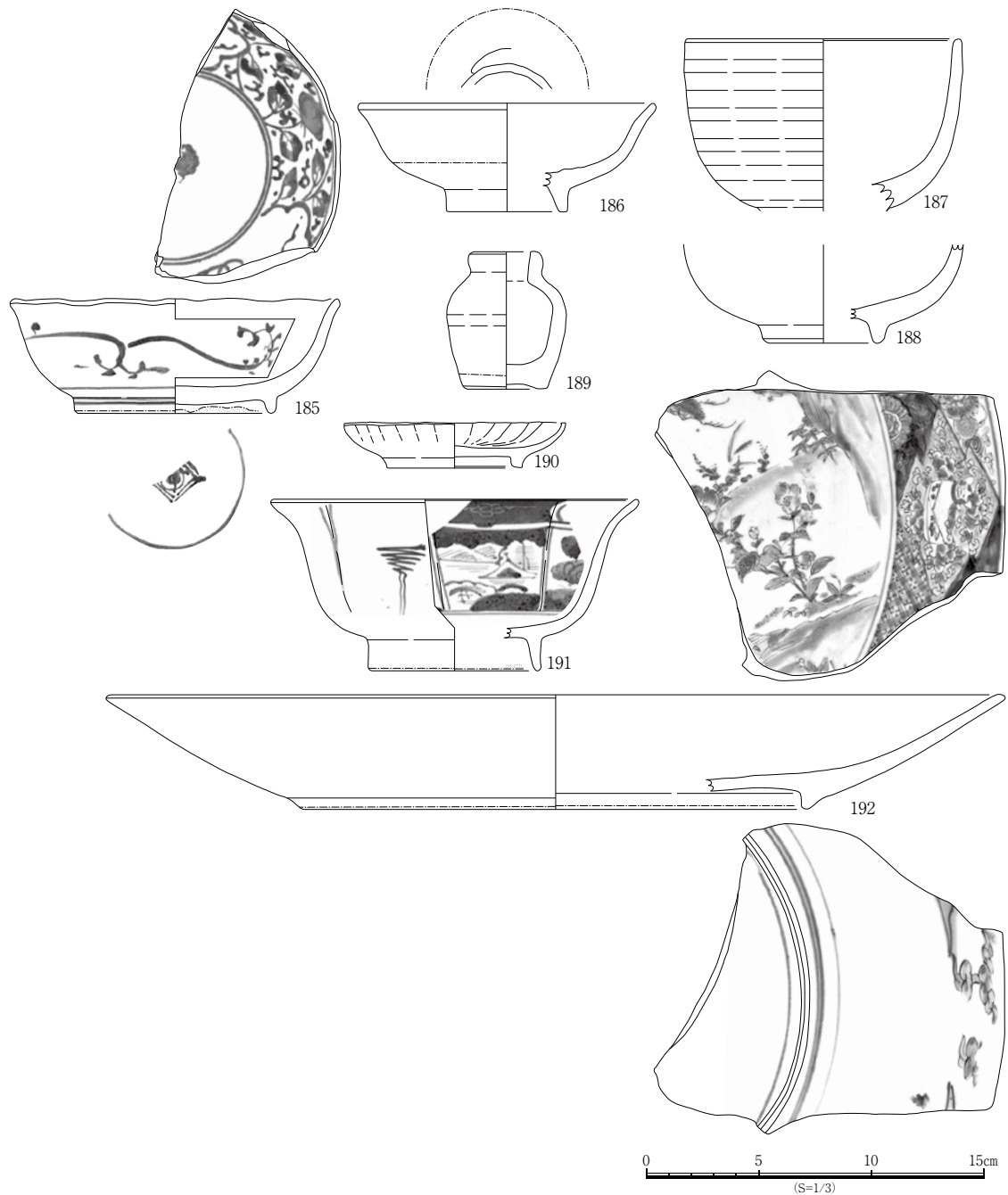


図43 廃棄土坑遺物実測図1



図44 廃棄土坑遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

は子供用の磁器飯碗である。208は外面に上絵付により日章旗と零戦が描かれており、第二次世界大戦中のものと思われる。上絵はほぼ剥がれ落ちている。209も上絵付により兎と山、童謡「うさぎとかめ」の一節が染付される。210も上絵付により蒸気機関車と日章旗及び桜が描かれる。高台内に「岐420」の統制番号がみられる。211も外面高台内に「岐406」の統制番号を持つ磁器碗である。外面口縁部に青緑色の二重圈線が巡る。212～215は磁器小杯である。212の口縁部は僅かに外反する。外面口縁部に呉須が施され、内面に戦艦と日章旗、桜と錨が描かれる。海軍による記念品と思われる。213の口縁部は大きく外反し、端部は尖り気味に仕上げる。内面口縁部に口錆風の褐色釉と呉須による圈線、蓑を着た人物と落款が描かれる。214は筒形を呈し、口縁部は上方に伸びる。内面には色絵により鯉と水草、文字が描かれる。215は瀬戸美濃系で、口縁端部は尖り、外反する。外面「高砂」の歌詞、箒と熊手が濃い呉須により描かれる。

216～223は瓦である。いずれも棧瓦で、平瓦である。ここでは、刻印がみられるものを抽出し記載する。216は「イノ(右より)中島製」、217は「タキウシ」、218は「山□□」、219は「王椎」、223は「□原」の刻印がみられる。224は砂岩製の五輪塔である。火・水・地輪で、一石を加工する。約18.0cm四方で高さ29.9cmを測る。

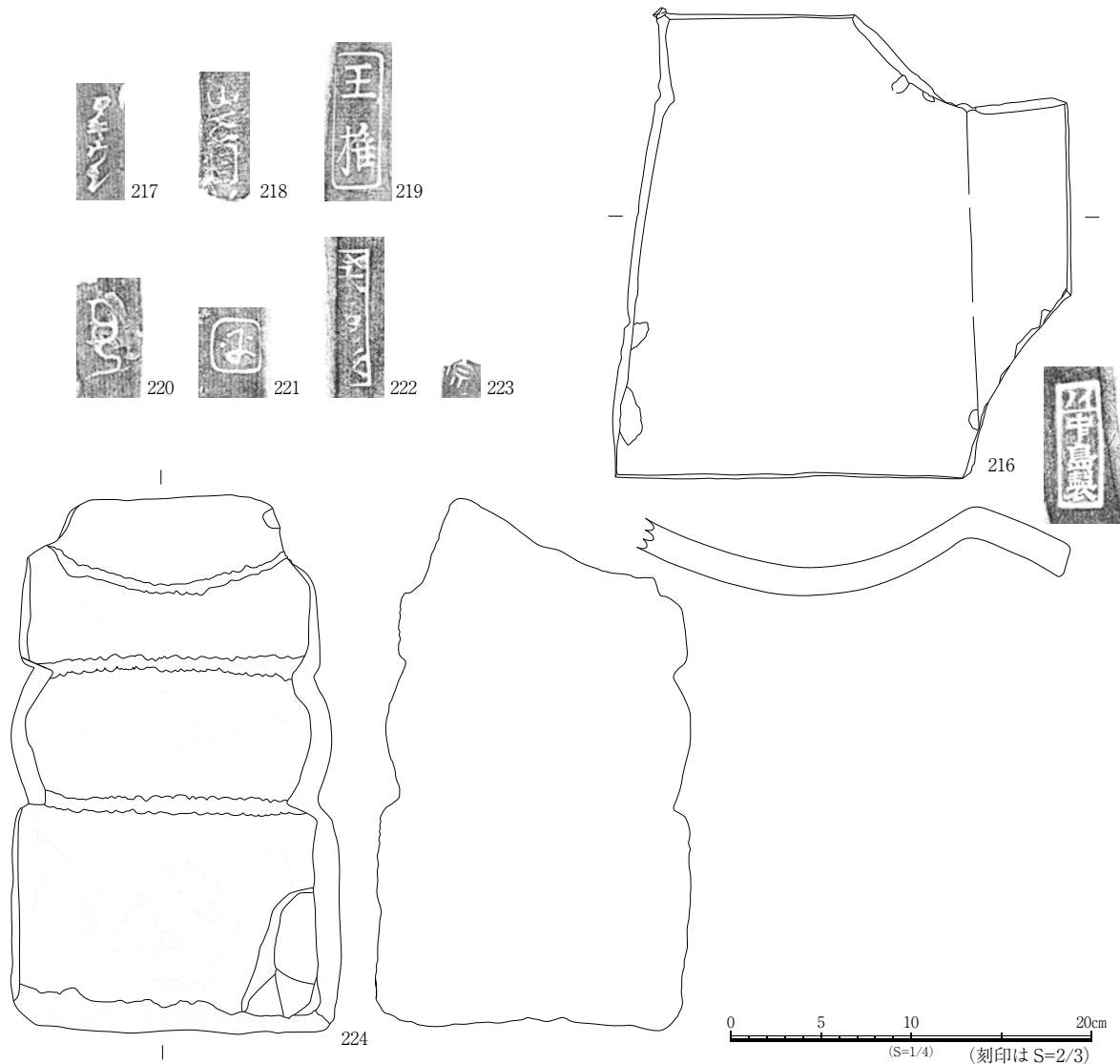


図45 廃棄土坑遺物実測図3

(8)ハンダ土坑・石垣

ハンダ土坑1(図46~48 225~253)

直径約1.52mの円形を測るハンダ土坑で、調査区中央部東側に2基並んで検出した。当地域にはこのような型式の土坑が数多くみられる。いずれも耕作地に隣接または耕作地内に位置することから、主に肥料を貯蔵しておくための所謂肥溜めとして使用されていたものと考えられる。埋土からは主に近代の遺物が出土した。いずれも完形に近いものが多く一括性があり、資料として図化できるものについて以下に掲載した。遺構図については図7遺構配置図に位置と平面プランのみ掲載した。



図46 ハンダ土坑1遺物実測図1

3. 検出遺構と出土遺物

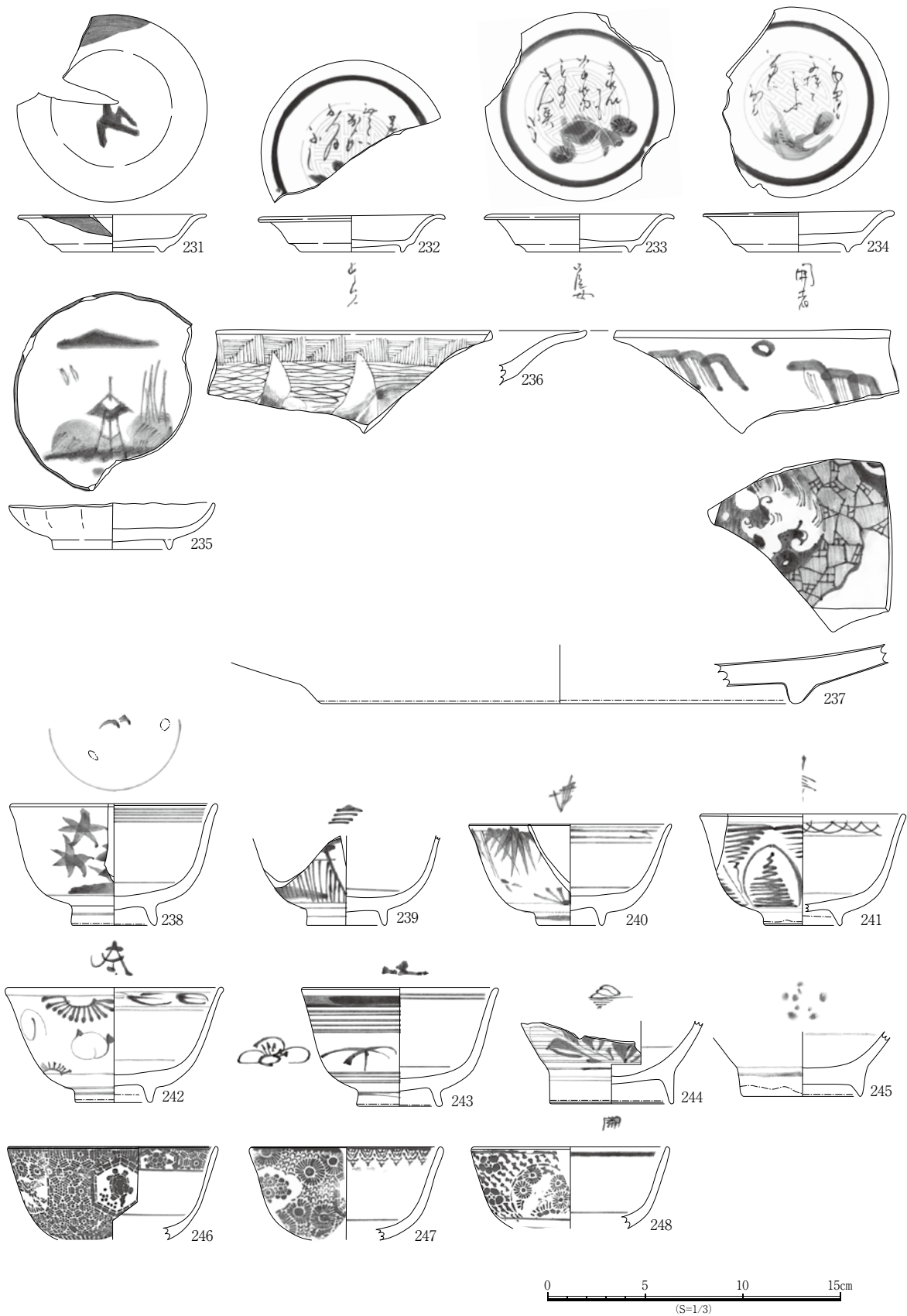


図47 ハンダ土坑1遺物実測図2

225～230は陶器または炆器である。225は能茶山窯の台付灯明皿である。全面に鉄釉がつけ掛けされ、外面底部は露胎する。底部切離しは回転糸切りである。226は播鉢で、外面体部中位から口縁部上面まで鉄釉が施され、外面下位は露胎する。外面口縁部に二条の凹線が巡り、端部は平坦面を呈す。内面口縁部は密な摺目をナデ消しその境目に一条の沈線が施される。227は播鉢で、口縁部片である。口縁端部は上部に拡張し、外面に二条の凹線が巡る。内面には九条一単位の摺目がみられる。228は播鉢の底部で、内面に粗い単位の摺目が密に施される。見込みの摺目は七条一単位で浅く、放射状を呈する。229は甕で、全面に褐色釉が施される。頸部は上方に伸び、口縁部は外方に拡張し水平な平坦面を呈する。肩部にはロクロ目が残る。230は徳利である。体部はほぼ垂直に上方に伸びる。外面に鉄釉がつけ掛けされ、内面中位まで釉が垂れる。外面底部は露胎し、墨書が施される。

231～249は磁器である。231～234はいずれも同形の型打成形による端反皿で、口縁端部は大きく外方に開き高台は断面三角形状である。231は内面見込みに燕、口縁部内外面に褐色の染付が施される。232～234は内面見込みに「壽」の刻印が施され、見込みに帯線、色絵によって動植物と文字が描かれる。これらは瀬戸のものともみられる。235は皿で、口縁部は型打成形により輪花状を呈する。口縁端部は口銹、内面に山水楼阁文が描かれる。透明釉は白濁する。236は大皿の口縁部である。体部中位から大きく外方に開き、口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。内面は文様に沿って立体的に成形される。237は肥前産の大皿で、全面に厚い釉が施され、内面は丸に波頭文が描かれる。断面三角形の高台、畳付は釉剥ぎである。238～248は碗である。238は端反碗で、外面に草花文、内面は口縁部に多重圏線、見込みに雁が描かれる。見込みには砂粒が付着するとともに二箇所の目痕が残る。239も端反碗で、内面見込みに簡略化された山水文が濃い呉須により染付される。口縁部は欠損する。240は瀬戸美濃系の端反碗で外面上位に竹、下位に半菊、内面口縁部に多重圏線、見込みに寿文が描かれる。呉須は鮮やかな発色である。241も瀬戸美濃系の端反碗で濃い呉須により外面に蓮弁風の文様、内面口縁部は連弧状の文様、見込み中央に寿文が染付される。242も端反碗で、濃い呉須により外面上下圏線間に半菊と果実文、内面は口縁部に退化した雷文帯が描かれる。243も端反碗で外面帯線と多重圏線間に草花文が巡る。244は能茶山窯の広東形碗で、外面高台内に「茶」の窯印が施さ

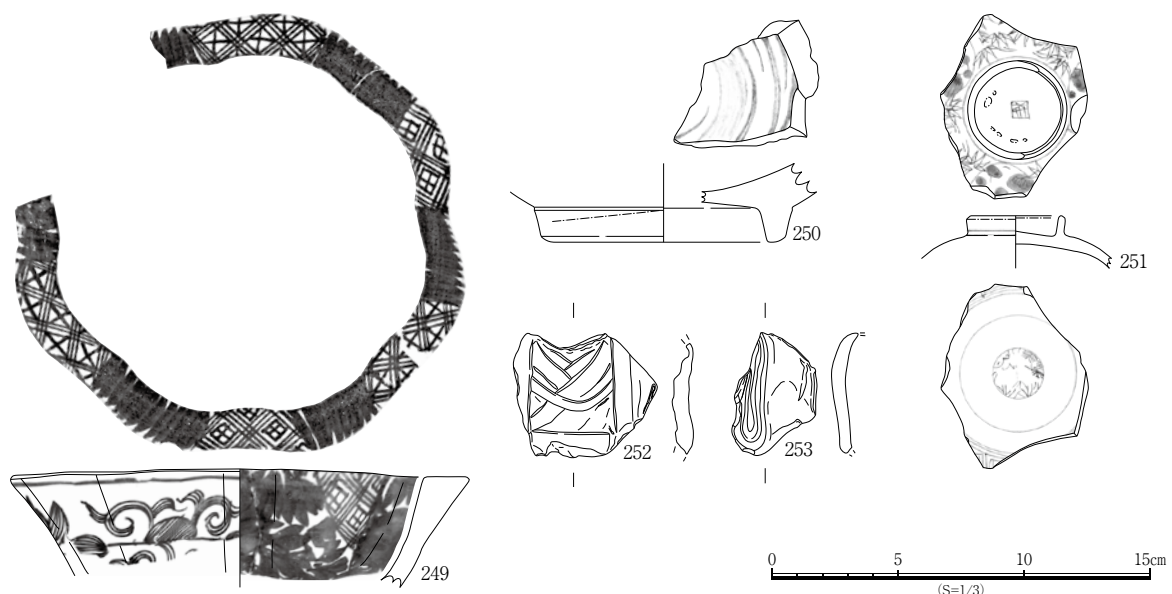


図48 ハンダ土坑1遺物実測図3

3. 検出遺構と出土遺物

れる。外面は多重圏線文に唐草風の文様、内面見込みに波頭文が描かれる。高台は高くやや外側に開く。245は瀬戸美濃系陶胎染付の広東形碗である。褪せた藍色の呉須により内面見込み中央に簡略化された五弁花文が描かれる。高台畳付は釉剥ぎである。246は型紙摺りによる端反碗である。濃い呉須により外面に菊と亀甲の地文様、窓絵に鶴と亀、下位に矢羽根状の連続文が描かれる。内面口縁部にも菊花と亀甲の地文様と亀が染付される。247も型紙摺りによる端反碗で、外面弧状地に菊花、亀甲と花卉の窓絵に菊花が描かれる。内面口縁部に瓔珞文が染付される。248も型紙摺りの端反碗で外面に梅花と枝、丸に菊花文が描かれる。内面口縁部には帯線が巡る。

249は磁器鉢で、口縁部は輪花状を呈し、端部は外方に拡張し水平な平坦面を呈する。濃い呉須により口縁上面から内面に四方禳文と菊花と花文、外面中位に唐草と睡蓮花が染付される。250は肥前産の陶器鉢で、内面に白化粧土を刷毛塗りし、灰釉を施す。外面は鉄釉である。削り高台で、高台は無釉である。251は磁器蓋である。外面つまみ内に「茶」の窯印が施される。外面に竹、丸に花卉風の文様、内面に雷文帯、中央に丸に松葉文が描かれる。

252・253は土製品人形である。同一個体であると考えられ、252は人物の胸部、253は着物の袖部と思われる。いずれも型押し成形で中空、内面はナデ調整と指頭圧痕が残る。

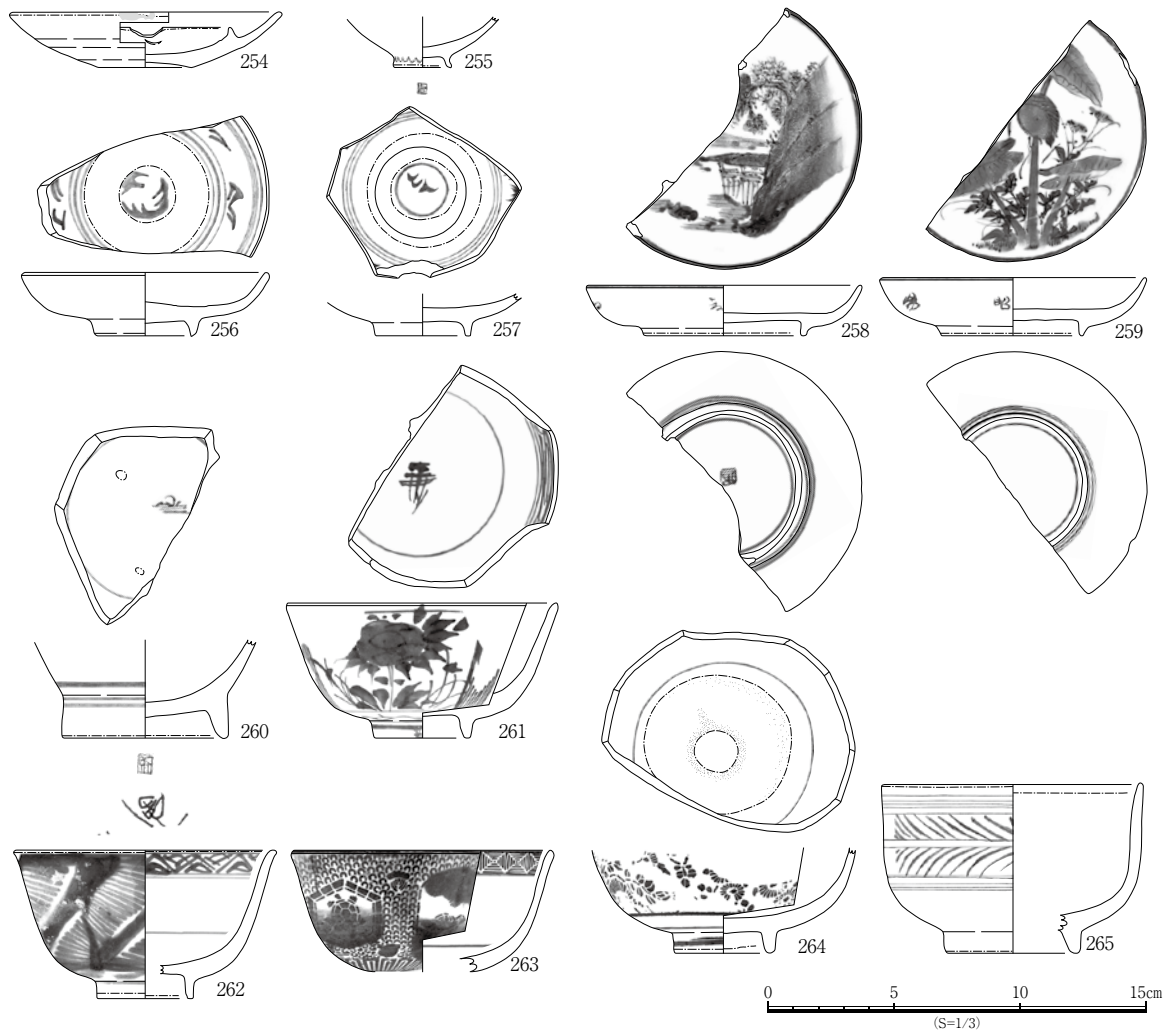


図49 ハンダ土坑2遺物実測図

ハンダ土坑2(図49 254~265)

調査区中央部東側で検出したハンダ土坑で、平面形は角丸長方形、長径2.92m、短径1.47mを測る。ハンダ土坑1と同様の性格を持つと思われ、埋土からは近代の遺物が出土した。遺構図については図7遺構配置図に位置と平面プランのみ掲載した。

254は陶器灯明皿である。内面に半透明の灰釉が施され、外面は露胎である。内面の堤はやや内傾し、抉りが入る。口縁の一部に煤が付着する。255~265は磁器である。255は小杯で、口縁部は欠損する。外面高台に櫛歯文、高台内に落款が染付される。外側に開く高台で、畳付は釉剥ぎである。256は皿で、内面上下多重圏線間に蝙蝠文を配する。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、中央に草文が染付される。高台は断面三角形で、畳付は釉剥ぎである。257も皿で、内面三重の圏線が巡る。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、中央に草文が描かれる。258・259は皿で、いずれも外面口縁部に文字が巡り、口縁端部には口銹風に呉須が施される。258は内面に山水文、259は内面に草花文が描かれる。260~264は碗である。260は能茶山窯の広東形碗で、外面高台内に「茶」の窯印がみられる。内面見込み圏線中央に波頭文、目痕が残る。やや外方に開く高い高台で、畳付は釉剥ぎである。261は端反碗である。内面口縁部に退化した雷文帯が巡り、見込み圏線中央に寿文が描かれる。外面草花文、高台に二重圏線が巡る。262も端反碗で、内面口縁部に簡略化した四方襷文、外面は草文と思われる文様が染付される。263は型紙摺りの端反碗である。内面口縁部に四方襷文、見込みに圏線、外面に弧状地、窓絵に亀が描かれる。262・263の呉須は鮮明な発色である。264も型紙摺りの碗で、腰部は丸みを持つ。内面見込みに圏線、蛇ノ目釉剥ぎに砂粒が付着する。外面草花文が染付される。265は蓋物で、外面上下の多重圏線間に草の文様が巡る。口縁部は上方に伸び、端部は釉剥ぎである。

石垣・裏込め(図50~52 266~311)

調査区中央部、東西に伸びる石垣で、谷部を宅地や耕作地に利用する際に造成を行ったものと考えられる。この石垣はSD2に平行しており、SD2はこの石垣に関連するものと思われる。高さは0.3~1.0m、長さ34.5mで、裏込めから中世から近代の遺物が出土した。図示できるものについて以下に掲載する。

266は土師質土器杯である。摩耗が著しく調整等は不明瞭である。267は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁文が施される。

268~282は陶器である。268は灯明皿である。内面と外面中位に黄褐色の釉が施される。内面の堤は僅かに内傾し、V字状の抉りが入る。堤端部は釉剥ぎである。269~275は碗である。269・270は広東形である。269は外面に白化粧土による文様の一部がみられる。内面見込みに三箇所の目痕が残る。270は高台脇より高台内が深く、器壁が薄い。内面見込みに二箇所の目痕が残る。271は、丸みを持って立ち上がり、口縁部は上方に伸びる。胎土は磁器質である。272~274は丸碗で、全面に灰釉が施される。いずれも高台脇より高台内が深く削り込まれ、畳付は釉剥ぎである。272は高台畳付に砂粒の付着がみられ、全面に貫入が入る。275は、全面に青みがかった釉がつけ掛けされ、外面高台は露胎する。内面見込みに三箇所の目痕が残る。276は能茶山窯の皿である。鉄釉がつけ掛けされ、体部下半と高台は露胎する。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、二箇所の目痕が残る。外面口縁下に一条の沈線が巡る。277は内野山窯とみられる陶器皿で、内面に透明感のある銅緑釉が施される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。外面底部は露胎で、つけ掛けされた釉が垂れる。278は肥前産の瓶である。外面に白化粧土の刷毛目文様が描かれる。内面は無釉で、割り底である。279は備前焼播鉢の底部で、内面

3. 検出遺構と出土遺物

に密な摺目が施される。280も播鉢で、口縁部は片口状を呈する。内面に放射状の密な摺目が施される。281は備前焼の匣鉢である。内面底部に重ね焼きの痕跡がみられ、外面底部切離しは糸切りで板状の圧痕が残る。灯明皿の匣鉢として流通したものと思われる。282は練り込み手の筒形火鉢である。橙色の素地に白色土を練り込む。脚部に浅いアーチ状の抉りが入り、外面底部に刻印がみられる。283は土師質土器焜炉である。高い高台に径0.6cmの円孔が外から中へ穿たれる。284は陶器甕の口縁部で、全面に褐色の釉、肩部の一部に黒色釉が施される。口縁端部は横方向に拡張し、平坦な水平面

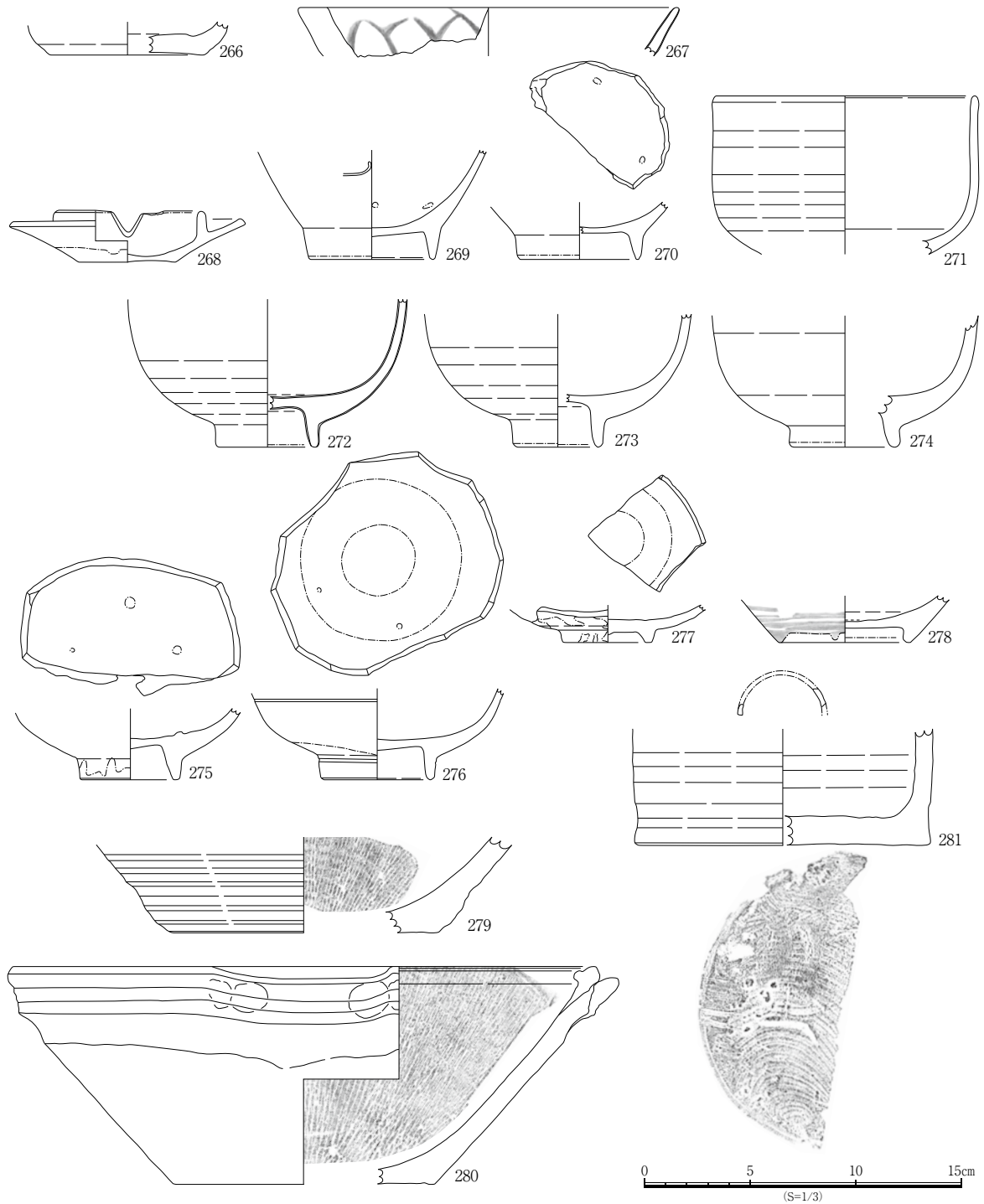


図50 石垣裏込め遺物実測図1

を呈する。285も陶器甕で全面に赤褐色の釉が施される。口縁端部は横方向に拡張した水平な平坦面に三もしくは四条の沈線が巡る。外面肩部以下にも多重の沈線が巡る。

286～311は磁器で、この内286～290は皿である。286は能茶山窯の製品で、外面底部に「茶」の窯印が残る。口縁部は型打成形により輪花状を呈し、内面に梅樹、口縁端部に呉須が染付される。287は削り高台で、外面高台と高台内は無釉である。内面見込みに重ね焼きの痕跡が残る。288は内面に魚文が描かれる。見込みに目痕、砂粒の付着がみられる。高台内は無釉である。289の口縁部は欠損する。内面に山水楼阁文が染付される。290は内面に二重斜格子文が巡る。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、砂目が残る。高台畳付は釉剥ぎで、砂粒が付着する。291・292は小碗である。291の口縁部は僅かに外反し、口縁端部に口銹が施される。内面に草花文が染付される。292は能茶山窯の製品で、外面高台内に「サ」の窯印がみられる。内面口縁部に帯線、見込みは波頭文とみられる文様が描かれる。293～306は碗である。293は肥前産の丸碗で、外面に梅樹と草花が染付される。高台は二重、一部三重の圏線が巡る。294の口縁部は欠損する。外面中位に鋸歯文、下半に松葉が描かれる。低い高台である。295は外面に二重格子文が巡る。内面は口縁部に二重圏線、見込み蛇ノ目釉剥ぎの中央に斜格子文が描かれる。内面に重ね焼きの痕跡、高台に砂粒の付着が残る。296の口縁部は欠損する。外面中位には多重の横線、下位に圏線が巡る。内面見込みは土坡文とみられ、目痕が三箇所残る。高台内の一部に砂粒が付着する。297は外面の区画文に竹と宝文、下位に菱形が巡る。高く外方に開く高台を持ち、全面に貫入がみられる。298は外面に蝶、下位に圏線が描かれる。内面口縁部は二重圏線が巡る。299は肥前産で、広東形を呈する。外面に鶴か鷺、内面見込みの圏線中央に鷺文が描かれる。300も広東形で、外面に草花風の文様が描かれる。器壁は薄い。301は肥前産の広東形碗で、内面見込みに花卉

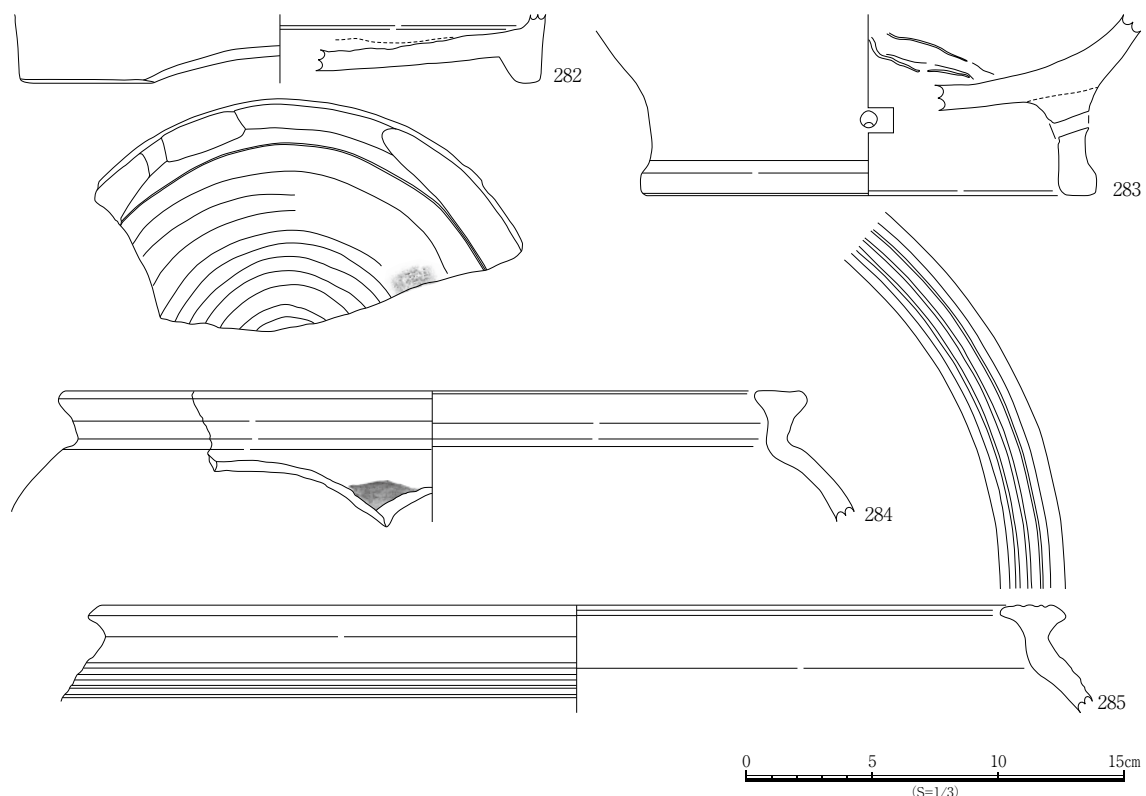


図51 石垣裏込め遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物



図52 石垣裏込め遺物実測図3

とみられる文様が描かれる。高台は断面三角形状になる。302の口縁部は僅かに外反し、外面に菊唐草文とみられる文様、内面口縁部に崩れた雷文帯または縄目文が巡る。303の口縁部も僅かに外反する。外面に松樹文、内面口縁部に二重圏線が巡る。304は端反碗で、口縁部と高台に二重圏線、松と草花とみられる文様が描かれる。305も端反碗で、内面見込みに丸に鶴文がみられる。外面高台に二重圏線が巡る。306の口縁部は欠損する。内面見込みに寿文、外面は木賊文と思われる。302～306の呉須は鮮明な発色である。307・308は蓋である。307は肥前産で、外面に稲束文、内面に鷺文が染付される。308は外面に多重圏線と折枝竹文が描かれる。309は段重である。外面の上下帯線間に櫛歯状の文様が巡る。口唇部と内面口縁の一部及び底部は釉を剥ぎ取る。310は火入で、筒形を呈し、外面に青磁釉が施される。蛇ノ目高台で置付は銹釉、内面底部に重ね焼きの痕跡がみられる。311は水滴である。型押し成形により波頭とみられる文様が配される。内面はナデ調整が施される。

(9) 表採遺物

表採遺物(図53 312～315)

今回の調査対象地周辺で表採された遺物を取り上げる。これらの遺物は概ね13～14世紀にかけてのものであり、表面採集されたものである。調査区内で検出された遺構と同時期であるため参考資料として取り上げる。

312は龍泉窯系青磁碗である。外面に鎬蓮弁文が施される。313は備前焼壺の胴部片と考えられる。外面に三条ないしは四条一単位の沈線が巡る。314は備前焼の水屋甕である。外面肩部にヘラ状工具による崩れた波状文が施される。内外面とも横方向のナデ調整である。315は常滑焼の甕である。口縁部は大きく外反し、端部は上下に拡張する。端部側面はナデ調整により凹線状になる。13世紀後半から14世紀のものと思われる。

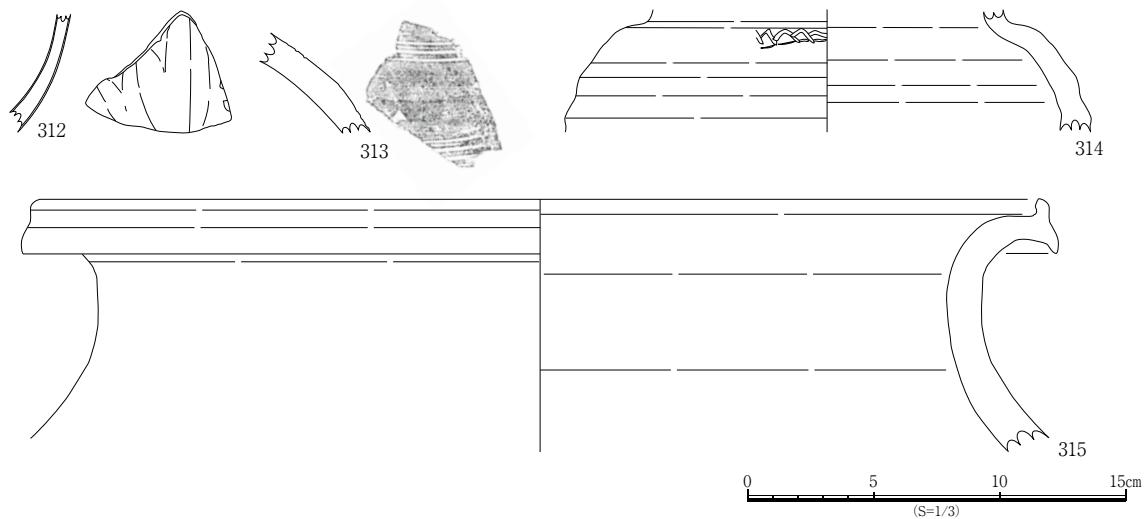


図53 表採遺物実測図

(10) 包含層出土遺物

I層(図54 316~326)

I層からは主に近世から近代の遺物が出土した。316は陶器で、能茶山窯の鉄釉皿である。外面上半と内面に鉄釉が施され、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎで重ね焼きの痕跡がみられる。317~325は磁器で、317~321は皿である。317は灯明皿で、外面口縁部と内面に灰白色の釉が施される。内面口縁部に型作りの菊花を貼付し、見込みから口縁にかけて六条の櫛目が入る。見込みに二箇所が目跡が残る。318は型打成形による菊皿で、釉に細かい粒状の呉須が混じる。蛇ノ目高台で、内面見込みに三箇所ハマ痕が残る。319は型紙摺りにより内面に亀甲・花・菱形の地文様と文字、見込みに草花文が染付される。320は肥前産の大皿で、口縁端部は僅かに肥厚し、丸く収める。内面口縁部に半菊唐草文、見込みは波頭文が鮮明な発色の呉須により描かれる。321は肥前産の角皿である。内面見込みに雷文帯、外面高台及び高台内に圈線が巡る。322は端反碗である。内面口縁に格子文、見込みに圈線が巡り、蛇ノ目釉剥ぎである。外面は圈線間に縞文と蔓草文と思われる文様が巡る。323は小碗で内面見込みに濃い呉須により松樹が描かれる。口縁端部は僅かに外反し、口鏤が施される。324は

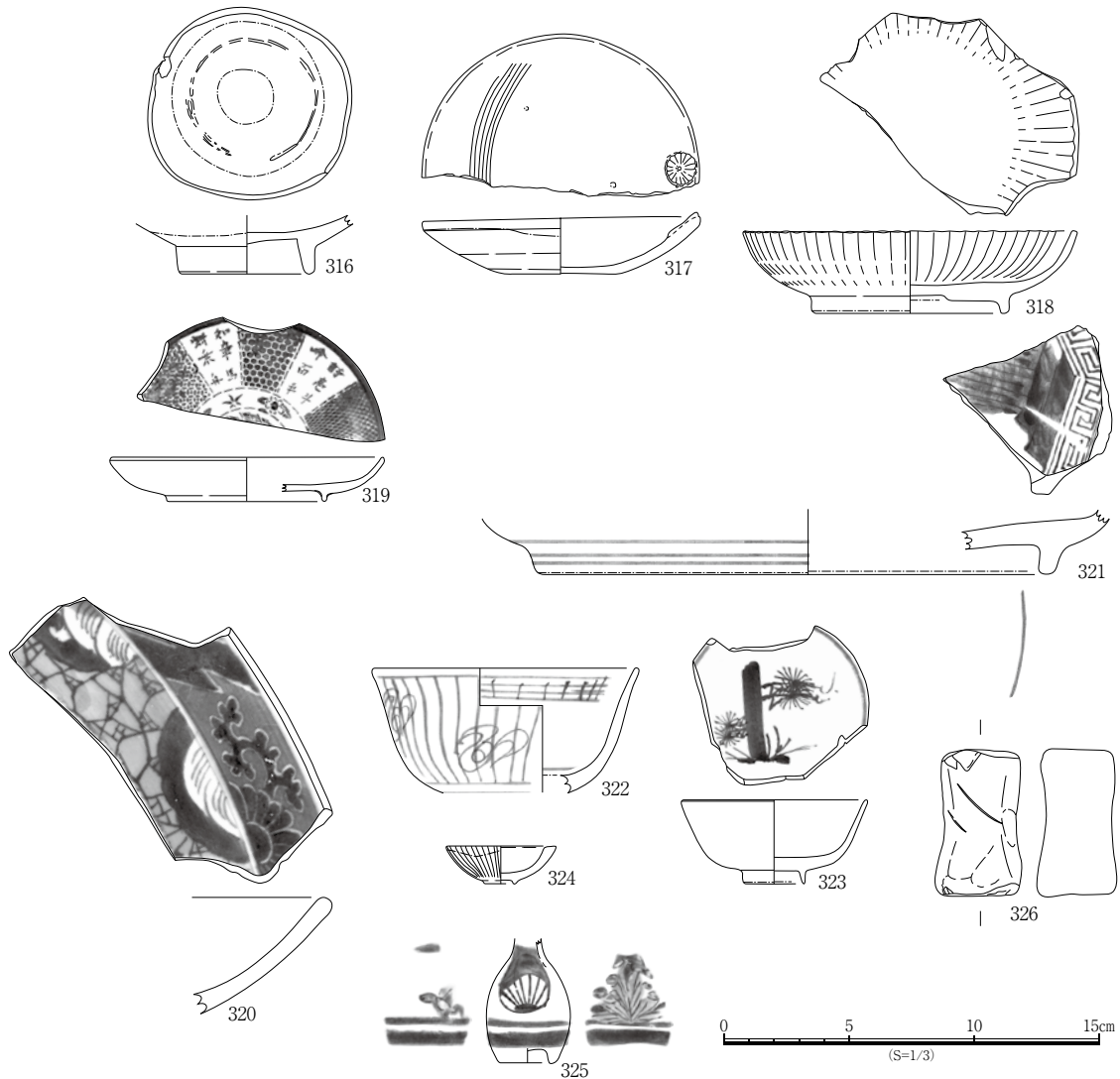


図54 I層遺物実測図

紅皿である。型押し成形により貝殻状を呈し、内面と外面口縁部のみ施釉される。325は肥前産の神仏用の瓶である。外面胴部中位に幅広の帯線、草花、蝶の色絵が染付される。高台内と畳付は無釉である。326はトチンである。外面にナデ調整と指頭圧痕が施される。

Ⅱ層(図55～59 327～372)

Ⅱ層からは主に近世の遺物が出土した。327は関西系の焙烙である。調査区中央西端EⅡ-19-1グリッドで、石垣背部の包含層Ⅱ層を掘削中に出土した。明確な掘方はなく、焙烙を伏せて底面を上とした状態で検出した。底部中央は欠損していた。焙烙を取り上げた下には328～335の土師質土器小皿が8枚重なった状態で納められていた。さらに焙烙には内外面に墨書が認められる。平たい底部からやや丸みを持って立ち上がり、口縁部にかけて直立する。口縁端部はナデ調整により水平な面をつくり、口縁部の双方には直径7mmの穿孔を持つ。内外面ともにヨコナデを基調とするが、穿孔部は外面に粘土を継ぎ足し肥厚させ、接合部にはユビオサエが残る。体部から底部も丁寧なナデ調整が施され、外面口縁部との接合部は、はみ出た粘土を板状工具で掻き取った痕が残る。「享保□年」の墨書から享保年間(1716～1736)という年代に比定できる。328～335は土師質土器の小皿で、いずれもロクロ成形で底部の切離しは回転糸切りである。底径は4.2～5.1cmと定形であり、円柱造りである。これらの土師質土器小皿については上記の焙烙の内側に重ねた状態で出土しており、祈祷、祈願の際に使用された可能性が高い。

336～343は陶器で、336は皿である。内面及び外面上半に鉄釉が施される。外面高台は露胎する。337～340は碗である。337は内面及び外面上半に灰釉が施される。高台脇はケズリにより明瞭な稜となり、外方に開く高台を持つ。338は肥前産である。削り高台で、内面は鉄釉が施され、外面は露胎する。339は全面に灰釉が薄く施される。口縁端部は僅かに外反し、削り高台で高台脇より高台内が深くなる。全面に細かい貫入がみられる。340も全面に灰釉が施される。口縁部は上方に伸び、腰部は僅かに段状となり、底部は欠損する。341は唐津産の火入で、内面口縁部から外面下半まで灰釉が施され、高台は露胎する。外面口縁部に帯線、下半に圏線が巡り、間に山水文と思われる文様が描かれる。口縁部は内方向に折り返し、玉縁状で、断面は中空になる。342は備前焼の播鉢で、内面に九条一単位の放射状を呈する密な摺目を持つ。外面は横方向のナデ調整が施され、口縁部は欠損する。343は播鉢の口縁部片である。口縁外面は三段で端部の断面形は円形を呈し、内面口縁部は摺目の後、横方向のナデ調整を施す。344は土師質土器焙烙の口縁部片である。内外面とも横方向のナデ調整が施される。口縁端部は平坦面を呈し、面取りを行う。外面の一部に煤が付着する。345は瓦質土器の焙烙である。口縁部は大きく外反し、端部は肥厚、外傾する平坦な面を成す。外面口縁部以下は表面が剥離する。18世紀から幕末のものと思われる。346は陶器鍋で、内面に灰釉が施され、外面は露胎する。低い削り高台を持ち、短い三足を貼付する。高台脇は凹状で明瞭な段になる。347は瀬戸焼の火鉢で、外面及び内面口縁部まで緑釉が施される。頸部はへら状工具による鎬が巡り直線的に上方に伸び、口縁端部は外方に開く。348は瓦質土器火鉢の底部である。断面四角形の高台を持ち、胴部は筒形を呈するものと思われる。349は陶器甕で、全面に赤褐色の釉が施される。口縁端部は水平な面を成し、横方向に拡張する。端部上面には四条の沈線、外面肩部に多重の沈線が巡る。

350～362は磁器である。350は皿で、内面周縁に斜格子文、見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。見込みに重ね焼きの痕跡が二重に残り、一方にアルミナ砂が付着する。351は皿で、型打成形により口縁部は輪花状を呈し、端部は僅かに上方に伸びる。内面に菊花の色絵が染付される。352も皿で、口縁端

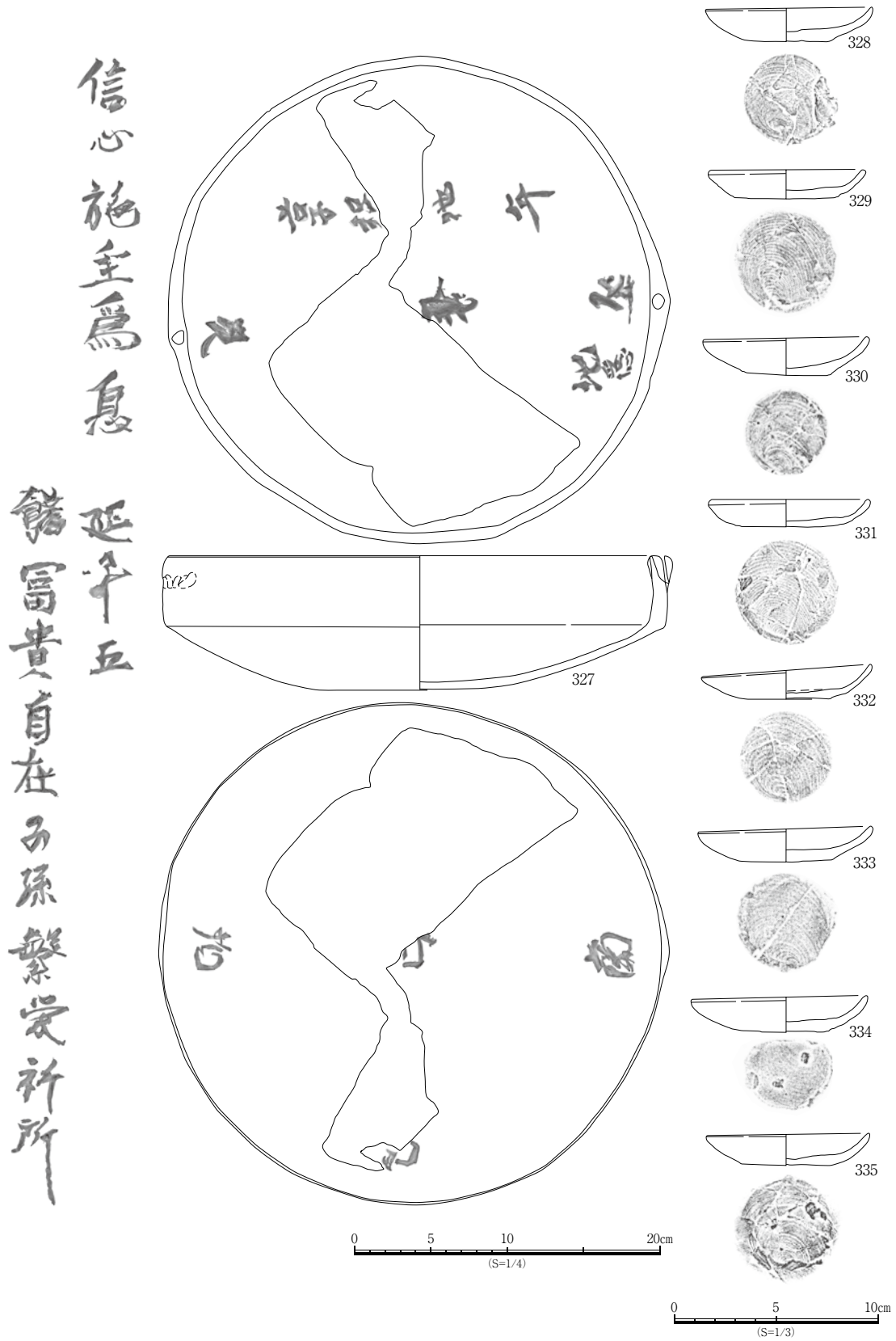


図55 II層遺物実測図1

部に口銹風に褐色釉を施し、丸に桜花文を銅板転写により染付する。353 は能茶山窯の広東形碗で、外面高台に二重圈線が巡る。高台内に「サ」の窯印がみられ、内面見込みの圈線中央に崩れた波頭文と、目痕が二箇所残る。354 は能茶山窯の丸碗である。外面に稲束文、高台内に「サ」の窯印がみられる。内面見込み圈線中央に波頭文が描かれる。355 は碗で、外面に梅花文、下位に多重圈線が巡る。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。356 は端反碗である。胴部上位に四条の横線が巡り、外面上下圈線間に山水文が染付される。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。357 は碗で、外面山水文と圈線が巡る。高台は歪む。358 は能茶山窯の蓋で、摘み内に「茶」の窯印が染付される。内面丸に松葉文、外面は笹文とみられる。359 は仏飯器である。比較的大型で口縁部は外方に開き、端部は上方に尖り気味に仕

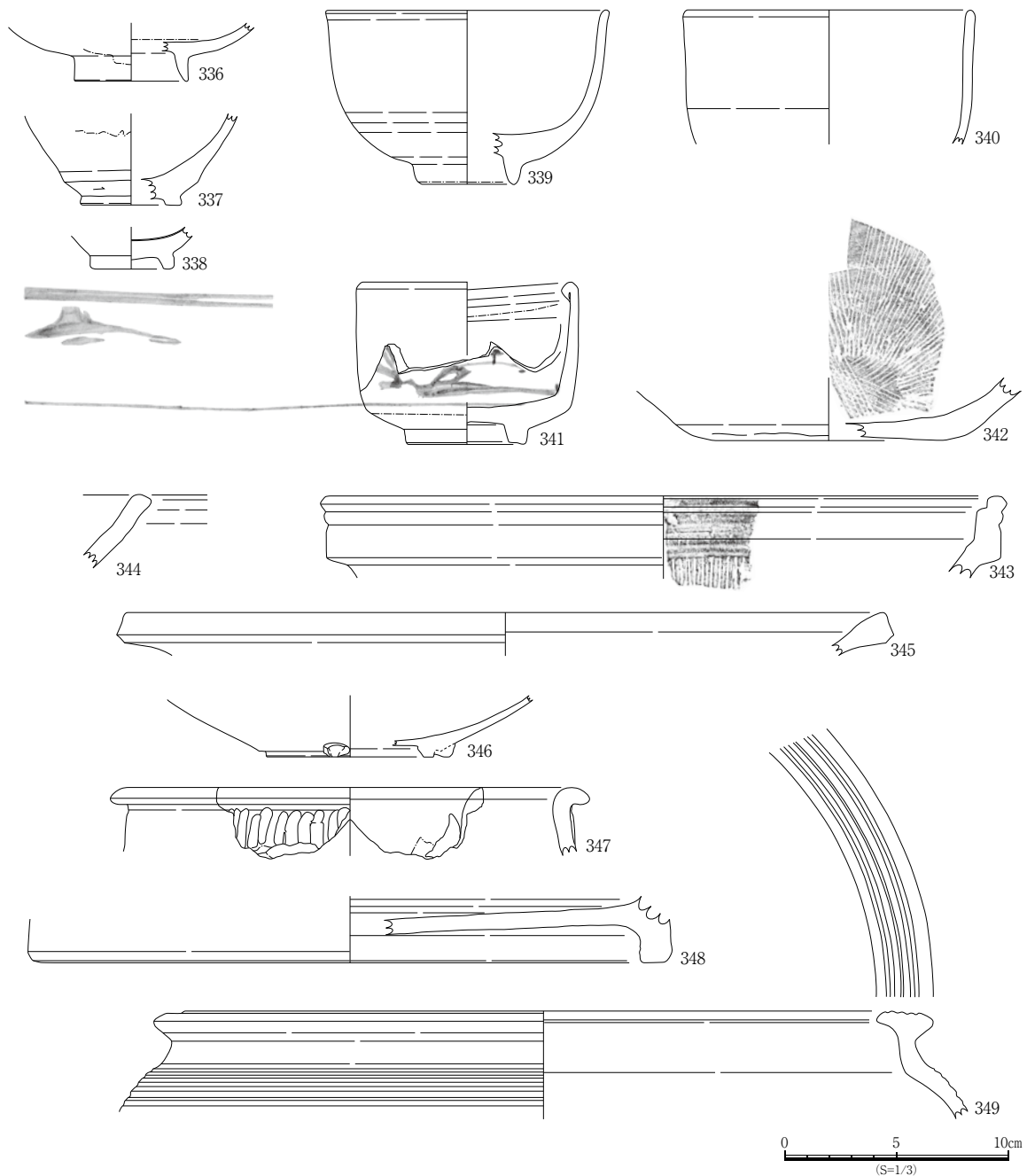


図56 II層遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

上げる。外面の上下圏線間に暦手文とみられる文様が染付される。360は小杯である。口縁端部は外反し、内面に花または鳥が白抜きで染付されるが、文様はにじむ。361も小杯である。内面旗に「伊野東町 呉服 太物 糸屋店 今」の染付がみられる。362は九谷焼の鬼面盃で、鬼面の顎部に「九谷」の印と、孔径0.3cmの穿孔がみられる。内面はおたふくの面が描かれる。

363は管状土錘である。364は軒平瓦で、中心飾りは鳶文である。365も軒平瓦で、中心飾りは左巻きの三つ巴文である。366は和鏡である。E II - 15 - 18グリッドの調査区壁際のII層から出土した。面径10.1cm, 面厚0.1cm, 周縁幅0.2cm, 周縁頂厚0.7cmを測る。蓬萊紋鏡であり、文様は「浜松双鶴紋」(双鶴・松樹・州浜)に桐紋が配され、鈕座は亀である。全体的に文様の形骸化が進んでおり江戸初期に造られた和鏡と思われる。367は鉄釘で胴部は5mm角を測る。368は銅製の煙管で、側面に継ぎ目が残る。

369は細粒砂岩製の砥石である。370は砂岩製の荒砥で、二面を使用する。短辺の一部にも使用痕がみられる。371は砂岩製の石臼で、側面に方形の抉りが残る。372は砂岩製の五輪塔の火輪で、全長27.2cm, 全幅27.3cmを測る。

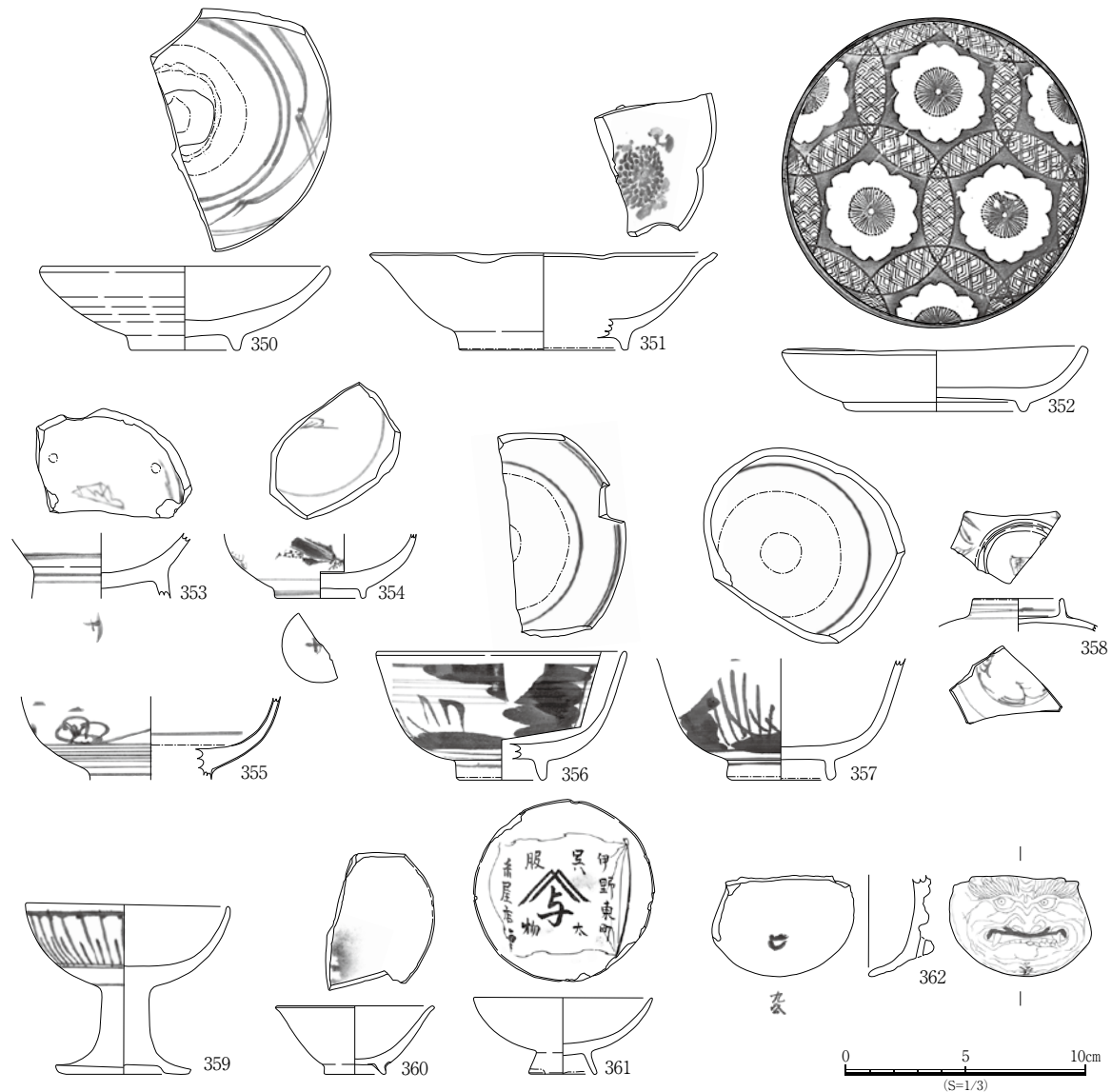


図57 II層遺物実測図3

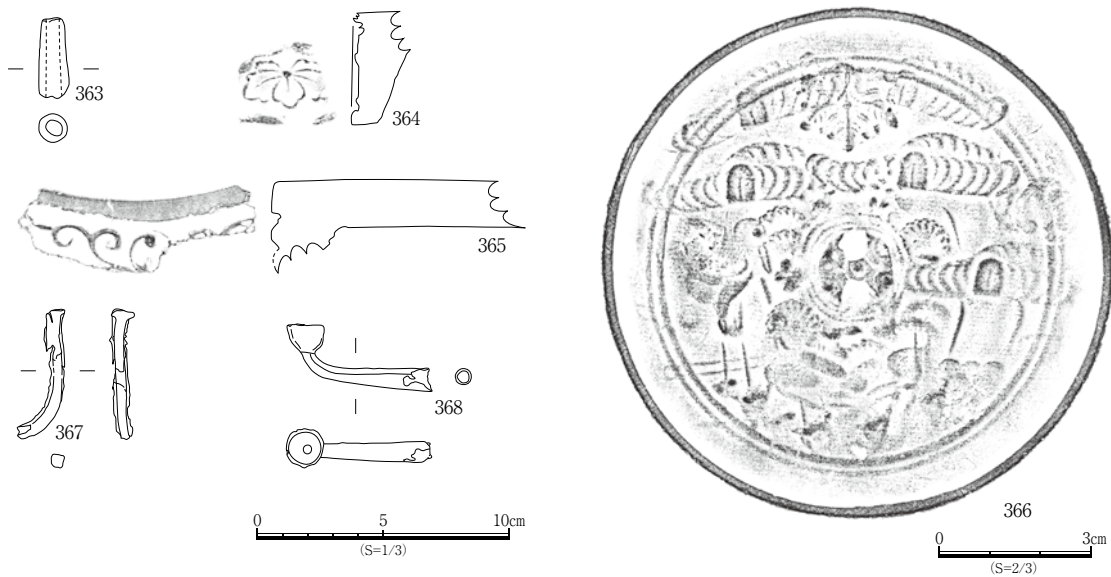


図58 II層遺物実測図4

Ⅲ層(図60 373~390)

Ⅲ層からは主に中世の遺物が出土した。

373~379は土師質土器である。373は灯明皿で、内面と外面の一部にタール痕がみられる。剥離と摩耗が著しく、調整等は不明瞭である。374は小皿で、体部下半はやや肥厚し、口縁部は斜上方に伸びる。内外面とも回転ナデ調整で、底部切離しは回転糸切りである。375は小皿で、内外面の一部に煤が付着し、灯明皿とみられる。摩耗が著しいが、内面ナデ調整、底部切離しは回転糸切りの痕跡が僅かに残る。376は小皿で、内面は回転ナデ、見込みは平行ナデ調整で、外面回転ナデ調整である。底部切離しは回転糸切りで、板状の圧痕がみられる。377~379は杯である。377はロクロ成形で口縁部は外方に開き、端部は尖り気味に仕上げる。内面の一部に煤が付着し、底部切離しは回転糸切りである。378は内外面とも摩耗が著しく調整等は不明瞭であるが、外面回転ナデ調整、底部切離しは回転糸切りの痕跡が僅かに残る。379は外面底部と体部の境目がナデ調整により段状になる。内外面とも回転ナデ調整、底部切離しは回転糸切りである。

380は龍泉窯系青磁杯である。口縁部は大きく外方に開き、端部は丸く収める。外面は退化した蓮弁文が施される。381は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁文が施される。蓮弁の中心に稜はみられない。

382~385は瓦質土器で、382は鉢である。口縁部は斜上方に伸び、端部は平坦な面を呈する。内外面とも横方向のナデ調整で、外面に指頭圧痕が残る。383は鍋である。膨らみのある体部から口縁部にかけて内湾し、端部は水平な平坦面を呈する。384は播磨型の羽釜で、張りのある胴部から口縁部は内湾し、端部は内傾する面を成す。断面三角形の短い鏝が貼付される。385は関西系の羽釜で、口縁部はやや肥厚し、端部は内傾する平坦面を成す。断面三角形の短い鏝が貼付される。384・385はいずれも内面は横方向のナデ、外面は指頭圧痕と横方向のナデ調整が施される。386は土師器羽釜である。外面口縁部はナデ調整により段状を呈し、内側に引き出し尖り気味に仕上げる。断面長方形の水平な鏝が貼付され、結合部下端はケズリによって凹む。387は土師器鍋である。口縁端部は上方に尖り気味に仕上げ、外傾する面を成す。面の中央部は僅かに凹む。388は土師質土器羽釜である。退化した鏝が口縁部に貼付される。内外面とも横方向のナデ調整、内面に指頭圧痕が施される。389は東播系須

3. 検出遺構と出土遺物

恵器捏鉢である。口縁端部は上方に拡張する。内外面とも横方向のナデ調整で、焼成不良により外面はにぶい橙色を呈する。390は備前焼の播鉢である。内面口縁直下に稜を持ち、端部は先細りになる。口縁外面には二条の凹線が巡る。内外面とも横方向のナデ調整で、斜方向の疎らな摺目が入る。

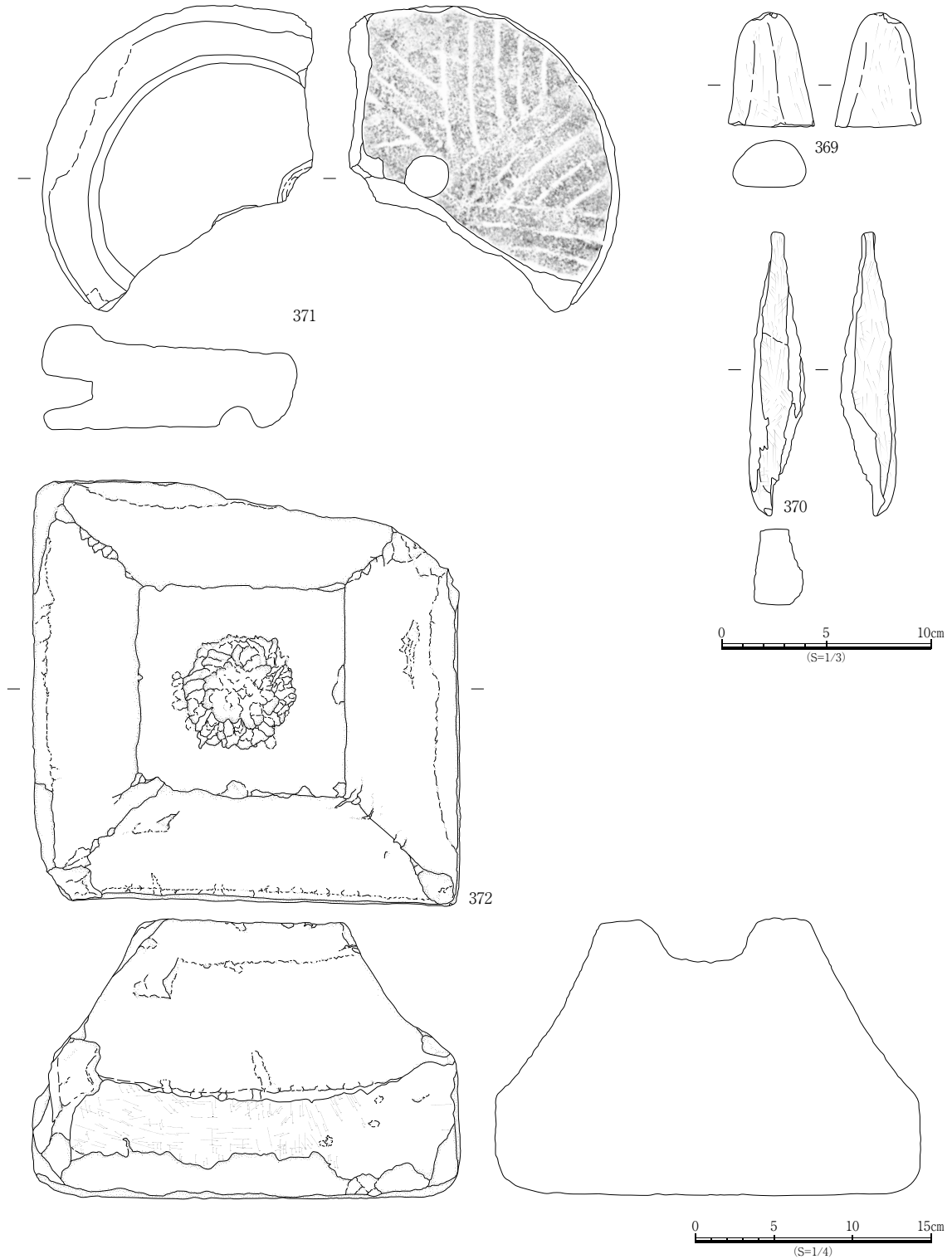


図59 II層遺物実測図5

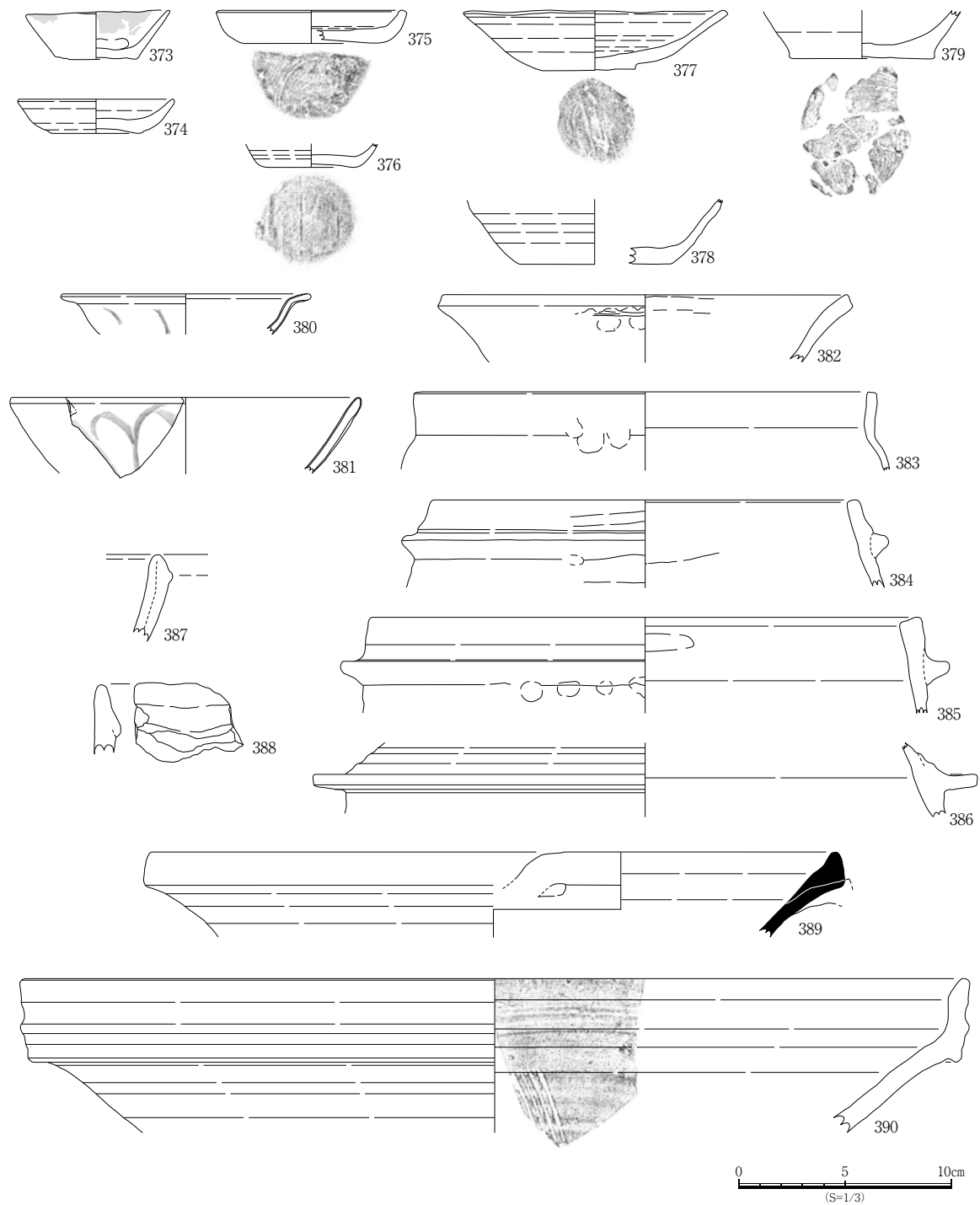


図60 Ⅲ層遺物実測図

Ⅳ層(図61~64 391~465)

Ⅳ層からは主に古代から中世、一部弥生時代の遺物が出土した。

391は弥生土器壺である。頸部は上方に伸び、口縁部は外反、端部は平坦面を呈する。外面に横方向のナデ調整と指頭圧痕が施される。内面は縦方向のナデ調整と指頭圧痕が施され、胴部と頸部の境目に接合痕が残る。392～396は土師器で、392は杯である。底部片のみ出土した。内面見込みはナデ調整で、底部切離しはヘラ切りである。393も杯で、外面底部と胴部の境は段になり円盤状を呈す

3. 検出遺構と出土遺物

る。内外面とも横方向のナデ調整が施される。394 も杯で、内面と外面の一部に煤が付着する。摩耗が著しく調整等は不明瞭である。395 は杯または椀である。器壁が薄く、口縁部は斜上方に直線的に伸びる。396 は輪高台椀である。断面楕円形のやや外方に開く高台が貼付される。外面は横方向のナデ調整が施される。397 は緑釉陶器である。摩耗が著しく、内外面の一部に僅かに釉が残る。398 は黒色土器椀で、内面のみ黒色処理で細かいヘラミガキが施される。胎土に雲母片を含む。搬入品である。399～402 は土師器甕である。399・400 の口縁部は「く」の字に外反する。端部は上方に摘み、平坦面を呈し中央は凹む。399 は外面頸部より上位は横方向のナデ、胴部はハケ調整、内面口縁部に横方向のハケ調整が施される在地系甕である。400 は内面横と斜方向の粗い単位の花ケ、外面横方向の花ケ調整が施され、外面に煤が付着する。搬入品である。401 は胴部片である。胴部上位は横と斜方向の

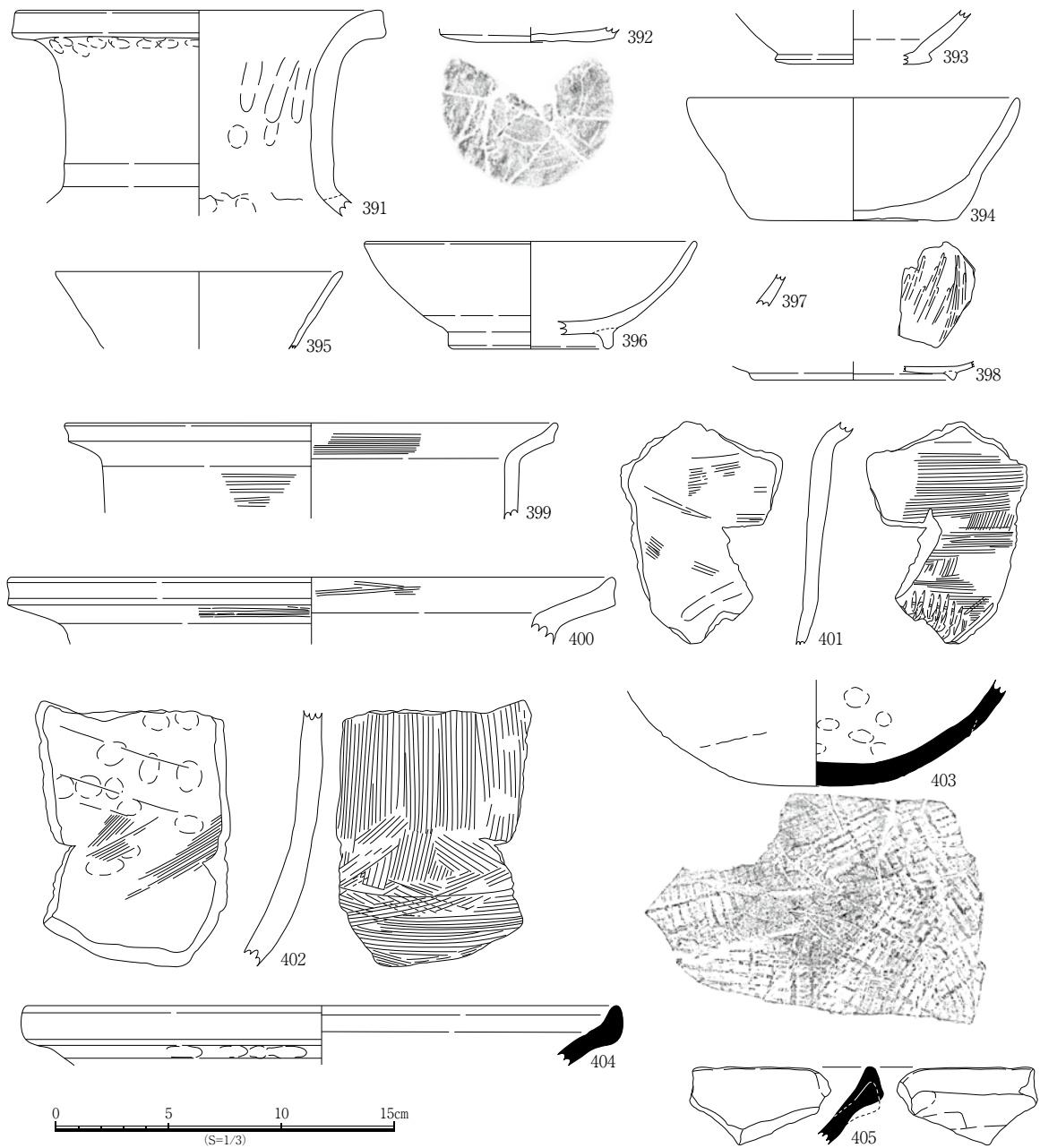


図61 IV層遺物実測図1

ハケ、下位にタタキ目が残リ、内面ハケ、ナデ調整が施される。外面の一部に煤付着がみられる。在地系である。402は胴部片である。外面上位は縦方向、中位は斜方向、下位は横方向のハケ調整で、内面はナデと指頭圧痕、一部にハケ調整が施される。胎土に雲母片を含む搬入品である。403は須恵器甕の底部片である。外面格子状のタタキ目、内面ナデ調整と指頭圧痕が残る。

404・405は東播系須恵器捏鉢である。いずれの口縁部も僅かに肥厚し、上下に拡張する。404の外面は横方向のナデと指頭圧痕、内面は横方向のナデ調整が施される。405は酸化焰焼成で外面横方向のナデ調整がみられる。

406～414は土師質土器である。406は小皿で、口縁部は斜上方に伸び、端部は丸く収める。外面底

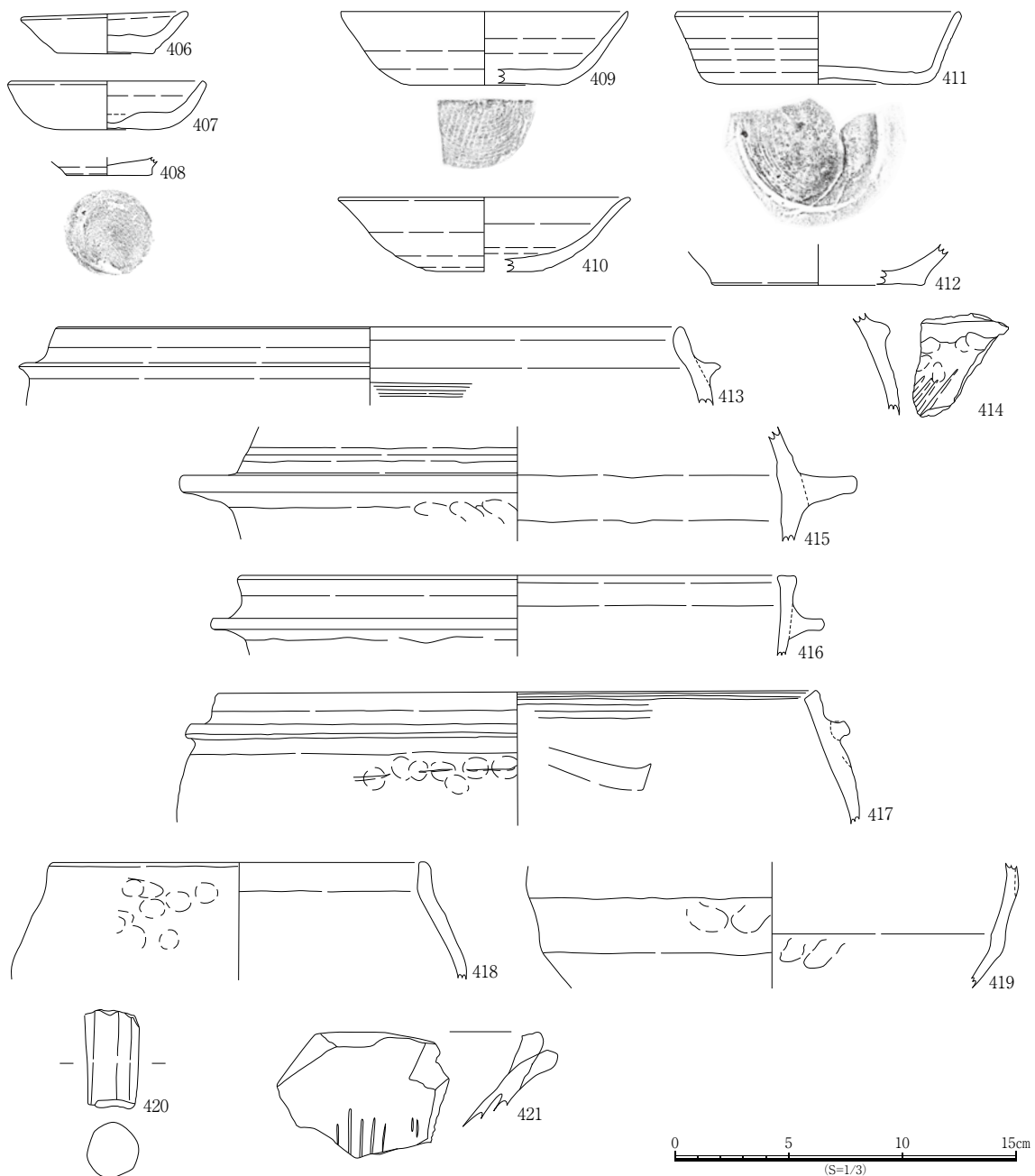


図62 IV層遺物実測図2

3. 検出遺構と出土遺物

部は僅かに段になり、内面は回転ナデ調整、底部切離しは回転糸切りである。407・408は皿である。407は厚みのある底部で、見込み中央は凹む。内外面とも回転ナデ調整で、底部切離しは回転糸切りである。408も内外面とも回転ナデ調整で、底部切離しは回転糸切りである。内面に煤が付着する。409～412は杯である。409の口縁部は斜上方に直線的に伸び、端部はやや尖り気味に仕上げる。内外面とも回転ナデ調整、内面見込みは平行ナデ調整である。外面底部に簀子状の圧痕が残る。410の口縁部は緩やかに外反する。内外面とも回転ナデ調整で、底部には板状の圧痕が僅かに残る。411の口縁部は比較的上方に直線的に伸び、端部は丸く収める。内外面とも回転ナデで見込みは平行ナデ調整が施される。底部切離しは回転糸切りである。412は内面と外面の一部に煤が付着する。底部は段状になり、口縁部に向けて斜上方に伸びる。口縁部は欠損する。底部切離しは回転糸切りである。413は羽釜である。外面に断面三角形の短い鏝が貼付され、鏝の下部に煤が付着する。口縁部は内面側に肥厚し、上方にやや尖り気味に仕上げる。内面は横方向のナデ、ハケ調整、外面は横方向のナデ調整が施され、胎土に雲母片を含む搬入品である。414も羽釜で、断面三角形の短い鏝を持つ。鏝部上位は横方向のナデ調整、下位は指頭圧痕、胴部はタタキ目が残る。内面は横方向のナデ調整が施される。

415～421は瓦質土器で、この内415～417は羽釜である。415は断面楕円形の長い鏝が貼付され、口縁部にむけて内湾する。外面鏝上部は強い横方向のナデにより段状になり、内面も横方向のナデ調整が施される。416の口縁部は横方向に拡張し、端部は内湾し平坦面を呈する。断面楕円形の水平な鏝が貼付され、鏝下端に接合痕が残る。417は短い断面四角形の鏝が貼付される。胴部から口縁部は内湾し、端部は内傾し平坦面を呈する。外面横方向のナデ調整と指頭圧痕、内面口縁部に横・斜方向のナデ調整が施される。外面に煤の付着がみられる。418・419は鍋である。418は短く直立する口縁で、端部は内側に摘み、やや尖り気味に仕上げる。外面はナデ調整と指頭圧痕、内面は横方向のナデ調整が施される。419は胴部片で、外面に薄い粘土帯を貼付する。内面横方向のナデ調整により胴部中位は段状になる。外面は横方向のナデ調整と指頭圧痕が施され、下半には煤の付着がみられる。420は羽釜の脚で、外面に縦方向のナデ調整が施される。421は播鉢で、口縁部は片口状を呈し、端部は平坦な面を成す。内面に五条の疎らな摺目が施される。

422～434は青磁で、422は龍泉窯系杯である。口縁部は大きく外反し、端部は僅かに肥厚し丸く収める。423は盤である。口縁部内面に明瞭な稜を持ち、端部は上方に引き上げ玉縁状を呈する。424～434は龍泉窯系碗である。424は底部片で、内面見込みに花文、外面に鎬蓮弁文の一部がみられる。厚みのある底部で、断面楕円形の高台を持ち、全面施釉後に高台内の釉を輪状に削り取る。425～430はいずれも外面に鎬蓮弁文が施される。425の釉調は灰オリーブ色を呈する。429の口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。全体に貫入が入る。431は無文で、口縁部は端反型を呈する。432も無文である。厚みのある底部に断面U字型の高台を持ち、全面施釉後に高台内の釉を輪状に削り取る。胎土は陶器質で重量感がある。433・434は外面にヘラ描きの細蓮弁文が施される。

435は青花皿である。内面見込みに玉取獅子文、外面牡丹唐草文が染付される。断面三角形の低い高台を持ち、高台内と壘付は釉をかきとる。436～438は白磁皿である。436・437の口縁部は小範囲に釉剥ぎが施される。436の口縁部は斜上方に直線的に伸びる。438は底部片で、体部中位より腰折れである。断面四角形の高台で、外面高台脇以下は釉をかきとる。

439・440は陶器播鉢である。439の口縁部は上下に拡張し、断面三角形状を呈する。内外面とも横方向のナデ調整が施される。440の口縁部は「く」の字状になり、端部は上方に伸びる。内外面とも横方向

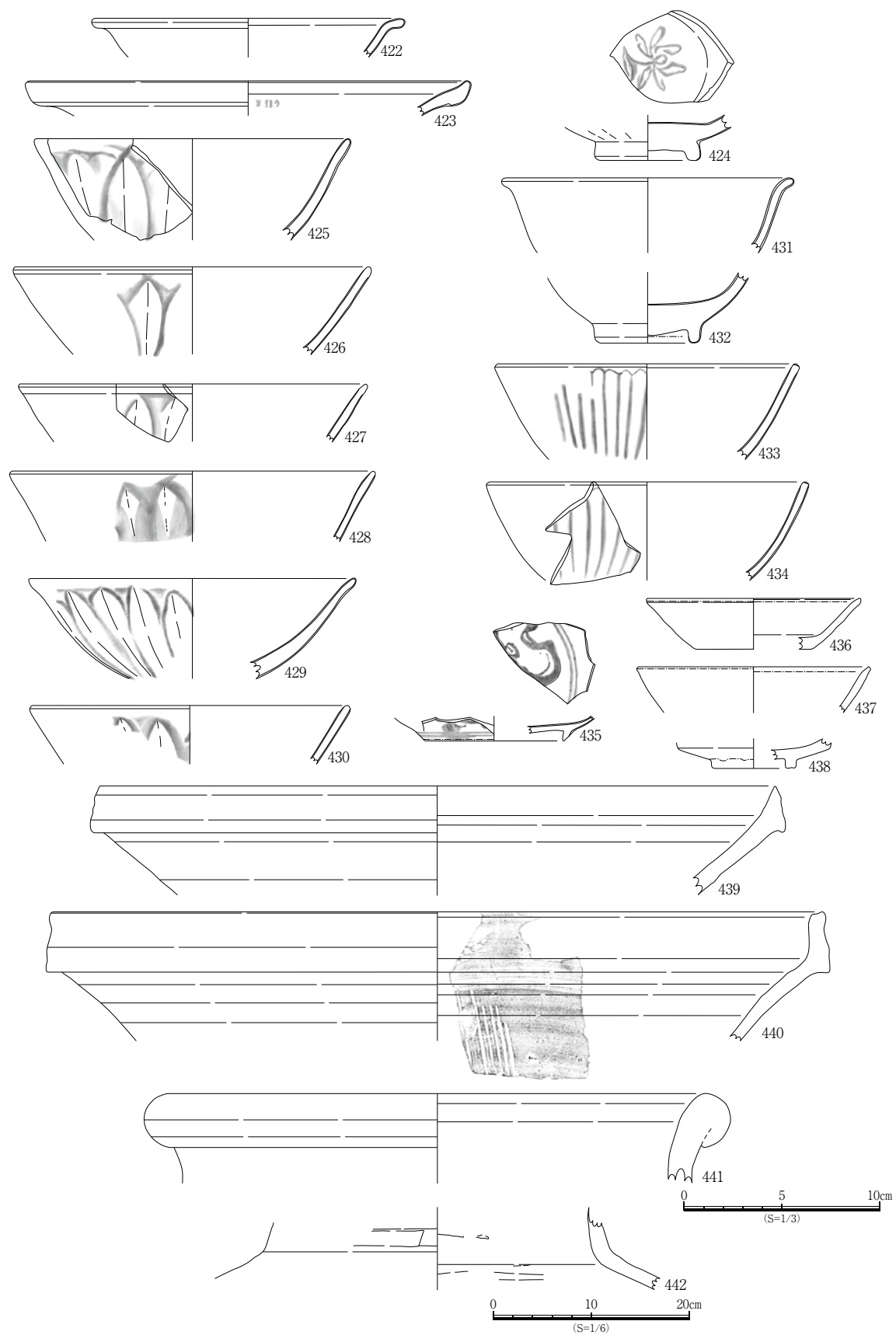


図63 IV層遺物実測図3

3. 検出遺構と出土遺物

のナデ調整で、口唇部はナデにより僅かに凹む。内面は五条一単位の疎らな摺目が施される。441は備前焼の甕で、口縁部は外側に折り曲げ、玉縁状を呈する。内外面とも横方向のナデ調整が施される。442は炆器甕の頸部で、外面に自然釉がかかる。内外面とも横方向のナデ調整が施される。

443～451は土錘である。いずれも管状土錘で、全長2.8～5.7cmで、全幅は概ね1.0～1.8cmであるが、444は比較的大型で2.4cmである。

452～454は金属製品である。452は鉄製品雁股鎌で、全長6.2cm、全幅2.8cm、重量12.6g、茎部は約0.3cm角を測る。453は鉄製品包丁である。454は銅製品の飾金具で、表面と裏面にそれぞれ径の異なる輪状の突起が巡る。455～458は鉄滓で重量は44.0～80.5gである。459は銭貨であるが、銭種不明である。

460～465は石製品である。460はチャート製の平基式石鎌で、表面側縁に加工痕が残る。461・462は基石である。461はチャート製で黒色、462は砂岩製で灰色を呈する。いずれも1.5cm前後を測る扁平な円形である。463は流紋岩製の砥石で、扁平な円形の三面を使用する。464も砥石で、細粒花崗岩製である。扁平石の一側面を使用する。465は細粒花崗岩製の投弾で、重量は335.5gである。

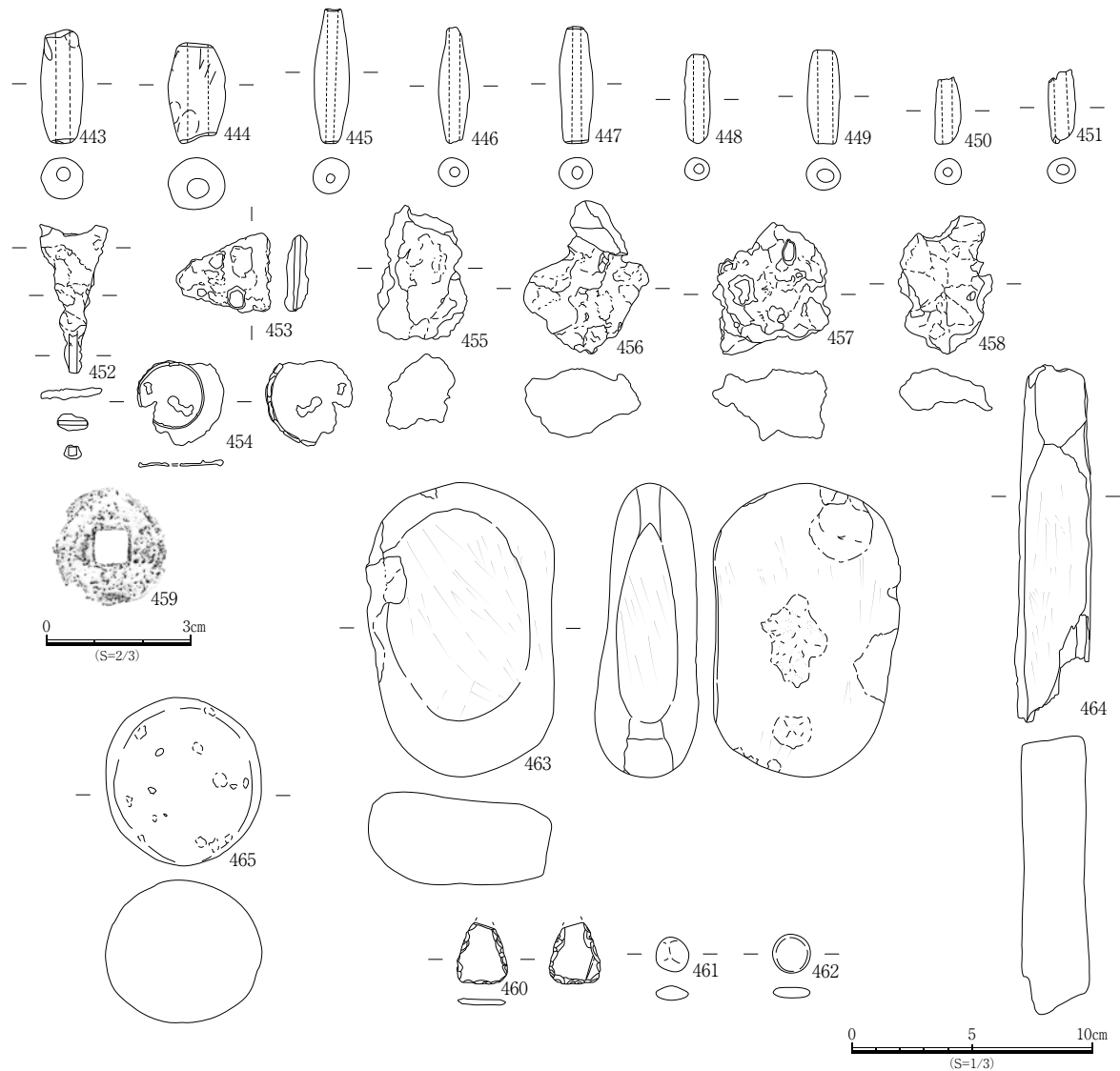


図64 IV層遺物実測図4

第IV章 科学分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

本報告では、奥名遺跡より出土した木製品に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行う。木製品の材料となる木材はセルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

2. 試料と方法

試料は、奥名遺跡より出土した漆器椀、板状木製品、曲物、曲物底板、把手の木製品7点である。試料の詳細は、結果とともに表1に記す。

樹種同定の方法は、次のとおりである。試料からカミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表1 奥名遺跡における樹種同定結果

No	器種	結果(学名/和名)
1	漆器椀	Fagus ブナ属
2	板状木製品	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
3	曲物底板	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
4	曲物底板	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
5	把手	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
6	曲物(側板)	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ
6	曲物(底板)	Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ

(1) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 写真2・3・4・5・6・7

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40 m、径1.5 mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽性、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

(2) ブナ属 *Fagus* ブナ科 写真1

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

3. 結果

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密で韌性があるが、保存性は低い。容器などに用いられる。

4. 考察

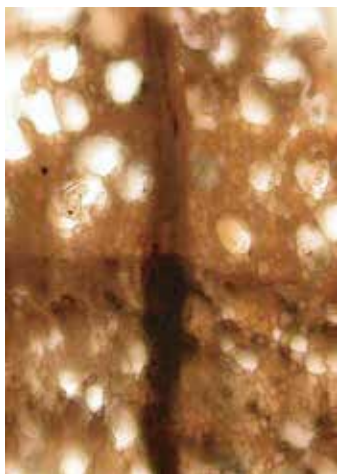
同定の結果、奥名遺跡の木製品は、ヒノキ5点、ブナ属1点であった。ヒノキは板状木製品、曲物底板、曲物側板、把手に使用されている。木材は木理通直で肌目緻密、大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。ブナ属は漆器椀に使用されており、木材は強さ中庸、切削、加工も中庸であり、弾性と従曲性に富む。

ヒノキは温帯を中心に分布する常緑針葉高木であり、特に温帯の中部に多い要素でありやや乾燥した土壌にも耐え、尾根、急峻地または岩盤上にもよく生育する。ブナ属にはブナとイヌブナがあり、温帯上部の冷温帯から温帯中間域の落葉広葉樹林帯に分布する落葉高木で、冷温帯落葉広葉樹林の代表的なブナ林を形成する。流通によってもたらされたとみなされよう。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.20 - 48.
- 佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.49 - 100.
- 島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p.296.
- 山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第1号, 植生史研究会, p.242.

奥名遺跡木製品



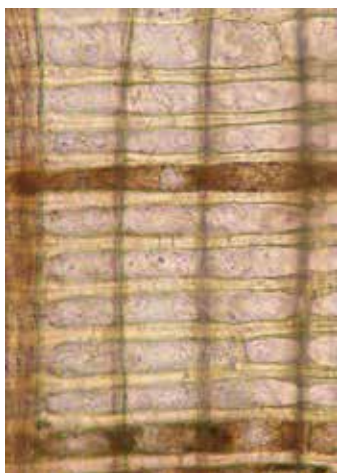
横断面 ————— : 0.2mm
1.No1 漆器椀 プナ属



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.05mm
2.No2 板状木製品 ヒノキ



放射断面 ————— : 0.05mm
3.No3 曲物底板 ヒノキ



接線断面 ————— : 0.05mm
4.No4 曲物底板 ヒノキ



横断面 ————— : 0.05mm
5.No5 把手 ヒノキ



放射断面 ————— : 0.05mm
6.No6 曲物(側板) ヒノキ



接線断面 ————— : 0.05mm
7.No6 曲物(底板) ヒノキ

図65 奥名遺跡木製品

第V章 考察

1. 遺構—中世の遺構について—

今回の奥名遺跡の発掘調査では、主に中世の掘立柱建物跡、土坑、溝、井戸跡など屋敷を構成する遺構が検出された。調査区南部と中央部との境に0.50～1.20m前後の段差があり、これは中世の段階に造られた成形面であると思われる。この成形面は方形状に東側にも成形されており、一段高い南部では、掘立柱建物跡のピットや土坑(一部が近世の土坑)が集中する。掘立柱建物跡はSB7～9の3棟が切合い段部北寄りに集中する。SB7は桁行2×梁行2間の正方形に近いプランであり、ピットから出土した土師質土器から13世紀後半から14世紀の建物跡として位置づけられる。SB8は桁行3×梁行2間で床面積が24.54㎡と大きく中心的な建物と考えられる。ピットから出土した東播系須恵器捏鉢や土師質土器などの遺物から13世紀後半から14世紀の建物跡として位置づけられる。南側柱のP5からは「開元通寶」の銭貨(18)が出土しており、地鎮を行った可能性がある。同じくSB9の北側柱中央のP6から「開元通寶」の銭貨(22)、南側柱隅のP4から鉄製刀子(21)が出土しており、これも地鎮を行ったものと思われる。さらに、ピットから出土した土師質土器の皿(19)、杯(20)の形態からSB7・8と同様に13世紀後半から14世紀の建物跡と位置づけられる。SB10はこれらの建物群の東側で検出された掘立柱建物跡である。段部の東側の境界を跨いでおり、SB7～9の建物群とは時期差があると考えられる。ピットからは土師質土器の細片が出土しているが時期の詳細は不明である。これらの建物と同じ時期の遺構としてはSK7・15がある。SK7は段部の北辺に位置し、楕円形を呈した土坑で、検出面で土坑の一端に集石が見られた。埋土から瓦質土器羽釜(119)が出土し、法量、形態から13世紀後半から14世紀前半のものと考えられる。SK15からは土師質土器杯が出土しており、外底に段を持つ底部の形態からSK7と同様に13世紀後半から14世紀前半が考えられる。

調査区中央部の一段下がった段部ではSB4～6の3棟を検出した。これらの建物の時期の詳細は不明であるが、ピットの埋土は段部で検出したSB7～9と同じ黒褐色シルトであり、建物の棟方向から同時期のものと思えることができる。建物の切合いも無く、遺構密度も南部と比べると疎らであり、居住空間とは異なる場ではないかと推察される。特に、西部はピットと土坑が集中しており、その内容をみると、P175では「元豊通寶」1点(39)と「開元通寶」等9点(40)の銭貨が重なって納められていた。また、SK28では鉄製刀子(126)、SK31では土師質土器杯(129)と銭貨が出土しており、これらの土坑は土坑墓の可能性もある。これらのピット、土坑が集中している場所は墓地として捉える事ができる。

中央部の北限には南西から北東方向に延びる溝SD2～8が数条あるが、この内SD7については、埋土から青磁の蓮弁文碗(156)、瓦質土器鍋(157)が出土しており、この溝より南部で検出された遺構と同時期であること、建物の方向性等から屋敷地を画する溝の可能性が高い。SD2～6については当初石垣があったラインに平行することから、近世の溝として位置づけられる。埋土中の遺物、石垣の裏込めから出土した遺物の内容から、18世紀後半から19世紀の溝であるとみられる。これらの溝の主軸方向から中世の屋敷区画と、近世の土地区画のラインの相違が把握できた。

また、SD2・4の西端では、これらの溝に切られた中世の石組井戸を検出した。石組みの北半分は上部が崩れていたが、井戸の内部から漆器椀や曲物などの木製品が出土した。相伴する土器から12世紀末から13世紀後半のものと考えられ、この時期の石組井戸としては県内では古い事例である。

漆器椀については船戸遺跡(四万十市)のSR1から出土した漆器椀について2例目である。

上述した溝を境に調査区北部では、西寄りではピットや土坑が集中して検出されている。この調査区北部は丘陵裾にあたり、地形は東に向かって下がっており、検出された遺構群は丘陵裾の標高が高い地点に集中する。ここでは南部で見られなかった埋土の遺構があり、上部の包含層からも9世紀後半から11世紀にかけての遺物が出土した。平安時代に遡る遺構と遺物がこの地点でまとまって検出された。これら北部で検出したピットや土坑は古代を中心とするが、SB1～3については柱穴の埋土中から15世紀後半から16世紀の遺物が出土しており、南部の建物群よりも一段階新しい時期の建物群である。中でもSB1は桁行4×梁行3間で、床面積は40.05㎡と比較的大規模で、中心的な建物になるとみられる。また、SB3も桁行4×梁行1間、床面積が31.24㎡の側柱建物であり、同じ性格をもつものと思われる。また、SB2は桁行2×梁行1間の正方形の建物であり、SB1・3とは様相が異なる。古代の遺構については、明確な建物を復元する事はできなかったが、この地点の包含層及びピット・土坑から出土した遺物の組成から、9世紀後半から11世紀にかけて恒常的な活動の場があったことは否めない。

以上、中世を中心に今回の調査で検出した遺構を概観してきた。平安期では調査区北部西寄りの比較的高い場所に活動の場があり、鎌倉期から南北朝期にかけては調査区中央部の井戸や区画する溝から南部にかけて造成、または溝で区画し屋敷地として定住が進んだものと思われる。また、15世紀代の室町時代には、再び調査区北部の高まりのある場所に屋敷地が広がる。その後、近世になり、調査区南部から中央部にかけて盛土をし、石垣を用いて造成を行った事が明らかとなった。

調査対象地の南谷奥には、伝承で城館(音竹城跡)の井戸(宝泉と呼ばれる)があったとされている場所があり、こうした水利施設を管理する目的で設けられた屋敷跡ではないかと推察できる。また、中世では「ヲクノ庵」という寺社に關係するホノギが『長宗我部地検帳』に見られる事から寺に關連する施設があった可能性も考えられる。さらに、江戸時代から現代(大正から昭和初期)に至るまで屋敷地として使用され、幕末から明治期に屋敷の一部が耕作地に変わる過程など、近世の土地利用の変遷を知る事ができた。

2. 遺物

今回の出土遺物の時期をみると古代(9c末～11c)、中世(13c後半～15c)、近世(17c～19c中葉)、近現代(19c～20c)に分かれる。

古代の遺物は土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器などが調査区北西部でまとまって出土した。土師器は杯・皿・甕である。中世の遺物は調査区南部から中央部にかけてIV層からまとまっており、土師質土器、瓦質土器、東播系須恵器、備前焼、青磁、白磁、青花など鎌倉時代から室町時代にかけての土器が出土している。近世は、唐津産の皿など17世紀後半に位置付けられるものと、能茶山窯の製品など19世紀に地元で生産された陶磁器類を中心とする他、肥前系の陶磁器などの流通品もみられる。遺物の組成は、碗や皿といった供膳具、焙烙や火鉢といった雑器など生活用具が多種にわたる。また、円鏡で浜松双鶴紋に桐紋が描かれた江戸時代の「蓬萊紋鏡」も出土し、江戸時代を通じて生活を営んでいた場所である事が窺える。以下に時代ごとに遺物を概観する。

(1) 古代

土師器は破片数で592点出土し、判別できる破片の内訳は杯・皿の供膳具326点、甕など煮炊具161点である。この内、煮炊具については在地品40点、搬入品99点であった。須恵器は杯1点、椀1点、甕11点、壺1点と少ない。黒色土器は破片数で内黒のA類椀5点・内外黒のB類椀3点の8点が出土した。緑釉陶器は椀の底部と細片が2点のみである。これらの遺物の組成から9世紀後半から10世紀の時期が中心であり、土師器煮炊具(131・132)、黒色土器B類など僅かに11世紀の遺物もみられる。

(2) 中世

中世の遺物は13世紀から14世紀にピークがあり、15世紀前半代までの時期のものもみられる。建物跡や溝を検出した調査区中央部から南部にかけての包含層(IV層)から出土した。土師質土器の供膳具は杯・皿がある。出土した土師質土器のほとんどが供膳具であり、破片数で3,000点余を数える。13世紀代の杯・皿については口縁部が直線的に立ち上がるもの(406・409)と、内湾するもの(407・410)があり、外底部に糸切り痕の上に簀子状の圧痕を残すものが多い。14～15世紀前半代の杯の形態的な特徴としては、体部中位から口縁部にかけて内湾するもの(70)と、直線的に立ち上がり、口径と底径の差が小さいもの(67)がある。煮炊具では河内型の羽釜3点と、播磨型の羽釜8点がみられる。いずれも15世紀代のものである。須恵器は調理具である東播系須恵器捏鉢がみ

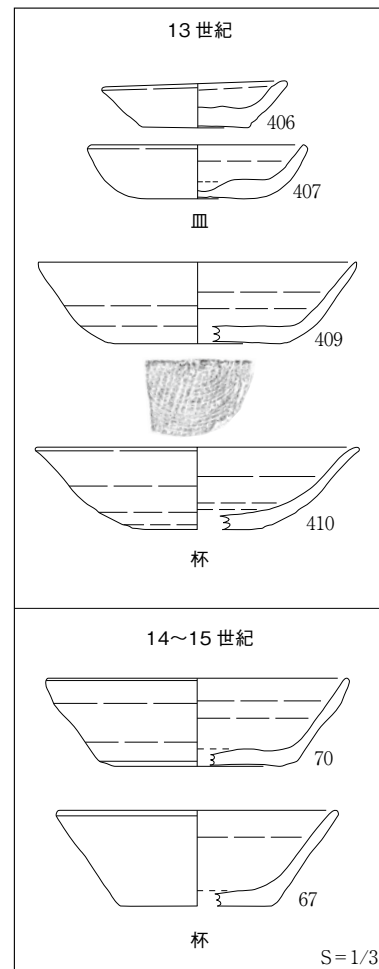


図66 土師質土器皿・杯形態分類図

られ、12世紀後半から13世紀にかけての形態のものが主体を占める。瓦質土器は、鉢・播鉢・鍋・羽釜がある。羽釜は13世紀後半から14世紀の退化した鍔が外面口縁部下に付くタイプで、脚付きのものもみられる。15世紀代は鍔及び口縁部にナデによる段を残す河内型がある。鍋はいわゆる「土佐型」と呼ばれる鍋の一群であり、播鉢とセットになる在地型の鍋である⁽¹⁾。14世紀から15世紀前半代にかけて法量を変化させながら続く。炆器類については、備前焼・常滑焼があり、播鉢・甕が中心に出土している。播鉢は備前焼の編年でIV期古の段階のものがみられる。常滑焼は表採資料ではあるが、常滑焼編年5型式の甕の口縁部がみられ13世後半から14世紀に位置づけられる。また、陶器では古瀬戸の瓶子がみられる。貿易陶磁器では青磁・白磁・青花が出土している。青磁は龍泉窯の劃花文が施された碗が僅かであるが出土した。鎚蓮弁文碗が中心であり、無文、細蓮弁文碗と続く。また、盤や杯といった器形もみられる。白磁は口禿皿が中心であり、D類の腰折れタイプの皿が1点出土している。青花では、玉取獅子文と牡丹唐草文のB群の皿が2点、C群の皿が1点みられる。これらの貿易陶磁器類の組成は13世紀から14世紀がピークであり、青花の割合は少ない。15世紀代を示す陶磁器は僅かである。

中世の遺物量は全体の70%を占め、今回の調査区での中心的な時期といえる。

(3) 近世・近代

近世の遺物は調査区の中央部から南部にかけて多く出土した。包含層(Ⅱ層)や、石垣裏込め、ハンダ土坑からの出土遺物が中心である。唐津産陶器、肥前系磁器については17世紀後半以降のものが多く、能茶山窯の製品では19世紀のものが中心であり、この時期のものがピークを占める。特筆すべき出土遺物は「享保□年…」の墨書が書かれた関西系焙烙(327)である。包含層Ⅱ層から土師質土器小皿を伴って出土した。327は内外面に墨書が認められる。体部外面には「信心施主為息□延命五□□富貴自在子孫繁栄祈所」とあり、外底部には周縁の四箇所に「北」「南」と「西」の文字の一部が認められることから、方角を示す「東西南北」の文字が配されているものと思われる。また中央部にも文字の一部が認められるが、欠損により判読はできない。一方、内底部にも「享保□(カ)□□年」「地為」と文字が書かれ、外底部の文字と対に中央部と周縁に梵字が配されている。梵字は金剛界五仏と思われ、内面中央に大日如来の梵字と考えられる「バーンク」、そして底部の文字「北」の墨書の裏内面对称に不空成就如来の梵字「アク」、同様に底部文字「南」の墨書の裏には宝生如来の梵字「タラク」を墨書している。おそらく欠損している部分には東、西の墨書が有り、梵字も書かれていたと考えられる。子孫繁栄や延命、富貴などの吉祥句から子孫繁栄、長寿延命、富貴長寿を祈願した祭祀と考えられる。また、土師質土器小皿については伏せた焙烙の下に重ねた状態で出土していることから、陰陽道に關係する地鎮祭祀と考えてよからう。高知県内では、江戸期の地域における宗教の実態を極めて端的に示した初例資料として位置づけられる。また、天神溝田遺跡にみられるような中世の錢貨埋納遺構も陰陽道に關係するものと推定され、この地域にこれらに關わる宗教者と施設が存在していたことが想定される。この焙烙が出土した北側には廃棄土坑があり、18世紀後半から19世紀の碗や大皿、仏飯具、灯明具などを中心とする遺物が出土した。型紙摺りや銅板転写のものもみられる。また、細流花崗岩を彫った五輪塔(火・水・地輪)が出土している。瓦は刻印の入った棧瓦で、「イノ中島製」と刻印されたものがみられ、地元で焼かれたものと思われる。ハンダ土坑から出土した遺物は19世紀代のものが中心であり、明治時代には土地の一部を耕作地として使用していた事が窺える。また、第二次世界大戦時に生産された統制陶器、子供茶碗など20世紀代のものも廃棄されていた。

(4) 出土遺物からみた土地利用の変遷

これらの出土遺物からみた今回の調査地点の土地利用の変遷を整理する。

まず、平安時代後期には調査区北部の西側丘陵裾部に活動の痕跡がみられる。9世紀から10世紀がピークであり土師器・黒色土器が中心に出土している。同時期の遺跡には西側に立地する天神溝田遺跡が挙げられる。宇治川に沿った南の丘陵裾部にはこの時代にこれら古代の集落が広がっていたものと思われる。さらに、奥名遺跡の東側丘陵上に広がるバーガ森北斜面遺跡、岩神地点の調査でも同時期の遺構と遺物がみつかっており、丘陵部を含めた山野開発がこの頃本格化し始めたのではないかと推察される。天神溝田遺跡では掘立柱建物跡が検出されているが、官郡衙的な方形堀方を持つものではなく、規模も小さいことから一般的な集落遺跡として位置づけられている。その一方で、鍛冶関連遺構や銚帯金具など官的役人層が持つ遺物もみられることから、官衙に關連する工房的な施設があった可能性も考えられている。岩神地点では緑釉陶器や祭祀具がみつかっており、信仰の場としての空間があったものと思われる。奥名遺跡については、これら周辺の遺跡と關連して9世紀から10世紀にかけて開発された集落の一部として位置づけられる。

次の画期は13世紀から始まる。出土遺物の中には12世紀末に遡るものもあり、萌芽はこの頃に求めることができる。これは先述した天神溝田遺跡も同様で、特に奥名遺跡と丘陵を挟み隣接する調査区でも同じような変遷がみられる。天神溝田遺跡では和泉型瓦器椀など12世紀後半から13世紀前半の土器が出土しており、律令期以降、この時期に画期がみられる。奥名遺跡では調査区北部から南部への開発が進み、丘陵裾を段部に成形し、屋敷地に転化する。さらに13世紀代には調査区南部の丘陵裾に開けた谷を段状に成形し、平場を設け居住する。出土遺物では土師質土器の供膳具を中心に貿易陶磁器も一定量が出土している。青磁は鎬蓮弁文碗B1群、白磁は口禿を中心としたⅩ類が多くを占め、東播系須恵器掬鉢もⅢ期のものが多く出土していることから、13世紀代にピークがあると思われる。また、青磁では蓮弁文碗B2・B4群、無文碗などD群が出土している。他に土佐型鍋や河内型、播磨型の鍋など14世紀から15世紀にかけての煮炊具、備前焼Ⅳ期の掬鉢など恒常的に使用する雑器類もみられることから継続的に居住区として機能していたものと思われる。後者の時期の遺構・遺物は、調査区北西部でも検出されていることから、15世紀代には中央部のSD1・2の北部にも屋敷地が広がるものと考えられる。概ね掘立柱建物の棟方向は中世を通して踏襲されている。南部と北部では建物跡のプランが切り合って検出されており、居住区として継続的に使われたことを示す。他方、中央部は建物跡のプランに切り合いは認められず、SB4など床面積の大きな建物が一定の空間を持って建つ。また、中央部の西山裾には土坑墓も検出されていることから、居住区とは異なる性格の場であったものと思われる。

次の画期は17世紀後半から18世紀の近世に入ってからである。16世紀代の遺物は僅少であり、この時期の様相は希薄である。近世の主な遺構としては土坑が挙げられ、ハンダ土坑など農地に関連する遺構が中心である。ハンダ土坑は2基が一对であり、調査区の中央部から南部にかけて分布する。埋土から、肥前系磁器や地元の能茶山窯産の磁器碗・皿など、また包含層のⅡ層、石垣裏込めからも18世紀後半から19世紀にかけての遺物が出土している。建物は検出されなかったが、雑器類が出土していることから周辺に集落があったことが窺える。中央部の石垣から南部にかけて耕作地として利用されていたものと思われる。

3. 地検帳からみた奥名遺跡周辺の景観

『長宗我部地検帳』によると、当地域は天正16年(1588)と、慶長2年(1597)の「大野郷伊野村地検帳」に記載がみられる⁽²⁾。今回調査した地点は、地検帳では「ヲクノ庵」というホノギに該当し、現在の小字の「奥名」がその名残である。周辺にも「岩神」「岩神谷口」「菖蒲谷」「三世庵」などの小字が残っており、地検帳に記載されているホノギとの照合が可能な場所といえる。ここでは地検帳をもとに当時の景観を復元してみる。

今回の調査地点の西部に位置する天神地区では、「天神ヤシキ」→「同所東」→「天神山」→「天神ノ東上」と音竹城跡が立地する天神山周辺を始点として、山裾を東にむかって検地が行われている。「天神山」には天神宮床、「天神ノ下東道共」には弓場床の記載がみられる。天神溝田遺跡で発掘調査を行った地点には「城山」「山本」の小字が残っており、奥名遺跡と丘陵を挟み隣接する調査地点は「山本ヤシキ」のホノギに該当する。「山本ヤシキ道ノ下江縁」の記載もみられ「山本ヤシキ」は宇治川の入江状の際に立地していたことが窺える。さらに「山本ヤシキ」の東には「同所東塔堂」と寺院に関連する「塔堂」が隣接していた記載がある。現在の沖田橋周辺、宇治川を挟んだ対岸には「塔の向」の小字

3. 地検帳からみた奥名遺跡周辺の景観



図67 奥名遺跡周辺の景観復元

があり、当時、寺院に関連する塔があったと想定される。「山本ヤシキ」は山本左衛門尉の所領であり、先述した「天神ヤシキ」及び「同所東塔堂」、さらに東側の丘陵が張り出した「須崎」周辺に給地が与えられている。検地は「里カイチ」「カリヤ」と東に向かって行われているが、「同所西江詰テ」「同所北江縁ツメテ」とここでも入江状の景観を示す記載がみられる。今回の調査地点西側の丘陵部は、現状よりも宇治川に張り出していたものと思われ、丘陵西側の突端から南に少し入った地点が「須崎」に位置するものと思われる。須崎から北に屋敷が2軒続き、「同所西江縁」→「同所北江縁」→「須崎江ニ付テ西南へ廻ル」と検地が進んでいるが「須崎」周辺は「江」の記載が多くみられることから、入江状を呈していたものと思われる。その後「里ノカイチ紺屋ヤシキ」へと丘陵の南の谷に入り、「ラクノ庵」を通過する。「ラクノ庵」は山本左衛門尉の所領であり、「中ヤシキ」「与衛門ゐ」と記載されている。検地はさらに谷に向かって進み、「岩神谷口」「同所東ノ谷のラク山タ」と山畠、山田が続く。「岩神谷口」は今回の調査地点の南部に位置し、現丘陵の岩神洞穴に向けて登る登山口にあたるのではないかと思われる。『南路志』「關国之部」吾川郡伊野村には、「岩神ラクノ庵同(祭礼)九月十七日」付けで「古来より岩穴を祭来る。先年は岩神祭に岩穴へ這入り候由、其以後穴口潰る。…」と古来、岩穴を祭っていた事を伝える記事がある⁽³⁾。現在でも、その岩穴は奥名遺跡の南丘陵谷部に残っており、小さな社が鎮座し、地元住民により「岩神様」として大切に祭られている。祭事に使用したと思われる土人形や皿などの土器が周辺で表採されている。

次に検地は、「同所東ノ谷のラク山タ」に進む。これは東側丘陵のバーガ森北斜面遺跡岩神地点の調査区周辺ではないかと思われる。調査時は耕作放棄地で竹林になっていたが、石垣と段状に成形された地形が残っていた。中世の遺物も確認されていることから、棚田のような景観を呈していたのではないだろうか。この地点から丘陵を北に下がり「同所北ノ下タン〜カケテ」に山畠ヤシキがあり、次に「別府寺」のホノギ、「中屋敷」・「寺中」・「主居」と寺を示す記載がみられる。「別府寺」はいの町内の鹿敷にも寺領があり、同じ地検帳には「八幡トウメイテン…伊野別府分」の記載がみられる。江戸時代には聖雲寺と混同され廃寺となる。「別府山威福院正雲廃寺址 真言宗常通寺末 一本 意福院 又意徳院」の記録が残っている⁽⁴⁾。また、地検帳には杉(相)本神社の神田が別府寺の寺領になっていることが記載されており、杉本神社の祭礼に関係があったものと思われ、地域の中心的な役割を果たした寺院であった事が窺える。「別府寺」から「別府寺下タン〜」までが寺領地の畠で、次に記載されている「テラ(寺)田」は先述した山本左衛門尉の下屋敷となっている。ここから丘陵部を超え「シヤ(ヨ)ウフ(菖蒲)谷」に入る。現在でも菖蒲谷の地名が残っており、比較的広い谷である。この菖蒲谷の東側には、少し丘陵がくびれた部分があり、この地点が「ヒノ谷」でないかと想定する。「ヒノ谷」は「乙武弥平衛」の給地となっている。「乙武弥平衛」の「乙武」は慶長2年(1597)の検地に記載されている名称であり、天正16年(1588)の地検帳には「吉良弥平衛」として記載されている。以前に吉良氏として主家の姓を名乗っていたものが乙武(音竹)という村名もしくは有力名主姓を名乗るようになったものと思われる。「乙武弥平衛」の給地は「里カイチ」にもみられる。

さらに検地は「ヒノ谷」から「同所上新在家」→「同所東道ノ下」→「同所東道ノ上三タンカケテ」と丘陵の上から東、「三世庵藪ノ内西ノハシ」へと進む。「三世庵」は現在でも地名が残っており、「下屋敷」「寺中」「クロイワ 三世庵居」の記載があり、「ラクノ庵」と同様に寺に関連するホノギである。先述した山本左衛門尉の給地となっている。検地はさらに東に進み、「クロ岩谷」に入る。クロ岩谷には「マト場」のホノギもあり、給地は同じく山本左衛門尉の名が記載されている。「クロ(黒)岩谷」は三世庵

3. 地検帳からみた奥名遺跡周辺の景観

の東側の奥深い谷部が想定される。

以上、奥名遺跡周辺の様相について地検帳をもとに概観した。「別府寺」を中心とする「ヲクノ庵」「三世庵」「塔堂」などの記載からは、天正から慶長期にかけて寺院があったことがより鮮明になった。調査区周辺には、中世から近世にかけての五輪塔が点在していることから、これらの寺院との関連が考えられる。また、「岩神」は古来より信仰の対象となっていた場所であったことも明らかとなった。今回の本調査や試掘調査で確認されたシルト層や、砂礫層の堆積など旧宇治川の影響を受けやすい環境であったことが「江」や「須崎」というホノギからも窺うことができた。現在の小字と地検帳に記載されているホノギと照らし合わせたことで、当時の地形環境を読み解くことができたのではないかと考える。

結語

本書をもって、高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査及び報告書作成に係る整理業務を終えるにあたり、発掘調査にご協力を頂いた地元の方々、工事関係者、並びに、いの町教育委員会に対しまして記して感謝いたします。

また、発掘調査現場でご尽力を頂いた発掘作業員の方々、本書を含め『城ヶ谷山遺跡・鎌田遺跡・貢山城跡』『天神溝田遺跡Ⅱ』『バーガ森北斜面遺跡』『西浦遺跡』の報告書作成に多大なご尽力を頂いた整理作業員の方々に心より厚く御礼申し上げます。

註・参考文献

(1)四国の土製甕・羽釜・鍋－古代末から中世の土製煮炊具の様相－ 吉成承三 2007

(2)『長宗我部地検帳－吾川郡下－』高知県立図書館 1963

・「天正十六年 弘岡分伊野村地検帳(前地検帳)」伊野村此帳慶長式年検地仕置□用ニ付此帳向後不用也 元禄十丑七月四日 野町万右衛門 森沢九蔵 高田孫三郎

・「慶長式年 土佐国吾川郡大野郷伊野村地検帳 卯月十九日」土佐国吾川郡大野郷伊野村地検帳事 合慶長式酉丁年三月六日

※ホノギ復元にあたっては「慶長式年 土佐国吾川郡大野郷伊野村地検帳」を参考にした。

(3)『土佐国史料集成 南路志』第3巻 高知県立図書館 1991

(4)『伊野町史』 伊野町史編纂委員会 1973

『日本出土の貿易陶磁器』 国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 国立歴史民俗博物館 1993

遺構計測表

遺構計測表1 SB

遺構名	棟方位	平面規模	総長 (m)	面積 (㎡)	柱間寸法 (m)	柱径 (m)	備考
SB1	N - 85° - E	桁行 4 間	7.63	40.05	1.58 ~ 2.15	0.06 ~ 0.30	中世
		梁行 3 間	5.25		1.41 ~ 2.31		
SB2	N - 2° - E	桁行 2 間	4.06	16.40	4.04 ~ 4.06	0.07 ~ 0.23	中世
		梁行 2 間	4.04		1.94 ~ 2.09		
SB3	N - 86° - W	桁行 4 間	7.81	31.24	1.75 ~ 2.13	0.08 ~ 0.23	中世
		梁行 2 間	4.00		4.00		
SB4	N - 5° - W	桁行 3 間	5.63	24.94 ~	1.85 ~ 1.90	0.15 ~ 0.25	中世
		梁行 2 間	4.43		2.10 ~ 2.33		
SB5	N - 84° - W	桁行 2 間	4.67	12.28	1.80 ~ 2.73	0.13 ~ 0.22	
		梁行 1 間	2.63		2.50 ~ 2.63		
SB6	N - 74° - E	桁行 2 間	3.98 ~	12.81 ~	1.55 ~ 2.03	0.11 ~ 0.15	中世
		梁行 1 間	3.22		-		
SB7	N - 14° - W	桁行 2 間	3.40	11.39	1.55 ~ 3.40	0.10 ~ 0.30	中世
		梁行 2 間	3.35		1.30 ~ 2.05		
SB8	N - 88° - W	桁行 3 間	6.09	24.54	1.62 ~ 2.43	0.10 ~ 0.40	中世
		梁行 2 間	4.03		1.60 ~ 2.40		
SB9	N - 83° - E	桁行 2 間	4.03	9.34	1.98 ~ 2.05	0.15 ~ 0.23	中世
		梁行 1 間	2.32		2.20 ~ 2.32		
SB10	N - 87° - E	桁行 3 間	5.08	19.30	1.33 ~ 1.92	0.10 ~ 0.20	中世
		梁行 2 間	3.80		1.70 ~ 3.73		
SB11	N - 86° - E	2 間	4.65	5.62 ~	1.21 ~	0.15 ~ 0.30	中世
		2 間以上	1.21 ~		1.89 ~ 2.76		

遺構計測表2 SB1ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.79 (P2)	0.42	0.36	0.55	楕円形	土師質土器細片 18
P2	2.06 (P3)	0.33	0.31	0.32	円形	土師器細片 1
P3	1.96 (P4)	(0.44)	0.44	0.21	楕円形	土師質土器細片 7, 陶磁器皿 1, 鉄製品釘 1 (5g)
P4	2.05 (P5)	0.24	0.16	0.37	楕円形	-
P5	1.58 (P6)	0.29	0.28	0.45	円形	土師質土器細片 5
P6	1.87 (P7)	0.34	0.28	0.24	楕円形	-
P7	1.41 (P8)	0.37	0.37	0.23	円形	-
P8	2.31 (P9)	0.87	0.35	0.07	溝状	-
P9	1.97 (P10)	0.36	0.30	0.17	楕円形	-
P10	1.64 (P11)	0.36	0.34	0.23	円形	土師質土器杯片 1, 青磁片 1
P11	2.15 (P12)	0.52	0.37	0.22	楕円形	石錘 1
P12	1.85 (P1)	0.48	(0.32)	0.61	楕円形	土師質土器細片 1, 陶器碗 1
P13	1.44 (P9) 2.11 (P14)	0.23	0.21	0.31	円形	-
P14	1.79 (P15)	0.35	0.26	0.27	楕円形	-
P15	1.81 (P16)	0.43	0.34	0.49	楕円形	土師質土器細片 7
P16	-	(0.28)	0.27	0.22	円形	-

※柱間距離は () のピットまでの距離

遺構計測表3～6

遺構計測表 3 SB2 ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	4.06 (P2)	0.30	0.27	0.45	楕円形	土師質土器細片 1
P2	1.95 (P3)	0.30	0.29	0.37	円形	土師質土器細片 1
P3	2.09 (P4)	0.33	0.33	0.37	円形	土師質土器細片 2, 陶器 (備前焼) 甕 1
P4	4.04 (P5)	0.30	0.28	0.53	円形	土師質土器細片 3, 瓦質土器鍋片 1
P5	2.00 (P6)	0.35	0.28	0.15	楕円形	土師質土器細片 1
P6	1.94 (P1)	0.31	0.29	0.40	楕円形	土師質土器細片 2

遺構計測表 4 SB3 ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	4.00 (P2)	0.36	0.34	0.19	円形	土師質土器細片 2
P2	2.13 (P3)	0.28	0.23	0.35	楕円形	土師質土器細片 1
P3	1.85 (P4)	(0.49)	0.35	0.43	楕円形	-
P4	2.00 (P5)	0.42	0.42	0.60	円形	陶器 (陶胎染付) 1
P5	1.83 (P6)	0.37	0.37	0.29	円形	-
P6	4.00 (P7)	0.36	0.32	0.19	楕円形	土師質土器細片 1
P7	2.05 (P8)	0.31	0.27	0.41	楕円形	土師質土器細片 3
P8	1.87 (P9)	0.23	0.22	0.28	円形	-
P9	1.75 (P10)	0.40	0.36	0.51	楕円形	土師質土器細片 1, 陶器皿 1
P10	2.13 (P1)	0.48	0.37	0.51	楕円形	土師質土器細片 5

遺構計測表 5 SB4 ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.85 (P2)	0.26	0.26	0.41	円形	-
P2	2.10 (P3)	0.28	0.31	0.59	円形	-
P3	2.33 (P4)	0.33	0.31	0.21	円形	-
P4	1.90 (P5)	0.33	0.39	0.25	楕円形	-
P5	1.88 (P6)	0.35	0.35	0.26	円形	土師質土器細片 5
P6	1.85 (P7)	0.31	0.32	0.38	円形	-
P7	-	0.36	0.35	0.20	円形	-

遺構計測表 6 SB5 ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	2.50 (P2)	0.31	0.23	0.11	楕円形	-
P2	2.05 (P3)	0.33	0.32	0.19	円形	-
P3	2.62 (P4)	0.29	0.25	0.09	楕円形	-

※柱間距離は () のピットまでの距離

P4	2.63 (P5)	0.22	0.22	0.17	円形	-
P5	1.80 (P6)	0.31	0.24	0.31	楕円形	-
P6	2.73 (P1)	0.26	0.23	0.16	楕円形	-

遺構計測表7 SB6 ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.55 (P2)	(0.30)	0.30	0.38	楕円形	土師質土器細片 1
P2	-	0.38	0.34	0.24	楕円形	土師質土器細片 3
P3	2.03 (P4)	0.45	0.40	0.21	楕円形	-
P4	1.95 (P5)	0.32	0.37	0.18	楕円形	-
P5	-	0.36	0.25	0.46	楕円形	土師質土器細片 1

遺構計測表8 SB7 ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	3.40 (P2)	0.26	0.25	0.43	円形	-
P2	2.05 (P3)	0.25	0.30	0.22	楕円形	-
P3	1.30 (P4)	(0.20)	(0.20)	0.19	-	土師質土器細片 1
P4	1.60 (P5)	0.44	0.40	0.57	楕円形	土師質土器杯 1, 土師質土器細片 4, 白磁皿 1, 陶器 (備前焼) 壺片 1
P5	1.73 (P6)	0.42	0.38	0.35	楕円形	土師質土器杯 2, 土師質土器細片 7
P6	1.50 (P7)	0.32	0.30	0.50	楕円形	-
P7	1.83 (P1)	(0.50)	0.48	0.64	楕円形	土師質土器杯 1, 土師質土器細片 24
P8	1.55 (P7) 1.70 (P3)	0.36	0.35	0.62	円形	土師質土器杯 2, 土師質土器細片 5

遺構計測表9 SB8 ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.70 (P2)	0.45	0.35	0.21	楕円形	-
P2	2.33 (P3)	0.25	0.20	0.19	楕円形	-
P3	1.76 (P4)	0.59	0.54	0.69	楕円形	-
P4	1.62 (P5)	0.42	0.40	0.08	円形	土師器甕片 1, 土師器細片 1, 陶器 (瀬戸天目) 碗片 1
P5	2.40 (P6)	0.56	0.32 ~ 0.46	0.51	不整形	土師質土器細片 10, 陶器 (備前焼) 甕片 1, 炆器甕片 1, 銭貨 1
P6	2.40 (P7)	0.43	0.35	0.51	楕円形	東播系須恵器控鉢 1, 土師質土器小皿 2, 土師質土器細片 8, 鉄製品小札 1
P7	1.60 (P8)	0.33	0.26	0.25	楕円形	-
P8	2.40 (P9)	0.41	0.36	0.27	楕円形	-
P9	1.65 (P10)	0.22	0.21	0.21	円形	土師質土器細片 7
P10	1.85 (P1)	0.29	0.25	0.13	楕円形	土師質土器細片 1
P11	1.83 (P2) 1.83 (P12)	0.24	0.20	0.17	楕円形	土師質土器細片 3
P12	2.43 (P7)	0.49	0.46	0.30	円形	土師質土器杯 1, 土師質土器細片 4

※柱間距離は () のピットまでの距離

遺構計測表 10 SB9 ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	2.32 (P2)	0.28	(0.23)	0.22	楕円形	-
P2	1.98 (P3)	0.22	0.18	0.14	楕円形	-
P3	2.05 (P4)	0.27	0.25	(0.23)	楕円形	土師質土器杯片 1, 土師質土器細片 2
P4	2.20 (P5)	0.49	0.42	0.57	楕円形	土師質土器皿片 1, 土師質土器細片 32, 鉄製品刀子 1
P5	2.03 (P6)	0.34	0.32	0.19	円形	土師質土器細片 3
P6	1.98 (P1)	0.33	0.29	0.38	楕円形	土師質土器小皿 1, 土師質土器火鉢片 1, 銭貨 1

遺構計測表 11 SB10 ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.95 (P2)	0.27	0.22	0.16	楕円形	-
P2	1.70 (P3)	(0.42)	0.36	0.34	楕円形	-
P3	1.48 (P4)	0.40	0.30	0.42	楕円形	-
P4	1.92 (P5)	0.52	0.46	0.49	楕円形	土師質土器細片 2
P5	1.65 (P6)	0.32	0.30	0.37	円形	土師質土器細片 1
P6	3.73 (P7)	0.32	0.29	0.39	楕円形	-
P7	1.83 (P8)	0.28	0.25	0.34	円形	-
P8	1.92 (P9)	0.27	0.20	0.33	楕円形	土師質土器細片 2
P9	1.33 (P1)	0.34	0.27	0.35	楕円形	-
P10	1.85 (P8) 1.95 (P5)	0.32	0.25	0.51	楕円形	土師質土器細片 5

遺構計測表 12 SB11 ピット

遺構番号	柱間距離	規模 (m)			平面形	出土遺物
		長径	短径	深さ		
P1	1.21 (P2)	0.41	0.35	0.37	楕円形	土師質土器細片 2
P2	2.76 (P3)	0.50	0.40	0.25	楕円形	土師質土器細片 1
P3	1.89 (P4)	0.42	0.34	0.42	楕円形	土師質土器杯片 1, 土師質土器細片 5
P4	-	0.33	0.31	0.42	円形	土師質土器細片 2

※柱間距離は () のピットまでの距離

遺構計測表 13 SK

遺構番号	主軸方向	規模 (m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK1	N - 2° - E	1.31	1.08	0.14 ~ 0.16	楕円形	鉄製品釘 1	近世
SK2	N - 85° - W	1.37	1.07	0.21	方形	陶器甕 1	近世
SK3	N - 13° - W	1.52	1.42	0.30 ~ 0.51	隅丸方形	弥生土器細片 2, 須恵器片 1, 土師質土器細片 1, 陶器灯明皿 1, 磁器皿 2, 近世磁器片 6, 近世陶器片 4	近世
SK4	N - 37° - W	(1.75)	1.46	0.14 ~ 0.30	楕円形	土師質土器細片 12, 粘土塊 18g	中世
SK5	N - 55° - E	1.26	1.23	0.36 ~ 0.40	円形	土師質土器細片 2, 近世陶器鉢 1	近世
SK6	N - 7° - W	(1.13)	1.18	0.13 ~ 0.36	円形	土師質土器細片 8	中世
SK7	N - 59° - E	0.94	0.63	0.08	楕円形	須恵器甕 1, 土師質土器細片 1, 瓦質土器羽釜 1	中世
SK8	N - 56° - W	1.07	0.91	0.10 ~ 0.15	楕円形	土師質土器細片 3	中世
SK9	N - 61° - E	1.73	0.77	0.24 ~ 0.27	隅丸方形	瓦質土器羽釜 1	中世
SK10	-	(0.68)	0.74	0.26	隅丸方形	土師質土器細片 21	中世
SK11	N - 14° - E	0.92	0.60	0.10	楕円形	土師質土器細片 11, 瓦質土器羽釜 1	中世
SK12	N - 58° - E	1.11	0.91	0.56 ~ 0.67	隅丸方形	土師質土器細片 4, 白磁 1, 鉄製品釘 2	中世
SK13	N - 35° - E	1.00	0.47	0.18	楕円形	土師質土器細片 4, 近世陶器皿 1	近世
SK14	N - 58° - W	1.58	1.50	0.26	円形	土師質土器細片 15, 近世磁器片 2	近世
SK15	N - 26° - E	0.97	0.75	0.32	楕円形	土師質土器杯 2, 土師質土器細片 13, 瓦質土器鉢 1	中世
SK16	N - 8° - E	1.67	1.28	0.09 ~ 0.14	不整形	土師質土器細片 2, 瓦質土器鍋 1	中世
SK17	N - 74° - W	1.60	1.07	0.08 ~ 0.14	不整形	土師質土器細片 1	中世
SK18	N - 7° - E	1.28	0.71	0.47	楕円形	土師器甕片 1, 土師質土器細片 4, 近世陶器甕片 1, 近世陶器細片 1	近世
SK19	N - 58° - W	1.11	0.82	0.03 ~ 0.15	隅丸方形	-	
SK20	N - 20° - W	0.83	0.71	0.19	楕円形	-	
SK21	N - 68° - W	0.95	0.85	0.40	隅丸方形	土師質土器細片 2	中世
SK22	N - 64° - E	1.17	0.92	0.08 ~ 1.11	楕円形	土師質土器細片 6	中世
SK23	N - 83° - E	1.14	1.03	0.21 ~ 0.24	隅丸方形	土師質土器細片 10	中世
SK24	N - 7° - E	2.30	0.65 ~ 0.73	0.36	楕円形	土師質土器細片 25, 瓦質土器細片 2	中世
SK25	N - 82° - E	1.20	0.88	0.10 ~ 0.17	楕円形	土師質土器細片 8	中世
SK26	N - 17° - E	(1.05)	1.13	0.56	隅丸方形	-	
SK27	N - 17° - E	1.38	0.97	0.11	楕円形	-	
SK28	N - 21° - E	1.54	1.19	0.07	隅丸方形	鉄製品刀子 1	中世
SK29	N - 9° - W	0.82	0.70	0.30	楕円形	土師質土器杯 1, 土師質土器細片 4	中世
SK30	N - 84° - E	0.73	0.62	0.26	楕円形	土師質土器細片 10, 青磁碗 1, 鉄製品釘 1	中世
SK31	N - 24° - E	1.23	1.09	0.08	楕円形	土師質土器杯 1, 土師質土器細片 1, 銭貨 1	中世

遺構計測表 14

遺構計測表 14 SK

遺構番号	主軸方向	規模 (m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK32	N - 2° - E	0.77	0.70	0.51	長方形	土師質土器細片 4	中世
SK33	N - 34° - E	0.94	0.66	0.52	楕円形	土師質土器羽釜 1, 土師質土器細片 7	中世
SK34	N - 15° - E	1.26	1.20	0.08 ~ 0.13	長方形	土師質土器細片 4	中世
SK35	N - 4° - E	0.86	0.79	0.25	楕円形	-	
SK36	N - 75° - W	1.18	1.14	0.07 ~ 0.11	隅丸方形	土師質土器細片 8	中世
SK37	N - 87° - E	1.16	1.05	0.20	楕円形	-	
SK38	N - 37° - W	0.82	0.66	0.13	楕円形	-	
SK39	N - 73° - W	1.90	1.50	0.36	楕円形	土師質土器細片 25, 鉄滓 20.5g	中世
SK40	N - 55° - E	1.23	1.14	0.26	楕円形	土師質土器細片 4, 青磁碗 1	中世
SK41	N - 88° - W	1.25	0.80	0.03 ~ 0.10	長方形	-	
SK42	N - 5° - E	0.96	0.95	0.10	隅丸方形	土師質土器細片 4	中世
SK43	N - 33° - W	(0.66)	0.91	0.17	楕円形	土師質土器細片 4	中世
SK44	N - 33° - E	1.07	1.02	0.10	楕円形	土師質土器細片 2	中世
SK45	N - 61° - E	1.43	1.37	0.20 ~ 0.28	楕円形	土師質土器細片 9	中世
SK46	N - 37° - E	0.97	0.83	0.32	楕円形	青磁碗 1, 陶器 (備前焼) 甕 1	中世
SK47	N - 32° - W	0.95	0.85	0.82	楕円形	土師質土器羽釜 1, 土師質土器細片 2, 土師器椀片 1, 土師器甕 2, 土師器細片 38, 瓦器椀 1	中世
SK48	N - 2° - W	2.15	0.84	0.25 ~ 0.28	溝状	土師器甕片 8, 土師器細片 63, 須恵器椀片 1, 須恵器甕片 1, 須恵器壺片 2, 石製品砥石 1	古代
SK49	N - 85° - W	3.29	1.52	0.04 ~ 0.11	楕円形	土師質土器小皿 1, 土師質土器杯 2, 土師質土器細片 54, 青磁碗 1, 陶器瓶子 1, 土製品土錘 1, 石製品 1	中世
SK50	N - 90° - W	(1.62)	0.73	0.17 ~ 0.28	不整形	土師質土器細片 14, 陶器壺 1, 鉄滓 66.0g, 玉石 1	中世
SK51	N - 59° - E	0.90	0.70	0.39	楕円形	土師質土器杯 1, 土師質土器細片 6, 陶器 (備前焼) 片 1, 磁器片 1	近世
SK52	N - 88° - W	2.04	1.27	0.13 ~ 0.22	隅丸方形	土師質土器細片 18, 陶器 (備前焼) 甕 1, 鉄滓 28.5g	中世
SK53	N - 47° - E	0.97	0.89	0.10	楕円形	土師質土器杯 1, 土師質土器細片 7	中世
SK54	N - 30° - E	1.98	0.56	0.14 ~ 0.26	溝状	土師質土器細片 9, 陶器 (備前焼) 甕 1	中世
SK55	N - 55° - W	1.58	1.48	0.18	不整形	土師質土器細片 17, 青磁碗 1, 瓦質土器鍋 1	中世
廃棄土坑	N - 4° - W	3.50	1.72	0.38	不整形長方形	陶磁器片 58	近世~近代
ハンダ土坑 1	-	1.52	1.50	-	円形 (2基)	土師質土器片 42, 瓦質土器片 4, 青磁片 2, 陶器 (備前焼) 7, 陶器片 4, 陶磁器片 76, 鉄製品 1	近世~近代
ハンダ土坑 2	-	2.92	1.47	-	方形 (2基)	陶磁器片 27	近世~近代

遺構計測表 15 SD

遺構番号	主軸方向	規模 (m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 3° - W	1.28	0.38 ~ 0.55	0.10, 0.22	土師質土器杯 1, 土師質土器細片 2	中世
SD2	N - 60 ~ 90° - E	(19.86)	0.27 ~ 0.48	0.12 ~ 0.32	土師質土器焙烙鍋 1, 土師質土器細片 4, 陶器 (内野山窯) 皿 1, 陶器 (肥前産) 碗 1, 陶器片 1, 磁器 (肥前産) 皿 1, 磁器 (能茶山窯) 碗 1, 磁器片 1	近世
SD3	N - 63° - E	(9.80)	0.26 ~ 0.82	0.03 ~ 0.19	-	
SD4	N - 57 ~ 77° - E	(9.03)	0.39 ~ (0.47)	0.06 ~ 0.19	弥生土器片 1, 土師質土器細片 9, 瓦質土器鍋片 1, 陶器 (瀬戸焼) 細片 1	中世
SD5	N - 65° - E	2.88	0.49 ~ 0.56	0.08 ~ 0.12	土師質土器細片 1, 瓦器碗片 1	中世
SD6	N - 67° - E	(3.74)	0.19 ~ 0.32	0.08 ~ 0.18	-	
SD7	N - 77 ~ 87° - E	(18.92)	0.20 ~ 0.81	0.12 ~ 0.24	緑釉陶器碗 1, 土師質土器細片 25, 瓦質土器鍋 1, 青磁碗 1	中世
SD8	N - 30° - E N - 80 ~ 83° - E	(12.62)	0.34 ~ 1.24	0.11 ~ 0.44	土師質土器細片 51, 瓦質土器羽釜片 1, 陶器 (備前焼) 甕片 1	中世
SD9	N - 72° - E	(1.40)	(0.13 ~ 0.20)	0.10 ~ 0.14	-	
SD10	N - 34° - W	3.73	0.44 ~ 0.77	0.13 ~ 0.15	土師器杯片 3, 土師器 (搬入品) 甕片 11, 土師器 (在地系) 甕片 8, 土師器細片 71, 黒色土器 (B類) 片 1, 陶器 (常滑焼) 片 1	古代
SD11	N - 80° - E	(1.96)	0.83	0.09	土師質土器細片 1	中世
SD12	N - 1° - E	1.58	0.34	0.06 ~ 0.14	土師質土器細片 5, 瓦質土器鍋片 1	中世

遺構計測表 16 SE

遺構番号	主軸方向	規模 (m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SE1	-	1.31	1.31	3.42	円形	土師器杯片 2, 土師器細片 2, 東播系須志器捏鉢片 2, 土師質土器杯片 6, 土師質土器細片 314, 瓦質土器片 2, 青磁碗片 2, 陶器 (備前焼) 甕片 4, 炆器 (常滑焼) 甕 1, 板状木製品 4, 曲物 1, 把手状木製品 1, 漆器碗 1, 石製品叩石 1	中世

遺構計測表 17 SX

遺構番号	主軸方向	規模 (m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SX1	-	(3.54)	2.61	0.10 ~ 0.42	楕円形	土師質土器細片 2	中世

遺物觀察表

凡例

1. 遺物観察表の法量は、基本的に口径・器高・底径について計測した。残存長については()で記載する。
その他、器形により必要なものは直接項目に付け加えた。
土錘については全長・全幅・全厚、石製品及び鉄製品については全長・全幅・全厚の順にそれぞれ記載した。
2. 色調については『新版標準土色帳』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じた。
3. 胎土については肉眼観察で判別できるものについてのみ記載した。
4. その他、備考には器種の分類、年代のわかるものについて記載した。
5. 中世の土器・陶磁器の分類については『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社1995, 貿易陶磁器の分類については『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁器』1993を参照した。

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
1	SB1 P3	陶磁器 皿	(15.4)	(2.5)	—	灰白色 〃 〃	白磁皿Ⅸ類か陶器。内外面口縁端部の小範囲に釉剥ぎ。 (口剥ぎか) 器壁薄い。	
2	SB1 P12	陶器 碗	(10.0)	(4.6)	—	極暗赤褐色 〃 灰白色	古瀬戸丸碗か。体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上 がり、端部は短く外反する。	
3	SB1 P11	石製品 石錘	全長 5.6	全幅 5.3	全厚 5.0	—	細粒花崗岩製。中央部は浅い凹状を呈す。重量 203.00g。	
4	SB3 P9	陶器 皿	—	(1.5)	—	褐色 〃 浅黄色	瀬戸美濃系の稜花皿。口縁端部は稜花状を成す。	15c か
5	SB7 P8	土師質土器 杯	7.0	2.2	5.0	明黄褐色 〃 〃	内外面に摩耗が著しく、調整等は不明瞭。外面底部回転 糸切り。	
6	SB7 P5	〃 〃	—	(1.5)	(5.2)	にぶい黄橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。内外面ともに回転ナデ調整。	
7	SB7 P5	〃 〃	—	(1.5)	(6.0)	明黄褐色 〃 〃	外面底部回転糸切り。内外面回転ナデ調整。全体に摩耗 している。	
8	SB7 P8	〃 〃	(8.3)	(2.0)	—	にぶい黄橙色 〃 〃	口縁部一部のみ残存。ロクロ成形、回転ナデ調整。小型の 杯。	
9	SB7 P4	〃 〃	(10.0)	(2.1)	—	にぶい橙色 〃 〃	底部欠損。内面ナデ調整、口縁端部は丸く収める。	
10	SB7 P7	〃 〃	(10.4)	(3.3)	—	にぶい黄橙色 〃 〃	ロクロ成形。内外面回転ナデ調整。	
11	SB7 P4	白磁 皿	(9.0)	(1.5)	—	灰白色 〃 〃	口縁部のみ残存。白濁色の釉と透明釉。胎土は陶質を呈 す。	
12	SB8 P4	土師器 甕	—	(2.9)	—	にぶい黄褐色 〃 橙色	胎土に石英を含む。	
13	SB8 P6	東播系須恵器 捏鉢	(24.6)	(3.1)	—	灰色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。口縁端部は上方に伸び拡張させ る。	12c 末～ 13c 後半か
14	SB8 P6	土師質土器 小皿	(6.6)	(1.2)	(4.6)	橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。外面回転ナデ調整。内面摩耗のため 調整等は不明瞭。口縁端部はやや肥厚し丸く収める。	
15	SB8 P12	〃 杯	—	(1.5)	(7.8)	にぶい橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。全体に摩耗のため調整は不明瞭。 外面の一部に煤付着か。	
16	SB8 P5	炆器 甕	—	(4.4)	—	黒褐色 灰白色 黄灰色	外面に自然釉がかかる。内面ナデ調整。常滑か。	
17	SB8 P6	鉄製品 小札	全長 6.0	全幅 3.0	全厚 0.3	—	径 3mm の円孔が 2 箇所認められる。重量 14.50g。	
18	SB8 P5	銭貨	内径 (mm) 22.00	外径 (mm) 25.00	銭厚 (mm) 1.45	—	開元通寶 (南唐 960 年)。 内郭外径 8.00mm, 内郭内径 7.00mm, 文字面厚 0.70mm, 重量 2.45g。	
19	SB9 P6	土師質土器 小皿	7.2	1.5	5.4	橙色 〃 浅黄橙色	外面底部回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。口縁部には 歪みあり。	
20	SB9 P3	〃 杯	(11.4)	(3.6)	—	橙色 〃 〃	体部から口縁部の一部残存。ロクロ成形。体部から口縁 部は斜上方に伸び、端部は丸く収める。	
21	SB9 P4	鉄製品 刀子	全長 15.3	全幅 2.9	全厚 0.6	—	重量 44.50g。	
22	SB9 P6	銭貨	内径 (mm) 21.00	外径 (mm) 24.00	銭厚 (mm) 1.25	—	開元通寶 (南唐 960 年)。 内郭外径 7.50mm, 内郭内径 6.50mm, 文字厚 1.10mm, 重量 3.06g。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
23	SB11 P3	土師質土器 杯	(13.0)	(3.8)	—	にぶい黄橙色 〃 〃	内外面ともに摩耗のため調整等は不明瞭。	
24	P28	〃 〃	—	(2.3)	(6.8)	にぶい橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。内外面回転ナデ調整。	
25	〃	陶器 壺	—	(3.1)	(7.2)	褐色 〃 にぶい褐色	備前焼。外面底部一部剥離。内外面回転ナデ調整。内面底部にはロクロ目が残る。内面底部には自然軸あり。	
26	P56	土師質土器 小皿	7.1	1.7	5.3	にぶい黄橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。体部は斜上方に短く伸び、端部は丸く収める。内外面回転ナデ調整。	
27	〃	〃 〃	6.5	1.9	4.6	にぶい橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。体部は斜上方に伸び、口唇部は丸く収める。内外面回転ナデ調整。	
28	〃	〃 〃	7.7	2.5	5.6	浅黄橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。板状の圧痕あり。内外面回転ナデ調整。体部は口縁部にかけてやや内湾し、端部はナデにより外反気味。	
29	P105	〃 杯	(12.2)	3.3	(7.4)	にぶい橙色 〃 〃	ロクロ成形。外面底部回転糸切り。板状圧痕が残る。内外面回転ナデ調整。体部は斜上方に伸び、口縁端部は丸く収める。	
30	〃	瓦質土器 羽釜	—	(4.5)	—	灰色 〃 灰白色	外面一部に煤附着。鏽部、口縁部内外面はナデ調整。内面は摩耗。胎土に1～2mmの小礫を含む。	
31	P107	土師質土器 杯	—	(2.7)	—	にぶい褐色 〃 〃	口縁部のみ残存。内外面回転ナデ調整。胎土に石英を含む。他とは異なった胎土。	
32	〃	〃 〃	—	(1.3)	(5.2)	にぶい黄橙色 〃 〃	内外面に回転ナデ調整。外面底部は摩耗のため調整等は不明瞭。	
33	P110	〃 〃	(10.2)	3.7	(6.0)	にぶい橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。内外面回転ナデ調整。	
34	〃	〃 〃	(11.6)	3.2	(6.6)	にぶい黄橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り、板状の圧痕が残る。内外面回転ナデ調整。口縁端部は丸く収める。底部内面は横方向のナデ調整。	
35	P150	鉄製品 小札	全長 4.1	全幅 2.6	全厚 0.5	—	重量 10.50g。	
36	〃	鉄滓	全長 4.5	全幅 3.7	全厚 3.7	—	重量 81.60g。	
37	P173	土師質土器 杯	(13.8)	(2.3)	—	にぶい黄橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。口縁端部は外反し、やや尖り気味に仕上げる。(土師器の可能性もあり)	
38	〃	〃 〃	—	(2.2)	(6.0)	にぶい橙色 〃 〃	内外面に回転ナデ調整。煤附着。外面底部回転糸切り。やや摩耗する。	
39	P175	銭貨	内径 (mm) 18.00	外径 (mm) 24.00	銭厚 (mm) 1.70	—	元豊通寶(北宋1078年)。 内郭外径7.00mm, 内郭内径6.00mm, 文字面厚1.05mm, 重量3.87g。	
40	〃	〃	内径 (mm) 21.00	外径 (mm) 24.00	銭厚 (mm) —	—	9点が付着する。最前面は開元通寶(南唐960年)。 内郭外径7.50mm, 内郭内径6.00mm, 重量31.34g。	
41	P188	青磁 碗	—	(3.0)	—	緑灰色 〃 〃	外面に鎬蓮弁文(龍泉窯系統B類)。	13c 後～ 14c 前
42	〃	土製品 土錘	全長 3.5	全幅 1.4	全厚 1.3	にぶい黄橙色 〃 〃	管状土錘。孔径0.4cm。重量4.80g。	
43	P202	土師質土器 杯	—	(2.0)	4.4	浅黄橙色 にぶい橙色 浅黄橙色	円盤状高台。外面底部回転糸切り。内外面回転ナデ調整。	
44	〃	〃 〃	—	(1.7)	(8.0)	橙色 〃 〃	摩耗が著しく調整等は不明瞭。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
45	P247	東播系須恵器 捏鉢	-	(4.5)	-	灰黄色 〃 〃	口縁部歪みあり。摩耗が著しく内面の調整は不明瞭。外面回転ナデ調整。一部指頭圧痕あり。口縁部は上下に拡張する。	
46	〃	炆器 鉢	-	(4.0)	-	灰白色 〃 〃	高台付の鉢。内外面に回転ナデ調整。高台部欠損。	
47	P327	土師器 杯	(12.8)	4.4	7.0	にぶい黄橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。外面底部回転ヘラ切り。内底部は僅かに凹む。底部から段を持ち斜上方に伸び、口縁端部はやや外方に開く。	
48	〃	〃 〃	-	(1.3)	(8.0)	にぶい黄橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。外面底部回転ヘラ切り。口縁部は欠損する。	
49	P349	土師質土器 小皿	6.5	1.5	4.7	橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。外面底部は摩耗のため調整等不明瞭。口縁端部は丸く収める。	
50	〃	陶器 瓶	-	(9.3)	-	にぶい黄色 浅黄色 灰白色	瀬戸か。外面ヘラ状工具による横方向のナデ調整。自然釉がかかる。内面ヘラ状工具とユビによる斜方向のナデ調整。	
51	P410	銭貨	内径 (mm) 19.00	外径 (mm) 24.50	銭厚 (mm) 1.30	-	元豊通寶 (北宋 1078 年)。 内郭外径 8.00mm, 内郭内径 6.00mm, 文字面厚 0.70mm, 重量 2.78g。	
52	〃	〃	内径 (mm) 20.00	外径 (mm) 25.00	銭厚 (mm) 1.25	-	天聖元寶 (北宋 1023 年)。 内郭外径 8.50mm, 内郭内径 6.50mm, 文字面厚 0.65mm, 重量 2.24g。	
53	〃	〃	内径 (mm) 20.00	外径 (mm) 24.50	銭厚 (mm) 1.25	-	皇口通寶。 内郭外径 9.00mm, 内郭内径 7.00mm, 文字面厚 0.60mm, 重量 2.09g。	
54	〃	〃	内径 (mm) 19.00	外径 (mm) 24.00	銭厚 (mm) 1.35	-	治平元寶 (北宋 1064 年 模中世末期～近世初)。 内郭外径 8.00mm, 内郭内径 6.00mm, 文字面厚 1.00mm, 重量 2.64g。	
55	〃	〃	内径 (mm) 18.00	外径 (mm) 23.00	銭厚 (mm) 1.15	-	皇宋通寶 (北宋 1038 年)。 内郭外径 7.50mm, 内郭内径 6.00mm, 文字面厚 0.75mm, 重量 2.57g。	
56	〃	〃	内径 (mm) 19.00	外径 (mm) 24.00	銭厚 (mm) 0.90	-	景德元寶 (北宋 1004 年)。 内郭外径 7.00mm, 内郭内径 6.00mm, 文字面厚 0.60mm, 重量 1.62g。	
57	〃	〃	内径 (mm) -	外径 (mm) -	銭厚 (mm) 1.00	-	天禧通寶 (北宋 1017 年)。 文字面厚 0.60mm, 重量 0.74g。	
58	〃	〃	内径 (mm) -	外径 (mm) -	銭厚 (mm) 1.20	-	太平通寶 (北宋 1064 年 模中世末期～近世初) か。 文字面厚 0.70mm, 重量 0.87g。	
59	P314	土師器 皿	(13.0)	(1.7)	-	橙色 〃 〃	器壁薄い。摩耗のため調整等不明瞭。口縁部は外方に開く。	
60	P312	〃 甕	-	(3.0)	-	橙色 〃 〃	口縁部内外面横方向のナデ調整。口縁端部は僅かに内傾する。搬入品か。	
61	P332	〃 〃	(23.0)	(2.5)	-	にぶい橙色 明赤褐色 橙色	口縁部内面に粗い単位の横方向のハケ調整。口縁部は外方に開き、端部は上方に拡張する。	
62	P268	〃 〃	-	(7.5)	-	にぶい褐色 〃 明褐色	口縁部欠損。胴部外面に縦方向のハケ調整。内面ナデ調整が施される。胎土に雲母片、白色小礫を含む。搬入品。	
63	P320	黒色土器 椀	-	(1.4)	(9.2)	黒褐色 にぶい橙色 灰白色	黒色土器 A 類 (内面黒色処理) 内面ヘラミガキ、外面ナデ調整。断面三角形の低い高台が付く。胎土に雲母片含む。搬入品。	
64	P328	須恵器 皿	(14.4)	2.3	(10.8)	灰白色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。外面底部回転ヘラ切り。底部から緩やかに立ち上がり、口縁端部は平坦面を呈す。	
65	P61・34	土師質土器 小皿	6.6	1.9	4.1	橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。内外面回転ナデ調整。体部は斜上方に伸び、端部は丸く収める。	
66	P68	〃 杯	(9.8)	(2.3)	-	明黄褐色 〃 〃	ロクロ成形。内外面回転ナデ調整。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
67	P44	土師質土器 杯	(11.0)	3.8	(6.0)	にぶい黄橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。内外面回転ナデ調整。体部は斜上方に伸びる。	
68	P348	〃 〃	(12.2)	(2.5)	-	にぶい黄橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。口縁端部は尖り気味に仕上げる。	
69	P446	〃 〃	(12.0)	(3.1)	-	橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。口縁端部は丸く収める。摩耗著しい。	
70	P106	〃 〃	(11.8)	3.5	(6.6)	にぶい橙色 橙色 浅黄橙色	外面底部回転糸切り。内外面回転ナデ調整。内面底部は横方向のナデ調整。	
71	P277	〃 〃	15.4	(3.2)	-	橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整が施される。口縁端部は僅かに内傾する。底部は欠損。	
72	P16	〃 〃	-	(1.1)	(6.6)	にぶい褐色 〃 にぶい橙色	外面底部回転糸切り。内面回転ナデ調整。	
73	P325	〃 〃	-	(1.8)	(5.2)	橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。摩耗が著しいが、回転ナデ調整が残る。	
74	P124	〃 〃	-	(1.4)	(6.0)	にぶい橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。内外面回転ナデ調整。口縁部は欠損。	
75	P23	〃 〃	-	(2.6)	(5.4)	橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。内外面回転ナデ調整。	
76	P492	〃 〃	-	(3.2)	(7.2)	にぶい橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。外面底部は摩耗著しく調整等は不明瞭。器壁は厚い。	
77	P86	〃 〃	-	(1.4)	(8.2)	にぶい黄橙色 〃 〃	外面底部回転糸切り。内外面は回転ナデ調整。	
78	P227	〃 〃	-	(3.0)	(8.6)	橙色 〃 〃	内外面に回転ナデ調整。外面底部回転糸切り。全面摩耗している。	
79	P505	〃 〃	-	(3.1)	(8.6)	にぶい橙色 〃 〃	大振りの杯。内外面回転ナデ調整。外面底部回転糸切り。器壁は薄い。	
80	P411	〃 〃	-	(1.4)	(8.2)	にぶい橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。外面底部回転糸切り、ヘラ状工具の痕がみられる。	
81	P108	〃 銅	(17.0)	(4.8)	-	橙色 灰褐色 橙色	口縁部は肥厚し、端部はナデ調整。外面頸部に指頭圧痕、ナデ調整。一部に煤付着。胎土に1～2mmの白色小礫を含む。	
82	P31	瓦器 皿	(11.2)	2.0	(5.0)	灰色 〃 灰白色	内外面口縁部ナデ調整。外面底部は指頭圧痕が施される。	
83	P311	瓦質土器 銅	(19.4)	(3.4)	-	灰色 〃 〃	膨らみのある胴部から直立気味に立ち上がる。口縁部は横方向のナデ調整、胴部上位に指頭圧痕がみられる。	14c 中～ 15c 中
84	P62	東播系須恵器 捏鉢	(24.2)	(5.5)	-	灰色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。口縁端部は上方に伸び、拡張させる。内面指頭圧痕、回転ナデ調整。胎土に白色小礫を含む。	13c 前～ 後半
85	P217	〃 〃	(29.4)	(3.0)	-	灰色 〃 〃	内外面に回転ナデ調整。口縁端部に自然釉がかかる。	13c 前～ 後半か
86	P159	〃 〃	(32.0)	(5.1)	-	灰色 〃 〃	内外面とも回転ナデ調整。口縁端部は上方に拡張する。比較的器壁が薄い。	13c 前～ 後半
87	P272	青磁 碗	-	(4.6)	-	灰オリーブ色 〃 〃	龍泉窯系統 I 類。内面に割花文が施される。	12c 後半
88	P176	〃 〃	(13.0)	(5.0)	-	緑灰色 〃 〃	龍泉窯系統 B 類。外面に細蓮弁文。貫入が入る。	15c

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
89	P291	青磁 碗	-	(3.1)	(6.2)	オリープ灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統 E 類。内面見込みに界線、草系の文様が見られる。全面に厚い釉が施され、高台内は丸く釉剥ぎ。粗い貫入あり。	15c 後半
90	P184	〃 〃	(12.6)	(2.4)	-	緑灰色 〃 灰白色	外面無文、龍泉窯系統 E 類。口縁部は斜上方に伸びる。	
91	P380	〃 〃	(15.5)	(2.9)	-	灰オリープ色 暗オリープ色 灰色	龍泉窯系統 D 類。口縁部は外方に開く。	
92	P463	〃 〃	(18.4)	(3.1)	-	オリープ灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統 D 類。 口縁端部は玉縁状を呈し、外方に開く。	
93	P292	白磁 皿	(7.2)	(1.4)	-	灰白色 〃 〃	白磁Ⅰ類皿。内面口縁端部の小範囲に釉剥ぎ。	13c 後半 ～ 14c 前 半
94	P433	〃 〃	(9.8)	(1.6)	-	灰白色 〃 〃	白磁Ⅰ類皿。内面口縁端部と口唇部の小範囲に釉剥ぎ。	〃
95	P297	〃 〃	-	(1.0)	(7.2)	灰白色 〃 にぶい黄橙色	白磁Ⅰ類皿。口縁部欠損。内外面施釉される。	〃
96	P21	炆器 甕	-	(14.4)	-	灰色 灰黄色 〃	内面指頭圧痕、ナデ調整。外面ナデ調整。胎土に白色礫・石英を含む。	
97	P204	青花 皿	11.6	2.7	6.5	明緑灰色 〃 灰白色	染付皿 B 群。内面に玉取獅子、外面に牡丹唐草文が描かれる。高台畳付は釉剥ぎ、高台内に砂粒が付着する。外面文様、内面見込みの二重界線はにじむ。	
98	P270	〃 碗	-	(1.8)	(5.4)	明緑灰色 〃 灰白色	染付碗 C 群。内面見込みに二重界線に丸を三つ結合した文がみられる。高台畳付は釉剥ぎ。	
99	P340	国内産陶器 甕	-	(6.7)	-	灰色 黒褐色 灰色	体部片。内面に横方向のナデ調整が施される。	
100	P131	国内産陶器 壺または甕	-	(6.6)	-	黒褐色 灰白色 〃	常滑焼。外面に菊花状の押印文あり。内面はナデ調整。	
101	P367	〃 播鉢	(24.2)	(3.5)	-	にぶい赤褐色 褐灰色 灰褐色・黄灰色	備前焼。口縁内部に稜線を残し、端部は上方に伸び平坦な面を成す。内外面ともロクロ目顕著。	備前焼 V 期 15c
102	P490	〃 〃	(28.0)	(6.0)	-	にぶい赤褐色 〃 〃	備前焼。口縁部は断面三角形。口縁部内側が僅かに上に突出する。内外面に回転ナデ調整。内面に四条の摺目。	14c 後葉 ～ 15c 中 葉
103	P509	〃 〃	-	(4.0)	-	橙色 にぶい赤褐色 橙色	備前焼。内外面にナデ調整。口縁端部は僅かに上部に拡張する。	14c 後葉 ～ 15c 中 葉
104	P1	陶器 甕	(29.0)	(3.0)	-	暗褐色 〃 灰白色	口縁端部は横方向に拡張、平坦面を成す。内外面に褐釉が施される。	
105	P64	土製品 土錘	全長 2.9	全幅 1.5	全厚 1.4	- 橙色 -	1/2 残存。孔径 0.5cm。重量 4.90g。	
106	P346	銅製品 飾金具	全長 3.7	全幅 0.5	全厚 0.6	-	重量 1.02g。	
107	P353	鉄製品 釘	全長 7.9	全幅 1.7	全厚 0.6	-	重量 5.10g。平釘か。断面四角形状。頭部欠損のため不明瞭。	
108	P182	銅製品 不明	全長 2.3	全幅 1.3	全厚 0.3	-	重量 1.10g。	
109	P144	〃 〃	全長 2.7	全幅 2.2	全厚 0.2	-	器形不明瞭。雷文が施される。重量 5.00g。	
110	P338	銭貨	内径 (mm) -	外径 (mm) 27.00	全厚 (mm) 4.40	-	2～3点が付着している。銭種不明。 内郭内径 6.50mm、重量 7.80g。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
111	P407	石製品 砥石	全長 10.9	全幅 4.6	全厚 4.7	-	重量 361.00g。流紋岩製。一側面を使用。	
112	P417	〃 〃	全長 9.3	全幅 5.6	全厚 1.7	-	重量 93.44g。細粒花崗岩製。粗く割った一面を砥石として使用したものか。	
113	P465	〃 叩石	全長 13.4	全幅 11.4	全厚 4.9	-	重量 1,007.00g。細粒花崗岩製。周縁の2箇所を使用痕あり。	
114	P152	〃 石臼	全長 31.2	全幅 32.0	全厚 10.0	-	重量 17.00kg。砂岩製。	
115	SK3	陶器 灯明皿	(7.3)	4.3	(4.2)	にぶい赤褐色 〃 灰黄色	台付灯明皿。全体に褐釉が施される。外面底部は露胎、回転糸切り痕が残る。口縁の一部に煤が付着する。	
116	〃	磁器 皿	(10.2)	2.1	(6.4)	灰白色 〃 〃	見込みに西洋風の人物図が描かれる。高台皿付は釉剥ぎ、露胎する。	
117	〃	〃 〃	9.3	2.6	4.6	灰白色 〃 〃	肥前産磁器皿。透明感のある釉が施される。内面格子文、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、中央に斜格子文が描かれる。高台は皿付釉をかきとる。	
118	SK5	陶器 鉢	-	(3.8)	-	灰白色 極暗褐色 にぶい褐色	肥前産陶器。外面白化粧土による刷毛目文様、内面の一部は釉を削り取る。	
119	SK7	瓦質土器 羽釜	(23.0)	(7.3)	-	灰色 〃 灰白色	内面ナデ調整、外面指頭圧痕とナデ調整が施される。鋳部は断面三角形の退化した薄い粘土帯を貼付する。口唇部ナデにより凹状を呈する。	14c 後半 ～ 15c 初
120	SK11	〃 〃	(33.0)	(3.7)	-	灰白色 〃 〃	外面指頭圧痕とナデ調整が施される。鋳部が退化し、薄い粘土帯を貼付する。摩耗が著しい。	14c 後半 ～ 15c 初
121	SK13	陶器 皿	-	(2.1)	(5.0)	黄灰色 にぶい黄橙色 浅黄色	肥前産陶器(唐津)。削り高台、内面見込みに砂目あり。外面体部下半まで灰釉が施される。	1610～ 1650
122	SK15	土師質土器 杯	-	(2.7)	(7.6)	にぶい橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。外面底部回転糸切り。内面は摩耗する。	
123	〃	〃 〃	-	(1.9)	7.6	灰黄褐色 にぶい黄褐色 〃	内外面回転ナデ調整が施される。外面底部回転糸切り。内外面に摩耗する。	
124	〃	瓦質土器 鉢	-	(1.5)	(9.4)	灰黄色 黄灰色 灰黄色	内面は摩耗、剥離のため調整等は不明瞭。外面底部回転糸切り。外面に煤が付着する。	
125	SK18	陶器 水屋甕	-	(5.4)	-	灰褐色 にぶい赤褐色 浅黄色	内外面褐釉が施される。	
126	SK28	鉄製品 刀子	全長 5.9	全幅 2.9	全厚 1.1	-	重量 32.46g。状態は良くない。	
127	SK29	土師質土器 杯	-	(1.7)	4.0	橙色 〃 〃	内外面口クロ目顕著。外面底部回転糸切り。	
128	SK30	青磁 碗	(14.9)	(3.8)	-	灰オリーブ色 〃 灰白色	龍泉窯系統 E 類。口縁部に沈線状に釉が溜まる。内外面貫入が入る。	
129	SK31	土師質土器 杯	13.2	3.8	6.3	橙色 〃 〃	口縁部は底部から外方に伸び、端部は丸く収める。摩耗のため調整等は不明瞭。	
130	SK46	青磁 碗	(16.0)	(2.2)	-	オリーブ灰色 〃 灰色	龍泉窯系統 B1 類。外面に鎬蓮弁文が施される。	
131	SK48	土師器 甕	(16.3)	(6.9)	-	にぶい橙色 〃 〃	口縁部は外反し、端部は上方に拡張する。内面頸部と外面胴部に粗い単位のヨコ方向のハケ調整が施される。	
132	〃	〃 〃	-	(4.5)	-	にぶい橙色 〃 にぶい橙色	外面横方向のハケ調整、内面横方向のハケ調整とナデ調整が施される。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
133	SK48	須恵器 壺	-	(6.8)	(9.4)	黄灰色 〃 〃	断面台形の削り高台を有する。内外面回転ナデ調整。内面の一部に自然釉がかかる。	
134	〃	〃 甕	-	(10.5)	-	灰色 〃 〃	タタキ成形(平行タタキ目)。内面はナデ調整が施される。	
135	〃	石製品 砥石	全長 10.8	全幅 7.9	全厚 4.2	-	重量 415.00g。砂岩製。三面または四面に使用痕あり。	
136	SK49	土師質土器 小皿	(6.7)	(1.5)	(5.2)	橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。外面底部回転糸切り。口縁部は斜上方に伸び、端部は尖り気味に仕上げる。	
137	〃	〃 杯	(11.4)	(2.7)	-	橙色 にぶい橙色 〃	内外面回転ナデ調整。口縁部は斜上方に伸び、端部は尖り気味に仕上げる。	
138	〃	〃 〃	-	(1.8)	(8.2)	橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。外面底部回転糸切り。	
139	〃	陶器 瓶子	-	(2.1)	-	浅黄色 オリーブ黄色 灰黄色	外面、内面の一部に灰釉が施される。肩部に二条の沈線。内面頸部に接合痕がみられる。古瀬戸か。	
140	〃	青磁 碗	(16.8)	(3.0)	-	明オリーブ灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統 D 類。口縁部はやや外反する。内外面には細かい貫入が入る。	
141	〃	土製品 土錘	全長 4.7	全幅 1.4	全厚 1.3	- 灰黄褐色 -	管状土錘。孔径 0.5cm。重量 7.40g。	
142	〃	石製品 不明	全長 9.1	全幅 8.9	全厚 3.7	-	重量 431.00g。周縁の一部に使用痕がみられる。砂岩か。	
143	SK50	陶器 瓶子	-	(4.5)	-	浅黄色 灰白色 灰黄色	古瀬戸。肩部に四条の沈線が巡る。外面耳部の周辺に釉がかかる。内面ナデ調整。139 と同一個体か。	
144	SK51	土師質土器 杯	-	(1.6)	6.0	黄褐色 〃 〃	摩耗が著しく調整等は不明瞭。内面見込みに僅かにロクロ目が残る。	
145	SK53	〃 〃	-	(3.2)	(5.6)	橙色 〃 〃	内外面回転ナデ調整。ロクロ目が残る。外面底部回転糸切り。	
146	SK54	陶器 甕	-	(5.0)	(33.4)	褐灰色 橙色 褐灰色	備前焼甕の底部片。底部周縁が二条の沈線状に凹む。	
147	SK55	青磁 碗	-	(2.3)	-	灰白色 〃 〃	龍泉窯系統 B 類。外面に鎬蓮弁文。	
148	〃	瓦質土器 鍋	(24.2)	(4.7)	-	灰白色 灰色 灰白色	口縁部は上方に直立し、端部は僅かに内傾する。外面ナデ調整。指頭圧痕。内面ナデ調整。軟質、摩耗する。	14c 中～ 15c 中
149	SD1	土師質土器 杯	-	(1.1)	(7.4)	橙色 〃 〃	内外面摩耗する。外面底部回転糸切り痕。	
150	SD2	陶器 皿	-	(1.4)	-	緑灰色 灰黄色 灰白色	内野山窯。内面見込みに銅緑釉が施される。蛇ノ目釉剥ぎか。高台内は削り出し、露胎する。	1650～ 1780 か
151	〃	〃 碗	-	(4.6)	(4.6)	灰オリーブ色 〃 灰白色	高い高台。高台脇より高台内が深く削り込まれる。全面施釉。皿付は釉剥ぎ。	
152	〃	磁器 〃	(10.9)	6.2	(5.6)	灰白色 〃 〃	能茶山窯広東形碗。高台内に「茶山」の印。外面如意頭文か。高台脇と高台に圈線。内面口縁部に二重圈線。見込みに圈線と火焰宝珠文。皿付釉剥ぎ。	19c
153	〃	〃 〃	(9.8)	(2.6)	-	灰白色 〃 〃	肥前産。外面口縁部に二重圈線。唐草風の文様が描かれる。	
154	〃	土師質土器 焙烙	(36.0)	(4.9)	-	にぶい褐色 にぶい橙色 〃	口縁部は外反、端部は下方に拡張し平坦な面を成す。内外面ナデ調整。外面に指頭圧痕が残る。内面と外面の一部に煤が付着する。胎土に雲母片を含む。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
155	SD7	緑釉陶器 碗	-	(1.8)	(6.6)	浅黄色 〃 〃	輪高台碗。低い高台が付く。内外面ヘラミガキ、外面回転ナデ調整が施される。高台内面にロクロ目が残る。外面の一部に施釉。	
156	〃	青磁 碗	(14.0)	(3.8)	-	オリーブ灰色 〃 緑灰色	龍泉窯系統B類。外面に鎚蓮弁文。	13c 中～
157	〃	瓦質土器 鍋	(16.0)	(5.3)	-	灰白色 灰色 灰白色	口縁部は直立し、端部は僅かに外反する。外面ナデ調整と指頭圧痕、内面ナデ調整。外面胴部に煤が付着する。	
158	SD10	土師器 杯	(11.0)	5.1	7.7	にぶい褐色 橙色 〃	器壁薄い。外面底部ヘラ切り、板状の圧痕が残る。摩耗著しい。	
159	〃	〃 〃	-	(1.9)	(8.0)	明黄褐色 〃 〃	摩耗著しく調整は不明瞭。外面にナデ調整の痕が僅かに残る。	
160	〃	〃 〃	-	(1.4)	(10.2)	にぶい黄橙色 〃 浅黄色	内外面ナデ調整。外面底部摩耗のため、切離しは不明瞭。	
161	〃	〃 甕	(19.2)	(2.7)	-	にぶい黄褐色 〃 〃	口縁端部は上方に拡張し、端部を摘み出す。内面粗い単位のハケ調整、外面ナデ調整。胎土に雲母片を含む。搬入品。	10c
162	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	にぶい橙色 橙色 〃	外面胴部上位に縦方向のハケ調整。内面ナデ、指頭圧痕が残る。内面に接合痕あり。頸部はナデにより段状になる。胎土に雲母片を含む。搬入品。	
163	SE1	〃 碗	-	(2.8)	(6.0)	にぶい黄橙色 橙色 褐灰色	輪高台碗。外方に開く高台が付く。摩耗のため調整は不明瞭。	
164	〃	土師質土器 皿	-	(2.0)	(6.2)	黒色 にぶい黄褐色 〃	灯明皿。内面ロクロ目が残る、段状になる。見込みは平行ナデ。外面底部糸切り、板状の圧痕が残る。内面全体に煤が付着する。	
165	〃	〃 杯	-	(2.9)	(7.6)	橙色 〃 〃	摩耗著しい。外面に僅かに回転ナデ調整の痕がみられる。	
166	〃	〃 〃	-	(1.1)	(6.4)	橙色 にぶい橙色 橙色	摩耗著しい。外面底部回転糸切り、板状の圧痕が残る。内面に僅かにロクロ目がみられる。	
167	〃	〃 〃	-	(2.8)	(5.0)	にぶい黄褐色 〃 〃	摩耗が著しく調整等は不明瞭。	
168	〃	〃 〃	-	(1.8)	6.0	灰黄色 〃 〃	器壁厚い。摩耗が著しく調整等は不明瞭。	
169	〃	〃 〃	-	(1.8)	(6.4)	にぶい橙色 〃 〃	内底面に一部ナデ痕が残る。摩耗が著しく他の調整等は不明瞭。	
170	〃	〃 〃	-	(2.0)	(7.8)	にぶい黄褐色 〃 〃	器壁厚い。摩耗が著しく調整等は不明瞭。	
171	〃	〃 〃	-	(3.0)	6.6	明黄褐色 〃 〃	器壁厚い。摩耗が著しく調整等は不明瞭。	
172	〃	東播系須恵器 捏鉢	(24.6)	(4.2)	-	灰色 〃 〃	内面外面共に横方向のナデ調整。口縁部は僅かに肥厚し、端部は面を成す。片口を有する。	
173	〃	〃 〃	(25.8)	(3.5)	-	灰白色 〃 〃	内面外面共に横方向のナデ調整。口縁端部は丸く収める。	
174	〃	青磁 碗	-	(3.3)	-	オリーブ灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統B類。外面に鎚蓮弁文。内外面貫入が入る。	
175	〃	〃 〃	-	(2.7)	-	オリーブ灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統B類。外面鎚蓮弁文が施される。	
176	〃	炆器 甕	-	(9.0)	(26.0)	褐灰色 黒褐色 灰色	内面横方向のナデ調整、外面工具による縦と横方向のナデ調整。備前焼か。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
177	SE1	漆器 椀	-	(6.6)	(8.3)	暗赤褐色 〃 褐灰色	赤漆が外面高台脇まで施される。下地は黒漆で、高台及び外底部は下地のままである。底部及び体部下半は木地が薄く丁寧に削られる。ブナ。	
178	〃	木製品 曲物	19.3	10.8	19.7	-	曲物の側板と底板。側板は曲げた端を縫錐状の工具により穿孔し、桜の皮で綴じる。底板の側面周縁は木釘を打ち込んだ穿孔がみられる。ヒノキ。	
179	〃	板状 木製品	全長 17.7	全幅 7.4	全厚 0.8	-	半月状を呈する。曲物の底板か。丁寧にケズリが施される。ヒノキ。	
180	〃	〃	全長 24.1	全幅 5.2	全厚 0.9	-	曲物の底板か蓋の一部か。二箇所に木釘孔が穿たれる。ヒノキ。	
181	〃	〃	全長 22.3	全幅 8.8	全厚 1.0	-	曲物の底板か蓋の一部か。ヒノキ。	
182	〃	把手状 木製品	全長 17.1	全幅 2.5	全厚 1.5	-	把手状を呈する。取付け部に円孔を穿つ。ヒノキ。	
183	〃	石製品 叩石	全長 14.3	全幅 6.1	全厚 3.8	-	重量 530.00g。細粒花崗岩製。短辺の二箇所に敲打痕が残る。	
184	〃	〃 〃	全長 5.4	全幅 7.5	全厚 1.4	-	重量 93.00g。緑色岩製。扁平な石の中央部と周縁部に使用痕がみられる。	
185	廃棄土坑	陶磁器 皿	(14.4)	5.1	(8.6)	灰白色 〃 〃	肥前産やや深手の輪花皿。陶胎染付。口縁部は輪花状、端部はやや外反する。内面花唐草文、見込み五弁花のコンニャク印判。外面唐草文、高台内に圏線、中央に渦福。	1700～ 1740
186	〃	陶器 〃	(13.0)	4.9	(5.3)	黒褐色 〃 灰黄褐色	能茶山窯端反皿。外面胴部中位まで鉄釉がつけ掛けされる。削り高台。内面蛇ノ目釉剥ぎ、アルミナ砂を塗布する。見込みに重ね焼きによる高台痕がみられる。	19c
187	〃	〃 碗	(12.0)	(7.7)	-	浅黄色 〃 〃	筒丸形碗。口縁部は上方に伸びる。全面に灰釉が施される。内面口縁部に一条の沈線。内面ロクロ目顕著。	
188	〃	〃 〃	-	(4.4)	(5.0)	黄色 〃 淡黄色	灰釉が全面施釉される。高台畳付は釉剥ぎ。細かな貫入が入る。	
189	〃	〃 小壺	2.7	6.2	3.6	暗褐色 暗褐色・白色 -	ロクロ成形。体部下半まで褐色の釉がかかり、底部は露胎。内面口縁部は上方に伸びる。蓋は木栓とみられる。瀬戸か。	
190	〃	磁器 皿	(9.8)	2.0	(6.0)	灰白色 〃 〃	肥前産若しくは能茶山窯の型打成形による菊皿。口縁端部は僅かに内湾する。高台畳付は釉剥ぎ。	
191	〃	〃 角皿	(16.2)	7.7	(7.4)	灰白色 〃 灰黄色	型打成形による角皿。外面退化した窓枠、内面区画内に山水文。やや外方に開く高台、畳付は釉剥ぎ。	
192	〃	〃 大皿	(39.4)	5.1	(22.2)	灰白色 〃 〃	肥前産色絵大皿。内面見込みに草花、山水、松。口縁部は四方櫛文、半菊、窓絵に猫が描かれる。外面は雲と山か。高台脇と内に圏線が巡る。畳付釉剥ぎ、砂粒が付着する。	17c か
193	〃	〃 小碗	(8.4)	5.0	(4.0)	灰白色 〃 〃	外面二重圏線と樹木文、高台二重圏線、高台内にも圏線あり。高台は僅かに内湾し、畳付は釉剥ぎ、砂粒が付着する。	
194	〃	〃 碗	(10.2)	5.6	(3.5)	灰白色 〃 〃	端反碗。内面口縁部は退化した雷文帯、見込み圏線内に文様あり。外面上下圏線間に笹と草花文。高台畳付釉剥ぎ。	19c
195	〃	〃 〃	(10.0)	(4.5)	-	灰白色 〃 〃	端反碗。外面格子文、内面口縁部に二重圏線、見込みに圏線が巡る。口縁部は斜上方に伸びる。	18c
196	〃	〃 〃	-	(4.3)	(3.7)	灰白色 〃 〃	外面石灯籠、唐草文。高台畳付は釉剥ぎ、砂粒が付着する。高台内は能茶山窯の窯印か。内面見込み圏線中央に文様が描かれる。	
197	〃	〃 〃	-	(2.4)	4.6	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外方に開く高台、畳付は釉剥ぎ。外面高台に二重圏線、高台内に「茶」の窯印。内面圏線中央は山水文か。貫入が入る。	19c
198	〃	〃 〃	(11.0)	6.2	6.0	灰白色 〃 〃	広東形碗。外面稲束文、内面口縁部二重圏線、見込み圏線中央に鷺文。高台畳付は釉剥ぎ。	19c

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
199	廃棄土坑	磁器 碗	—	(3.7)	(6.0)	灰白色 〃 〃	能茶山窯広東形碗。外面高台内に「サ」の窯印。内面見込み圏線中央に十字花文。三箇所が目痕あり。高台畳付は釉剥ぎ。	19c
200	〃	〃 仏飯器	(6.6)	6.0	4.0	明緑灰色 〃 灰白色	肥前産。外面蜻唐草文と圏線。杯部は深く口縁部は上方に伸びる。底部は削り出し、高台内の削り込みは浅く無釉である。	1690～ 1780
201	〃	〃 〃	7.0	5.8	3.6	灰白色 〃 〃	外面唐草文。杯部は浅く、口縁部は外方に開く。全面施釉され、畳付は釉剥ぎ。	
202	〃	〃 〃	(6.9)	6.0	4.0	明緑灰色 〃 白色	肥前産。外面半菊文。杯部は浅く、口縁部はやや外方に開く。底部は削り出し、高台内の削り込みは僅かで無釉である。	1780～ 1860
203	〃	〃 鉢か火入	(11.6)	(11.0)	—	灰白色 〃 〃	内面口縁部に瓔珞文。外面草花文か。胴部中位にくびれを持つ。口縁部は内湾し、端部は水平な面を成す。瀬戸美濃系か。	
204	〃	釜道具 トチン	—	5.2	5.0	にぶい黄橙色 にぶい橙色 にぶい黄橙色	外面指頭圧痕、ナデ調整。外面の一部に自然釉がかかる。	
205	〃	磁器 皿	(13.0)	3.8	8.0	灰白色 〃 〃	内面型紙摺り。内面鶴と檜垣文。外面唐草文と二重圏線。高台に圏線が巡る。内面見込み五箇所が目痕あり。蛇ノ目高台。	
206	〃	〃 碗	(12.0)	4.4	(3.4)	灰白色 〃 〃	型紙摺りの平碗。外面米俵と鼠、扇形の窓絵に大黒天。内面樹木、草花、人物が描かれる。低い高台、畳付は釉剥ぎ。外面文様にずれがみられる。	19c
207	〃	〃 〃	10.4	5.7	3.7	灰白色 〃 白色	外面に柿の枝と果実が描かれる。高台内に「倉陶」の窯印あり。外方に開く高台、畳付は釉剥ぎ。	19c
208	〃	〃 〃	(9.6)	4.7	(3.2)	白色 〃 〃	子供用の飯碗。外面上絵付により上下圏線内に日章旗、零戦と思われる飛行機が描かれる。上絵付はほぼ剥がれ落ちる。第二次世界大戦中か。高台畳付は釉剥ぎ。	
209	〃	〃 〃	(9.4)	4.4	(3.4)	灰白色 〃 〃	子供用の飯碗。外面上絵付により兎と山、童謡「うさぎとかめ」の一節が描かれる。高台畳付は釉剥ぎ。	
210	〃	〃 〃	(9.7)	4.8	(2.8)	灰白色 〃 〃	子供用の飯碗。外面彩色により蒸気機関車と日章旗、桜が描かれる。高台との境目に帯線。高台内に「岐420」の統制番号あり。断面に補修済の痕跡がみられる。	
211	〃	〃 〃	(14.6)	5.8	(6.0)	灰白色 〃 〃	外面高台内に「岐406」の統制番号が染付される。外面口縁部に青緑色の二重圏線。口縁部は斜上方に伸びる。高台畳付は釉剥ぎ。	
212	〃	〃 小杯	5.3	3.0	2.2	白色 〃 〃	口縁部は尖り、外方に開く。外面口縁部に呉須が施される。内面に戦艦、日章旗、桜と錨が描かれる。戦中、海軍による記念品か。高台畳付は釉剥ぎ。	
213	〃	〃 〃	(6.8)	2.8	2.4	灰白色 〃 〃	口縁部は尖り、外方に開く。外面口縁部圏線、高台との境に二重圏線。内面口縁部に口銚風の褐色釉と呉須による圏線、蓑を着た人物と落款が描かれる。	
214	〃	〃 〃	—	(2.5)	2.1	灰白色 〃 〃	筒形を呈し、口縁部は上方に伸びる。内面に鯉、水草、赤色で和歌が描かれる。外面高台内にも文字あり。高台畳付は釉剥ぎ。	19c
215	〃	〃 〃	5.0	2.8	1.8	白色 〃 〃	瀬戸美濃系。口縁部は尖り、外反する。外面「高砂」の歌詞、帯と熊手が濃い呉須により描かれる。高台畳付は釉剥ぎ。	明治後半
216	〃	瓦 平瓦	全長 26.1	全幅 25.4	全厚 1.5	灰色	「イノ(右より)中島製」の刻印。重量 1700.00g。	
217	〃	〃 〃	全長 5.5	全幅 8.2	器高 1.6	灰色	「タキウシ」刻印。重量 90.00g。	
218	〃	〃 〃	全長 13.0	全幅 13.3	全厚 1.5	暗灰色	「山□□」の刻印。重量 320.00g。	
219	〃	〃 〃	全長 14.9	全幅 10.7	全厚 1.6	暗灰色	「王稚」の刻印。重量 240.00g。	
220	〃	〃 〃	全長 11.8	全幅 7.7	全厚 1.6	灰色	重量 120.00g。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
221	廃棄土坑	瓦 平瓦	全長 15.7	全幅 21.4	全厚 1.8	灰色	重量 590.00g。	
222	〃	〃	全長 11.6	全幅 11.6	全厚 1.5	暗灰色	重量 230.00g。	
223	〃	〃	全長 11.8	全幅 11.3	全厚 1.6	灰色	「□原」の刻印。重量 280.00g。	
224	〃	石製品 五輪塔	全長 29.9	全幅 18.4	全厚 17.5	-	砂岩製。火・水・地輪で、一石を加工する。重量 16.70kg。	17c
225	ハンダ土坑 1	陶器 灯明皿	(6.6)	4.0	4.4	黒褐色 〃 灰褐色	能茶山窯台付灯明皿。鉄釉がつけ掛けされ、外面底部は露胎、回転糸切り。	19c
226	〃	〃 描鉢	32.0	11.0	(15.6)	にぶい褐色 黒褐色 褐灰色	外面体部中位から口縁部上面まで鉄釉、他は露胎。口縁部は摺目をナデ消し、境目に一条の沈線を施す。外面口縁部二条の凹線、端部は平坦面を呈す。	
227	〃	〃 〃	(24.8)	(2.8)	-	にぶい赤褐色 〃 にぶい黄褐色	口縁端部は上下に拡張し、外面に二条の凹線が巡る。内面九条一単位の摺目。ロクロ目顕著。	
228	〃	〃 〃	-	(3.1)	(14.4)	にぶい赤褐色 〃 〃	内面粗い単位の摺目が密に施される。見込みは七条一単位で浅く、放射状を呈す。外面ナデ調整。	
229	〃	〃 甕	(21.0)	(9.3)	-	暗赤褐色 〃 灰色	褐色の釉が全面に施される。丸みをもつ胴部から頸部は上方に伸びる。口縁端部は外方へ拡張し、水平な平坦面を呈す。肩部にはロクロ目が残る。	
230	〃	〃 徳利	-	(9.2) (14.5)	12.5	にぶい橙色 黒色 にぶい橙色	体部はほぼ垂直に伸びる。外面に鉄釉がつけ掛けされ、内面中位まで釉が垂れる。外面底部は露胎、墨書が施される。内外面ロクロ目顕著。関西系。	
231	〃	磁器 皿	9.7	1.9	5.2	灰白色 〃 〃	型打成形による端反皿。内面見込みに燕、口縁部内外面に褐色の染付が施される。瀬戸か。	19c
232	〃	〃 〃	9.6	1.4	(5.4)	灰白色 〃 〃	型打成形による端反皿。内面見込みに帯線、「壽」の刻印。色絵による文字・文様が染付される。外面底部にも文字あり。高台畳付は釉剥ぎ。瀬戸。	19c
233	〃	〃 〃	9.7	2.0	5.4	灰白色 〃 〃	型打成形による端反皿。内面見込みに帯線、「壽」の刻印。金魚と水草、文字が染付される。外面底部にも文字あり。高台畳付は釉剥ぎ。瀬戸。	19c
234	〃	〃 〃	9.8	2.1	5.3	灰白色 〃 〃	型打成形による端反皿。内面見込みに帯線、「壽」の刻印。色絵による文字と文様が染付される。外面底部にも文字あり。高台畳付は釉剥ぎ。瀬戸。	19c
235	〃	〃 〃	10.6	2.4	6.0	灰白色 〃 〃	型打成形により口縁部は輪花状を呈し、口鏽を施す。内面に山水樓閣文。断面三角形の高台が貼付され、畳付は釉剥ぎ。透明釉が白濁する。能茶山窯か。	
236	〃	〃 大皿	-	(2.8)	-	灰白色 〃 〃	角形の大皿。口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。内面口縁部楕圓風の文様、中位に網目の地文様。文様に沿って立体的に成形される。外面岩山と月が描かれる。	
237	〃	〃 〃	-	(3.0)	(24.4)	灰白色 〃 〃	肥前産。厚い釉が全面にかかる。内面丸に波頭風の文様。断面三角形の高台、畳付は釉剥ぎ。	
238	〃	〃 碗	(10.4)	6.2	(4.2)	灰白色 〃 〃	端反碗。外面草花風の文様、下位と高台に圈線。内面は口縁部に多重圈線、見込み圈線、中央に雁が描かれる。見込みに砂粒が付着、残存部に二箇所の日痕が残る。	
239	〃	〃 〃	-	(4.6)	4.1	灰白色 〃 〃	端反碗。内面見込み圈線内に簡略化された山水文。外面に濃い呉須により文様が描かれる。高台に圈線、畳付は釉剥ぎ。	
240	〃	〃 〃	(10.2)	5.2	(3.2)	灰白色 〃 〃	瀬戸美濃系端反碗。口縁部は僅かに外反する。内面口縁部多重圈線、見込み圈線中央に寿文。外面上位に竹、下位に半菊、高台に圈線が描かれる。高台畳付は釉剥ぎ。	
241	〃	〃 〃	10.3	5.7	3.8	灰白色 〃 〃	瀬戸美濃系端反碗。内面口縁部に連弧状の文様、見込み圈線中央は寿文か。外面に蓮弁風の文様、高台との境に圈線が描かれる。高台畳付、高台内の一部まで釉剥ぎ。	
242	〃	〃 〃	11.0	5.9	3.9	灰白色 〃 〃	端反碗。外面上下圈線間に半菊と果実文。口縁部と胴部下位及び高台に圈線が描かれる。内面は口縁部に退化した雷文帯、見込み圈線、中央に文様。高台畳付は釉剥ぎ。	19c

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
243	ハンダ土坑 1	磁器 碗	9.8	6.1	(4.2)	灰白色 〃 〃	端反碗。外面帯線、多重圏線、草花文。内面口縁部二重圏線、見込み圏線、中央に文様が描かれる。底部または肥前産か。	19c 後半
244	〃	〃 〃	-	(4.3)	(6.3)	灰白色 〃 〃	能茶山窯の広東形碗。外面多重圏線文に唐草風の文様が描かれる。高台は二重圏線、高台内に「茶」の銘あり。内面見込みは圏線内に波頭文か。高台畳付は釉剥ぎ。	19c
245	〃	〃 〃	-	(3.4)	6.1	灰白色 〃 浅黄色	瀬戸美濃系。陶胎染付の広東形碗。内面見込み圏線、中央に簡略化された五弁花文。外面高台に圏線が描かれる。呉須は褪せた藍色を呈す。高台畳付は釉剥ぎ。	19c
246	〃	〃 〃	(10.6)	(4.8)	-	灰白色 〃 〃	型紙摺りの端反碗。濃い呉須により外面菊と亀甲の地文様、窓絵に鶴と亀、下位に矢羽根状の連続文。内面口縁部にも菊花と亀甲の地文様、窓絵に亀、見込みに圏線が描かれる。	19c (明治)
247	〃	〃 〃	(9.7)	(4.8)	-	灰白色 〃 〃	型紙摺りの端反碗。口縁部はやや外反する。外面弧状地に菊花、花卉、亀甲風の窓絵に菊花が描かれる。内面口縁部に環珞文、見込みに圏線が描かれる。	19c (明治)
248	〃	〃 〃	(10.0)	(4.2)	-	灰白色 〃 〃	型紙摺りの端反碗。外面梅花、枝の文様と丸に菊花文、高台脇に圏線が描かれる。内面口縁部に帯線、見込みに圏線。	19c (明治)
249	〃	〃 鉢	(18.2)	(4.8)	-	灰白色 〃 〃	口縁部は輪花状を呈す。端部は水平な面を成し外方に拡張する。濃い呉須により口縁上面から内面に四方禪文と菊花、花文。外面口縁部に圏線、中位に唐草、睡蓮花か。	
250	〃	陶器 〃	-	(3.1)	(9.0)	浅黄色 暗赤褐色 にぶい橙色	肥前産。内面白化粧土を刷毛塗り、灰釉を施す。外面は鉄釉。削り高台で高台は無釉。	
251	〃	磁器 蓋	-	(2.1)	(3.6)	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面竹、丸に花卉風の文様が描かれる。つまみに二重圏線、つまみ内に「茶」の銘あり。端部は釉剥ぎ。内面雷文帯、圏線、中央に丸に松葉が描かれる。	19c
252	〃	土製品 人形	全長 4.9	全幅 5.7	全厚 0.8	浅黄橙色 〃 〃	人物の胸部。型押し成形、中空。内面はナデ調整、指頭圧痕が残る。	
253	〃	〃 〃	全長 4.9	全幅 3.4	全厚 0.6	浅黄橙色 〃 〃	袖の一部か。内面ナデ調整、指頭圧痕。	
254	ハンダ土坑 2	陶器 灯明皿	(10.6)	2.2	3.6	にぶい黄橙色 〃 〃	受付灯明皿。内面に半透明の灰釉、外面は露胎。内面の堤はやや内傾し、幅 1.1cm の U 字状の括りあり。外面はロクロ目顕著、口縁の一部に煤付着がみられる。	
255	〃	磁器 小杯	-	(2.0)	2.2	灰白色 〃 〃	外面高台に歯文、高台内に落款あり。外方に開く高台。畳付は釉剥ぎ。	19c
256	〃	〃 皿	(9.6)	2.5	3.7	灰白色 〃 〃	内面上下多重圏線間に蝙蝠文を配する。見込み蛇ノ目釉剥ぎ、中央に草文。断面三角形の高台、畳付は釉剥ぎ。底部焼か。	19c
257	〃	〃 〃	-	(1.7)	3.8	灰白色 〃 〃	内面見込み三重の圏線が巡る。蛇ノ目釉剥ぎ。中央に草文。高台畳付は釉剥ぎ。	
258	〃	〃 〃	10.8	2.0	6.2	灰白色 〃 〃	内面山水文、口縁風に呉須が施される。外面高台に圏線、口縁部に文字が巡る。高台内、圏線中央に落款あり。畳付は釉剥ぎ。	19c
259	〃	〃 〃	(10.4)	(2.3)	5.6	灰白色 〃 〃	内面草花文、口縁部に口縁風に呉須が施される。外面口縁部に文字が巡る。高台脇、高台内に圏線あり。高台畳付は釉剥ぎ。	19c
260	〃	〃 碗	-	(3.9)	(6.4)	灰白色 〃 〃	能茶山窯広東形碗。外面高台に圏線。高台内に「茶」の窯印。内面見込み圏線中央に波頭文、残存部分に二箇所目痕あり。やや外方に開く高い高台。畳付は釉剥ぎ。	
261	〃	〃 〃	(10.6)	(5.4)	(3.8)	灰白色 〃 〃	端反碗。内面口縁部退化雷文帯、見込み圏線、中央に寿文。外面草花文。高台に二重圏線が施される。高台畳付は釉剥ぎ。瀬戸美濃系か。	19c
262	〃	〃 〃	(10.2)	5.9	(3.8)	灰白色 〃 〃	端反碗。内面口縁部に略化四方禪文、見込み圏線中央に文様あり。外面は草文か。高台畳付は釉剥ぎ。呉須は鮮明な発色。	19c
263	〃	〃 〃	(10.0)	(4.8)	-	灰白色 〃 〃	端反碗。型紙摺り。内面四方禪文、見込み圏線。外面弧状地、窓絵に亀が描かれる。呉須は鮮明な発色。	19c
264	〃	〃 〃	-	(4.2)	3.7	灰白色 〃 〃	型紙摺り。底部から腰部は丸みを持つ。内面見込み圏線、蛇ノ目釉剥ぎ、砂粒が付着する。外面草花文、高台に圏線。やや雑なつくり。	19c

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
265	ハンダ土坑 2	磁器 蓋物	(10.2)	6.7	(5.2)	灰白色 〃 〃	外面上下多重線間に草の文様が巡る。口縁部は上方に伸び、端部は釉剥ぎ。高台はやや外側に開き、畳付は釉剥ぎ。能茶山窯か。	
266	石垣裏込め	土師質土器 杯	-	(1.6)	(7.2)	にぶい橙色 〃 〃	比較的厚みのある底部。摩耗が著しく調整等は不明瞭。	
267	〃	青磁 碗	(18.0)	(2.3)	-	灰オリーブ色 〃 灰白色	龍泉窯系統 B 類。外面に中心に稜をもたない鑄蓮弁文が描かれる。内外面貫入が入る。	
268	〃	陶器 灯明皿	11.2	2.4	4.6	明黄褐色 〃 浅黄色	受付灯明皿。内面と外面中位まで黄褐色の釉がかかる。内面の堤は僅かに内傾し、幅 1.3cm V 字状の挟りあり。堤端部は釉剥ぎ。	18c か
269	〃	〃 碗	-	(5.2)	5.8	灰オリーブ色 〃 灰色	広東形碗。内面見込み残存部に三箇所の目痕が残る。高台畳付は釉剥ぎ。外面には白化粘土による文様がみられる。	
270	〃	〃 〃	-	(2.7)	(5.6)	灰白色 〃 淡黄色	広東形碗。高台脇より高台内が深く、器壁が薄い。内面見込み残存部に二箇所の目痕あり。高台畳付は釉剥ぎ。	
271	〃	〃 〃	(12.2)	(7.5)	-	にぶい黄褐色 〃 浅黄色	全面に灰釉が施される。丸みを持って立ち上がり、口縁部は直線的に上方に伸びる。口縁端部は丸く収める。器壁は薄い。胎土は磁器質である。	
272	〃	〃 〃	-	(7.0)	(4.6)	黄褐色 〃 にぶい黄色	丸碗。全面的に厚みのある灰釉が施される。高台畳付は釉剥ぎ、一部に砂粒が付着。高台脇より高台内が深く削り込まれる。内外面に細かい貫入が入る。	
273	〃	〃 〃	-	(6.3)	(3.8)	黄褐色 〃 灰黄色	丸碗。全体に灰釉が施され、高台畳付は釉剥ぎ。高台脇より高台が深く削り込まれる。外面体部のロクロ目が比較的前者である。	
274	〃	〃 〃	-	(6.2)	(5.0)	にぶい黄色 〃 灰白色	丸碗。全面に灰釉が施され、細かい貫入が入る。高台脇より高台内が深く削られる。高台畳付は釉剥ぎ。	
275	〃	〃 〃	-	(3.4)	4.6	灰色 黄灰色 にぶい黄褐色	全面に青みがかった釉がつけ掛けされ、外面高台は露胎する。高台脇より高台内が深い削り高台。内面見込み残存部に三箇所の目痕が残る。	
276	〃	〃 皿	-	(4.3)	5.0	黒色 〃 明赤褐色	能茶山窯。鉄釉がつけ掛けされ、外面体部下半と高台は露胎。削り高台。外面口縁下に一条の沈線が巡る。内面見込み蛇ノ目釉剥ぎ、二箇所の目痕が残る。	1820 年以降
277	〃	〃 〃	-	(1.8)	(4.2)	オリーブ黄色 浅黄色 〃	肥前産内野山窯か。削り高台。内面に透明感のある銅緑釉が施される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。外面底部は露胎、つけ掛けされた釉が垂れ付着する。	
278	〃	〃 瓶	-	(2.2)	(6.2)	にぶい黄色 にぶい褐色 にぶい黄色	肥前産。外面高台内まで施釉、白化粘土の刷毛目文様が描かれる。削り底で畳付は釉剥ぎ。内面は無釉。	1690～ 1780 年か
279	〃	〃 播鉢	-	(4.6)	(12.8)	にぶい赤褐色 〃 〃	備前焼。内面密な摺目。外面ロクロ目が残る。	
280	〃	〃 〃	(27.6)	(10.3)	(12.4)	赤色 〃 〃	備前焼か。片口状を呈する。内面に放射状の密な摺目。ロクロ成形後ナデにより口縁部を調整する。	19c
281	〃	〃 匣鉢	-	(5.6)	(14.0)	にぶい褐色 〃 灰色	備前焼。外面底部に糸切痕と板状の圧痕が残る。内面底部に重ね焼きの痕跡あり。内外面ロクロ目が残る。灯明皿の匣鉢として共に流通したか。	
282	〃	〃 火鉢	-	(2.7)	(20.0)	明赤褐色 〃 〃	練り込み手の筒形火鉢。橙色の素地に白色土を練り込む。脚部に浅いアーチ状の挟りが入る。外面底部に刻印あり。	
283	〃	土師質土器 焜炉	-	(7.2)	(17.4)	橙色 〃 黄褐色	回転ナデ成形。断面四角形の高い高台が貼付される。径 0.6cm の小孔が外から内へと穿たれる。	
284	〃	陶器 甕	(29.3)	(5.2)	-	灰オリーブ色 にぶい赤褐色 灰色	全面に褐色釉、肩部の一部に黒色の釉が施される。口縁部は平坦な面を成し、横方向に拡張する。平坦面は一部釉を剥ぎとる。	
285	〃	〃 〃	(38.8)	(4.3)	-	暗赤褐色 〃 灰色	全面に赤褐色の釉。口縁端部は水平な面を成し、横方向に拡張する。端部上面に三から四条の沈線が巡る。肩部以下にも多重の沈線。内面は横方向のナデ。肥前産か。	
286	〃	磁器 皿	(9.7)	2.3	5.6	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面底部に「茶」の窯印。型打成形により口縁部は輪花状を呈す。口唇部に具須を施し、内面に梅樹が描かれる。高台畳付は露胎。	1820 年以降

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
287	石垣裏込め	磁器 皿	-	(1.9)	(4.5)	灰白色 〃 〃	削り高台。外面高台、高台内は無釉。内面見込みに重ね焼きの痕跡残る。	
288	〃	〃 〃	(9.5)	2.9	(4.3)	灰白色 〃 淡黄色	削り高台。高台端部は僅かに外反する。内面見込みに魚文、目痕、砂粒の付着がみられる。外面高台畳付から高台内は無釉。	
289	〃	〃 〃	-	(1.7)	5.6	灰白色 〃 〃	内面山水楼閣文。高台畳付は釉剥ぎ。肥前産か。	
290	〃	〃 〃	(11.7)	3.6	(4.2)	灰白色 〃 〃	内面二重の斜格子、見込みに二重圏線が施される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、砂目が残る。外面高台畳付は釉剥ぎ、砂粒が付着する。	
291	〃	小碗	(7.0)	3.5	(2.4)	灰白色 〃 〃	口縁部は僅かに外反し、口縁端部に口錆が施される。内面に草花文が描かれる。高台畳付は釉剥ぎ。	
292	〃	〃 〃	(7.2)	(3.7)	3.0	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面底部に「サ」の窯印。内面口縁部に帯線、見込み波頭文か。外面高台畳付は釉剥ぎ。	1820年以降
293	〃	碗	(9.9)	5.1	4.2	灰白色 〃 〃	肥前産丸碗。外面梅樹、草花風の文様が描かれる。高台二重圏線、一部三重になる。高台内にも文様。全面施釉され、高台畳付は釉剥ぎ。	
294	〃	〃 〃	-	(2.2)	3.2	灰白色 〃 〃	能茶山窯か。外面中位鋸歯文、下位に松葉の文様。低い高台。	
295	〃	〃 〃	(10.4)	5.2	(4.4)	灰白色 〃 〃	内面口縁部二重圏線、見込みに圏線、蛇ノ目釉剥ぎの中央に斜格子文。外面二重格子文。高台畳付は釉剥ぎ、砂粒が付着する。内面見込み重ね焼きの痕跡あり。	
296	〃	〃 〃	-	(4.0)	4.1	灰白色 〃 〃	外面中位に複数の横線、下位に圏線。内面見込みに土坡風の文様、三箇所が目痕が認められる。全面施釉、高台畳付は釉剥ぎ、高台内の一部に砂粒が付着する。	
297	〃	〃 〃	-	(4.8)	(4.3)	灰白色 〃 〃	能茶山窯か。外面区画文様の中に竹、宝文、下位に菱形、高台に二重圏線が描かれる。高台は高く外方に開く。内面見込みに圏線、中央にも文様あり。貫入がみられる。	
298	〃	〃 〃	(9.4)	(4.6)	-	灰白色 〃 〃	内面口縁部に二重圏線、見込みに圏線。外面蝶、下位に圏線が描かれる。	
299	〃	〃 〃	(11.3)	6.7	5.6	灰白色 〃 〃	肥前産広東形碗。口縁部は斜上方に直線的に伸びる。全面施釉、畳付釉剥ぎ。内面口縁部に二重圏線、見込みに圏線と鷺文。外面に鷺か鶴の文様が描かれる。	
300	〃	〃 〃	-	(4.4)	(5.6)	明緑灰色 〃 灰白色	肥前産広東形碗。内面見込み圏線内に文様、外面草花風の文様、高台との境目に圏線が描かれる。器壁薄い。	
301	〃	〃 〃	-	(3.0)	5.4	明緑灰色 〃 灰白色	肥前産広東形碗。内面見込みに花卉風の文様。断面三角形の高台が付く。畳付は釉剥ぎ。	
302	〃	〃 〃	(10.0)	(4.1)	-	明緑灰色 〃 〃	外面菊唐草風、内面崩れた雷文帯、もしくは縄目の文様が描かれる。口縁部は僅かに外反する。全体に透明釉がかかり、呉須は鮮明な発色。	
303	〃	〃 〃	(11.0)	(3.9)	-	灰白色 〃 〃	外面松樹文、内面口縁部二重圏線、見込みに圏線が巡る。呉須は鮮明な発色。口縁部は僅かに外反する。	
304	〃	〃 〃	(11.6)	6.3	4.3	灰白色 〃 〃	端反碗。外面口縁部と高台に二重圏線、松と草花風の文様。内面口縁部と見込みに二重圏線、見込み中央部にも文様あり。畳付けは釉剥ぎ。瀬戸か。呉須は鮮明な発色。	
305	〃	〃 〃	(10.4)	5.9	(4.0)	灰白色 〃 〃	端反碗。302と同一個体か。内面見込みに丸に鶴文。外面高台二重圏線が巡る。外面高台畳付は釉剥ぎ。呉須は鮮明な発色。	
306	〃	〃 〃	-	(1.9)	4.0	灰白色 〃 〃	内面見込みに寿文。外面は木賊文か。呉須は鮮明な発色。高台畳付は釉剥ぎ。	
307	〃	蓋	-	(1.9)	(4.8)	灰白色 〃 〃	肥前産。内面見込み圏線内に鷺文、外面稲束文が描かれる。	
308	〃	〃 〃	(9.8)	(2.4)	-	灰白色 〃 〃	外面多重圏線に折枝竹文。内面口縁部に二重圏線、見込みに圏線、中央に文様あり。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
309	石垣裏込め	磁器 段重	(11.8)	3.6	(11.8)	明緑灰色 〃 灰白色	能茶山窯か。外面上下に帯線、中央に歯状の文様が巡る。口唇部と内面口縁の一部及び外面底部は釉を剥ぎ取る。	
310	〃	〃 火入	-	(4.1)	(7.4)	灰白色 明オリープ灰色 灰白色	筒形を呈する。外面に青磁釉が施され、底部は蛇ノ目高台、畳付は銹釉。内面底部に重ね焼きの痕跡がみられる。	
311	〃	〃 水滴	-	(2.9)	-	灰白色 暗青灰色 灰白色	型押し成形により波頭風の文様が配される。内面ナデ調整。	
312	表採	青磁 碗	-	(4.8)	-	灰オリープ色 〃 灰白色	龍泉窯系統 B 類。外面に鎬蓮弁文が施される。	
313	〃	陶器 壺	-	(4.0)	-	にぶい黄褐色 〃 褐灰色	備前焼壺の胴部片か。外面三条ないし四条一単位の沈線が巡る。内面横方向のナデ調整。	
314	〃	〃 水屋甕	-	(5.1)	-	灰褐色 褐灰色 灰色	備前焼。外面肩部にヘラ状工具による崩れた波状文が施される。内外面は横方向のナデ調整。	
315	〃	〃 甕	(39.7)	(10.0)	-	にぶい褐色 灰褐色 褐灰色	常滑焼。外面に自然釉がかかる。口縁部は外反、上下に拡張し、端部の側面はナデにより凹線状になる。内外面横方向のナデ調整が施される。	13c 後半 ～ 14c
316	I 層	陶器 皿	-	(2.4)	5.0	灰黄褐色 にぶい赤褐色 〃	能茶山窯の鉄釉皿。外面下半から高台は露胎。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、重ね焼きの痕跡がみられる。高台脇より高台内を深く削る。	
317	〃	磁器 灯明皿	11.1	2.5	4.4	灰白色 灰黄色 灰白色	灯明皿。内面と外面口縁の一部に灰白色の釉。内面口縁部に型作りの菊花を貼付、見込みから口縁に六条の櫛目。内面見込みに二箇所の目痕あり。ロクロ成形。	
318	〃	〃 皿	13.4	3.3	7.6	灰白色 〃 〃	菊皿。型打成形により菊花状を呈し、端部は水平な平坦面を成す。内面見込みに三箇所のハマ痕あり。蛇ノ目高台。釉に細かい粒状の呉須が混じる。	
319	〃	〃 〃	(10.8)	1.8	(6.2)	灰白色 〃 〃	型紙摺りにより、内面亀甲、花、菱形の地文様と文字、見込みに草花文が染付される。高台畳付は釉剥ぎ。	
320	〃	〃 大皿	-	(4.7)	-	灰白色 〃 〃	肥前産大皿。口縁端部は僅かに肥厚し、丸く収める。内面口縁部半菊唐草文、見込みに波頭文が染付される。呉須は鮮やかな発色。	
321	〃	〃 角皿	-	(2.6)	(20.3)	明緑灰色 〃 〃	肥前産角皿。内面見込み雷文帯。外面高台と高台内に圏線が巡る。高台畳付は釉剥ぎ。	
322	〃	〃 碗	(10.5)	(5.0)	-	明緑灰色 〃 青灰色	端反碗。内面口縁部格子文、見込みに圏線、蛇ノ目釉剥ぎが施される。外面上下圏線間に縞文、蔓草文か。	19c
323	〃	〃 小碗	(7.3)	3.4	2.3	灰白色 〃 〃	内面見込みに濃い呉須により松樹が描かれる。口縁部口銹、端部は僅かに外反する。小さく低い高台、畳付は釉剥ぎ。	
324	〃	〃 紅皿	(4.4)	1.5	1.2	灰白色 〃 〃	型押し成形により貝殻状を呈す。口縁端部は水平な平坦面を成し、内面と外面口縁部のみ施釉される。小さく低い高台。	1820 年 以降か
325	〃	〃 瓶	-	(5.0)	2.3	灰白色 〃 〃	肥前産神仏用の瓶。外面胴部中に幅広の帯線、草花、蝶の色絵が施される。高台内、畳付は無釉。	19c
326	〃	窯道具 トチン	-	5.9	2.8	灰色 〃 〃	外面にナデと指頭圧痕。下面に凹凸あり。	
327	II 層	土師質土器 焙烙	32.9	8.8	10.9	にぶい橙色 〃 〃	体部外面に「信心施主為息〇延命五〇〇〇富貴自在子孫繁栄祈所」、内面見込み、外面底部にも墨書が認められる。内面に「享保〇年」の文字あり。	
328	〃	〃 小皿	8.2	1.7	4.2	橙色 〃 〃	回転ナデ調整、外面底部回転糸切り。円柱造り。	
329	〃	〃 〃	7.5	1.5	5.1	にぶい黄褐色 〃 〃	回転ナデ調整、外面底部回転糸切り。円柱造り。	
330	〃	〃 〃	8.0	1.9	4.4	橙色 〃 〃	回転ナデ調整、外面底部回転糸切り。円柱造り。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
331	Ⅱ層	土師質土器 小皿	7.8	1.4	5.1	浅黄橙色 〃 〃	回転ナデ調整, 外面底部回転糸切り。円柱造り。	
332	〃	〃 〃	8.3	1.7	4.4	にぶい橙色 〃 〃	回転ナデ調整, 外面底部回転糸切り。円柱造り。	
333	〃	〃 〃	8.5	1.8	4.6	橙色 〃 〃	回転ナデ調整, 外面底部回転糸切り。円柱造り。	
334	〃	〃 〃	8.6	1.8	4.3	浅黄色 〃 〃	回転ナデ調整, 外面底部回転糸切り。円柱造り。	
335	〃	〃 〃	8.0	1.6	4.4	橙色 〃 〃	回転ナデ調整, 外面底部回転糸切り。円柱造り。	
336	〃	陶器 皿	-	(2.6)	(4.9)	オリーブ褐色・浅黄色 〃・にぶい黄褐色 褐色	内外面に鉄釉が施され, 外面高台は露胎する。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。能茶山または肥前産か。	19c
337	〃	〃 碗	-	(4.1)	(4.4)	灰色 にぶい黄色 にぶい橙色・灰色	内面及び外面体部上半まで灰釉が施される。高台脇の屈折部はケズリにより明瞭な稜となり, 斜上方に直線的に伸びる。断面四角形, 「ハ」の字に開く高台。	1594～ 1610
338	〃	〃 〃	-	(1.9)	3.7	黒色 橙色 〃	肥前産。内面に鉄釉, 外面は露胎する。削り高台。	
339	〃	〃 〃	(12.5)	7.8	(4.2)	浅黄色 〃 淡黄色	外面はロクロ目顕著。口縁端部は僅かに外反する。全面に灰釉が薄く施され, 高台畳付は釉剥ぎ。削り高台で高台脇より高台内が深くなる。細かい貫入が入る。	
340	〃	〃 〃	12.6	(6.0)	-	灰白色 〃 浅黄色	全面に灰釉が施され, 外面口縁の一部に釉が厚く溜まり垂れる。口縁部は上方に伸び, 外面腰部は僅かに段状になる。	
341	〃	〃 火入	(9.2)	7.3	5.3	にぶい褐色 〃 灰黄色	唐津産。内面口縁部から外面下半まで灰釉。外面口縁部帯線, 下端に圏線, 間に山水文か。口縁部内方向に折り返し玉縁状で断面中空になる。見込み重ね焼きの痕跡。	1650～ 1690
342	〃	〃 播鉢	-	(2.8)	(10.2)	にぶい赤褐色 橙色 にぶい褐色	備前焼。内面九条一単位の放射状の摺目, 見込みも放射状の摺目。外面横方向のナデ調整。使用痕あり。	近世
343	〃	〃 〃	(30.2)	(3.7)	-	にぶい赤褐色 〃 〃	口縁外面は三段。口縁上端部の断面は円形を呈す。内面摺目の後, 口縁部は横方向のナデを施す。	18c 末～ 19c 中
344	〃	土師質土器 焙烙	-	(3.3)	-	にぶい褐色 褐色 にぶい橙色	内外面横方向のナデ調整。口縁端部は平坦な面を成し, 面取りを行う。外面口縁直下はナデにより僅かに凹む。外面の一部に煤が付着する。	
345	〃	瓦質土器 〃	(34.0)	(1.9)	-	灰色 〃 〃	口縁部は大きく外反し, 端部は肥厚, 外傾する平坦な面を成す。内面及び口縁端部は回転ナデ, 外面口縁部以下は表面が剥離する。	18c～ 幕末
346	〃	陶器 鍋	-	(2.8)	(7.3)	灰白色 にぶい黄褐色 〃	内面灰釉, 外面は露胎する。低い削り高台, 高台脇は凹状で明瞭な段になる。短い三足を貼付する。外面底部に煤が付着する。	
347	〃	〃 火鉢	(19.8)	(3.1)	-	灰オリーブ色 暗オリーブ色 〃	瀬戸焼。外面及び内面口縁部まで緑釉が施される。頸部はヘラ状工具による鍋が施され, 直線的に上方に伸びる。口縁端部は外方に開く。	19c 初
348	〃	瓦質土器 〃	-	(3.0)	28.4	黄灰色 〃 灰黄色	底部のみ残存。断面四角形の高台, 筒形を呈すると思われる。内面底部ナデ調整。	
349	〃	陶器 甕	(34.9)	(4.8)	-	灰赤色 〃 灰色	全面に赤褐色の釉が施される。口縁端部は水平な面を成し, 横方向に拡張する。端部上面に四条の沈線, 外面肩部以下にも多重の沈線が巡る。内面は横方向のナデ調整。	17c 後半 か
350	〃	磁器 皿	(11.9)	3.5	(4.5)	灰白色 〃 〃	見込み蛇ノ目釉剥ぎ, 重ね焼きの痕跡が二重に残り, 一方にはアルミナ砂が付着する。内面見込み二重圏線, 斜格子文が染付される。	
351	〃	〃 〃	(14.1)	4.1	(7.0)	白色 〃 〃	型打成形により口縁部は輪花状を呈す。口縁端部は僅かに上方に伸びる。内面に菊花の色絵が施される。外面高台畳付は釉剥ぎ。	
352	〃	〃 〃	12.3	2.8	7.5	白色 灰白色 -	銅板転写。口縁端部に口銹風に褐色の釉を施し, 丸に桜花文を染付する。高台畳付は釉剥ぎ。瀬戸美濃系か。	明治後半 から大正

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
353	Ⅱ層	磁器 碗	—	(2.8)	—	白色 〃 〃	能茶山窯広東形碗。外面体部下位に圏線、高台に二重圏線、高台内に「サ」の窯印が施される。内面見込みに圏線中央に崩れた波頭文。残存部に二箇所の目痕が残る。	19c
354	〃	〃 〃	—	(2.7)	(3.6)	淡黄色 〃 灰白色	能茶山窯丸碗。外面に稲束文、高台内に「サ」の窯印。内面見込み圏線中央に波頭文。低く小さな高台。畳付は釉剥ぎ。	19c
355	〃	〃 〃	—	(3.5)	—	灰白色 〃 〃	外面に梅花文、下部に多重圏線。内面見込みに圏線が施される。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。高台と口縁部は欠損する。砥部か。	
356	〃	〃 〃	(10.2)	5.4	(3.4)	灰白色 〃 〃	端反碗。胴部上位に四条の横線が巡る。外面上下圏線間に山水文。高台脇と高台に圏線、内面口縁部に二重圏線、見込みにも圏線が巡る。内面見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	
357	〃	〃 〃	—	(5.1)	(4.2)	灰白色 〃 〃	内面見込みに圏線、蛇ノ目釉剥ぎが施される。外面山水文、高台脇と高台に圏線が巡る。高台に歪みあり。畳付釉剥ぎ。	
358	〃	〃 蓋	—	(1.4)	(3.6)	灰白色 〃 〃	能茶山窯。外面笹文か。二重圏線、つまみ内に「茶」の窯印、つまみ端部は釉剥ぎ。内面圏線内に丸に松葉文。	19c
359	〃	〃 仏飯器	8.4	7.2	5.5	白色 〃 〃	大型の仏飯器。口縁部は外方に開き、端部は上方に尖り気味に仕上げる。外面圏線間に暦手文か。文様はにじむ。高台畳付は釉剥ぎ。	
360	〃	〃 小杯	(6.4)	2.9	2.6	灰白色 〃 白色	内面花または鳥の白抜きの文様が染付される。口縁端部は外反する。低く小さい高台、畳付が釉剥ぎ。	
361	〃	〃 〃	7.4	3.2	2.8	灰白色 〃 〃	内面、旗に「伊野東町 呉服 太物 糸屋店 傘」の染付あり。口縁端部は尖り気味に仕上げる。薄く「ハ」の字に開く高台。畳付釉剥ぎ。	戦前
362	〃	〃 盃	全長 (4.3)	全幅 (5.9)	全厚 2.7	灰白色 〃 〃	九谷焼鬼面盃。鬼面の顎部分に「九谷」の印、孔径0.3cmの穿孔あり。内面にはおたふくの面が描かれる。眼球と牙に金色の上絵付の痕跡あり。	
363	〃	土製品 土錘	全長 3.2	全幅 1.2	全厚 1.2	明赤褐色 橙色 〃	管状土錘。孔径0.6cm。重量2.74g。	
364	〃	瓦 軒平瓦	平瓦厚 1.5	瓦当高 4.4	文様 区高 3.0	灰色	中心飾りは葛文。	
365	〃	〃 〃	平瓦厚 1.9	瓦当高 (3.7)	文様 区高 (2.4)	灰色	中心飾りは三つ巴文、左巻。唐草は上向き-下向き-飛び唐草。	
366	〃	和鏡	面径 10.1	面厚 0.1	—	—	蓬萊紋鏡。浜松双鶴文。周縁頂厚0.7cm、周縁幅0.2cm。重量115.59g。	
367	〃	鉄製品 鉄釘	全長 5.2	全幅 0.8	全厚 0.5	—	重量7.77g。全長約5cmの角釘。釘頭は幅9mm、胴部は5mm角を測る。	
368	〃	銅製品 煙管	残存長 5.8	火皿径 1.5	—	—	側面に継ぎ目が残る。重量5.00g。	
369	〃	石製品 砥石	全長 5.5	全幅 4.1	全厚 2.3	—	重量62.00g。細粒砂岩製。二面を砥石として使用。	
370	〃	〃 〃	全長 13.6	全幅 2.7	全厚 3.6	—	重量162.80g。砂岩製の荒砥。長辺の二面を砥石として使用。短辺の一部にも使用痕あり。	
371	〃	〃 石臼	全長 19.5	全幅 17.3	全厚 6.8	—	重量3.14kg。砂岩製。中心部に軸受け、片面に放射状の摺目。側面に方形の挟りあり。摺目は摩耗する。	
372	〃	〃 五輪塔	全長 27.2	全幅 27.3	全厚 17.7	—	砂岩製の火輪。重量19.70kg。	
373	Ⅲ層	土師質土器 皿	6.6	2.3	4.0	にぶい橙色 〃 〃	灯明皿。内外面に摩耗と剥離が著しい。口縁部は斜上方に直線的に伸び、端部は丸く収める。内面と外面口縁部の一部にタールが付着する。	
374	〃	〃 小皿	(7.2)	1.6	(4.2)	にぶい橙色 〃 〃	体部下位はやや肥厚し、口縁部は斜上方に伸びる。内外面回転ナデ調整、外面底部回転糸切り。	

番号	造構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
375	Ⅲ層	土師質土器 小皿	(8.6)	1.6	(6.2)	橙色 〃 〃	灯明皿。口縁部は緩やかに立ち上がり、端部は丸く収める。摩耗が著しいが、内面ナデ調整、外面底部回転糸切り。内外面の一部に煤が付着する。	
376	〃	〃 〃	-	(1.1)	4.4	橙色 〃 〃	内面回転ナデ、見込みは平行ナデ調整。外面回転ナデ、底部回転糸切り、板状の圧痕が残る。	
377	〃	〃 杯	(12.2)	2.9	4.5	橙色 〃 〃	口縁部は外方に開き、端部はやや尖り気味に仕上げる。回転ナデ調整、内面はロクロ目顕著。内面口縁の一部に煤付着。外面底部回転糸切り。底部の一部が段状になる。	近世
378	〃	〃 〃	-	(3.1)	(7.2)	にぶい橙色 〃 にぶい黄橙色	内外面摩耗著しく調整等は不明瞭。外面回転ナデ調整、外面底部回転糸切り。	
379	〃	〃 〃	-	(2.3)	(6.8)	にぶい橙色 〃 〃	外面底部と体部の境目がナデにより段になる。内外面回転ナデ調整、外面底部回転糸切り。	
380	〃	青磁 〃	(11.6)	(1.9)	-	灰白色 〃 〃	龍泉窯系青磁杯。口縁部は大きく外方に開き、端部は丸く収める。外面は退化した蓮弁文が施される。	
381	〃	〃 碗	(16.4)	(3.6)	-	灰色 〃 〃	龍泉窯系碗 B 類。外面に鎗蓮弁文。蓮弁の中心に稜はみられない。	13c
382	〃	瓦質土器 鉢	(19.0)	(3.2)	-	灰黄色 黄灰色 にぶい黄色	口縁部は、斜上方に伸びる。口縁端部は平坦な面を成す。内外面横方向のナデ調整、外面指頭圧痕が残る。	14c 後半 ～15c 前半
383	〃	〃 鍋	(21.5)	(3.7)	-	灰色 〃 〃	膨らみのある体部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部は水平な平坦面を成す。	14c 後半
384	〃	〃 羽釜	(19.9)	(4.1)	-	灰色 〃 〃	張りのある胴部。口縁部は内湾し、端部は内傾する面を成す。断面三角形の短い鑊がつく。播磨型。外面指頭圧痕、横方向のナデ、内面横方向のナデ調整が施される。	
385	〃	〃 〃	25.7	(4.6)	-	灰色 〃 〃	関西系の羽釜。口縁部はやや肥厚し、端部は内傾する平坦面。断面三角形の短い鑊が貼付される。外面指頭圧痕、横方向のナデ、内面横方向のナデ調整が施される。	14c
386	〃	土師器 〃	(24.4)	(3.5)	-	にぶい黄色 〃 〃	外面口縁部はナデにより段状、内側に引き出し尖り気味に仕上げる。断面長方形の水平な鑊が貼付され、接合部の下端はケズリにより凹む。内面横方向のナデ調整。	15c 前半
387	〃	〃 鍋	-	(4.1)	-	にぶい黄橙色 〃 〃・赤橙色	口縁端部は上方に尖り気味に仕上げ、外傾する面を成す。面の中央部は僅かに凹む。	15c 後半 ～16c
388	〃	土師質土器 羽釜	-	(3.3)	-	にぶい黄橙色 〃 〃	退化した鑊が口縁下に貼付される。口縁端部は丸く収める。内外面横方向のナデ調整、内面指頭圧痕あり。	15c
389	〃	東播系須恵器 捏鉢	(32.2)	(4.0)	-	灰色 にぶい橙色 にぶい黄橙色	口縁端部は上方に拡張する。内外面とも横方向のナデ調整。焼成不良で外面はにぶい橙色を呈す。	
390	〃	陶器 播鉢	(44.6)	(7.3)	-	にぶい赤褐色 褐灰色 灰色	備前焼。内面口縁直下に稜を持ち、端部は先細りになる。外面口縁には二条の凹線が巡る。内外面横方向のナデ調整、斜方向の疎らな摺目が入る。	16c 後半
391	Ⅳ層	弥生土器 壺	(16.0)	(9.2)	-	にぶい黄橙色 橙色 黄灰色	頸部は上方に伸び、口縁部は外反し端部は平坦面を成す。外面口縁部指頭圧痕、頸部横方向のナデ調整、胴部との境目に接合痕あり。内面は縦方向のナデ調整と指頭圧痕。	
392	〃	土師器 杯	-	(0.7)	7.7	にぶい黄橙色 〃 〃	底部以外は欠損する。内面見込みナデ調整、外面底部ヘラ切り。	10c
393	〃	〃 〃	-	(2.4)	(6.9)	にぶい黄橙色 橙色 〃	外面底部と胴部の境は段になり、円盤状を呈す。内外面横方向のナデ調整。	
394	〃	〃 〃	14.6	5.5	(9.4)	にぶい橙色 〃 〃	内面と外面の一部に煤が付着する。口縁部は斜上方に伸び、端部は丸く収める。摩耗が著しく調整等は不明瞭。	13c
395	〃	〃 杯または碗	(12.7)	(3.5)	-	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	口縁部は斜上方に直線状に伸びる。器壁薄い。摩耗著しく調整等は不明瞭。	
396	〃	〃 碗	(14.6)	4.8	6.8	にぶい黄色 明赤褐色 褐灰色	輪高台碗。断面楕円形のやや外方に開く高台が貼付される。内面は摩耗により調整等は不明瞭。外面は横方向のナデ調整。	11c 後半 ～12c

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
397	IV層	緑釉陶器 不明	-	(1.5)	-	淡黄色 〃 〃	摩耗著しい。内外面の一部に僅かに釉が残る。	
398	〃	黒色土器 椀	-	(0.8)	(8.8)	黒色 にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	内面のみ黒色処理(A類)内面見込みは細かいヘラミガキ、断面三角形の低い高台が付く。胎土に雲母片を含む。搬入品。	9c末～ 10c初
399	〃	土師器 甕	(21.7)	(4.3)	-	にぶい橙色 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反する。端部は上方に拡張、平坦面を成し中央は凹む。外面頸部より上位は横方向のナデ、胴部はハケ。内面口縁部に横方向のハケ。在地系。	10c
400	〃	〃 〃	(26.7)	(3.0)	-	にぶい褐色 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反する。端部は上方に拡張、平坦面を成し中央は凹む。内面横と斜方向の粗い単位のハケ、外面横方向のハケ調整。外面に煤付着。搬入品。	
401	〃	〃 〃	-	(9.9)	-	橙色 灰黄褐色 橙色	胴部片。頸部は「く」の字になり、口縁部にかけて外反する。胴部上位は横、斜方向のハケ、下位にタタキ目が残る。内面ハケ、ナデ調整。外面の一部に煤付着。在地系。	10～11c
402	〃	〃 〃	-	(11.4)	-	明褐色 にぶい黄褐色 明黄褐色	胴部片。外面上位は縦方向、中位に斜方向、下位は横方向のハケ調整。内面ナデ、指頭圧痕、一部にハケ調整が施される。胎土に雲母片含む。搬入品。	10c
403	〃	須恵器 〃	-	(4.8)	-	灰色 〃 灰白色	甕の底部片。外面格子状のタタキ目が残る。内面ナデ調整、指頭圧痕。	
404	〃	東播系須恵器 捏鉢	(26.0)	(2.7)	-	灰色 〃 〃	口縁部は僅かに肥厚し、上下に拡張し玉縁状を呈する。外面は横方向のナデ調整と指頭圧痕、内面は横方向のナデ調整が施される。	12c末～ 13c初
405	〃	〃 〃	-	(3.4)	-	灰白色 灰黄色 黄灰色	酸化焙焼成。口縁部は僅かに肥厚し、上下に拡張する。外面横方向のナデ調整、内面は摩耗のため調整等不明瞭。	12c末～ 13c初
406	〃	土師質土器 小皿	7.1	1.9	4.3	橙色 浅黄橙色 〃	外面底部は僅かに段状になる。口縁部は斜上方に伸び、端部は丸く収める。内面は回転ナデ調整、外面底部回転糸切り。摩耗著しい。	
407	〃	〃 皿	(8.4)	2.2	(5.5)	橙色 〃 〃	厚みのある底部。口縁部は斜上方に伸び、端部は丸く収める。内面見込み中央は凹む。内外面回転ナデ調整、外面底部回転糸切り。	
408	〃	〃 〃	-	(0.8)	3.8	にぶい橙色 〃 〃	内面見込みに煤の付着あり。内外面回転ナデ調整、外面底部回転糸切り。円柱作りか。	
409	〃	〃 杯	(12.6)	3.3	7.3	橙色 〃 〃	口縁部は斜上方に直線的に伸び、端部はやや尖り気味に仕上げる。内外面回転ナデ、内面見込みは平行ナデ調整。外面底部は回転糸切り、箕子状の圧痕が残る。	
410	〃	〃 〃	(12.8)	3.3	(5.2)	橙色 〃 〃	口縁部は緩やかに外反する。内外面回転ナデ調整。底部は摩耗著しいが板状の圧痕が僅かに残る。	
411	〃	〃 〃	(12.3)	3.2	(9.1)	にぶい橙色 〃 〃	口縁部は比較的上方に直線的に伸び、端部は丸く収める。内面回転ナデ、見込み平行ナデ調整。外面回転ナデ、底部回転糸切り。	
412	〃	〃 〃	-	(1.8)	(9.4)	にぶい橙色 〃 〃	内面と外面の一部に煤が付着する。外面底部は段状になり、口縁に向けて斜上方に伸びる。外面底部は回転糸切り。	13c
413	〃	〃 羽釜	(27.2)	(3.5)	-	橙色 〃 〃	断面三角形の鑊の下側に煤付着。口縁部は内面側に肥厚しやや尖り気味に仕上げる。内面横方向のナデ、ハケ調整、外面横方向のナデ調整。胎土に雲母片含む。搬入品。	
414	〃	〃 〃	-	(4.3)	-	橙色 灰黄褐色 橙色	断面三角形の短い鑊が付く。鑊部上位は横方向のナデ、下位は指頭圧痕、胴部タタキ目が残る。内面横方向のナデ調整。外面は二次被熱を受ける。	
415	〃	瓦質土器 〃	-	(5.1)	-	黄灰色 〃 灰白色	断面楕円形の長い鑊が付く。口縁部は内湾する。外面鑊上部は強い横方向のナデにより段状になる。内面も横方向のナデ調整。	14c末～ 15c中
416	〃	〃 〃	(24.4)	(3.5)	-	灰色 〃 灰白色	口縁部は拡張し水平な面を成す。口縁端部は強いナデにより僅かに内湾する。断面楕円形の水平な鑊が付く。鑊下端に接合痕が残る。	13c後～ 14c前
417	〃	〃 〃	(26.2)	(5.9)	-	黄灰色 灰色 黄灰色	胴部から口縁部は内湾し、短い断面四角形の鑊が付く。外面指頭圧痕、横方向のナデ。内面口縁部横・斜方向のナデ調整。外面に煤が付着する。鑊の接合部が顕著である。	13c後～ 14c前
418	〃	〃 鍋	(16.0)	(5.2)	-	灰色 〃 灰白色	口縁部は短く直立する。端部は内側に摘み、やや尖り気味に仕上げる。外面指頭圧痕、ナデ調整。内面横方向のナデ調整。	14c中～ 15c中
419	〃	〃 〃	-	(5.5)	-	灰白色 灰色 灰白色	外面に薄い粘土帯を貼付する。内面横方向のナデ調整により胴部中位は段状になる。外面横方向のナデ、指頭圧痕。胴部下半は煤が付着する。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
420	IV層	瓦質土器 羽釜脚	-	(4.3)	-	- 黄灰色 灰黄色	足付羽釜の脚部。縦方向のナデ調整が施される。	13c 後～ 14c
421	〃	〃 播鉢	-	(5.3)	-	灰白色 〃 灰色	内面五条の疎らな摺目あり。口縁部は片口状で端部は平坦な面を成す。外面は摩耗し、下位は剥離する。	14c～15c
422	〃	青磁 杯	(15.8)	(2.0)	-	灰白色 〃 〃	龍泉窯系青磁杯。口縁部は大きく外反する。口縁端部は僅かに肥厚し丸く収める。	
423	〃	〃 盤	(22.4)	(1.8)	-	オリーブ灰色 〃 灰白色	口縁部以下欠損。内面に明瞭な稜を持つ。口縁端部は上方に引き上げ、玉縁状を呈する。	
424	〃	〃 碗	-	(2.4)	(4.9)	灰オリーブ色 〃 灰白色	龍泉窯系統B類。厚みのある底部に断面楕円形の高台。全面施釉後、高台内の釉を輪状に削り取る。外面に鎬蓮弁文の一部がみられる。内面見込みに花文。	
425	〃	〃 〃	(16.0)	(5.2)	-	灰オリーブ色 〃 灰色	龍泉窯系統B1類。外面鎬蓮弁文。蓮弁中心の稜は明瞭。釉調は灰オリーブ色を呈す。	13c 前
426	〃	〃 〃	(18.0)	(4.5)	-	オリーブ灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統B1類。外面鎬蓮弁文。蓮弁中心の稜はやや不明瞭。	13c 前
427	〃	〃 〃	(17.6)	(3.0)	-	オリーブ灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統B1類。外面に鎬蓮弁文。蓮弁中心の稜は明瞭。	13c 前
428	〃	〃 〃	(18.4)	(3.6)	-	明緑灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統B1類。外面に鎬蓮弁文。蓮弁中心の稜はやや不明瞭。	13c 前
429	〃	〃 〃	(16.6)	(5.2)	-	オリーブ灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統B類。外面に鎬蓮弁文。蓮弁中心の稜は明瞭。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸く収める。全体に貫入が入る。	13c 前
430	〃	〃 〃	(16.1)	(3.0)	-	灰オリーブ色 〃 灰白色	龍泉窯系統B1類。外面鎬蓮弁文。蓮弁中心の稜は明瞭。	13c 前
431	〃	〃 〃	(14.4)	(3.9)	-	灰オリーブ色 〃 灰白色	龍泉窯系統D類。無文。口縁部は端反型を呈す。	15c 前
432	〃	〃 〃	-	(3.7)	5.0	灰オリーブ色 〃 浅黄橙色	無文。厚みのある底部に断面U字型の高台。全面施釉後、高台内の釉を輪状に削り取る。胎土が陶器質で重量感あり。龍泉窯系統E類か。	15c 後
433	〃	〃 〃	(15.2)	(4.9)	-	オリーブ灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統B4類。外面ヘラ描きの細蓮弁文。	15c 後～ 16c 前
434	〃	〃 〃	(16.1)	(5.1)	-	明オリーブ灰色 〃 灰白色	龍泉窯系統B4類。外面ヘラ描きの細蓮弁文。	15c 後～ 16c 前
435	〃	青花 皿	-	(1.3)	(7.0)	明緑灰色 灰白色 〃	染付皿B群。内面見込みに玉取獅子文、外面牡丹唐草文。断面三角形の低い高台。高台内と畳付は釉をかきとる。	15c 中～ 16c 中
436	〃	白磁 〃	(10.9)	2.6	(6.0)	灰白色 〃 〃	白磁X類。口縁部小範囲は釉剥ぎ。底部から口縁部にかけて直線的に斜上方に伸びる。	13c 後～ 14c 初
437	〃	〃 〃	(11.7)	(2.4)	-	灰白色 〃 〃	白磁IX類。口縁部小範囲は釉剥ぎ。	13c 後～ 14c 初
438	〃	〃 〃	-	(1.5)	(4.3)	灰黄色 〃 淡黄色	白磁D類。断面四角形の高台。外面高台脇以下は釉をかき取る。体部中位より腰折れ。胎土は陶器質。	15c 前
439	〃	陶器 播鉢	(34.4)	(5.6)	-	にぶい褐色 〃 にぶい橙色	口縁部は上下に拡張し、断面三角形状を呈す。内外面横方向のナデ調整。	15c
440	〃	〃 〃	(39.2)	(6.6)	-	灰褐色 〃 〃	水肥した胎土。口縁部は「く」の字状になり、端部は上方に伸びる。口唇部は僅かに凹む。内面に五条一単位の疎らな摺目。内外面に横方向のナデ調整。	15c 後～ 16c 前半
441	〃	〃 甕	(27.7)	(4.6)	-	暗褐色 〃 灰色	備前焼。口縁端部は外方に折り曲げて玉縁状になる。内外面横方向のナデ調整。	14c 前半
442	〃	炆器 〃	-	(8.4)	-	灰褐色 褐灰色 灰褐色	頸部と胴部上位のみ。外面頸部に自然釉がかかる。内外面横方向のナデ調整。備前焼か。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
			口径	器高	底径			
443	IV層	土製品 土錘	全長 4.8	全幅 1.8	全厚 1.8	明黄褐色 〃 〃	管状土錘。孔径 0.6cm。重量 11.77g。	
444	〃	〃 〃	全長 4.2	全幅 2.4	全厚 2.2	橙色 〃 〃	管状土錘。比較的大型。孔径 0.9cm。重量 16.31g。	
445	〃	〃 〃	全長 5.7	全幅 1.5	全厚 1.5	橙色 〃 〃	管状土錘。孔径 0.4cm。重量 10.07g。	
446	〃	〃 〃	全長 4.9	全幅 1.3	全厚 1.2	にぶい黄褐色 〃 〃	管状土錘。孔径 0.4cm。重量 4.97g。	
447	〃	〃 〃	全長 4.9	全幅 1.4	全厚 1.3	にぶい橙色 〃 〃	管状土錘。孔径 0.5cm。重量 7.18g。	
448	〃	〃 〃	全長 3.7	全幅 1.0	全厚 1.0	にぶい黄褐色 〃 〃	管状土錘。摩耗著しい。孔径 0.4cm。重量 3.00g。	
449	〃	〃 〃	全長 3.9	全幅 1.4	全厚 1.4	にぶい黄褐色 〃 〃	管状土錘。孔径 0.6cm。重量 4.91g。	
450	〃	〃 〃	全長 2.8	全幅 1.1	全厚 1.1	橙色 〃 〃	管状土錘。孔径 0.4cm。重量 2.02g。	
451	〃	〃 〃	全長 3.1	全幅 1.2	全厚 1.1	にぶい橙色 〃 〃	管状土錘。孔径 0.5cm。重量 2.37g。	
452	〃	鉄製品 雁股鎌	全長 6.2	全幅 2.8	全厚 0.7	-	重量 12.60g。茎部は 0.3cm角。	
453	〃	〃 包丁	全長 4.0	全幅 3.3	全厚 1.0	-	重量 14.10g。包丁の切先部か。	
454	〃	銅製品 飾金具	全長 3.5	全幅 3.6	全厚 0.1	-	重量 3.49g。表面と裏面にそれぞれ径の異なる輪状の突起が巡る。	
455	〃	鉄滓	全長 5.6	全幅 3.8	全厚 3.1	-	重量 67.50g。	
456	〃	〃	全長 5.4	全幅 5.2	全厚 2.9	-	重量 79.30g。	
457	〃	〃	全長 5.5	全幅 4.9	全厚 3.0	-	重量 80.50g。	
458	〃	〃	全長 5.8	全幅 3.9	全厚 1.8	-	重量 44.00g。	
459	〃	銭貨	内径 (mm) 20.00	外径 (mm) 25.00	銭厚 (mm) 1.20	-	内郭外径 8.00mm、内郭内径 6.00mm、文字面厚 0.90mm、重量 2.58g。	
460	〃	石製品 石鏃	全長 2.6	全幅 2.2	全厚 0.3	-	重量 1.80g。チャート製。表面側縁に加工痕が残る。平基式。	
461	〃	〃 碁石	全長 1.4	全幅 1.4	全厚 0.6	-	重量 1.60g。チャート製。黒色で、扁平な円形を呈する。	
462	〃	〃 〃	全長 1.6	全幅 1.6	全厚 0.4	-	重量 1.70g。砂岩製。灰色で、扁平な円形を呈する。	
463	〃	〃 砥石	全長 12.3	全幅 7.8	全厚 3.9	-	重量 537.90g。流紋岩製。扁平な円形の石の三面を使用する。一面の中央に敲打痕が残る。	
464	〃	〃 〃	全長 14.9	全幅 3.2	全厚 2.8	-	重量 780.00g。細粒花崗岩製。扁平な石の一側面を使用する。	
465	〃	〃 投弾	全長 7.0	全幅 6.5	全厚 6.0	-	重量 335.50g。細粒花崗岩製。	

写真図版



奥名遺跡遠景(北東より)

図版2



調査前遠景(北東より)



調査前風景(北東より1)



調査前風景(南東より)



調査前風景(北東より2)

図版4



遺構検出状態(南西より)



遺構検出状態(北より)



遺構検出状態中央部(西より)



遺構検出状態南半部(東より)



遺構完掘状態(上空より)



遺構完掘状態南半部(北西より)



遺構完掘状態北半部(南西より)



遺構完掘状態北部(西より)

図版8



調査区セクション全景(北西より)



調査区セクション中央部(西より)



調査区セクション北部(北西より)



調査区セクション南部(西より)



SD2・3・4セクション(東より)



SD6・7・8セクション(東より)



SE1 石組検出状態(北より)



SE1 半裁状態(北より)



SE1 土師質土器杯(166)出土状態



SE1 漆器椀(177)・曲物(178)出土状態



SB1P11 石錘(3) 出土状態



SB8P5 炆器甕(16) 出土状態



SB8P5 錢貨(18) 出土状態



SB9P4 鉄製品刀子(21) 出土状態



P56 土師質土器小皿(26) 出土状態



P105 土師質土器(29) 出土状態



P175 錢貨(39・40) 出土状態



P349 土師質土器小皿(49)・陶器瓶(50) 出土状態



P410 錢貨(54) 出土状態



P410 錢貨出土状態



P328 須恵器皿(64) 出土状態



P44 土師質土器杯(67) 出土状態



P446 土師質土器杯出土状態



P505 土師質土器杯(79) 出土状態



P131 陶器壺または甕(100) 出土状態



P144 銅製品(109) 出土状態



P338 銭貨(110) 出土状態



P152 石製品石臼(114) 出土状態



SK5 セクション(南より)



SK5 集石出土状態(南西より)



SK7 セクション(北東より)



SK7 集石出土状態(北東より)



SK11・P130 セクション(北より)



SK13 陶器皿(121) 出土状態



SK18セクション(南より)



SK29セクション(北より)



SK30セクション・青磁碗(128)出土状態



SK31土師質土器杯(129)出土状態



SK48セクション(南より)



SK49完掘, SK50・ピット検出状態(西より)



SK50セクション(東より)



SK54セクション(南より)



II層和鏡(366)出土狀態



III層青磁杯(380)出土狀態



IV層弥生土器壺(391)出土狀態



IV層土師器杯(394)出土狀態



IV層土師質土器小皿(406)出土狀態



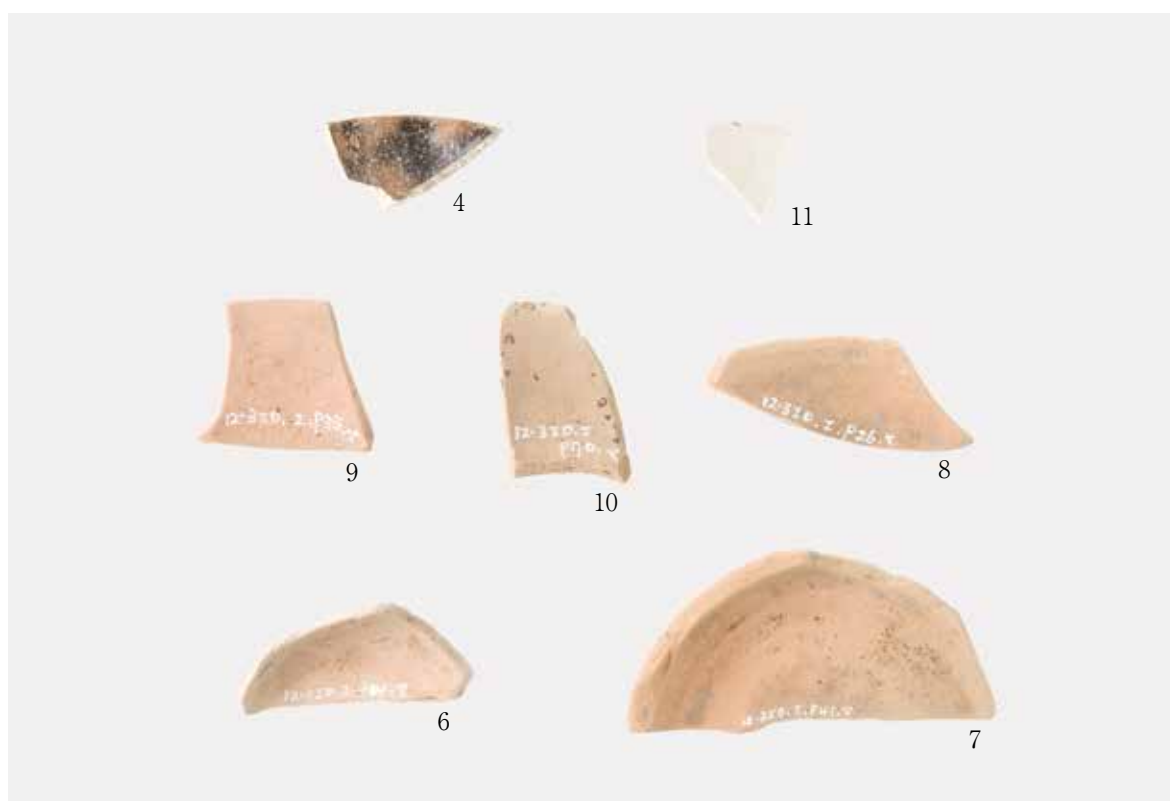
IV層土師質土器杯(411)出土狀態



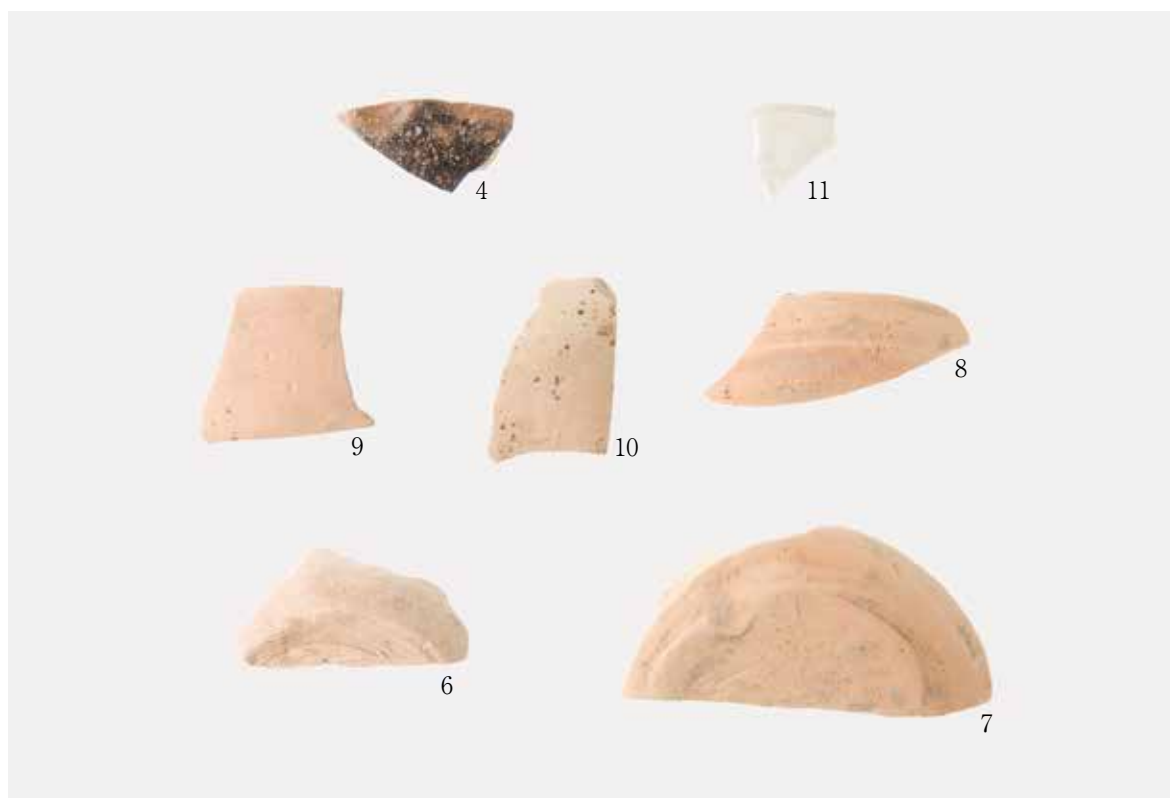
IV層青磁碗(434)出土狀態



IV層鐵製品雁股鏝(452)出土狀態



SB3P9, SB7P4・P5・P7・P8 陶器(皿), 土師質土器(杯), 白磁(皿) (内面)



SB3P9, SB7P4・P5・P7・P8 陶器(皿), 土師質土器(杯), 白磁(皿) (外面)



SB8P4・P5・P6・P12 土師器(甕), 東播系須恵器(捏鉢), 土師質土器(小皿・杯), 炆器(甕) (内面)



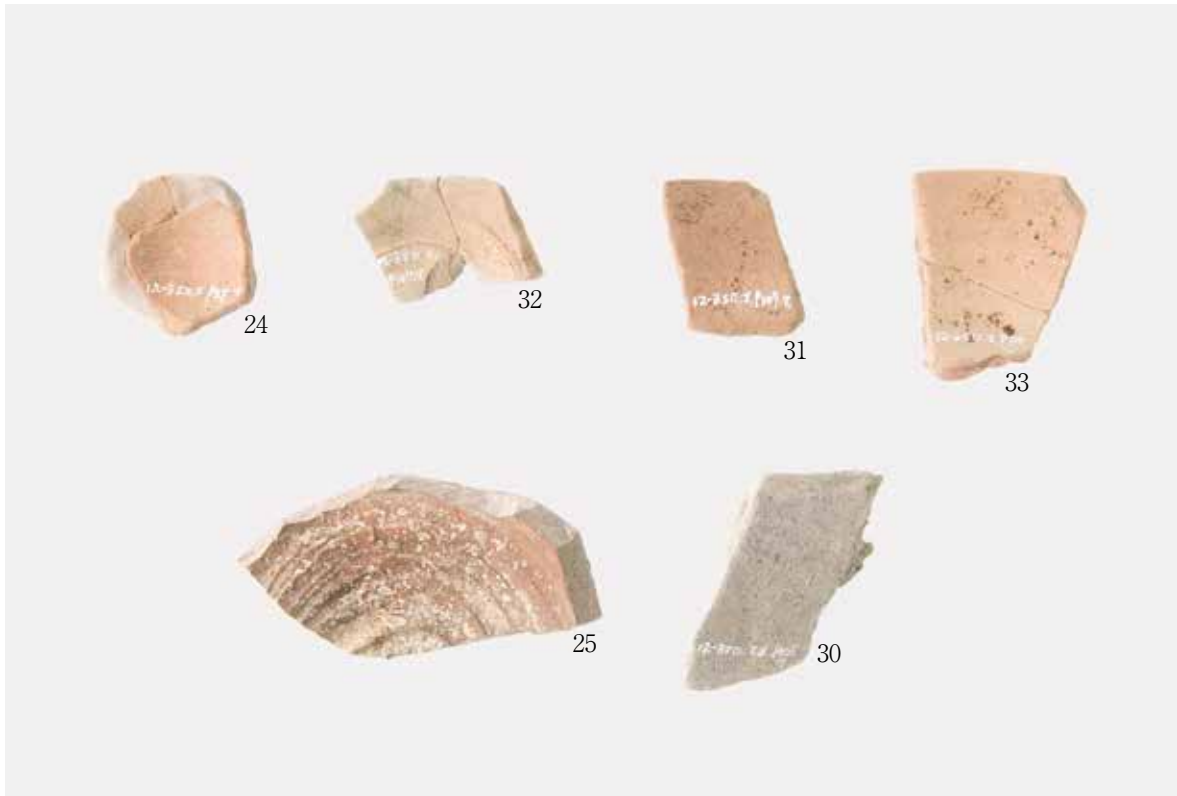
SB8P4・P5・P6・P12 土師器(甕), 東播系須恵器(捏鉢), 土師質土器(小皿・杯), 炆器(甕) (外面)



SB9P3 · P4 · P6 土師質土器(杯), 鐵製品(刀子), 錢貨(表面)



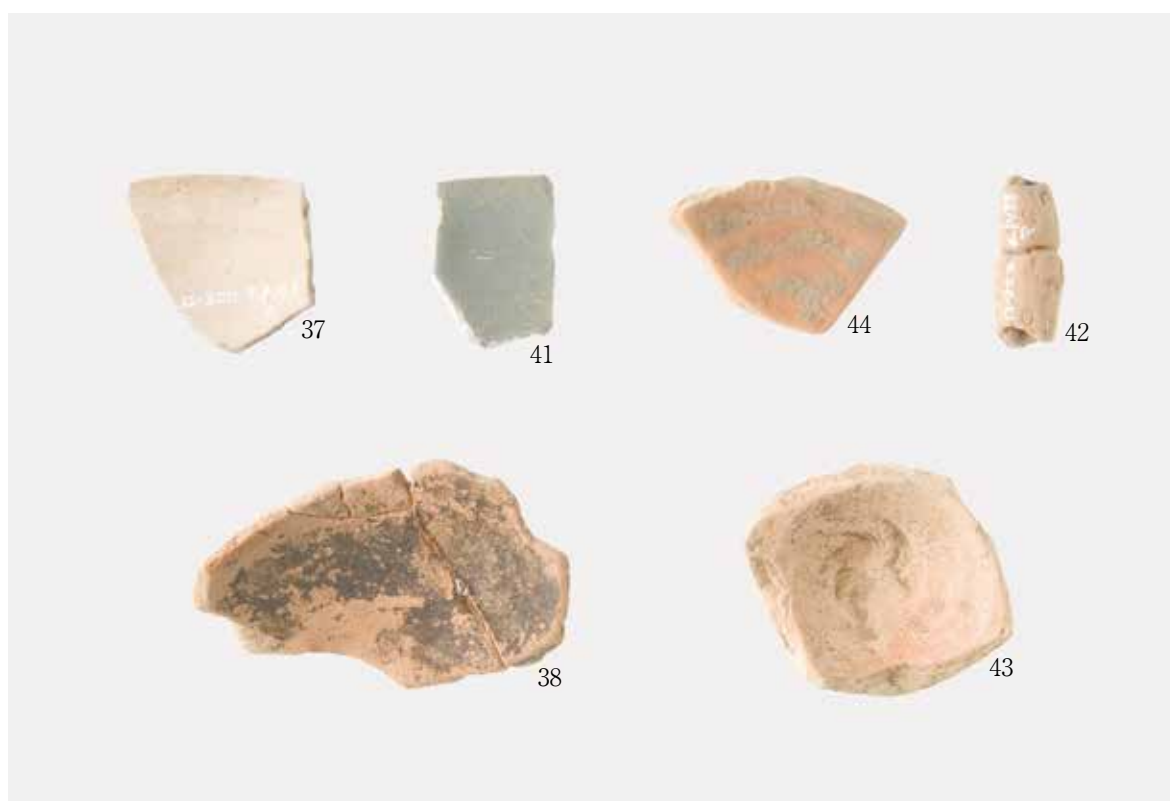
SB9P3 · P4 · P6 土師質土器(杯), 鐵製品(刀子), 錢貨(裏面)



P28・105・107・110 土師質土器(杯), 陶器(壺), 瓦質土器(羽釜) (内面)



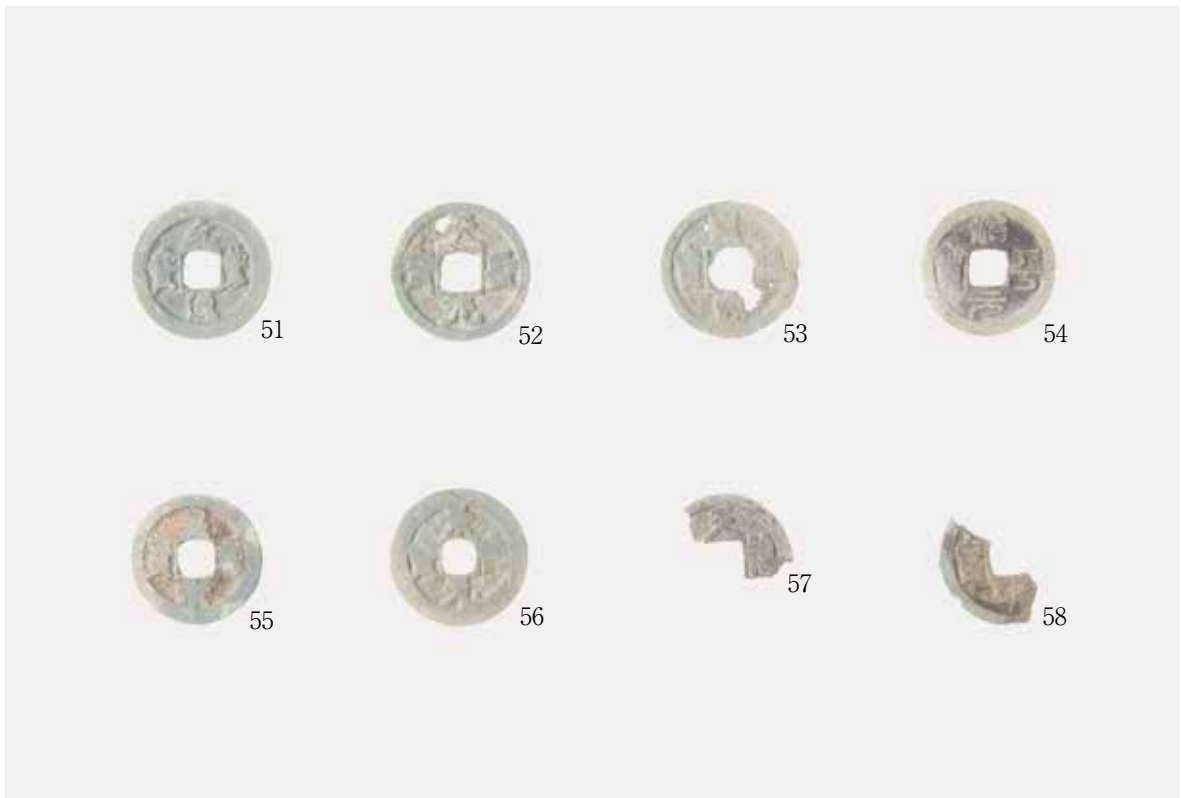
P28・105・107・110 土師質土器(杯), 陶器(壺), 瓦質土器(羽釜) (外面)



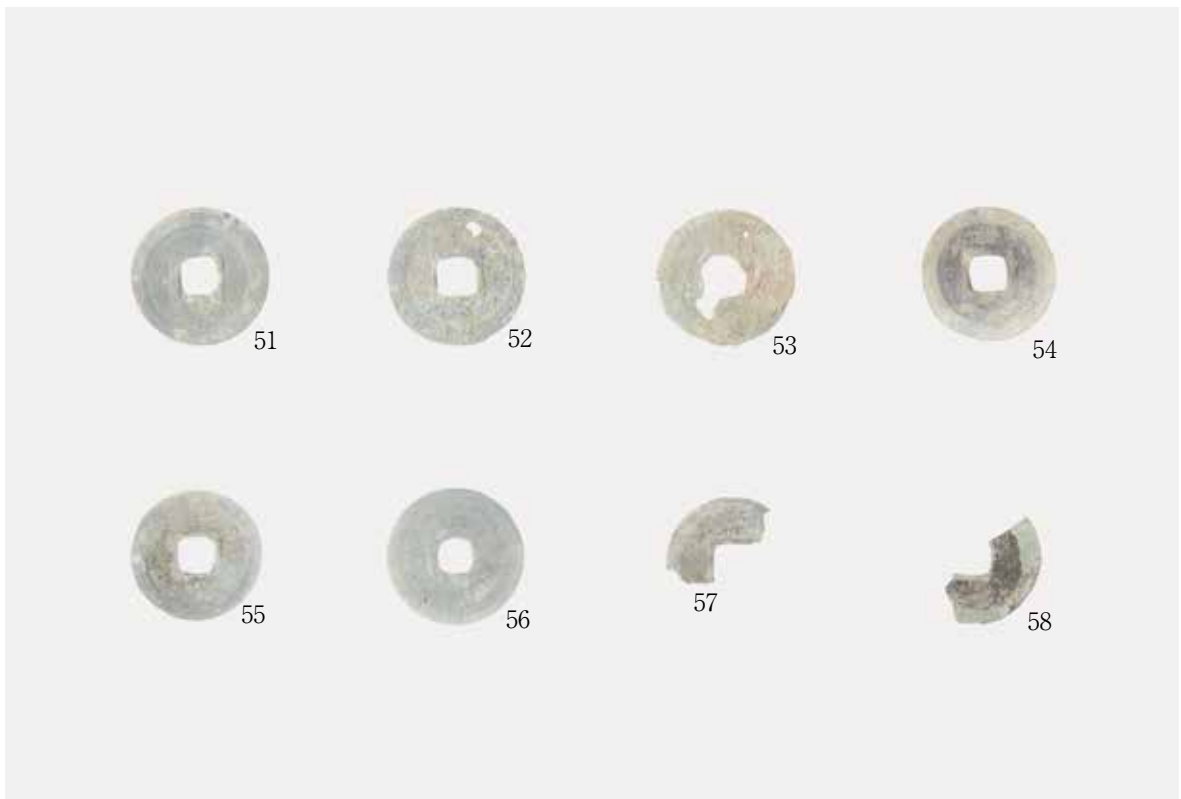
P173 · 188 · 202 土師質土器(杯), 青磁(碗), 土製品(土錘) (内面)



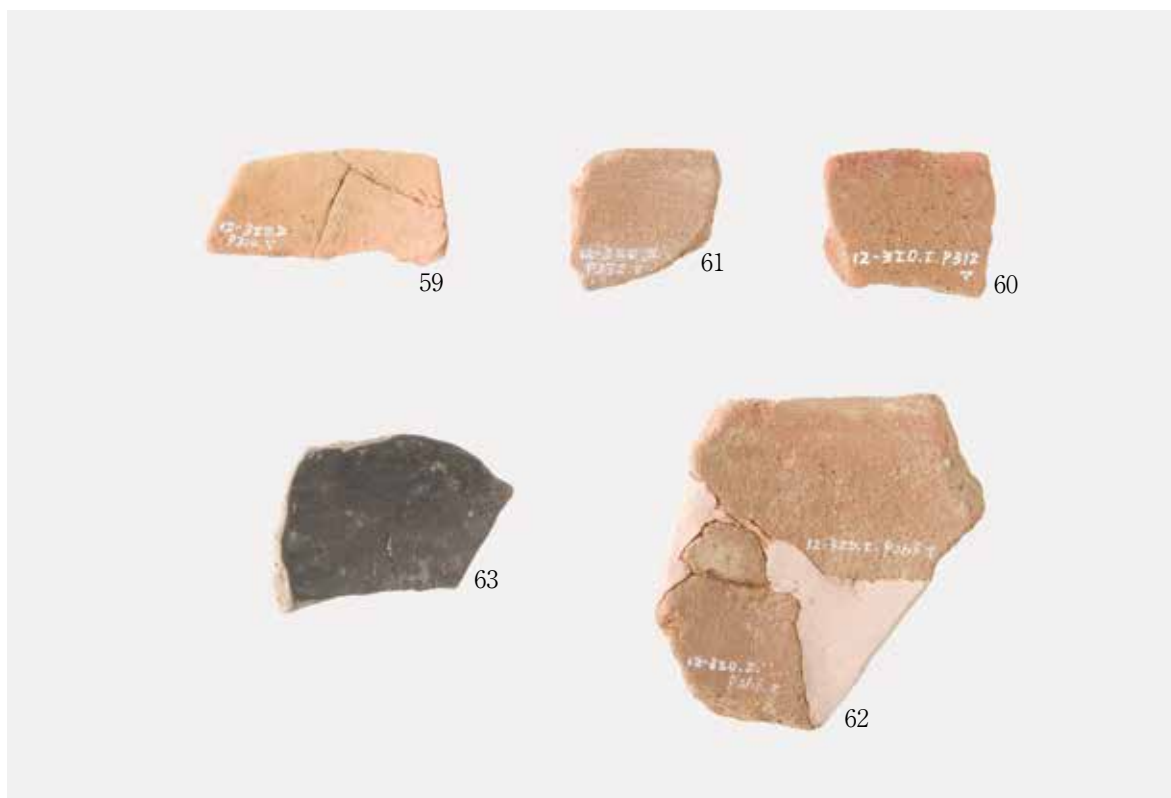
P173 · 188 · 202 土師質土器(杯), 青磁(碗), 土製品(土錘) (外面)



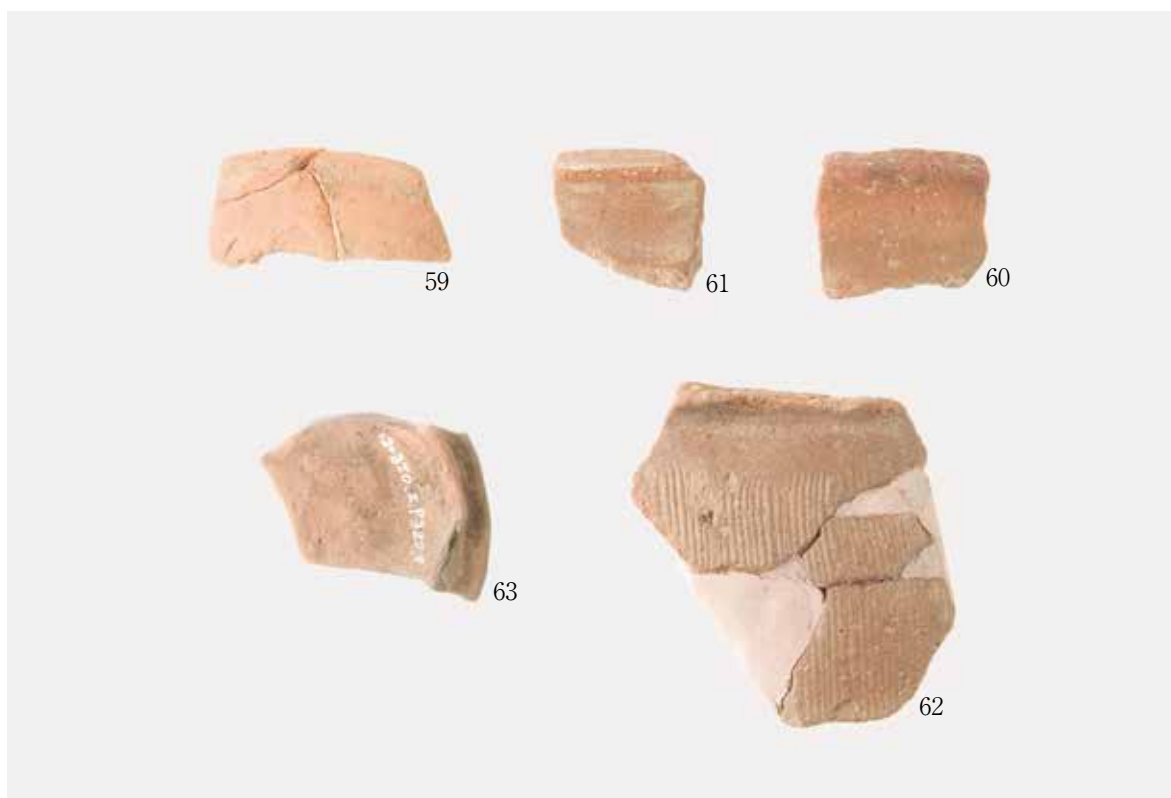
P410 钱货(表面)



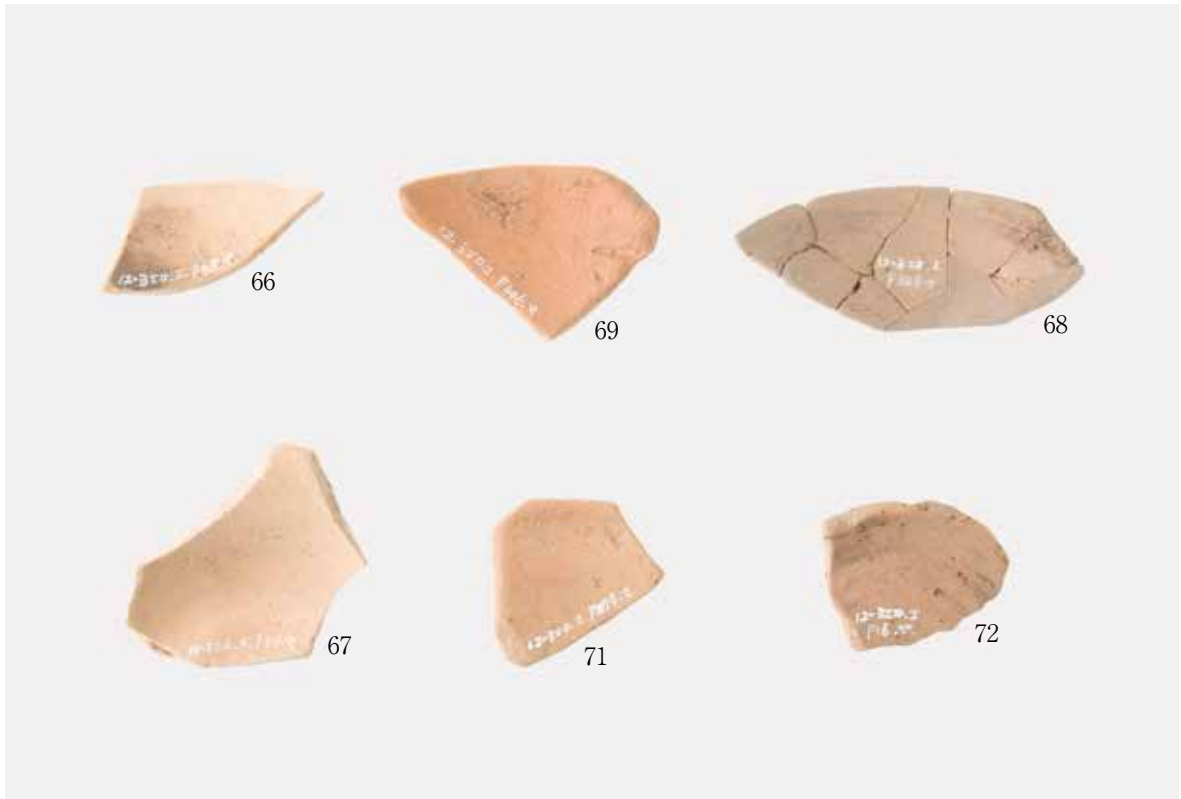
P410 钱货(裏面)



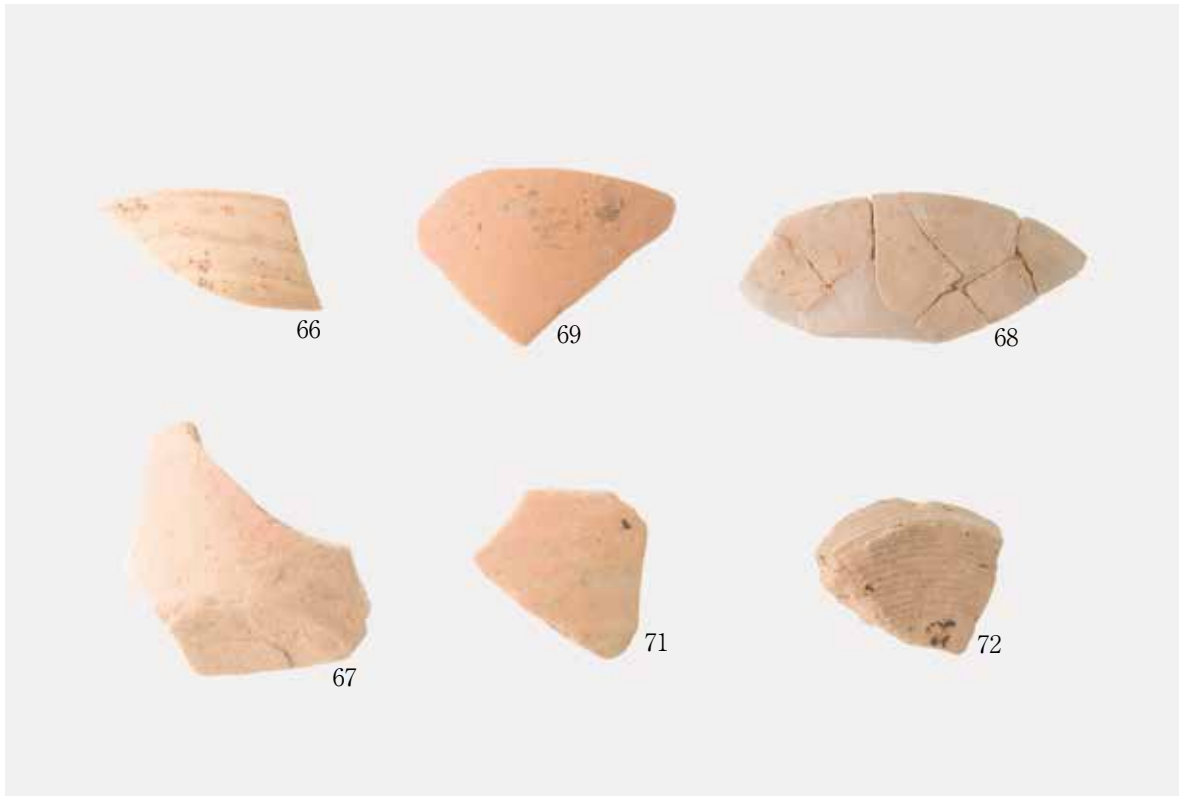
P268 · 312 · 314 · 320 · 332 土師器(皿·甕), 黑色土器(碗) (内面)



P268 · 312 · 314 · 320 · 332 土師器(皿·甕), 黑色土器(碗) (外面)



P16・44・68・277・348・446 土師質土器(杯) (内面)



P16・44・68・277・348・446 土師質土器(杯) (外面)



P23・86・124・227・325・411・492 土師質土器(杯) (内面)



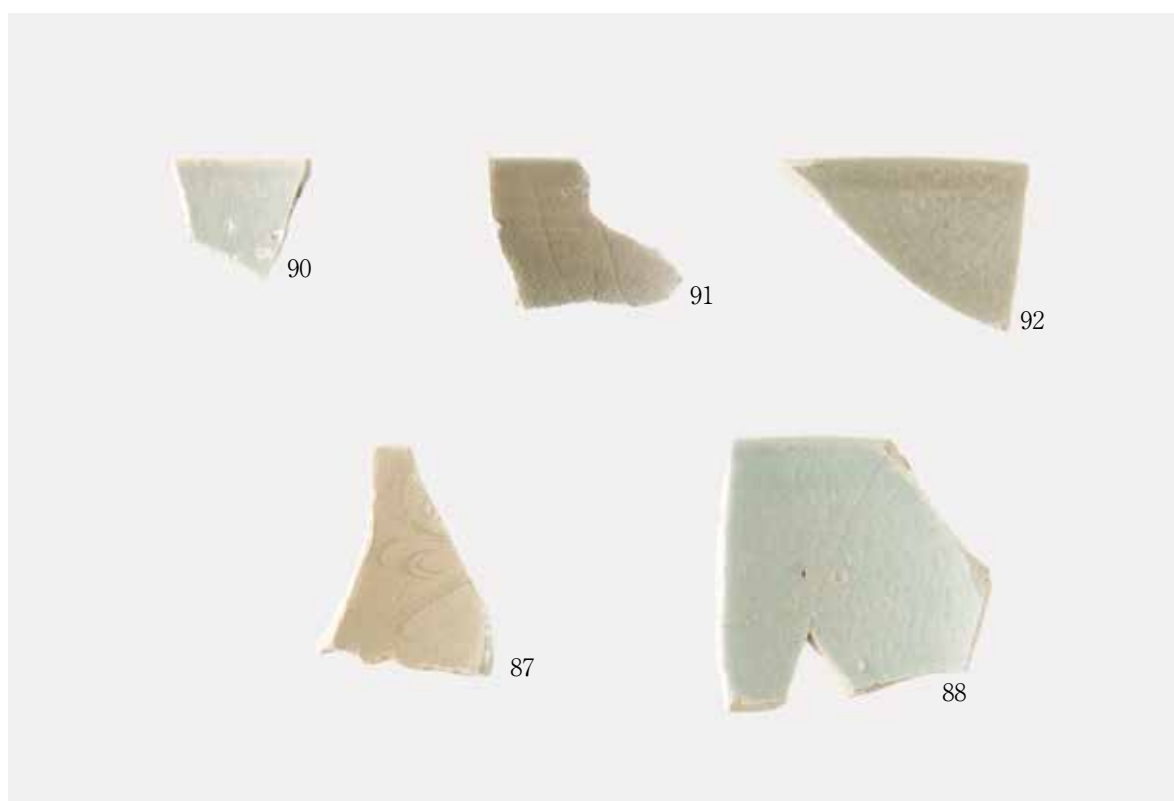
P23・86・124・227・325・411・492 土師質土器(杯) (外面)



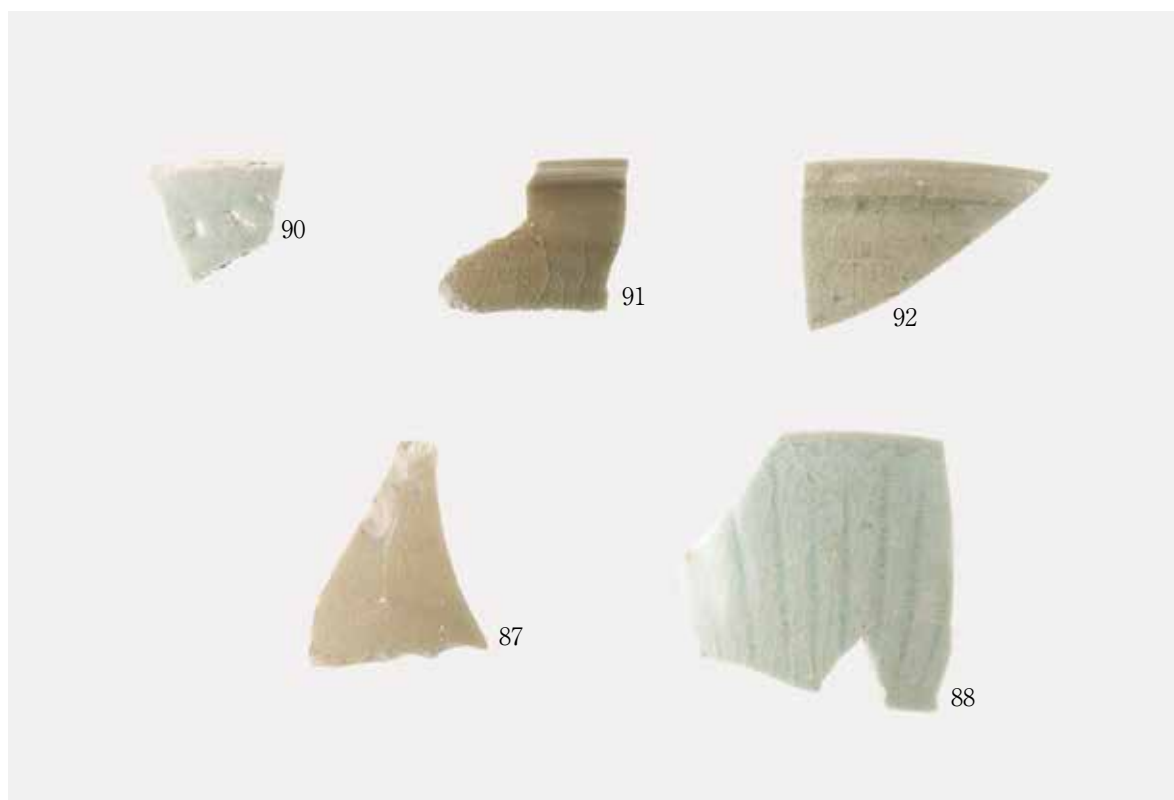
P31・62・108・159・217・311 土師質土器(鍋), 瓦器(皿), 瓦質土器(鍋), 東播系須恵器(捏鉢) (内面)



P31・62・108・159・217・311 土師質土器(鍋), 瓦器(皿), 瓦質土器(鍋), 東播系須恵器(捏鉢) (外面)



P176 · 184 · 272 · 380 · 463 青磁(碗) (内面)



P176 · 184 · 272 · 380 · 463 青磁(碗) (外面)



SK50・51・53～55 陶器(瓶子・甕), 土師質土器(杯), 青磁(碗), 瓦質土器(鍋) (内面)



SK50・51・53～55 陶器(瓶子・甕), 土師質土器(杯), 青磁(碗), 瓦質土器(鍋) (外面)



SE1 東播系須恵器(捏鉢), 炆器(甕), 青磁(碗) (内面)



SE1 東播系須恵器(捏鉢), 炆器(甕), 青磁(碗) (外面)



P64・144・182・338・346・353 土製品(土錘), 銅製品(飾金具・不明), 鉄製品(釘), 錢貨



SE1 木製品



178

SE1 木製品(曲物) (側板)



178

SE1 木製品(曲物) (底板)



SE1 木製品(表面)



SE1 木製品(裏面)



石垣裏込め 磁器(碗) (内面)



石垣裏込め 磁器(碗) (外面)



石垣裏込め 磁器(蓋・段重・火入・水滴) (内面)



石垣裏込め 磁器(蓋・段重・火入・水滴) (外面)



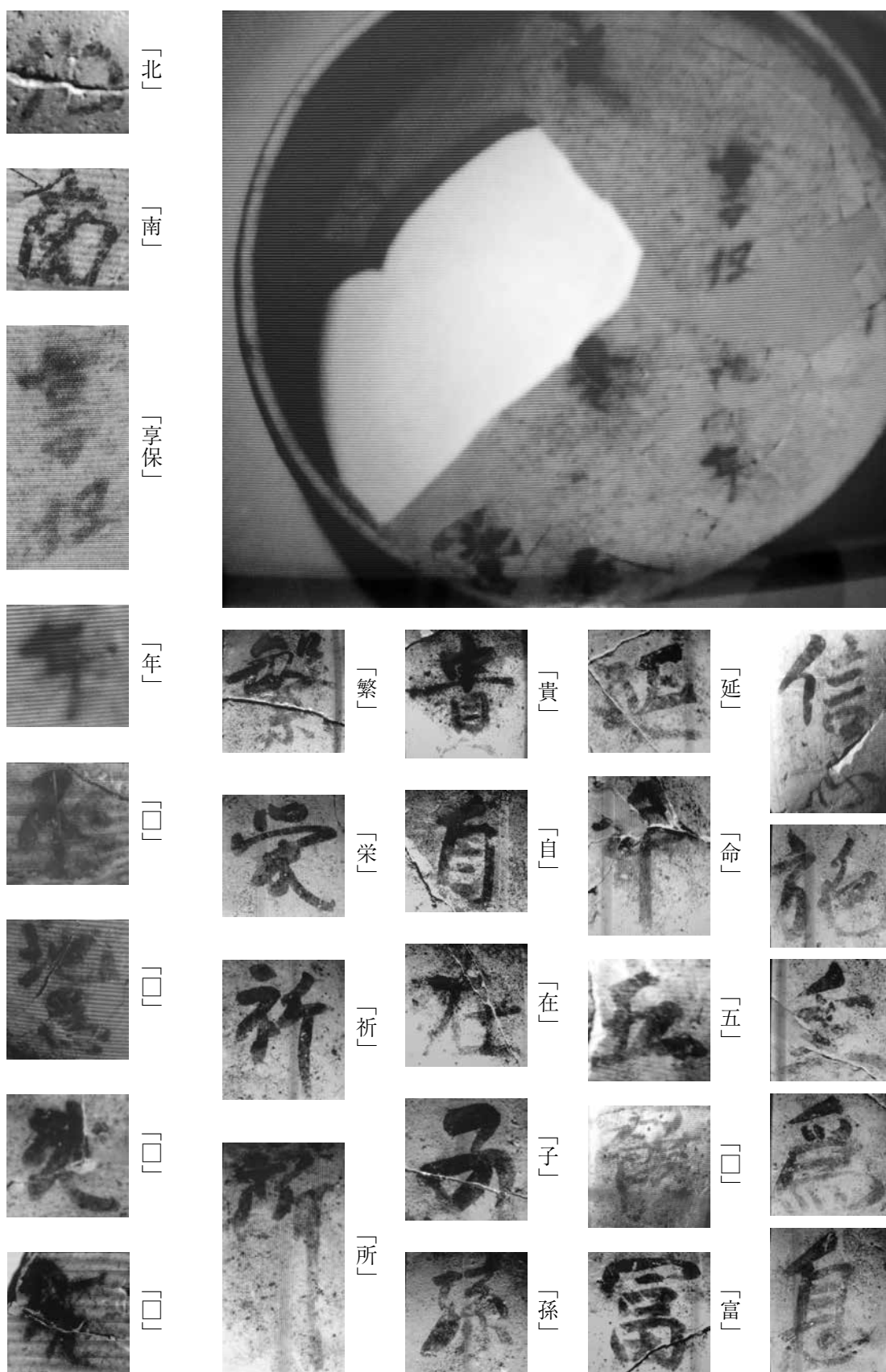
表採 青磁(碗), 炻器(壺・水屋甕・甕)(内面)



表採 青磁(碗), 炻器(壺・水屋甕・甕)(外面)



Ⅱ層 土師質土器(焙烙) (内面・外面・側面)



II層 土師質土器(焙烙) 赤外線写真



327

Ⅱ層 土師質土器(焙烙)



327 ~ 335

Ⅱ層 土師質土器(焙烙・小皿)



328

Ⅱ層 土師質土器(小皿)



329

Ⅱ層 土師質土器(小皿)



330

Ⅱ層 土師質土器(小皿)



331

Ⅱ層 土師質土器(小皿)



332

Ⅱ層 土師質土器(小皿)



333

Ⅱ層 土師質土器(小皿)



334

Ⅱ層 土師質土器(小皿)



335

Ⅱ層 土師質土器(小皿)



366

Ⅱ層 和鏡



Ⅳ層 土製品(土錘)



IV層 青磁(碗) (内面)



IV層 青磁(碗) (外面)



SB1P3・11・12 陶磁器(皿), 陶器(碗), 石製品(石錘)



P150 鉄製品(小札), 鉄滓



SB8P5・6 鉄製品(小札), 錢貨(表面)



SB8P5・6 鉄製品(小札), 錢貨(裏面)



P110 土師質土器(杯) (内面)



P110 土師質土器(杯) (外面)



P247 東播系須恵器(捏鉢), 炆器(鉢) (内面)



P247 東播系須恵器(捏鉢), 炆器(鉢) (外面)



47

P327 土師器(杯)



70

P106 土師質土器(杯)



97

P204 青花(皿)



113

P465 石製品(叩石)



114

P152 石製品(石臼)



115

SK3 陶器(灯明皿)



152

SD2 磁器(碗)



158

SD10 土師器(杯)



171

SE1 土師質土器(杯)



177

SE1 漆器(碗)



187

廃棄土坑 陶器(碗)



188

廃棄土坑 陶器(碗)



189

廃棄土坑 陶器(小壺)



192

廃棄土坑 磁器(大皿)



191

廃棄土坑 磁器(角皿) (内面)



191

廃棄土坑 磁器(角皿) (外面)



193

廃棄土坑 磁器(小碗)



194

廃棄土坑 磁器(碗)



195

廃棄土坑 磁器(碗)



196

廃棄土坑 磁器(碗)



198

廃棄土坑 磁器(碗)



200

201

202

廃棄土坑 磁器(仏飯器)



204

廃棄土坑 釜道具(トチン)



207

廃棄土坑 磁器(碗)



206

廃棄土坑 磁器(碗) (内面)



206

廃棄土坑 磁器(碗) (外面)



209

廃棄土坑 磁器(碗)



210

廃棄土坑 磁器(碗)



211

廃棄土坑 磁器(碗)



224

廃棄土坑 石製品(五輪塔)



225

ハンダ土坑1 陶器(灯明皿)



226

ハンダ土坑1 陶器(搦鉢)



230

ハンダ土坑1 陶器(徳利) (外面)



230

ハンダ土坑1 陶器(徳利) (底面)



231

ハンダ土坑1 磁器(皿)



232

233

234

ハンダ土坑1 磁器(皿)



235

ハンダ土坑1 磁器(皿)



238

ハンダ土坑1 磁器(碗)



239

ハンダ土坑1 磁器(碗)



240

ハンダ土坑1 磁器(碗)



241

ハンダ土坑1 磁器(碗)



242

ハンダ土坑1 磁器(碗)



243

ハンダ土坑1 磁器(碗)



244

ハンダ土坑1 磁器(碗)



245

ハンダ土坑1 磁器(碗)



249

ハンダ土坑1 磁器(鉢)



260

ハンダ土坑2 磁器(碗)



261

ハンダ土坑2 磁器(碗)



262

ハンダ土坑2 磁器(碗)



263

ハンダ土坑2 磁器(碗)



269

石垣裏込め 陶器(碗)



272

石垣裏込め 陶器(碗)



273

石垣裏込め 陶器(碗)



274

石垣裏込め 陶器(碗)



283

石垣裏込め 土師質土器(焜炉)



292

石垣裏込め 磁器(小碗)



293

石垣裏込め 磁器(碗)



304

石垣裏込め 磁器(碗)



305

石垣裏込め 磁器(碗)



325

I層 磁器(瓶)



326

I層 窯道具(トチン)



341

II層 陶器(火入)



359

II層 磁器(仏飯器)

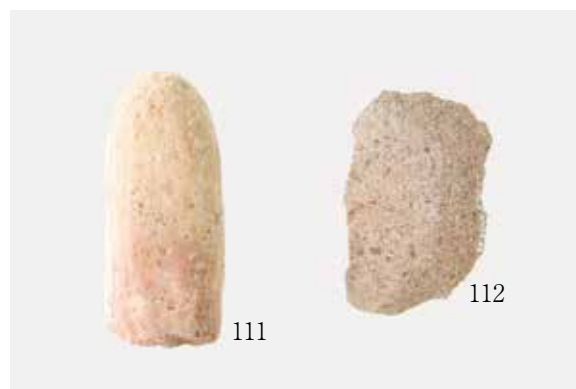


372

II層 石製品(五輪塔)



Ⅲ層 土師質土器(杯)



P407・417 石製品(砥石)



SK48・49 石製品(砥石・不明)



SD7 緑釉陶器(椀), 青磁(碗), 瓦質土器(鍋)



廃棄土坑 磁器(小杯)



SE1 石製品(叩石)



ハンダ土坑1 土製品(人形)



Ⅱ層 陶器(碗)



216

废弃土坑 瓦(平瓦)



217

废弃土坑 瓦(平瓦)



218

废弃土坑 瓦(平瓦)



219

废弃土坑 瓦(平瓦)



220

废弃土坑 瓦(平瓦)



221

废弃土坑 瓦(平瓦)



222

废弃土坑 瓦(平瓦)



223

废弃土坑 瓦(平瓦)



350

II層 磁器(皿)



382

383

384

385

III層 瓦質土器(鉢・鍋・羽釜)



391

IV層 弥生土器(壺)



401

402

IV層 土師器(甕)



463

IV層 石製品(砥石) (表面)



463

IV層 石製品(砥石) (裏面)



463

IV層 石製品(砥石) (側面)



415

416

417

IV層 瓦質土器(羽釜)



IV層 石製品(砥石)



IV層 石製品(投弾)



P327・349 土師器(杯), 陶器(瓶) (内面)



P327・349 土師器(杯), 陶器(瓶) (外面)



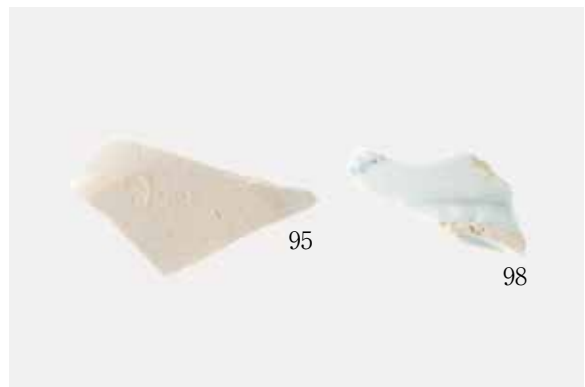
P292・433 白磁(皿) (内面)



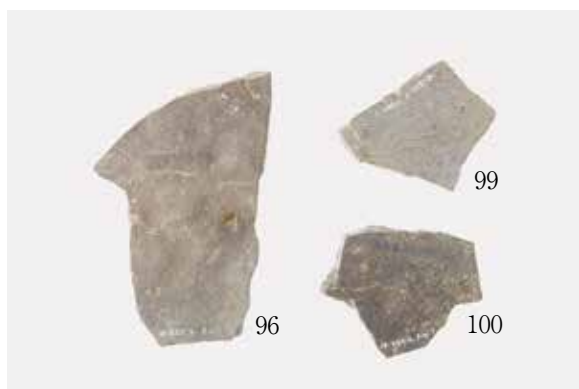
P292・433 白磁(皿) (外面)



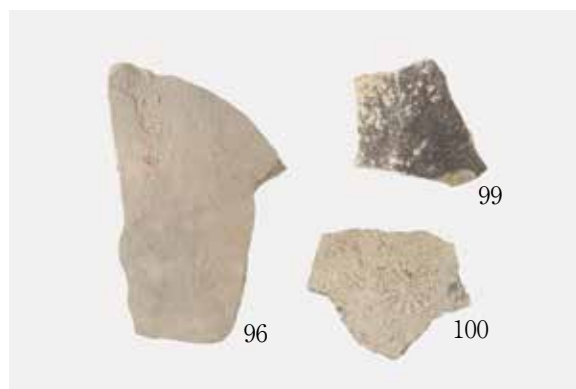
P297・270 白磁(皿), 青花(碗) (内面)



P297・270 白磁(皿), 青花(碗) (外面)



P21 · 131 · 340 炆器(甕), 陶器(甕) (内面)



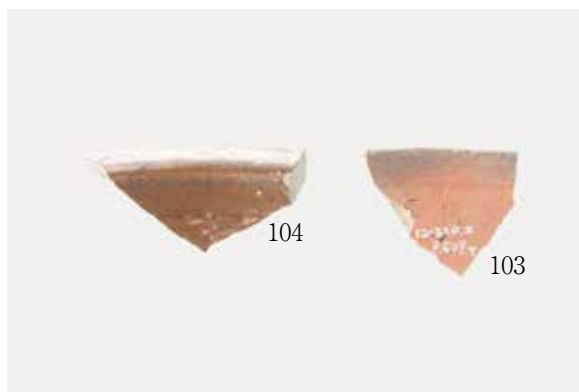
P21 · 131 · 340 炆器(甕), 陶器(甕) (外面)



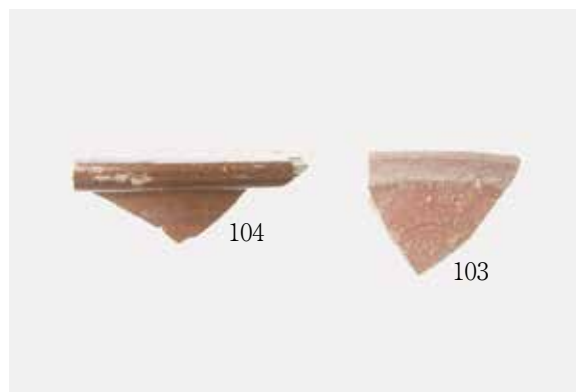
P367 · 490 陶器(搗鉢) (内面)



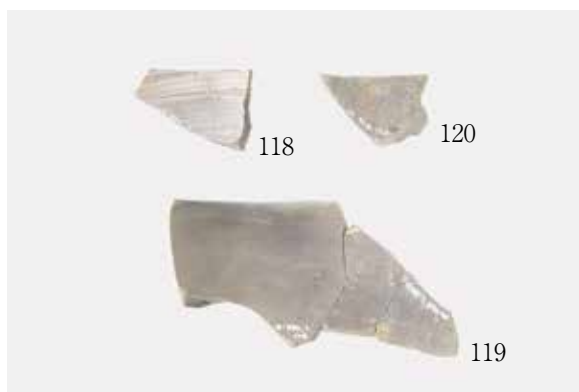
P367 · 490 陶器(搗鉢) (外面)



P1 · 509 陶器(搗鉢·甕) (内面)



P1 · 509 陶器(搗鉢·甕) (外面)



SK5 · 7 · 11 陶器(鉢), 瓦質土器(羽釜) (内面)



SK5 · 7 · 11 陶器(鉢), 瓦質土器(羽釜) (外面)



SK13・15 陶器(皿), 土師質土器(杯) (内面)



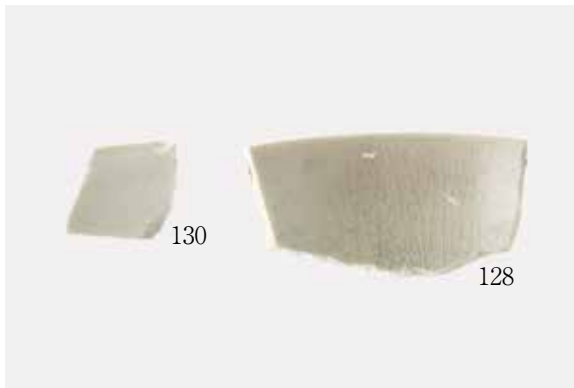
SK13・15 陶器(皿), 土師質土器(杯) (外面)



SK15・18 瓦質土器(鉢), 陶器(水屋甕) (内面)



SK15・18 瓦質土器(鉢), 陶器(水屋甕) (外面)



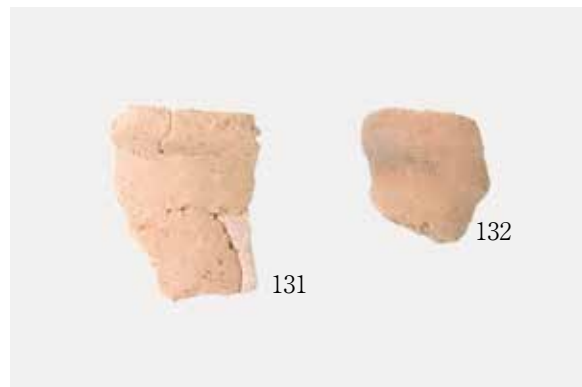
SK30・46 青磁(碗) (内面)



SK30・46 青磁(碗) (外面)



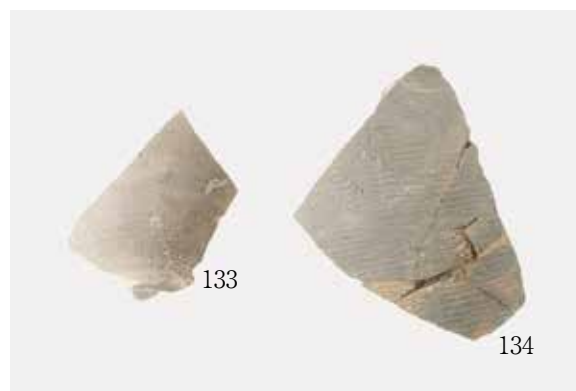
SK48 土師器(甕) (内面)



SK48 土師器(甕) (外面)



SK48 須恵器(壺・甕) (内面)



SK48 須恵器(壺・甕) (外面)



SK49 土師質土器(小皿・杯) (内面)



SK49 土師質土器(小皿・杯) (外面)



SK49 陶器(瓶子), 青磁(碗) (内面)



SK49 陶器(瓶子), 青磁(碗) (外面)



SD1・2 土師質土器(杯・焙烙), 陶器(皿), 磁器(碗)(内面)



SD1・2 土師質土器(杯・焙烙), 陶器(皿), 磁器(碗)(外面)



SD10 土師器(杯) (内面)



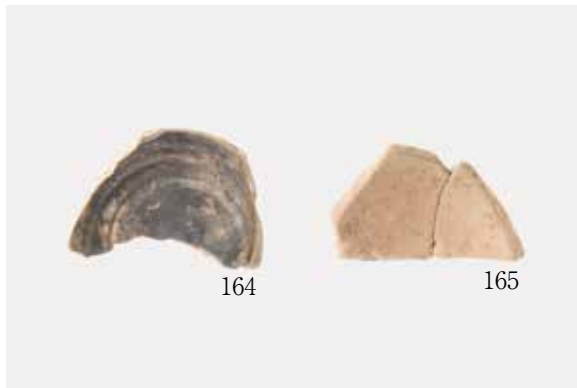
SD10 土師器(杯) (外面)



SD10 土師器(甕) (内面)



SD10 土師器(甕) (外面)



SE1 土師質土器(皿・杯) (内面)



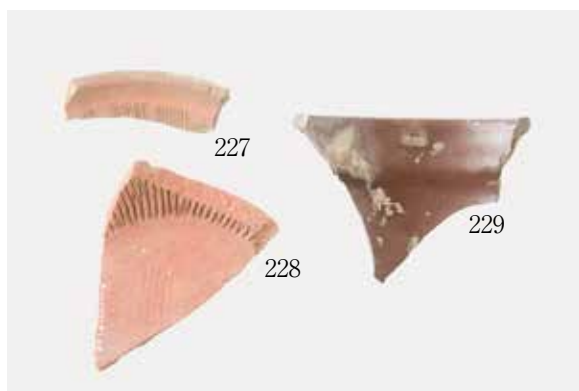
SE1 土師質土器(皿・杯) (外面)



SE1 土師質土器(杯) (内面)



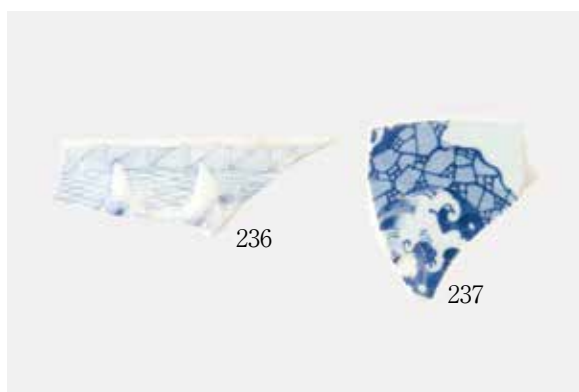
SE1 土師質土器(杯) (外面)



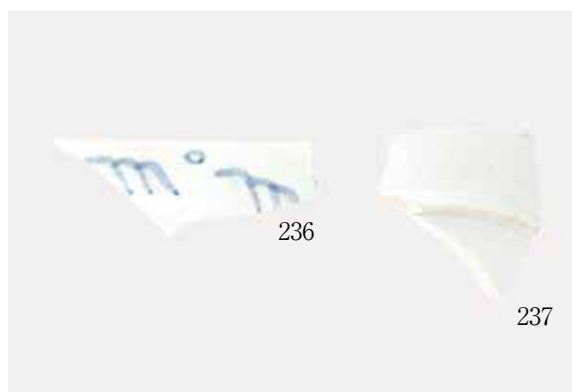
ハンダ土坑1 炆器(播鉢・甕), 陶器(播鉢) (内面)



ハンダ土坑1 炆器(播鉢・甕), 陶器(播鉢) (外面)



ハンダ土坑1 磁器(大皿) (内面)



ハンダ土坑1 磁器(大皿) (外面)



ハンダ土坑1 磁器(碗) (内面)



ハンダ土坑1 磁器(碗) (外面)



ハンダ土坑2 磁器(蓋物) (内面)



ハンダ土坑2 磁器(蓋物) (外面)



石垣裏込め 土師器土器(杯), 青磁(碗), 陶器(碗) (内面)



石垣裏込め 土師器土器(杯), 青磁(碗), 陶器(碗) (外面)



石垣裏込め 陶器(碗・皿・瓶) (内面)



石垣裏込め 陶器(碗・皿・瓶) (外面)



石垣裏込め 陶器(播鉢) (内面)



石垣裏込め 陶器(播鉢) (外面)



石垣裏込め 陶器(火鉢) (内面)



石垣裏込め 陶器(火鉢) (外面)



I層 陶器(皿), 磁器(灯明皿) (内面)



I層 陶器(皿), 磁器(灯明皿) (外面)



II層 瓦質土器(火鉢) (内面)



II層 瓦質土器(火鉢) (外面)



II層 石製品(砥石) (表面)



II層 石製品(砥石) (裏面)



II層 石製品(石臼) (上面)



II層 石製品(石臼) (下面)



390

Ⅲ層 炆器(播鉢) (内面)



390

Ⅲ層 炆器(播鉢) (外面)



394

Ⅳ層 土師器(杯) (内面)



394

Ⅳ層 土師器(杯) (外面)



Ⅳ層 土師質土器(杯) (内面)



Ⅳ層 土師質土器(杯) (外面)



452

Ⅳ層 鉄製品(雁股鍬) (表面)



452

Ⅳ層 鉄製品(雁股鍬) (裏面)



SB7P8, SB9P6, P56, P61・34, P105, P328, P349, P505 土師質土器(杯・小皿), 須恵器(皿)



P291, SK3-15-29-31, SD2, SE1, 廃棄土坑 土師質土器(杯), 青磁(碗), 磁器(皿), 陶器(碗・皿), 土師器(碗), 陶磁器(皿)



190



205



212

215



254



256



258



259



264



268



275

廃棄土坑, ハンダ土坑2, 石垣裏込め 磁器(皿・小杯・碗), 陶器(灯明皿・碗)



276



281



288



290



291



295



296



299



300



301

石垣裏込め 陶器(皿・匣鉢), 磁器(皿・小碗・碗)



352



361



365



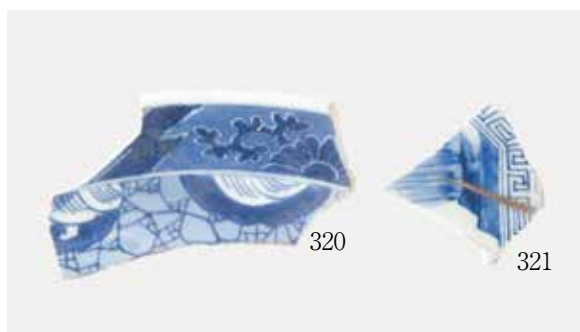
373



406



319



320

321



323



324



342

343

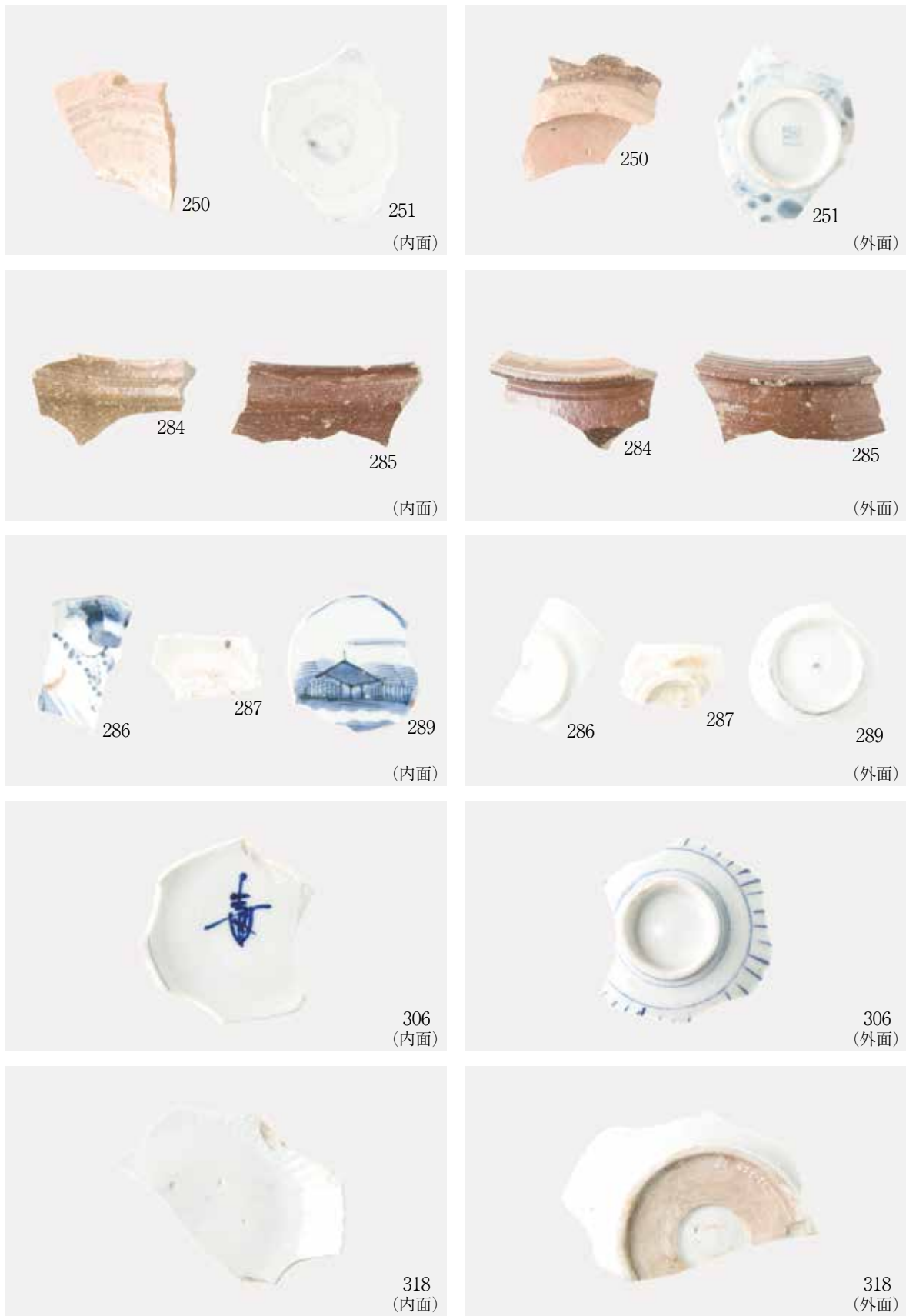
石垣裏込め, I・II・III・IV層 磁器(碗・小杯・小碗・皿・大皿・角皿・紅皿), 瓦(軒平瓦), 土師質土器(皿・小皿), 陶器(埴鉢)



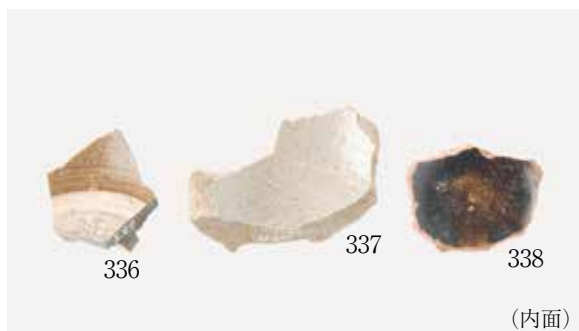
II・III・IV層 土師質土器(焙烙・羽釜), 瓦質土器(焙烙), 陶器(火鉢・甕), 銅製品(煙管), 土師器(羽釜・鍋・杯・椀・甕)



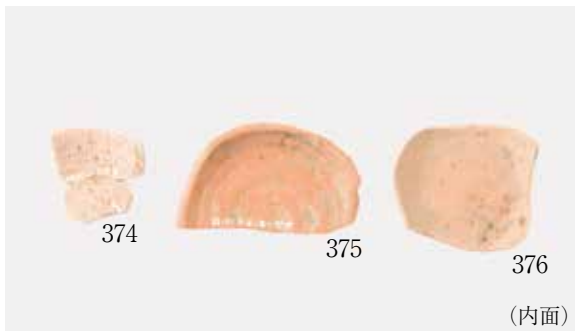
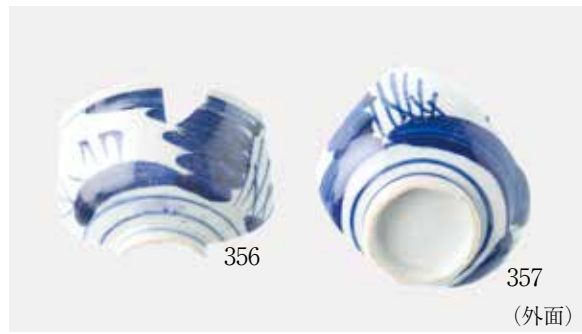
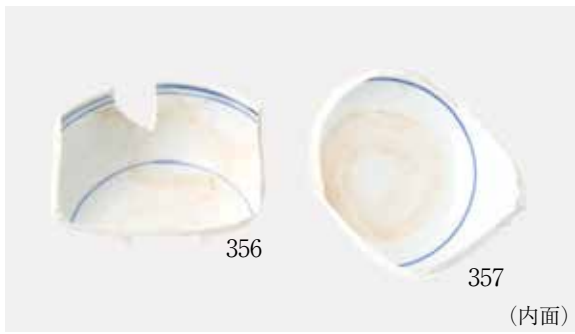
IV層, SB11P3, P175, SE1 東播系須恵器(捏鉢), 陶器(甕), 炆器(甕), 鉄滓, 石製品(基石), 土師質土器(杯), 銭貨



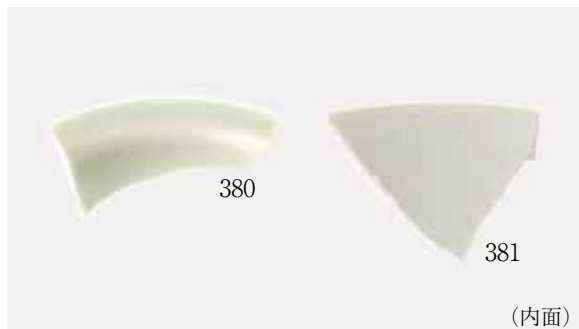
ハンダ土坑1, 石垣裏込め, I層 磁器(蓋), 陶器(鉢), 磁器(皿・碗)



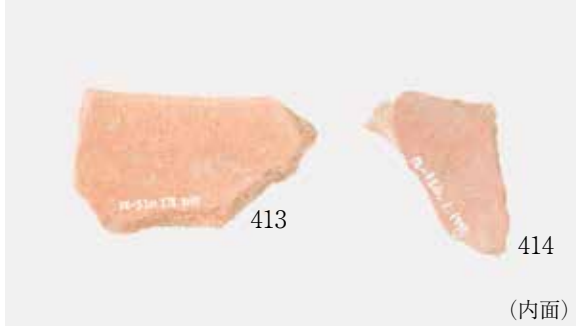
I · II 層 磁器(碗), 陶器(皿·碗·鍋)



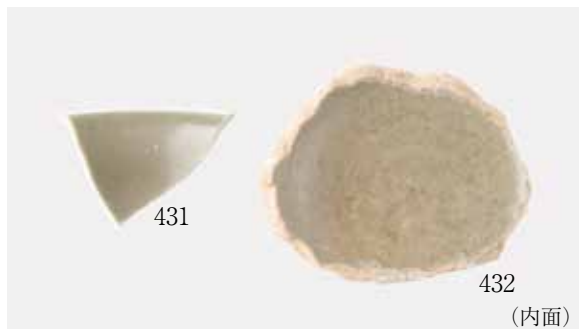
Ⅱ・Ⅲ層 磁器(碗・蓋・盃), 瓦(軒平瓦), 土師質土器(小皿)



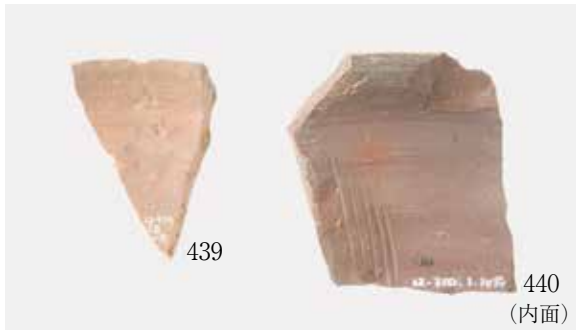
Ⅲ・Ⅳ層 土師質土器(杯), 青磁(杯・碗), 東播系須恵器(捏鉢), 黑色土器(椀), 須恵器(甕)



IV層 土師質土器(皿・羽釜), 瓦質土器(鍋・播鉢), 青磁(杯・盤)



IV層 青磁(碗), 青花(皿), 白磁(皿)



IV層 陶器(擂鉢), 鉄製品(包丁), 銅製品(飾金具), 錢貨, 石製品(石鏃)

報告書抄録

ふりがな	おくないせき							
書名	奥名遺跡							
副書名	高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書V							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第148集							
編著者名	吉成 承三 筒井 三菜							
編集機関	(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2016年3月4日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おくないせき 奥名遺跡	〒781-2110 高知県 吾川郡 いの町の	39386	320030	33° 32′ 39″	133° 26′ 10″	2012.5.24 ～ 2012.8.10	1,400㎡	記録保存調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
奥名遺跡	集落跡	古代 中世 近世 近現代	掘立柱建物跡 土坑 溝 井戸跡 性格不明遺構 ピット ハンダ土坑 廃棄土坑	11棟 55基 12条 1基 1基 1,306個 7基 1基	弥生土器 土師器 須恵器 黒色土器 緑釉陶器 土師質土器 瓦質土器 貿易陶磁器 陶器 磁器 鉄製品 銅製品 石製品	鎌倉から室町時代の掘立柱建物跡・溝・土坑などの遺構と、土師質土器・瓦質土器・貿易陶磁器などの遺物が出土した。また、平安時代後期を中心とする土師器・黒色土器が出土し、鎌倉期の石組み井戸を検出した。近世では墨書が書かれた焙烙を使用した祭祀、また、「浜松双鶴文」の蓬莱文鏡が出土した。		
要約	<p>奥名遺跡は、吾川郡いの町に位置し、仁淀川の支流、宇治川沿いの標高15～17m前後を測る丘陵及び谷部に立地する。丘陵緩斜面地に鎌倉期から室町時代(13～15世紀)の掘立柱建物跡、溝、井戸跡など屋敷の性格を示す遺構が検出された。また、調査区北部では9世紀末から10世紀を中心とする土師器・黒色土器がまとまって出土した。江戸時代(17世紀後半から19世紀)の遺物は主に包含層から出土した。特筆すべきは土師質土器小皿と共に出土した「子孫繁栄」「長寿延命」「富貴長寿」を祈願した内容の墨書が書かれた関西系焙烙である。</p> <p>今回の調査成果により遺跡の中心的な時期が明確になるとともに、鎌倉から室町期、さらに江戸期から現代(大正から昭和初期)に至るまで屋敷地として機能し、江戸期に屋敷の一部が耕作地になる過程など、土地利用の変遷を知る事ができた。</p>							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第148集

奥名遺跡

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ

2016年3月4日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社

X:60.360

X:60.360

X:60.340

X:60.340

X:60.320m

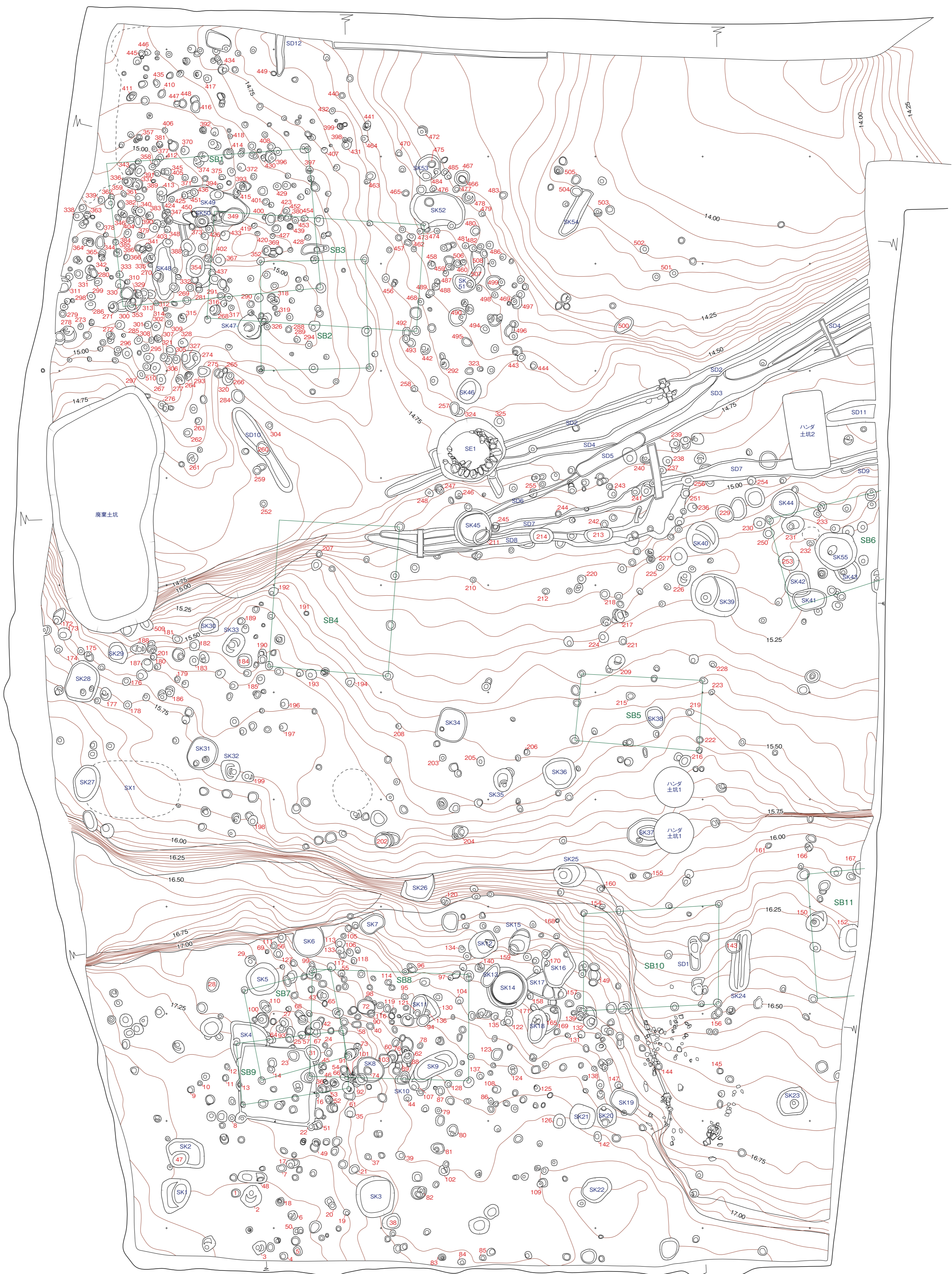
X:60.320m

Y:5.840

Y:5.820m

Y:5.840

Y:5.820m



※ 赤字番号はP(ピット)を示す。

付図 奥名遺跡遺構配置図 (S=1/100)